

平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

三ヶ尻遺跡 III

2003

埼玉県熊谷市教育委員会

平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

^み ^か ^{じり} ^い ^{せき}
三ヶ尻遺跡 III

2003

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷には、原始・古代の集落や中世の館跡等の埋蔵文化財が、数多く分布しております。

こうした埋蔵文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たち子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代に伝え、さらに豊かな熊谷市形成の礎としていかなければならないと考えております。

熊谷市では、きめ細かな教育の実現、学校教育の充実のために、学校施設の整備・拡張等の事業を実施してまいりました。その一環として、昭和61年度に市立三尻小学校の新水泳プール建設工事を実施することとなりました。事業地内及び周辺には、原始・古代から中世に至るおびただしい遺跡が確認されており、遺跡の重要性に鑑みて関係部局と保存に向けて協議を行ってまいりました。しかし、事業上やむを得ず計画等の変更ができないため工事により破壊を受ける箇所については、記録保存の方策を講ずることとなりました。

本書は、昭和61年度に実施された水泳プール建設工事に伴う発掘調査の成果をまとめたものです。

今回報告いたします三ヶ尻遺跡は、広大かつ多時期及び多種の埋蔵文化財が存在する遺跡であり、過去数回にわたって発掘調査が実施された遺跡です。そのうち三尻小学校に所在する埋蔵文化財発掘調査の成果であり、縄文時代から中・近世にかけての集落跡及び墓地跡が検出され、当地域における集落及び墓域の変遷を考える上で貴重な資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、ご理解、ご協力を賜りました地元関係者には厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

熊谷市教育委員会
教育長 飯塚 誠一郎

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市大字三ヶ尻字天王2956番地1他に所在する三ヶ尻遺跡（埼玉県遺跡番号59-022）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、熊谷市立三尻小学校水泳プール建設工事に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。
- 3 本事業の組織は、I章のとおりである。
- 4 発掘調査期間は、昭和61年5月14日～昭和61年9月1日である。
整理・報告書作成期間は、平成14年10月1日～平成15年3月29日である。
- 5 発掘調査の担当は、熊谷市教育委員会 金子正之が、整理報告書作成事業は、加藤隆則が主に担当し、吉野 健が補佐した。
- 6 本書の執筆は、加藤、吉野が担当した。また、縄文土器の実測・トレースについては松田 哲、中・近世遺物の実測・トレースについては船場昌子の補助を得た。
- 7 写真撮影は、発掘調査を金子が、遺物を吉野が行った。
- 8 出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。
- 9 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。
(敬称略)
浅野晴樹、細田 勝、村松 篤、大里郡市文化財担当者会

凡 例

- 1 本文中、遺構の表記記号は、次のとおりである。

SJ……住居跡、SK……土坑、P……ピット

- 2 各遺構の呼称は、整理作業の段階で変更した。

- 3 遺構平面図及び土層断面図中の表記記号は、次のとおりである。

P……土器、S……川原石、B……骨

- 4 住居跡平面図中のスクリーントーンは焼土の範囲を示す。

- 5 遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。



遺構全測図…… 1/200、住居跡・礎石建物跡・土坑・ピット・倒木痕…… 1/60、集石遺構…… 1/30、埋甕…… 1/30、その他、遺跡位置図、周辺遺跡分布図等は、その都度スケール脇に縮尺率を示した。

- 6 遺構平面図中の遺物番号は、遺物挿図中の遺物番号に一致する。

- 7 遺構土層断面図及びエレベーション図のポイントの標高は、その都度、ポイント脇に示した。また、原則として、同一図版・同一遺構の標高はAポイントに表記した。

- 8 遺物実測図の縮尺は、縄文土器・土師器・須恵器・陶器・土師質土器・瓦質土器、土錘、煙管は1/4、縄文土器（拓影・底部）・弥生土器（拓影）・石器、砥石は1/3、古銭（拓影）・泥面子は1/2、石臼・五輪塔は1/6とした。

- 9 遺物実測図の中で、中心線はすべて実線で示し、遺物観察表にできる限り残存率で示した。但し、縄文土器については、本文中に記した。また、断面表現は、須恵器については還元焰焼成のものは黒塗り、酸化焰焼成のものは白抜きとし、それ以外の縄文土器、弥生土器、土師器、陶器等の遺物はすべて白抜きで示した。

スクリーントーン指示は、赤彩は 、黒色処理は  で示し、その他についてはその都度示した。

- 10 遺物観察表の凡例は、次のとおりである。

法量の単位は、cm、gである。また、推定値は括弧付けで示した。

胎土は、土器に含まれる含有鉱物を以下の記号で示した。

A……白色粒子、B……黒色粒子、C……赤色粒子、D……褐色粒子、E……赤褐色粒子、

F……白色針状物質、G……長石、H……石英、I……白雲母、J……黒雲母、K……角閃石、

L……片岩、M……砂粒、N……礫

色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1997年版）に照らし最も近似した色相を示した。

焼成は、次のように区分した。A……良好、B……普通、C……不良

目 次

序	(3) 埋 甕	38
例 言	(4) 倒木痕	39
凡 例	(5) 遺構外出土遺物	43
目 次	2 古墳時代～奈良・平安時代	55
I 発掘調査の概要	(1) 竪穴住居跡	55
1 調査に至る経過	(2) 土 坑	64
2 発掘調査・報告書作成の経過	(3) 遺構外出土遺物	66
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	3 中世・近世	67
II 遺跡の立地と環境	(1) 土坑・ピット	67
III 遺跡の概要	(2) 土坑・ピット出土遺物	85
1 調査の方法	(3) 遺構外出土遺物	92
2 検出された遺構と遺物	4 その他の時期	94
IV 遺構と遺物	(1) 礎石建物跡	94
1 縄文時代	(2) 集石遺構	95
(1) 竪穴住居跡	V 調査のまとめ	96
(2) 土 坑		

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形図	2	第15図 第2号住居跡出土遺物(2)	26
第2図 周辺遺跡分布図	4	第16図 第2号住居跡出土遺物(3)	27
第3図 三ヶ尻遺跡・三ヶ尻古墳群位置図	8	第17図 第3号住居跡	28
第4図 三ヶ尻遺跡調査区位置図	8	第18図 第3号住居跡出土遺物	29
第5図 三ヶ尻遺跡全測図	10・11	第19図 第1～7号土坑	31
第6図 第1号住居跡	13	第20図 土坑出土遺物(1)	34
第7図 第1号住居跡出土遺物(1)	14	第21図 土坑出土遺物(2)	35
第8図 第1号住居跡出土遺物(2)	17	第22図 土坑出土遺物(3)	36
第9図 第1号住居跡出土遺物(3)	18	第23図 土坑出土遺物(4)	37
第10図 第1号住居跡出土遺物(4)	20	第24図 第1号埋甕出土状況	38
第11図 第1号住居跡出土遺物(5)	21	第25図 第1号埋甕出土遺物	38
第12図 第1号住居跡出土遺物(6)	22	第26図 第1～4号倒木痕	40
第13図 第2号住居跡	23	第27図 第5号倒木痕	41
第14図 第2号住居跡出土遺物(1)	24	第28図 倒木痕出土遺物(1)	42

第29図	倒木痕出土遺物(2)……………43	第49図	土坑・ピット全体図(2)……………69
第30図	遺構外出土遺物(1)……………44	第50図	土坑・ピット全体図(3)……………70
第31図	遺構外出土遺物(2)……………46	第51図	土坑・ピット全体図(4)……………71
第32図	遺構外出土遺物(3)……………48	第52図	土坑・ピット全体図(5)……………72
第33図	遺構外出土遺物(4)……………49	第53図	土坑・ピット全体図(6)……………73
第34図	遺構外出土遺物(5)……………50	第54図	土坑・ピット全体図(7)……………74
第35図	遺構外出土遺物(6)……………52	第55図	土坑・ピット全体図(8)……………75
第36図	遺構外出土遺物(7)……………53	第56図	土坑・ピット全体図(9)……………76
第37図	遺構外出土遺物(8)……………54	第57図	土坑・ピット全体図(10)……………77
第38図	第4・5号住居跡……………56	第58図	土坑・ピット全体図(11)……………77
第39図	第4号住居跡出土遺物……………57	第59図	土坑・ピット断面図(1)……………78
第40図	第5号住居跡出土遺物……………57	第60図	土坑・ピット断面図(2)……………79
第41図	第6号住居跡……………59	第61図	土坑・ピット断面図(3)……………80
第42図	第6号住居跡出土遺物……………60	第62図	土坑・ピット断面図(4)……………81
第43図	第7号住居跡・出土遺物……………62	第63図	第19号・192号土坑……………81
第44図	第8号住居跡・出土遺物……………63	第64図	土坑出土遺物(5)……………85
第45図	第8号土坑・出土遺物……………65	第65図	ピット出土遺物……………92
第46図	遺構外出土遺物(9)……………66	第66図	遺構外出土遺物(10)……………93
第47図	土坑・ピット全体図区割図……………67	第67図	第1号礎石建物跡……………94
第48図	土坑・ピット全体図(1)……………68	第68図	第1・2号集石遺構……………95

表 目 次

第1表	石器一覧表……………54	第8表	遺構外出土遺物(9)観察表……………66
第2表	第4号住居跡出土遺物観察表……………58	第9表	土坑一覧表……………82~84
第3表	第5号住居跡出土遺物観察表……………58	第10表	土坑出土遺物(5)観察表……………86
第4表	第6号住居跡出土遺物観察表……………61	第11表	ピット一覧表……………86~91
第5表	第7号住居跡出土遺物観察表……………61	第12表	ピット出土遺物観察表……………92
第6表	第8号住居跡出土遺物観察表……………64	第13表	遺構外出土遺物(10)観察表……………92
第7表	第8号土坑出土遺物観察表……………64		

図 版 目 次

図版1	第1号住居跡遺物出土状況	第2号住居跡
	第1号住居跡遺物出土状況	第2号住居跡遺物出土状況

	第2号住居跡炉出土状況		発掘調査風景
	第2号住居跡埋甕出土状況	図版5	第4～32号ピット
	第2号住居跡埋甕半截状況		第1号溝跡
	第4号土坑遺物出土状況		第2号溝跡(右)
図版2	第5号土坑遺物出土状況		第1号溝跡遺物出土状況
	第5号土坑打製石斧出土状況	図版6	第3・6・7・14・17号住居跡土師器坏
	第6号土坑礫出土状況	図版7	第3・6・13・14・15号住居跡土師器坏・椀・盤
	第1号埋甕遺物出土状況		第7・11・12号住居跡須恵器蓋
	第1号倒木痕遺物出土状況	図版8	第1・2・6・12・13・14号住居跡須恵器坏
	第4・5号住居跡遺物出土状況	図版9	第2・9・10・13号住居跡、遺構外出土遺物須恵器坏・椀
	第4号住居跡編み物石出土状況		第1・14号住居跡土師器甕
図版3	第6号住居跡遺物出土状況	図版10	第1・6・11号住居跡土師器甕
	第7号住居跡遺物出土状況	図版11	第6・10・13号住居跡土師器甕
	第8号住居跡遺物出土状況	図版12	第10号住居跡、遺構外出土遺物土師器甕・台付甕
	第8号住居跡カマド遺物出土状況		第12号住居跡、遺構外出土遺物須恵器壺・甕
	第8号土坑遺物出土状況	図版13	第3・5・6・7・11・14・16・17号住居跡須恵器壺・甕
	第8号土坑遺物出土状況	図版14	遺構外出土遺物須恵器甕
	第19号土坑人骨出土状況		第1・2号住居跡紡錘車
	第19号土坑頭骨出土状況		第5・17号住居跡、遺構外出土遺物土錘
図版4	第73号土坑石臼出土状況		遺構外出土遺物羽口・陶器
	第183号土坑遺物出土状況	図版15	第1号溝跡須恵器壺・甕・陶器・板石塔婆
	第192号土坑人骨出土状況		遺構外出土遺物打製石斧
	第192号土坑頭骨出土状況		
	第1号礎石建物跡		
	第1号礎石建物跡		
	第21号集石遺構		

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

昭和60年度、市立三尻小学校水泳プール老朽化に伴い、新水泳プール建設並びに運動場整備工事実施の運びとなった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、台地の縁辺先端部に位置し、その近隣の台地上には縄文時代前期からの集落跡や古墳跡、さらにこの北側には台地に沿って主に古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡等の遺跡が色濃く分布することが知られていた。そのため、教育委員会総務課から埋蔵文化財の取り扱いについて協議があった。このような状況下、当該地については保存に向けて協議を行ったが、工事計画の変更は困難なため記録保存の措置を講ずることとなり、発掘調査を実施することとなった。また、発掘調査に先立ち、埼玉県埋蔵文化財包蔵地調査カードを提出し、当該地を当初天王遺跡として変更増補を行った。

文化財保護法第57条の3の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知は熊谷市長より昭和61年2月13日付け60熊教社発第1203号で提出された。発掘調査は、昭和61年5月14日から実施した。

文化財保護法第98条の2の規定に基づく発掘調査に関わる熊谷市教育委員会の通知及び文化庁からの受理通知は以下のとおりである。

昭和61年4月12日付け61熊教社発第93号

昭和61年7月9日付け61委保記第2-2107号

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

三ヶ尻遺跡の三尻小学校水泳プール建設工事部分の発掘調査は、昭和61年5月14日から昭和61年9月1日にかけて行われた。調査面積は、遺跡面積約70,000m²のうちプール建設工事によって破壊をうける1,194.01m²であった。

調査は、遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行い、作業員による遺構確認のための精査を行った。そして、順次遺構掘削作業を行い、遺構・遺物の実測、写真撮影を行った。

昭和61年9月1日には現地における調査のすべてを終了した。調査途中、同小学校6年生対象の発掘調査体験学習も実施された。

(2) 整理・報告書作成作業

本書の整理作業は、平成14年10月から平成15年3月にかけて実施した。

遺物の洗浄・注記を実施し、土器の接合・復元作業を行った。その後遺物の分類を行い、実測作業を開始した。同時に遺構の図面整理も実施した。

次に土器等の遺物のトレース・拓本を採り図版組を行い、遺構のトレース・図版組を行った。そして、遺構の写真整理・遺物写真撮影をして、写真図版の割付をした。また、それと並行して原稿執筆を行い、業者の選定を行い、本報告書の刊行をした。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市教育委員会

(1) 発掘調査

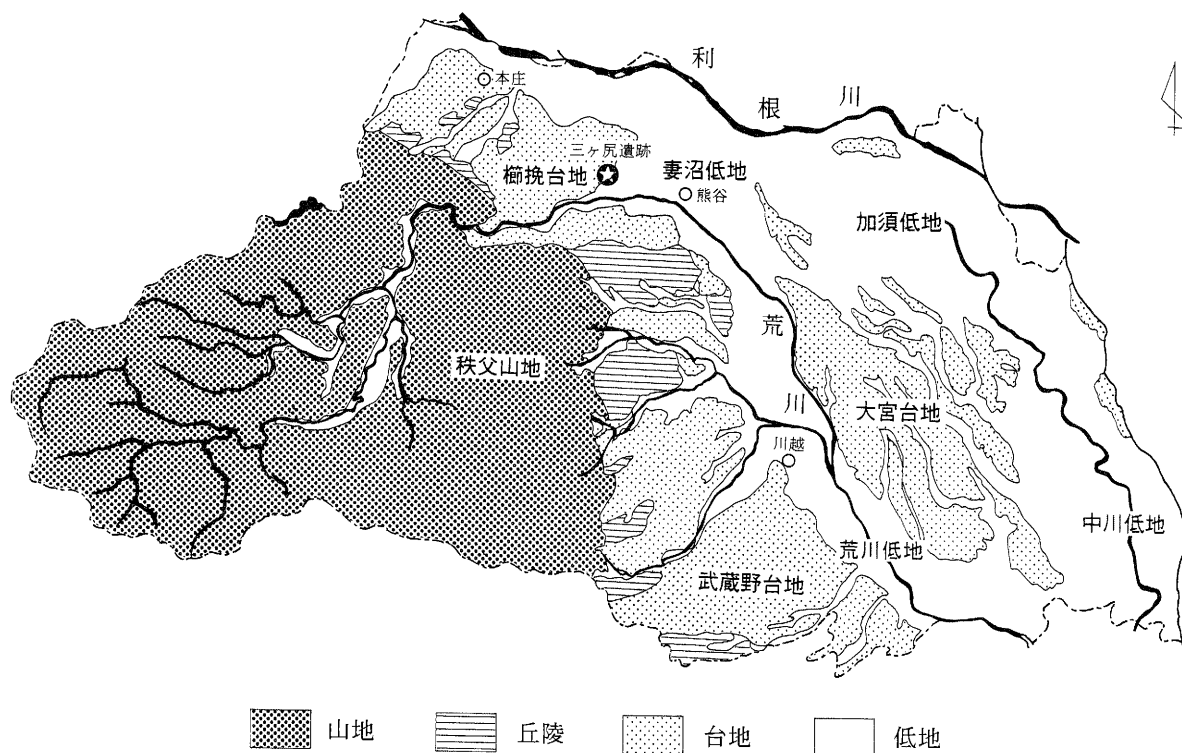
昭和61年度

教育長	関根 幸夫
教育次長	岡田 詮
社会教育課長	茂木 優
社会教育課長補佐	高田 普通
社会教育課振興係長	北 俊明
主査	山川 建
主任	米澤ひろみ
主事	寺社下 博
主事	金子 正之

(2) 整理・報告書作成事業

平成14年度

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	小林 武夫
社会教育課長	岩田 隆
社会教育課担当副参事	田中 英司
社会教育課長補佐	藤原 清
社会教育課文化財保護係主幹兼係長	金子 正之
主査	寺社下 博
主査	浅見 敦夫
主査	吉野 健
主事	松田 哲
発掘調査員	加藤 隆則
発掘調査員	渡邊 大士
発掘調査員	船場 昌子



第1図 埼玉県の地形図

II 遺跡の立地と環境

三ヶ尻遺跡は、熊谷市大字三ヶ尻字天王2956番地1他に所在し、JR高崎線籠原駅から南へ約2km、荒川から北へ約2km、利根川から南へ約8kmに位置する。

遺跡の所在する三ヶ尻地区は、熊谷市の西部にあたり、櫛挽台地の荒川寄り東縁辺部及び一部妻沼低地の新荒川扇状地上にある。櫛挽台地は、寄居町末野付近を扇頂に、荒川の両岸に広がる洪積扇状地である荒川扇状地の荒川左岸側の一帯が浸食されてできたものである。そして、妻沼低地は、利根川及びその支流により形成された沖積地であり、熊谷市の大半を覆っている沖積扇状地の新荒川扇状地（熊谷扇状地）と自然堤防が広がる地区に分けられる。本遺跡は、その荒川左岸の櫛挽台地東縁辺部の標高約50m前後に立地し、低地との比高差は約6m程度である。

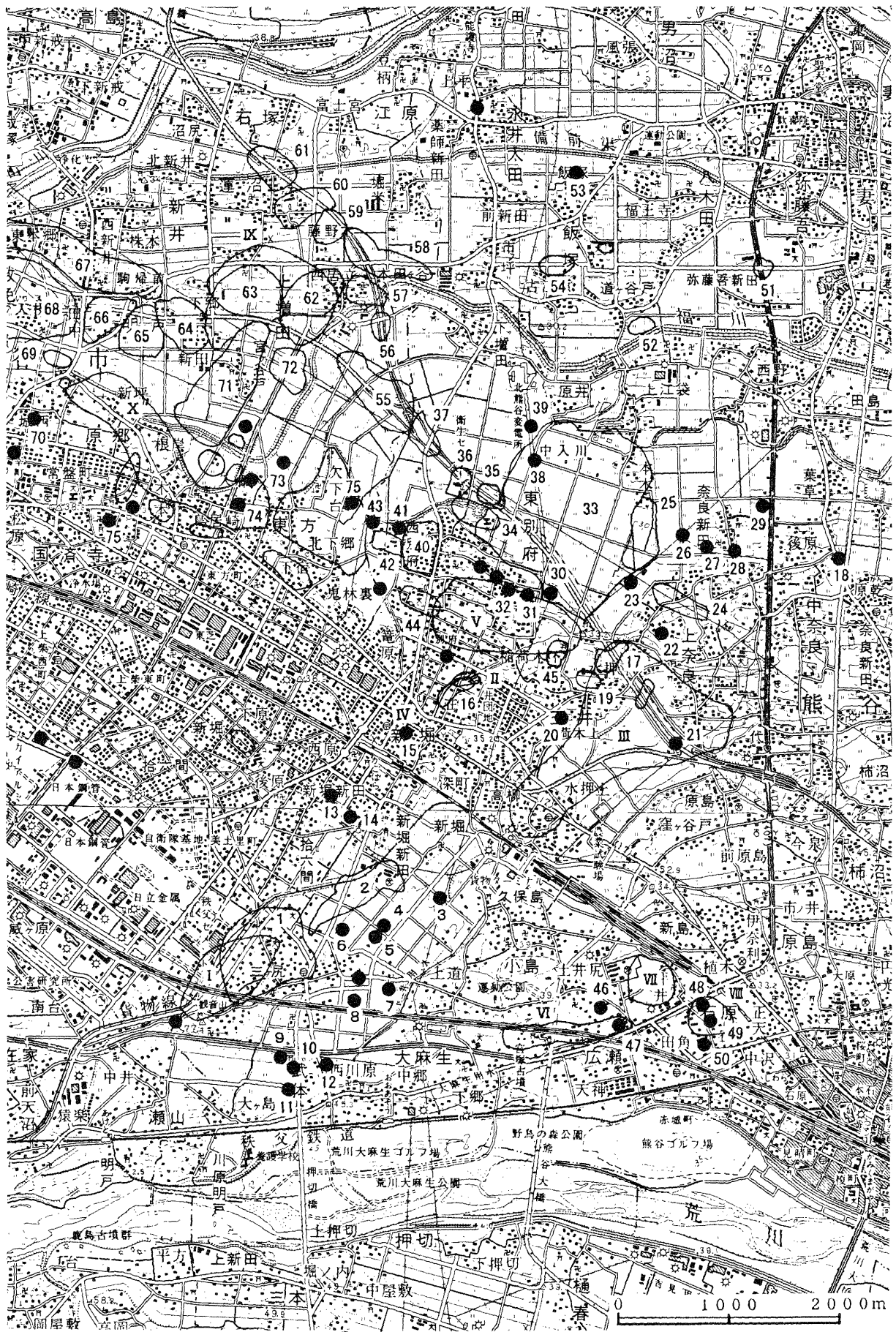
次に、本遺跡を中心に櫛挽台地及び妻沼低地における歴史的環境の一端を簡単に見ていく。

まず、旧石器時代から縄文時代であるが、この時期の遺跡の発見例はきわめて少ない状況である。旧石器時代で知られているのは、平安時代の住居跡覆土中から出土した、籠原裏遺跡の黒曜石製尖頭器が唯一の例である。縄文時代になると、櫛挽台地上さらには妻沼低地にも発見例が若干増える。早期では櫛挽台地上、深谷市東方城跡から尖頭器が確認されている。妻沼低地の寺東遺跡では前期関山式土器が、櫛挽台地上の遺跡である本遺跡内の林遺跡では黒浜式期の集落が確認されている。前述の寺東遺跡でも中期から後期にかけての敷石住居跡、埋甕、土坑が確認されている。後期に至ると、妻沼低地の寺東遺跡で称名寺式期の埋甕を伴う土坑等が発見されており、また豊富な土器群が検出された入川遺跡や深町遺跡も知られる。また、深谷市に目を転じてみると、妻沼低地の自然堤防上で発掘調査された本郷前東遺跡・原遺跡・上敷免遺跡・前遺跡等などの中期後葉から後期の遺跡が存在する。このことから、熊谷市だけに限らず深谷市においても妻沼低地の自然堤防上に生活の場を展開していったことが窺える。

縄文時代晩期から弥生時代前半にかけての熊谷市内の発見例はほとんどなく、縄文時代晩期の深谷市の妻沼低地では、前述の遺跡を継承した位置に再び集落が営まれたようである。

次に熊谷市内において本格的展開の知られる遺跡は、現段階では弥生時代中期まで待つことになる。妻沼低地上では須和田式期の再葬墓が16基発見された横間栗遺跡が、櫛挽台地上では同じく須和田式期の壺が発見されている三ヶ尻遺跡内の上古遺跡が知られる。さらに妻沼低地上で再葬墓群や土器を伴う土坑が検出されている遺跡は、深谷市上敷免遺跡・明戸東遺跡、妻沼町飯塚遺跡・飯塚南遺跡が知られる。上敷免遺跡では包含層から県内初の前期遠賀川式土器が出土している。市の東部の低地上に所在する北島遺跡・平戸遺跡・前中西遺跡も同時期の遺跡として挙げられ、北島遺跡でも再葬墓、土器棺墓、土壙墓群が、前中西遺跡では土器棺墓と方形周溝墓の2タイプの墓制が同時に発見されている。また、行田市小敷田遺跡では関東地方で最も古い段階の須和田式期の方形周溝墓が検出されている。一方、同時期の集落や住居跡が検出されている遺跡としては、妻沼低地の関下遺跡・飯塚南遺跡・池上遺跡が存在する。中期後半のものは深谷市宮ヶ谷戸遺跡・清水上遺跡で中部高地系櫛描文土器が出土している。後期には妻沼低地の各地に遺跡が見られ始め、深谷市明戸東遺跡・妻沼町弥藤吾新田遺跡・東沢遺跡・前中西遺跡・行田市池守遺跡が存在する。明戸東遺跡・東沢遺跡・池守遺跡では吉ヶ谷式土器が、弥藤吾新田遺跡では南関東系の弥生町式土器が出土している。

古墳時代に入ると、古墳は台地・自然堤防等の微高地に形成され、集落は台地ばかりでなく低地の自



第2図 周辺遺跡分布図

然堤防上にも営まれるようになり、次第に遺跡数も増加傾向にある。前期では、妻沼低地に大きく遺跡が展開している。横間栗遺跡・根絡遺跡・別府条里遺跡・一本木前遺跡・中耕地遺跡、深谷市清水上遺跡・明戸東遺跡・東川端遺跡・宮ヶ谷戸遺跡・本郷前東遺跡・上敷免遺跡、弥藤吾新田遺跡、小敷田遺跡等がある。横間栗遺跡では住居跡が3軒、根絡遺跡では住居跡が13軒検出されており、根絡遺跡、弥藤吾新田遺跡等は比較的大規模な集落と推定されている。

墓域の存在としては、上敷免遺跡・東川端遺跡等で方形周溝墓群が検出されており、特に東川端遺跡第2号方形周溝墓からは、パレススタイルの大型壺が出土している。

中期の様相は、他の時期と比べて不明な点が多いが、集落が大規模に展開していくのは中期後半以降となるようである。市東部に所在する北島遺跡・中条遺跡内の権現山遺跡・常光院東遺跡・前中西遺跡等で遺構・遺物が検出されている。北島遺跡では住居跡から須恵器の甕を模倣した土師器小型壺が、権現山遺跡では出現期の竈をもつ住居跡が検出されている。また、集落内の祭祀は東川端遺跡で確認されており、遺物が集中的に分布している谷にむかう斜面部で剣形滑石製模造品が検出されている。また、古墳に目を転じてみると、数こそ少ないが、妻沼低地の福川の自然堤防上に横塚山古墳が存在する。これは、B種横刷毛の埴輪をもつ前方後円墳（後円部は一部欠損）である。

そして、後期になると遺跡は爆発的な増加をみる。台地ばかりでなく自然堤防上にもさらに積極的に進出を図っていったようである。そして、集落は、古墳時代後期から奈良・平安時代へと継続して展開する大規模なものが市内では目立つようになる。櫛挽台地上及び新荒川扇状地上では、樋の上遺跡で古墳時代後期から平安時代の住居跡が90軒以上検出され、このうち古墳時代後期のものは14軒以上を数える。また同遺跡内の上辻・下辻遺跡でも後期から平安時代の住居跡が50軒以上検出され、本報告の集落とは小さな谷を挟んでいるが、一連のものだと判断できる。三ヶ尻遺跡内の天王遺跡でも後期の集落が検出されている。一方、妻沼低地の自然堤防上では、一本木前遺跡・天神下遺跡・根絡遺跡・原遺跡・東川端遺跡・新屋敷東遺跡・本郷前東遺跡・上敷免遺跡・砂田遺跡・柳町遺跡・城北遺跡・居立遺跡・飯塚南遺跡・妻沼町道ヶ谷戸遺跡等が存在する。一本木前遺跡では後期を中心に奈良・平安時代の住居跡

第2図掲載遺跡一覧表

- 1 三ヶ尻遺跡 2 樋の上遺跡 3 東遺跡 4 黒沢館跡 5 黒沢遺跡 6 若松遺跡 7 庚申塚遺跡 8 松原遺跡
 9 社裏北遺跡 10 社裏遺跡 11 社裏南遺跡 12 臺遺跡 13 拾六間後遺跡 14 堂西遺跡 15 籠原裏遺跡
 16 在家遺跡 17 新ヶ谷戸遺跡 18 奈良東耕地遺跡 19 水押下遺跡 20 稻荷木上遺跡 21 下河原上遺跡 22 奈良氏館跡
 23 天神下遺跡 24 土用ヶ谷戸遺跡 25 一本木前遺跡 26 中耕地遺跡 27 西通遺跡 28 東通遺跡
 29 横塚山古墳 30 寺東遺跡 31 別府氏館跡 32 別府城跡 33 別府条里遺跡 34 石田遺跡 35 関下遺跡 36 横間栗遺跡
 37 根絡遺跡 38 深町遺跡 39 入川遺跡 40 西別府館跡 41 西方遺跡 42 西別府廃寺 43 西別府祭祀遺跡
 44 原遺跡 45 玉井陣屋跡 46 高根遺跡 47 天神前遺跡 48 兵部裏屋敷跡 49 御蔵場跡 50 弥藤吾新田遺跡
 51 道ヶ谷戸遺跡 52 飯塚遺跡 53 飯塚南遺跡 54 清水上遺跡 55 前遺跡 56 居立遺跡 57 城北遺跡
 58 柳町遺跡 59 砂田遺跡 60 ウツギ内遺跡 61 原遺跡 62 明戸東遺跡 63 新田裏遺跡 64 新屋敷東遺跡 65 本郷前東遺跡
 66 上敷免北遺跡 67 上敷免遺跡 68 八日市遺跡 69 幡羅太郎館跡 70 宮ヶ谷戸堀ノ内遺跡
 71 東川端遺跡 72 城下遺跡 73 東方城跡 74 庁鼻和城跡 75 幡羅遺跡
- I 三ヶ尻古墳群 II 在家古墳群 III 玉井古墳群 IV 籠原裏古墳群 V 別府古墳群 VI 瀬古墳群
 VII 坪井古墳群 VIII 石原古墳群 IX 上増田古墳群 X 木の本古墳群

が300軒以上検出されており、当該期の祭祀跡も発見され、白玉を伴い土師器坏等の土器が折り重なるように出土した。城北遺跡では住居跡157軒が検出され、住居跡内から人骨、馬・牛等の獣骨が多数出土し、特に人骨が住居跡から検出された例はあまり知られていない。

一方、古墳を見てみると群を形成して築造されているのがわかる。本遺跡の南に分布する三ヶ尻古墳群のほか、櫛挽台地上には別府古墳群・在家古墳群・籠原裏古墳群・深谷市木の本古墳群、新荒川扇状地上には玉井古墳群・広瀬古墳群・坪井古墳群・石原古墳群、妻沼低地上には深谷市上増田古墳群のほか中条古墳群等が分布する。これらは概ね6世紀から7世紀、ないしは8世紀初頭にかけて形成された古墳群である。三ヶ尻古墳群は、前方後円墳の二子山古墳を盟主墳とする100基以上の古墳で構成される大古墳群であるが、現在でも61基の所在が確認されている（消滅・半壊を含める）。別府古墳群では、農夫の埴輪が出土している。籠原裏古墳群は川原石乱石積の胴張型横穴式石室を有する古墳群であるが、7世紀末の築造と考えられる八角形の墳形をもつ古墳の存在が知られており、終末期の古墳の様相、さらには後述する8世紀初頭創建の西別府廃寺という初期寺院との関係においても見逃すことのできない発見である。玉井古墳群に含まれると考えられる新ヶ谷戸遺跡1号墳でも川原石使用の胴張型横穴式石室が発掘調査によって発見されている。広瀬古墳群中の宮塚古墳は、上円下方墳という特異な墳形を今に残し、熊谷市唯一の国指定史跡として知られている。

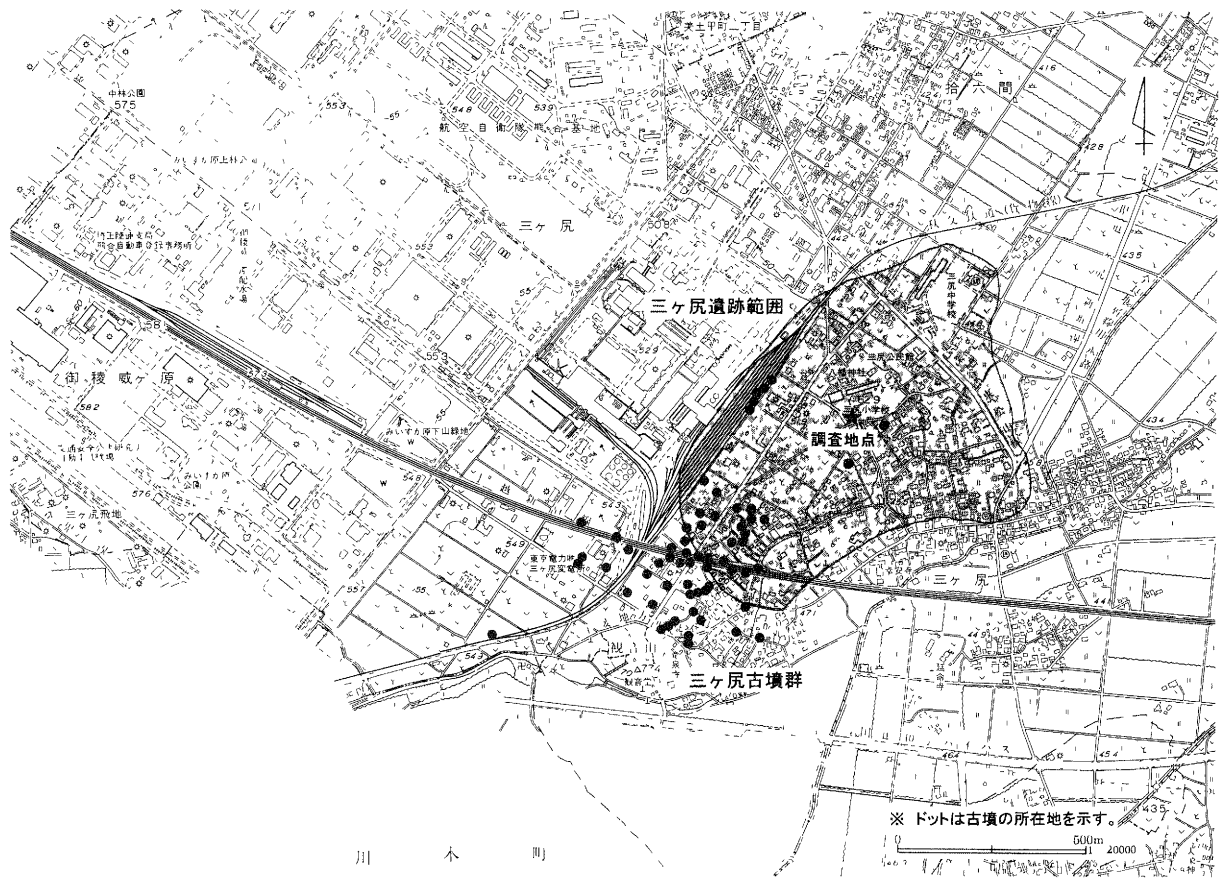
古墳時代後半に自然堤防上の微高地に形成された集落の多くは、増減はするものの奈良・平安時代へと継続されていく。新屋敷東遺跡・明戸東遺跡は、竪穴式住居を主体に少量の掘立柱建物で構成された集落である。他には、上敷免遺跡・柳町遺跡・東川端遺跡・清水上遺跡・根絡遺跡等が挙げられる。奈良時代には、この地域も律令体制に組み込まれていき、別府条里遺跡等が見られる。このころの中心的遺跡は櫛挽台地上に見られ、この地域には幡羅郡が設置され、台地上に「原郷」の地名が残る。ここには、前述のとおり西別府廃寺が存在する。二度の発掘調査によって寺域を区画する大溝、伽藍配置は不明であるが基壇跡、瓦溜まり状遺構等とともに軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が多量に出土している。瓦は8世紀初頭から9世紀後半のものまで確認されており、県内でも滑川町寺谷廃寺に次いで最も古い建立の寺院の一つとして認識されている。また、その北西約200mの湯殿神社裏の湧水箇所には西別府祭祀遺跡が所在し、奈良時代を中心にする古墳時代後期から平安時代までの、県内でも類例がほとんどない水辺の祭祀遺跡である。また、深谷市の幡羅遺跡では総柱倉庫群が発見され幡羅郡衙の正倉と考えられており、西別府廃寺、西別府祭祀遺跡とともに幡羅郡衙を考える上で重要な遺跡群である。すなわち、西別府廃寺は、幡羅郡の郡寺的な機能を有すると考え、周辺古墳群を形成した有力氏族との関係も想定できる。他に、奈良・平安時代の集落遺跡としては、在家遺跡・籠原裏遺跡・拾六間後遺跡・堂西遺跡・一本木前遺跡・飯塚南遺跡・新ヶ谷戸遺跡・奈良東耕地遺跡・不二ノ腰遺跡・高根遺跡等がある。一本木前遺跡の11世紀初頭の住居跡からは、瑞花鴛鴦八稜鏡が出土し、県内初の住居跡出土例として注目されている。

平安時代末から中世になると、武蔵七党やその他の在地武士団の館跡が散在するようになる。別府城跡・別府氏館跡・西別府館跡・玉井陣屋跡・奈良氏館跡・黒沢館跡・兵部裏屋敷、深谷市東方城跡・庁鼻和城跡・幡羅太郎館跡等であるが、いずれの居館も実態は詳細不明である。その中で残りの良いものの中に、別府城跡がある。別府氏の居館で方形の敷地に土塁の一部と空堀を良く残している。また、三ヶ尻地区に所在する黒沢館跡は、発掘調査によって出柝形に張り出して台形に全周する堀・土塁の一部・

2箇所の虎口・柱穴跡・土壙・集石遺構等が検出され、渡辺崋山の記した『訪蹊録』に残る「黒沢館跡」の記載と遺構が合致した貴重な例である。遺物としては、14～15世紀の年号が記載された板石塔婆や15～16世紀の瀬戸・美濃窯製品や内耳土器、土師質土器等が出土している。また、その北側に所在する樋の上遺跡でも、15～16世紀の土壙・集石遺構とともに比較的深くコーナーをもつ溝跡が検出されており、館跡の一部である可能性が考えられている。墓域としては、三ヶ尻遺跡内の天王遺跡・樋の上遺跡・若松遺跡・社裏北遺跡・社裏遺跡・社裏南遺跡等が挙げられ、楯挽台地及びそれを仰ぐ新荒川扇状地上に分布する。樋の上遺跡・若松遺跡では土葬墓・火葬跡等が検出されている。また、黒沢館跡及び樋の上遺跡の南西に位置する社裏北遺跡・社裏遺跡・社裏南遺跡では土壙墓群が、台地上の天王遺跡でも墓地群が検出されている。

また、台地の縁辺部に位置する西別府地区の西方遺跡では中世から近世にかけての150基以上もの土壙墓群が検出されている。

しかし、中世以降は調査例が少なく、歴史の実態はまだまだ情報不足で不明な点が多い。したがって、今後の調査成果によるところが大きく、情報の蓄積が期待される。



第3図 三ヶ尻遺跡・三ヶ尻古墳群位置図



第4図 三ヶ尻遺跡調査区位置図

III 遺跡の概要

1 調査の方法

発掘調査の方法は、1辺6mのグリッドを用いて調査区全体を網羅できるように、調査区の長辺・短辺にて任意に設定し、北東隅をA-1として南へA・B・C……、西へ1・2・3……と呼称し調査を実施した。

実測作業を行うにあたっては、グリッド交点に設定した杭を基準に水糸による1m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法を用いた。

2 検出された遺構と遺物

今回の発掘調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡3軒、土坑7基、埋甕1基、倒木痕5箇所、古墳時代の竪穴住居跡4軒、奈良時代の土坑1基、平安時代の竪穴住居跡1軒、中世の土坑184基、ピット328基、その他時期不明の礎石建物跡1棟、集石遺構2基である。出土した遺物は、縄文土器・石器、弥生土器、古墳・奈良・平安時代の土師器、須恵器、土製品、中世の土師質土器、瓦質土器、陶器、古銭、石臼、五輪塔、近世の陶磁器、煙管、古銭などコンテナ約25箱分の出土量であった。

縄文時代の遺物は、住居跡、土坑、埋甕、倒木痕の遺物である。

弥生時代の遺物は、遺構外出土の遺物である。

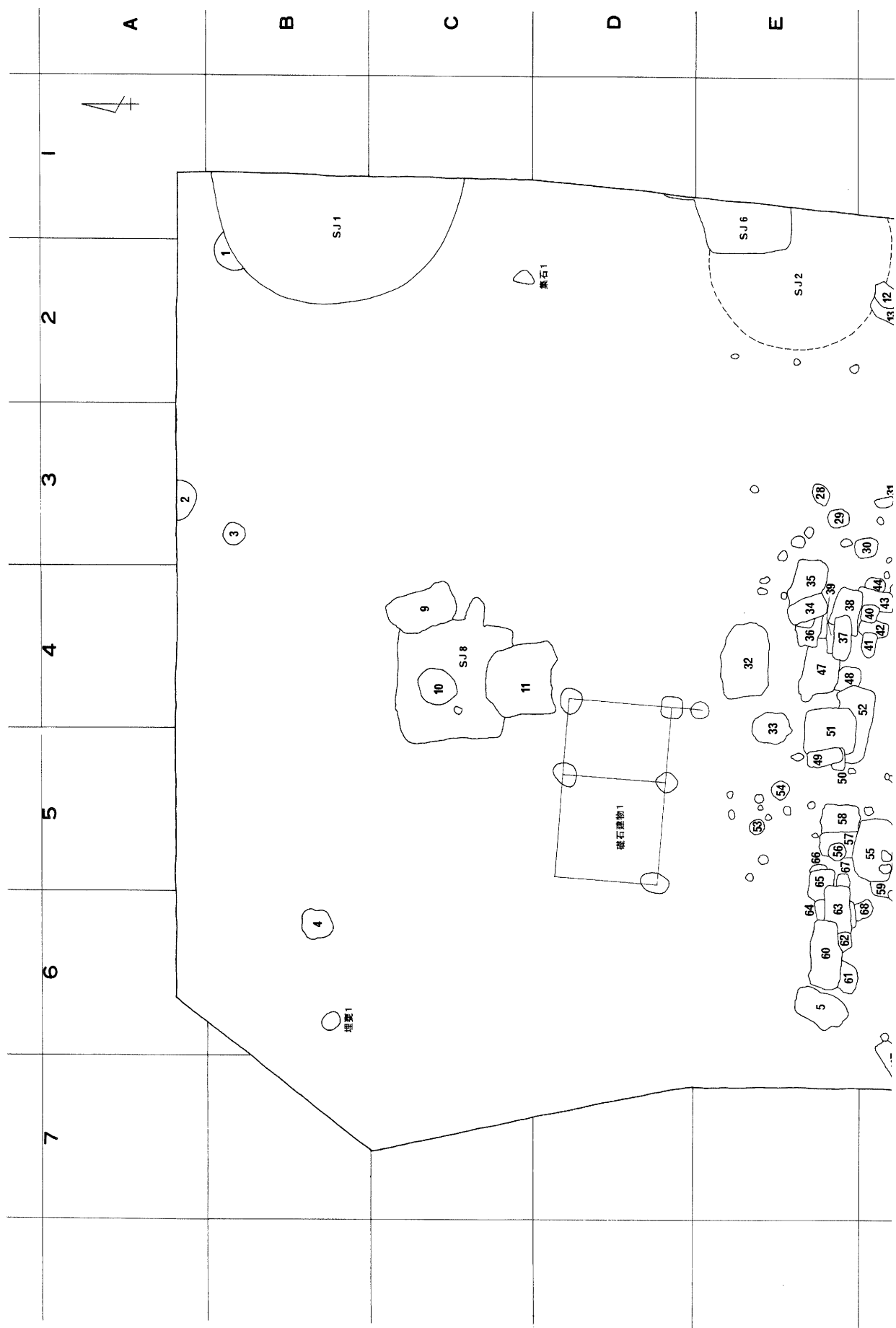
古墳時代の遺物は、住居跡、遺構外の遺物である。

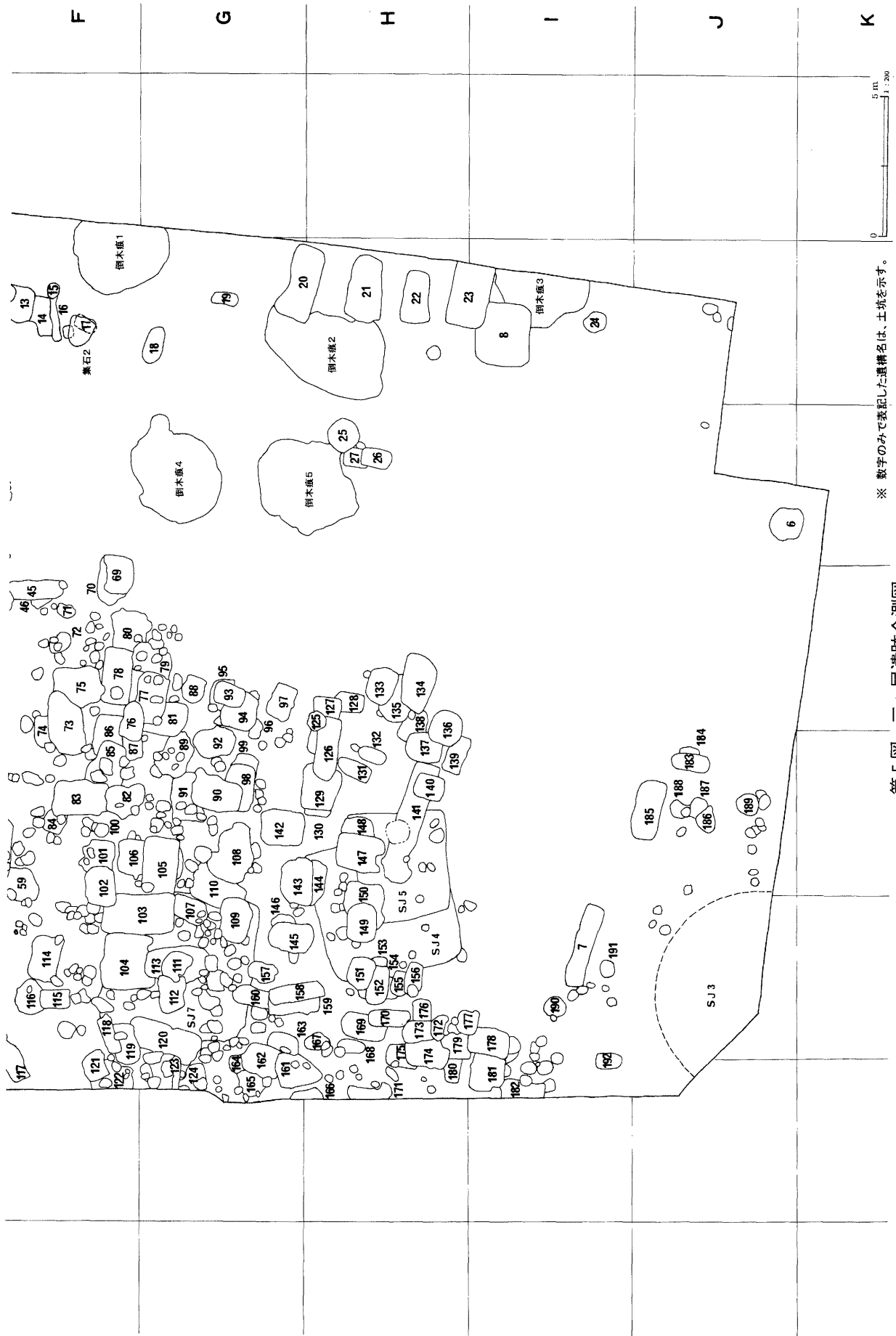
奈良時代の遺物は、土坑の遺物である。

平安時代の遺物は、竪穴住居跡、遺構外の遺物である。

中世の遺物は、土坑、ピット、遺構外の遺物である。

近世の遺物は、遺構外の遺物である。





第5図 三ヶ尻遺跡全測図

IV 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

本遺跡において確認された縄文時代に属する遺構は、竪穴住居跡3軒、土坑7基、埋甕1基、倒木痕5箇所であり、時期は中期後半加曾利E式～後期称名寺式期に比定される。竪穴住居跡3軒はいずれも調査区外にかかっており、ともに住居跡の半分ほどの調査にとどまった。時期は加曾利E式期である。土坑7基も調査区の外縁に分布しており、加曾利E式～称名寺式期に位置づけられる。埋甕1基は調査区北西に位置し、加曾利E式の浅鉢を埋設する。倒木痕は調査区南東に5箇所が集中する。このうち3箇所からは遺物が出土し、縄文時代のものと判断された。残り2箇所は遺物の出土が見られなかったが、覆土の様相と位置関係などから該期のものと判断した。該期のいずれの遺構も本調査区の外縁に分布し、集落は周辺にも及ぶものと思われる。

当遺跡の中心となる中期後半～後期初頭期以外の縄文時代遺物としては、縄文時代前期後半諸磯a式の深鉢破片1点、諸磯c式の深鉢破片数点、堀之内2式の深鉢破片1点、加曾利B式の深鉢破片1点、安行式深鉢破片1点を確認している。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第6図）

B-1・2、C-1・2グリッドに位置する。住居跡の東側半分は調査区外のため未調査である。北側では第1号土坑を切っている。平面形は直径約9.5mの円形である。床面は凹凸が激しく、南に向かって緩やかに下がる。南壁は急激に立ち上がり、北壁は緩やかに立ち上がる。5基検出されたピットはいずれも北側に分布し、深さはP1=50cm、P4=12cm、P5=32cmを測る。

炉跡は住居跡中央やや西よりに地床炉が検出された。掘り方は南北にやや長い楕円形で長軸80cm弱、短軸60cm、深さ10cmを測る。

出土遺物（第7図～第12図）

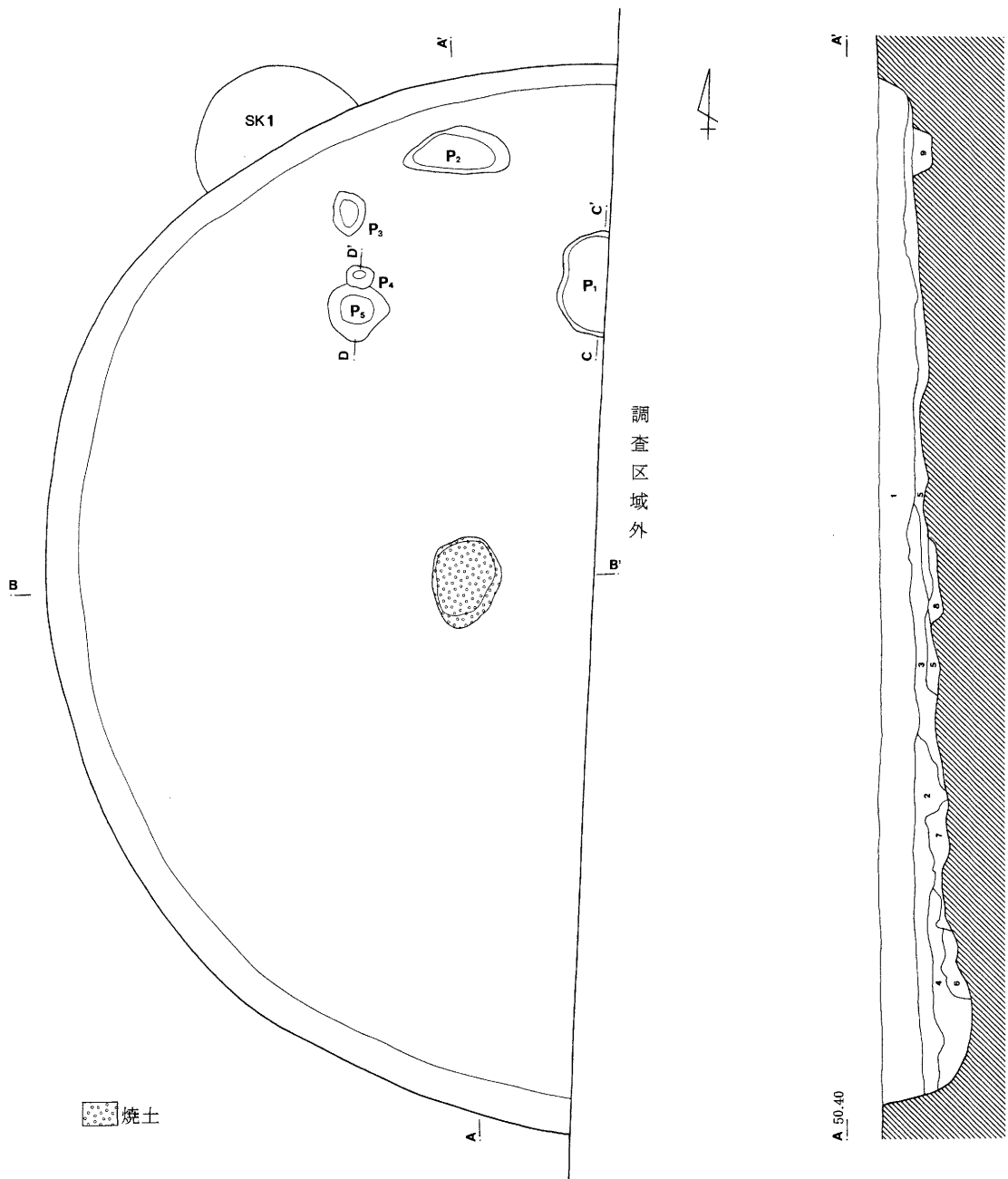
住居跡床面および覆土中から大量の土器・石器が出土している。遺物は住居内の全域に濃密に分布する。本遺跡の住居跡中、もっとも遺物の出土量が多くコンテナ8箱を数える。

1) 土器（第7図～第10図）

第7図1は4単位小波状口縁の深鉢であり胴下半部を欠損する。胴上半部にくびれをもち、口縁部に向かって外側へ広がる。口縁部文様帯は隆帯による楕円形区画と渦巻文が組み合わさり、胴部は2本沈線の懸垂文が8単位に垂下する。地文は横位のLR単節縄文である。口径23.0cm、現存高14.1cm。

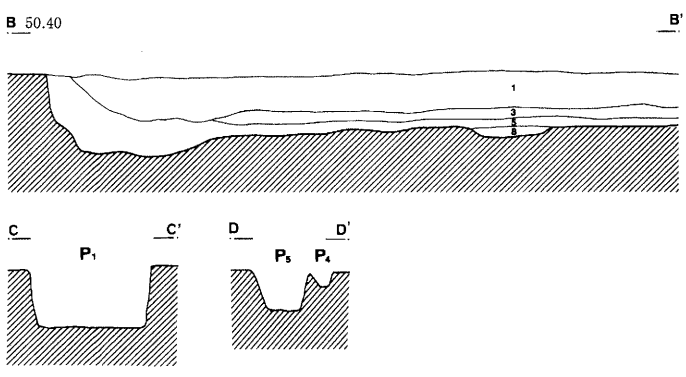
2は繫弧文の土器で胴下半部を欠損する。胴上半部にくびれをもち、口縁部に向かって外方へ直線的に立ち上がり、口唇部に至り緩やかに内湾する。弧文連結部には渦巻文が配される。胴部は渦巻文から垂下させた隆帯により4単位に配し、懸垂文間は弧文や重弧文が充填される。口径21.8cm、現存高13.8cm。

3は連弧文類の水平口縁深鉢で、胴部や底部を若干失っているものの全容のわかる個体である。胴部中段が張り、頸部にくびれをもち、口縁部に向かって緩やかに外反する。口唇部は外屈し断面三角形になる。口縁部直下には浅い沈線を2条巡らせ、円形刺突文列を2段に配する。頸部には2段の磨消し連

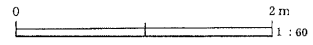


焼土

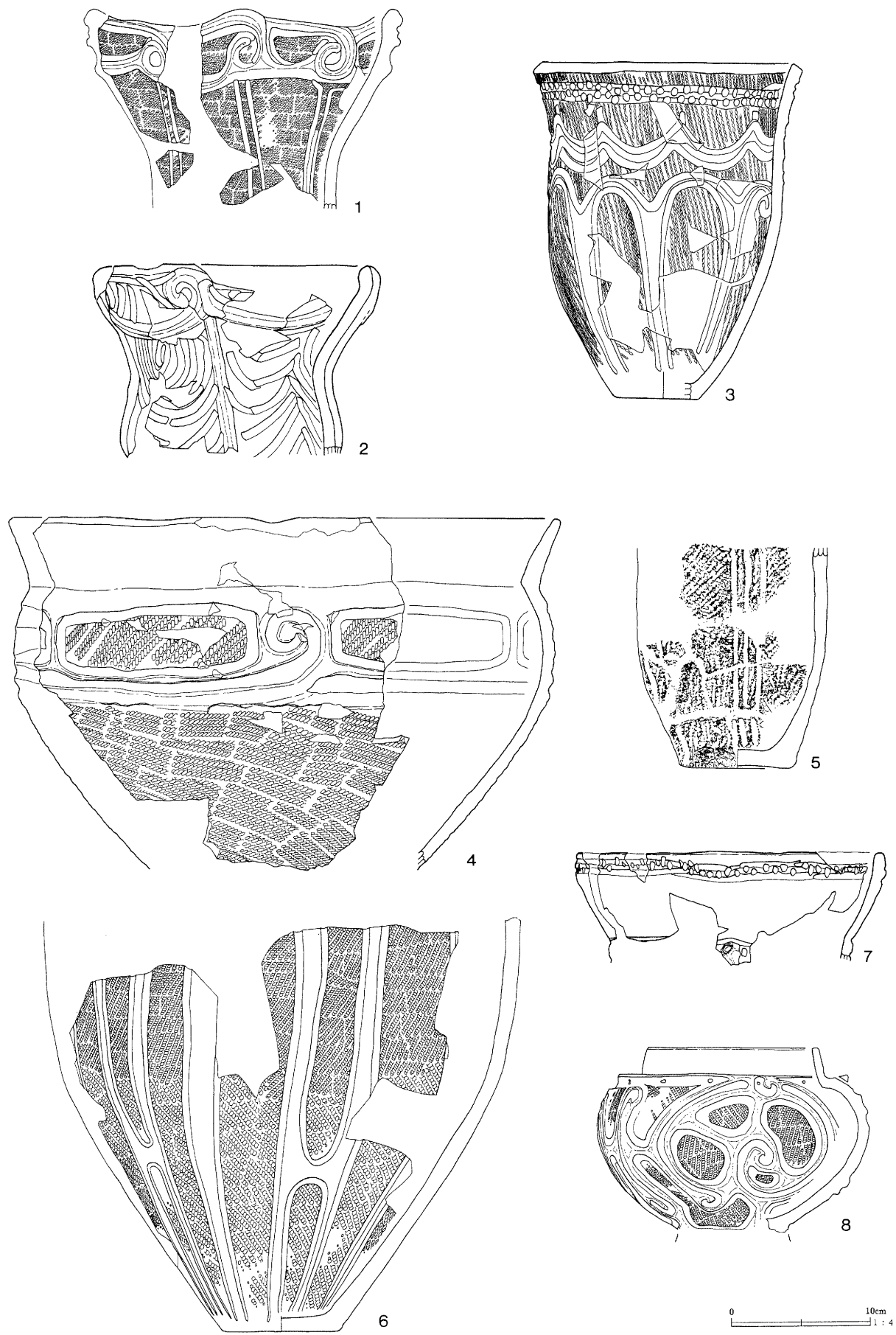
調査区域外



- 土層註記**
 SJ-1
 1 暗褐色土
 2 褐黒色土 (ロームブロック少量含む)
 3 暗灰褐色土
 4 黒褐色土
 5 暗灰色土 (ロームブロック少量含む)
 6 暗灰黄色土 (褐黒色土、ロームブロック少量含む)
 7 黄灰色土 (ロームブロック多量に含む)
 8 暗褐色土 (黒褐色土、黄褐色土、焼土ブロック多量に含む)
 9 褐黒色土 (ロームブロック少量含む)



第6図 第1号住居跡



第7图 第1号住居跡出土遺物(1)

弧文を10単位に、胴下半部は波状文と組み合わさった逆U字状文が8単位に配され、両文様間は磨消される。地文はR撚りの撚糸文を縦位に施文する。口径19.2cm、底径6.0cm、器高24.3cm。

4は浅鉢である。胴上半部に最大径を持ち、頸部はくの字に屈曲し、口縁部に向かって直線的に広がる。口縁部は無文で胴上半部に文様帯を持つ。文様帯は楕円形区画文と渦巻文によって構成されており、区画文内はRL単節縄文を縦位に施文する。口径39.6cm、現存高25.4cm。

5は胴部中段から底部にかけての破片である。胴下半部に最大径をもち、上半部に向かってややくびれる。底部はやや上げ底みである。3条一組の沈線文を垂下し、地文はLR単節縄文を縦位に施文する。底径8.4cm、現存高16.9cm。

6は胴下半部から底部にかけての破片である。地文は胴下半部をLR単節縄文で、上半部をRL単節縄文で施文する。逆U字状の区画文間は磨消される。底径10.4cm、器高36.8cm。

7は口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部に向けて外側へ開きながら緩やかに内湾して立ち上がる。口縁直下には2条の沈線が横走し、沈線間は棒状工具による上下の交互刺突が施される。結果として口縁部には、小波状モチーフが描出される。頸部以下は欠損するが頸部にも同様のモチーフが描出され、瘤状の突起が貼付される。頸部は内外面ともに丁寧に磨かれる。口径22.4cm、現存高8.1cm。

8は脚台付きの有孔鋳付土器である。胴部は50%の残存率で、脚台部は完全に欠損する。口縁は無文でやや内側へ向かって直線的に立ち上がる。胴上半部に最大径を持ち、胴下半部に向かって急激にくびれる。胴部には隆帯と沈線により、楕円形区画文や渦巻文、S字状文、勾玉状モチーフ等が配され、RL単節縄文とLR単節縄文が任意に充填される。口径12.3cm、現存高13.9cm。

第8図9～15は楕円形区画文を有するキャリパー類深鉢の口縁部である。このうち9・11・12・14・15は口縁部文様帯に楕円形区画文と渦巻文をもった個体である。9は波状口縁で波頂部には円孔を穿つ。口縁部文様帯には楕円形区画文に渦巻文が組み合わさったモチーフが描出され、区画内には縦位のLR単節縄文が充填される。胴部は磨消懸垂文が施される。10は胴上半部から外反し、口縁部は緩やかに内湾して立ち上がる。口縁部文様帯の楕円形区画文内にはRL単節縄文が縦位に施文される。11は口縁端部が肥厚しやや外反する。口縁部文様帯には楕円形区画文と渦巻文が描出される。胴部との境界には幅広の沈線が巡る。12も口縁部が内湾し口唇部は肥厚する。13は楕円形区画文間に円形のモチーフが配される。

16はキャリパー類深鉢の口縁部である。地文の条線文は、器面の乾燥が進行した段階で施文される。口縁部の直下には2段の隆帯がめぐり、隆帯からは渦巻文が懸垂する。

17～20は水平口縁の口縁部直下に幅広の沈線を施す土器である。いずれも口唇部が肥厚する。17は口縁直下に隆帯を施す。20は楕円形区画文が施され、区画内はLR単節縄文が充填される。

21～24は水平口縁であり口縁直下に隆帯を横走させる土器である。21・22は隆帯以下にLR単節縄文を施す。23は地文無節縄文に沈線による弧状モチーフが描出され、モチーフ内は磨消される。24の隆帯以下は縦位の沈線文が施される。

25は口縁直下に沈線を施す。地文は縦位のRL単節縄文である。26は楕円形区画文であろうか。沈線区画内には縦位のLR単節縄文が施される。

27～29は連弧文類深鉢の口縁部である。27は口縁直下に沈線を2条施し、沈線間を交互刺突が行われる。地文は縦位のLR単節縄文で、文様は3条沈線の弧文が配される。28は口縁部直下に3本の横沈線を

施し、以下に弧文を描出する。29は2条一組の沈線を2段配した弧文連結部分は渦巻文が施される。

30は2条一組の沈線で弧状のモチーフが描かれているが、楕円形区画文であろうか。

31は口縁端部に沈線を施す土器である。口縁直下に弧状の隆帯が施される。

32～35は口縁直下の2条の沈線間に棒状工具による上下の交互刺突を施す土器である。結果として口縁直下に小波状の区画が描出される。32は横位のLR単節縄文を地文とし、小波状区画の下位に沈線による弧状モチーフを描出する。2条一組の沈線で描かれている弧文は波状文であろうか。32～34は同一個体と思われる。35も口縁下において同様の描出方法をとるが、施文は粗雑で小波状モチーフ自体は崩れている。

36は地文のみの土器である。口縁直下からLR単節縄文が施される。

37～39は口縁直下には沈線が施され、縦位の条線を地文に持つ個体である。37は2条の沈線が横走り、沈線上に刺突文列が施される。地文上にも沈線によるモチーフが描出されるが、詳細は不明である。

40は水平口縁深鉢の口縁部である。口縁が肥厚しやや内湾して立ち上がる。地文はもたず、口縁部には楕円形区画文が施される。

41は沈線による逆U字状区画を配し、区画間を磨消し区画内を充填する。

42～51は地文を無文とし、沈線により文様が描出される土器である。42は水平口縁深鉢の口縁部から胴上半部破片である。胴部はほぼ直立し、頸部で変換をむかえ口縁部に向かい外側に開く器形である。32～35と同様の文様描出法により口縁下に小波状モチーフを施文する。胴部も同様の小波状モチーフを8単位に垂下させるが、口縁下のモチーフより崩れている。8単位に分割された懸垂文間は矢羽状沈線が施される。口径21.4cm、現存高11.6cm。

43・48～51は矢羽状モチーフを描出する土器である。43は口縁部破片であり、沈線は口縁下から施される。口径20.2cm、現存高8.3cm。

44・45・46は懸垂文間に矢羽状モチーフを描出する土器である。46は2本一組の懸垂文と弧状モチーフが描かれる。

52～58は撚糸文を地文にもつ土器である。55はL撚りの撚糸文を地文とし、2条の沈線による懸垂文と3条の弧状モチーフが描かれる。56～58は隆帯によって文様モチーフが描出される土器である。56は隆帯が垂下し、そこから渦巻文や樹枝状モチーフが派生する。57も弧状モチーフから別の隆帯が垂下し、円形ないしは渦巻状モチーフが懸垂文に組み込まれる。58は弧状の隆帯中に渦巻文を組み込んだ文様である。57・58はともに胎土に砂粒や小礫を多量に含み同一個体と思われる。

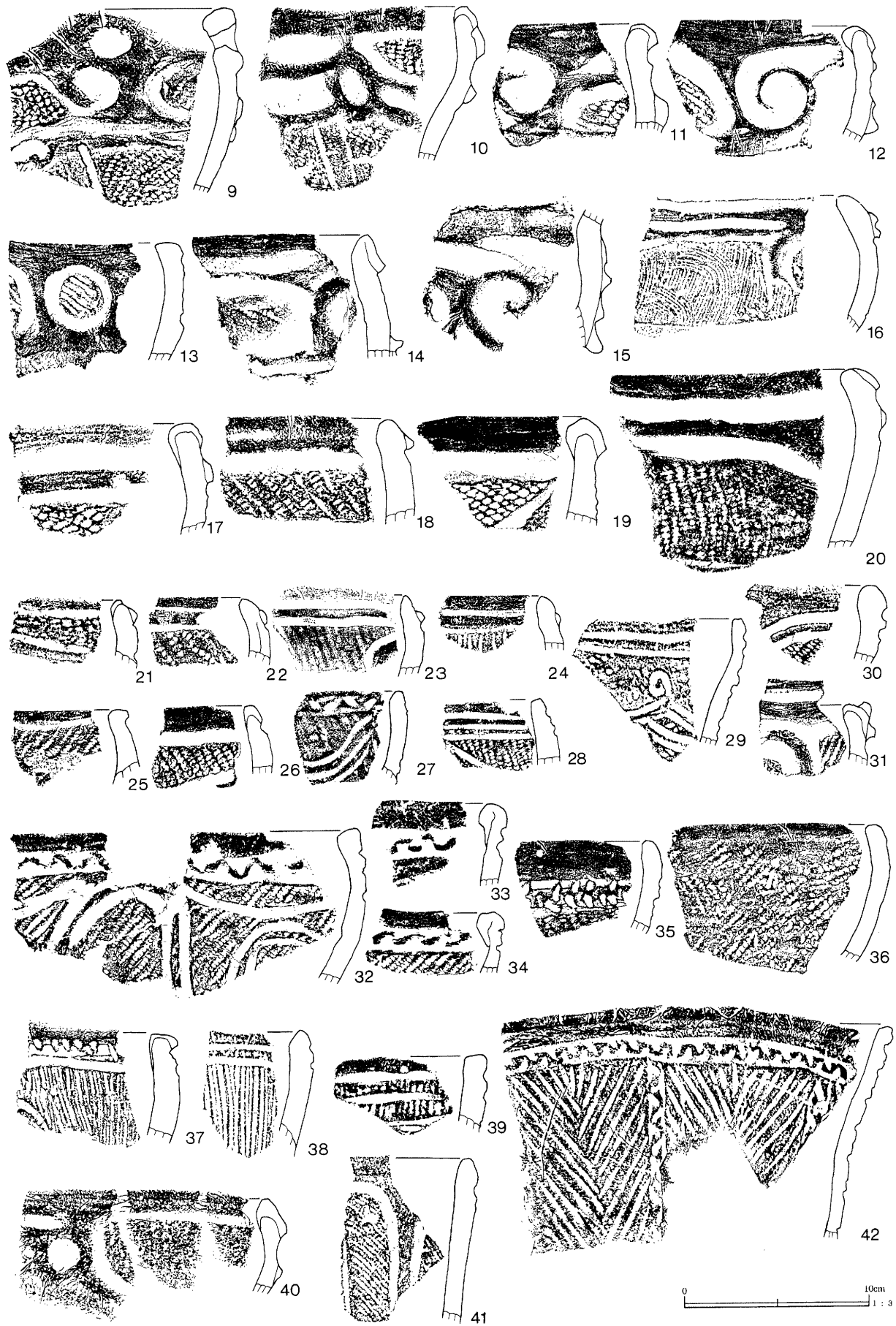
59～61は隆帯による区画をし、区画間に列点文を施した土器である。61は胴上半部が張り、頸部がくびれ、このくびれ部に隆帯区画が施される。胴部にはRL単節縄文を縦位施文する。59～61は文様、胎土・焼成などから同一個体と判断される。

62もくびれた頸部に隆帯区画をもち、区画内は沈線による上下の交互刺突が行われる。胴部の地文はRL単節縄文であり、隆帯区画からは2本一組の隆帯によるモチーフが描出される。

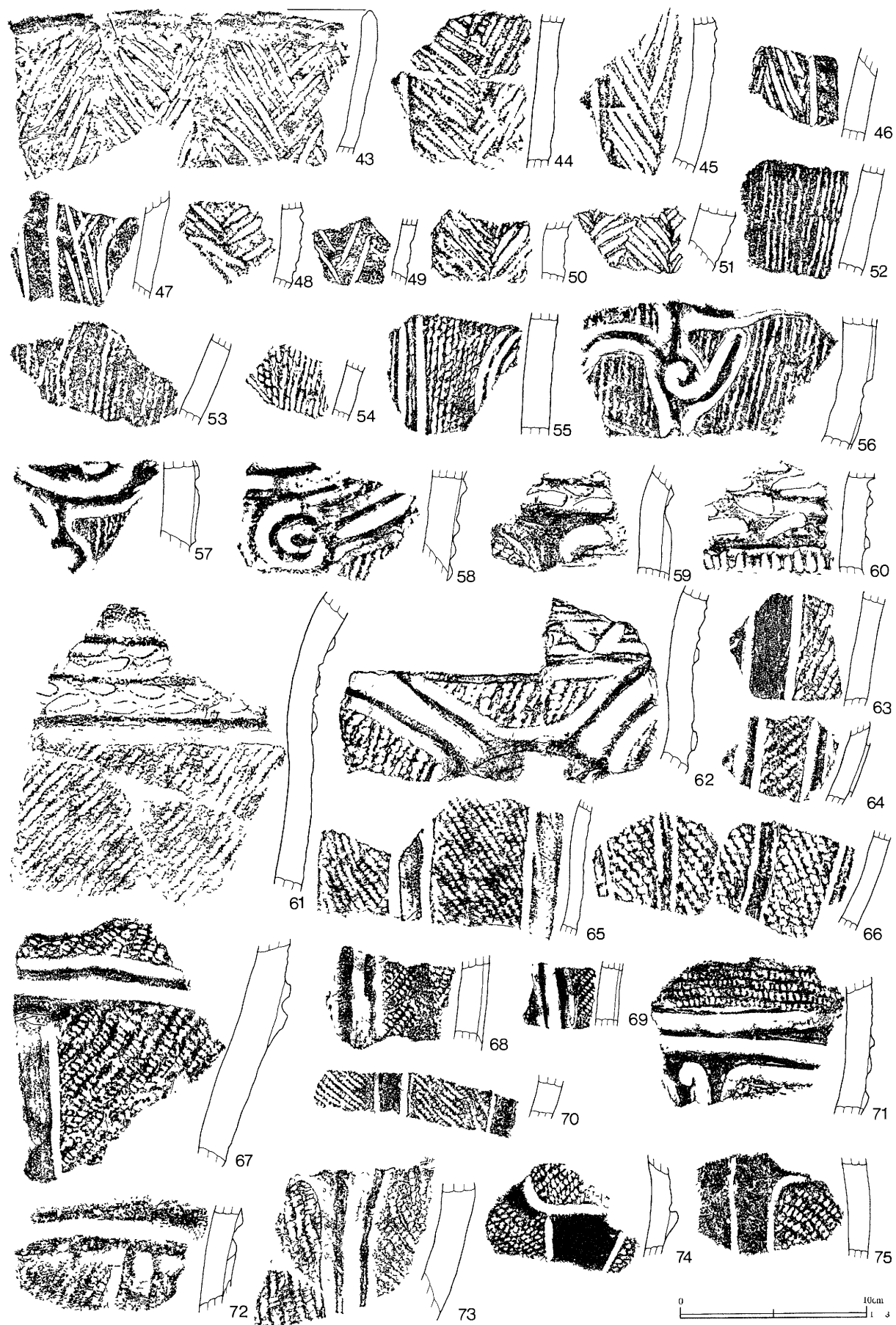
63・65・66・70は磨消し懸垂文の胴部破片である。63は縦位のRL単節縄文を地文とする。65・66・70は、幅狭の磨消し懸垂文が施される土器で、65・66はLR単節縄文を、70はRL単節縄文を地文にもつ。

67は頸部と胴部を隆帯で区画し、胴部は磨消し懸垂文が施される。地文はRL単節縄文である。

64は隆帯の懸垂文を施す胴部破片であり、地文はRL単節縄文を縦位に施す。68・69は2本隆帯の懸垂



第8图 第1号住居跡出土遺物(2)



第9图 第1号住居跡出土遺物(3)

文を施し、地文は縦位の RL 単節縄文である。

67・71・72は頸部の隆帯区画から懸垂文が施される土器である。67は横位の隆帯区画から沈線による磨消し懸垂文が施される。71・72は横位の2本隆帯から縦位の2本隆帯懸垂文が施される土器であるが、71は懸垂文間に沈線による蕨手状モチーフが描かれる。地文は RL 単節縄文である。73は2本隆帯による懸垂文が施される。地文は縦位の LR 単節縄文である。

74・75は磨消し縄文の土器である。74は地文 LR 単節縄文であり、75は地文 RL 単節縄文を横位に施す。

76～78は連弧文類深鉢である。76は2本沈線により渦巻文を描出し、その下位には弧文の連結部分が観察される。78の文様は32の文様と類似しており、同一個体の可能性がある。

79は懸垂文と蛇行懸垂文の配される土器である。80は横沈線から3本沈線で渦巻状文様を施文する。

81・82は文様モチーフを持たない地文のみの土器である。81は RL 単節縄文を地文にもつ胴部破片である。82は縄文が羽状に施文される。

83は地文が条線文の土器で浅鉢である。横走する幅広沈線の上下で櫛歯状工具による縦位施文が行われているが、沈線下位が比較的深く施文されているのに対し、沈線上位は施文が浅く、あたかもミガキのようである。器面成形後の施文の結果か、単なる施文のタイミングによる差であろうか。

84・85は地文が無文で、沈線により文様が描かれる土器である。

86は無文地に櫛歯状工具によりモチーフが描かれる。器面が乾いた段階での施文と思われる。

87～90は無文地に沈線による文様が描出される土器である。87は隆帯懸垂文をもち斜行沈線が施される。88は格子目状に沈線が施された後、2条一組の懸垂文を施文する。

91～93は斜行沈線の施された曾利系深鉢の口縁部である。91・92は緩やかに内湾しながら口縁部に至り、口唇部は平坦である。93は外方へ向かって直線的に立ち上がる土器である。口縁部内側に隆帯がめぐり、外面の斜行沈線が口縁端部をまたぎ、口縁部内側におよぶ。

94・95は口縁部無文の深鉢である。94は若干内湾して立ち上がり、口唇部は折り返されやや肥厚する。95は頸部でくの字に屈曲し、そのまま外方に直線的に立ち上がる。

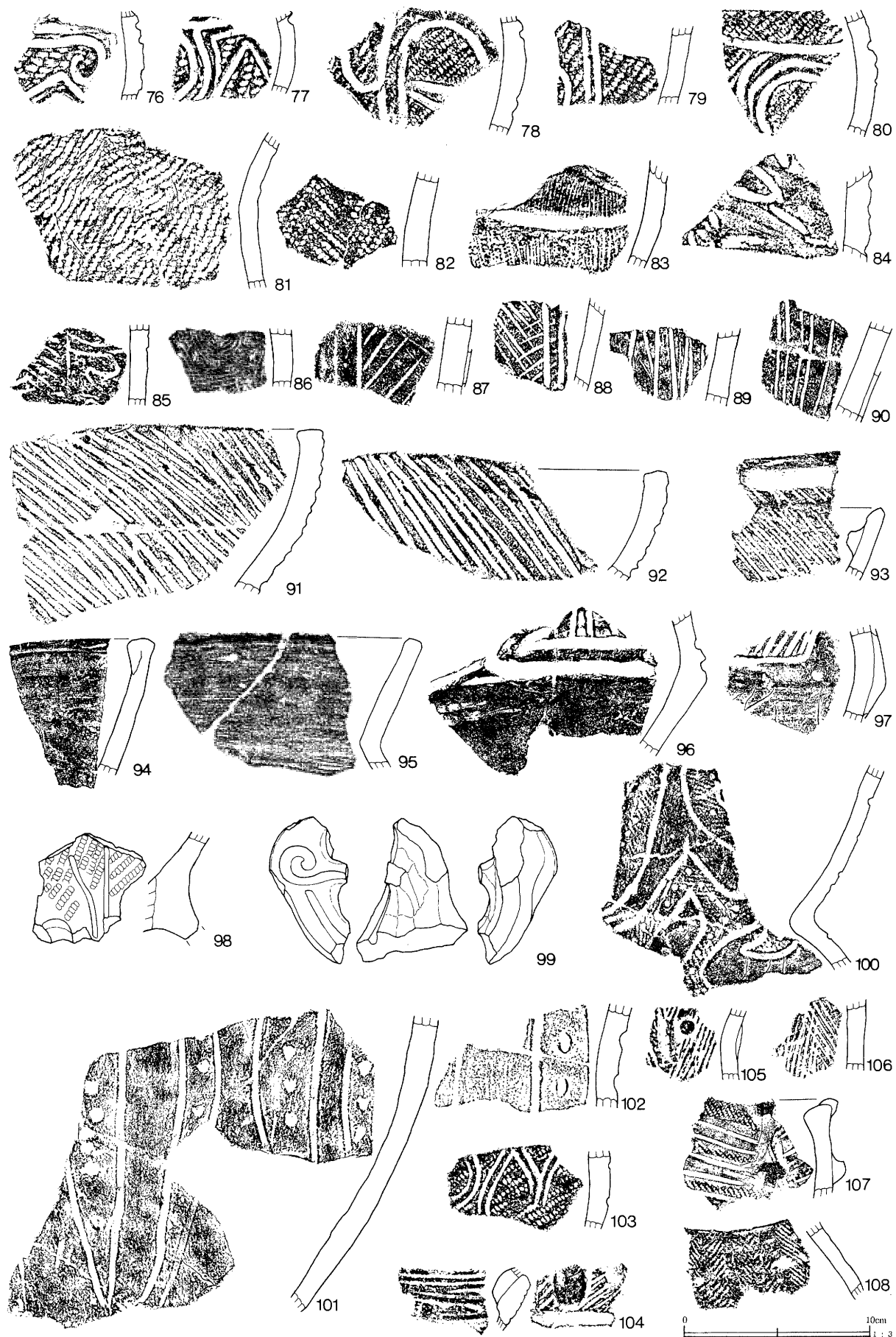
96・97は胴上半部に文様帯をもつ浅鉢で、地文は見られず沈線で文様が描出される。96・97はともに沈線による区画内に縦位あるいは斜位の沈線を施している。胴下半部は丁寧に研磨され無文である。

98は底部と脚台部との接続部分であろう。RL 単節縄文が縦位に荒く施文され、くびれ部辺りから下位に向かって2条の沈線が描出される。破片下位には円孔が見られ、本来、透かし穴を有していたものと思われる。くびれ部で推定された直径は4.6cmである。

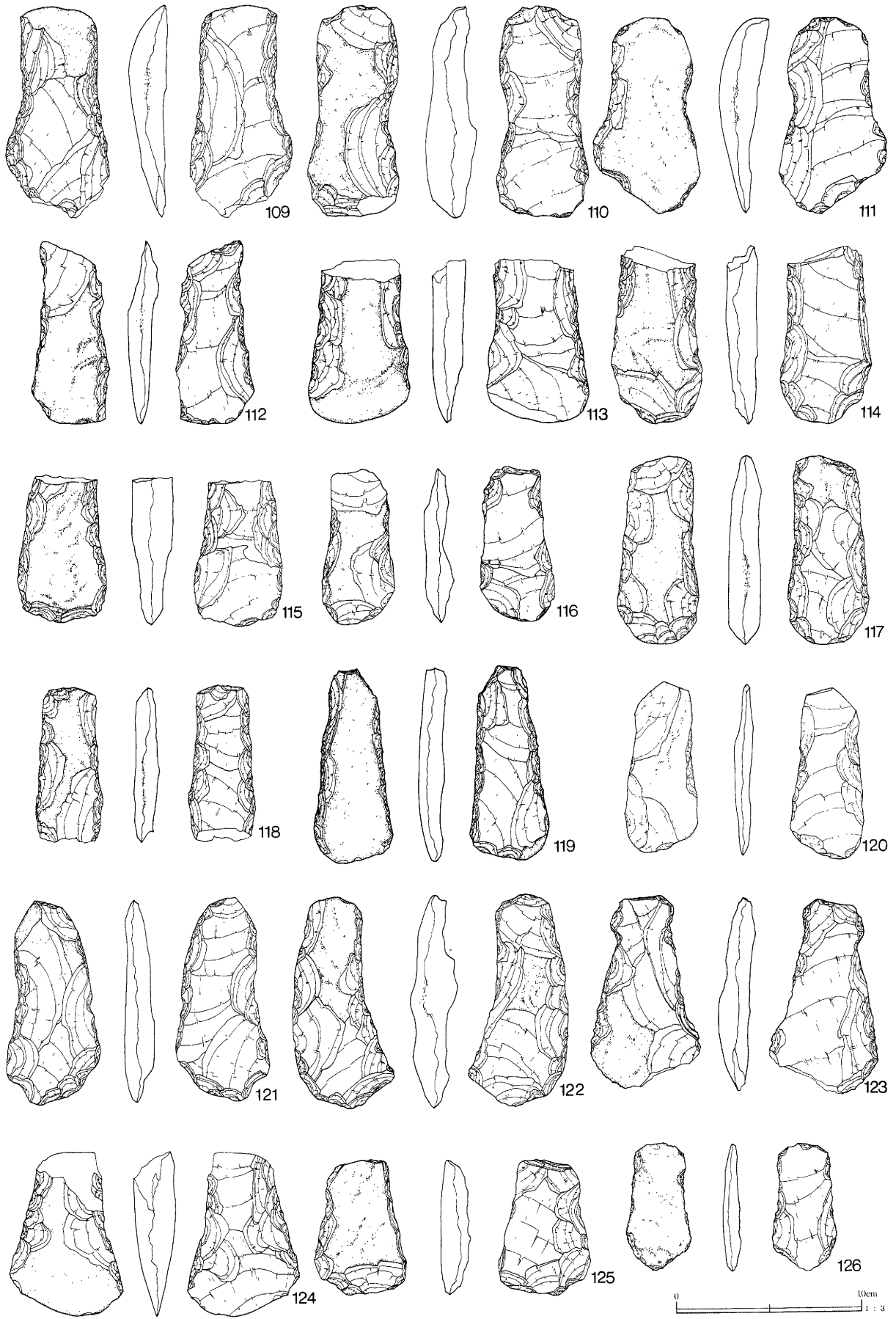
99は突起であろうか。上部は破損しており、さらに上方に続いていたものと思われる。また下部にも欠損が見られ、土器の器面に接続していたものと思われる。突起には沈線による渦巻文が描出されており、仮にこれを正面とすると、突起は右向きの弧状を呈する。弧状の腹側は成形が不十分であり、この面が土器に対して内側であった可能性がある。

100～102は縄文後期初頭称名寺式の深鉢である。100は胴上半部と下半部をつなぐくびれ部である。沈線により文様モチーフが描出され、モチーフ内は RL 単節縄文充填後、棒状工具による刺突が繰り返される。101・102は地文が無文の土器である。101は胴下半部であり、沈線による文様が描出され、文様内には棒状工具による刺突が施される。

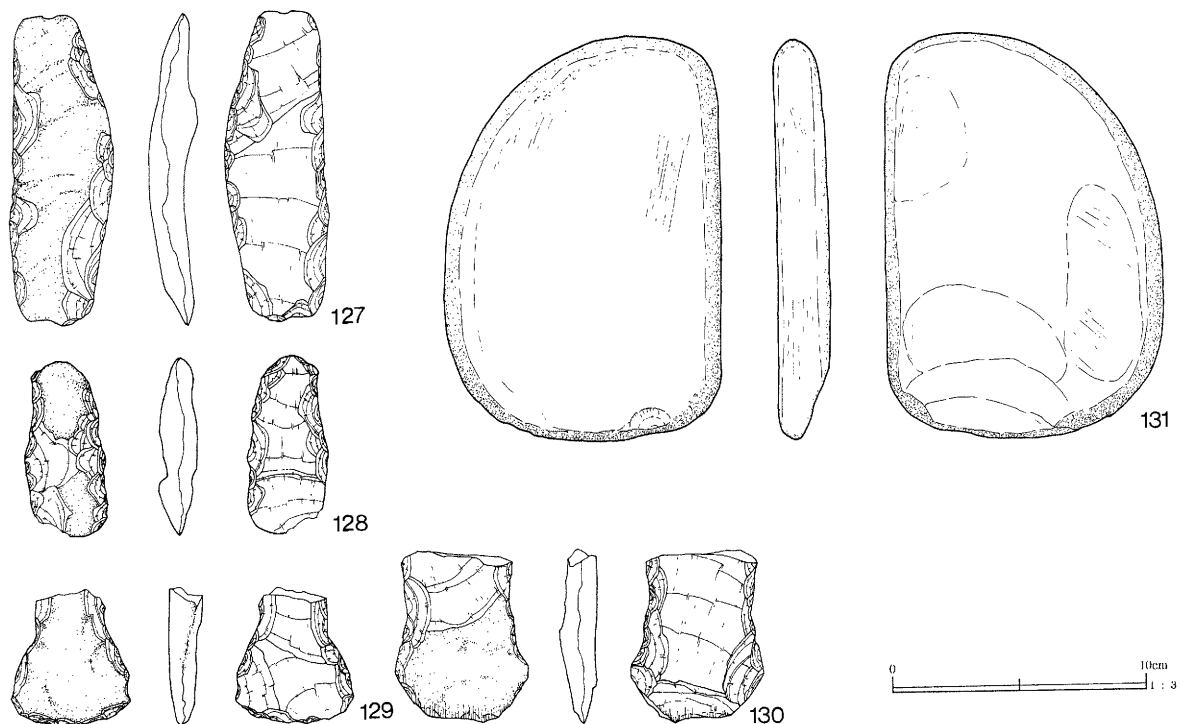
103～108は混入品である。103は縦位の RL 単節縄文を地文とし、竹管状工具により木葉状モチーフを



第10图 第1号住居跡出土遺物(4)



第11图 第1号住居跡出土遺物(5)



第12図 第1号住居跡出土遺物(6)

描出する。諸磯式a式深鉢であろう。104～106は集合沈線文の施される諸磯c式深鉢である。104は口縁部破片で、内側から外側へまたぐ耳朶状貼付文が施される。集合沈線は口縁部内外面におよび、外面は横方向、内面は斜方向に施される。105・106は胴部破片で、105は棒状と円形の貼付文が配される。107は縄文時代後期安行式の精製深鉢であり、波状口縁の破底部にあたる。破底部には瘤状の貼付が縦位に施され、そこから沈線と帯縄文による文様が描出される。108は弥生時代の壺形土器胴上半部の破片であろう。

2) 石器 (第11・12図)

本住居跡では覆土中から23点の石器が出土している。その内訳は打製石斧22点、磨石1点である。このうち打製石斧は残存率の高いものを中心に掲載した。その中でも特徴的なものについて説明する。

第11図109～111は両側縁に浅いえぐりの入るタイプである。112～120は台形を呈するタイプである。121・122は左右のいずれかに傾く非対称形の石斧である。122～124も台形を呈するが、基部に対する刃部の比率が大きい資料である。129は基部を欠損しており、両側縁は深くえぐれ、肩が張るタイプである。

打製石斧は全体的に風化・摩滅が著しかったが、118の表面の刃部において縦方向の擦痕を観察している。110～112、114・118・123～126、128などは片面に自然面をよく残す。自然礫を素材にしている。

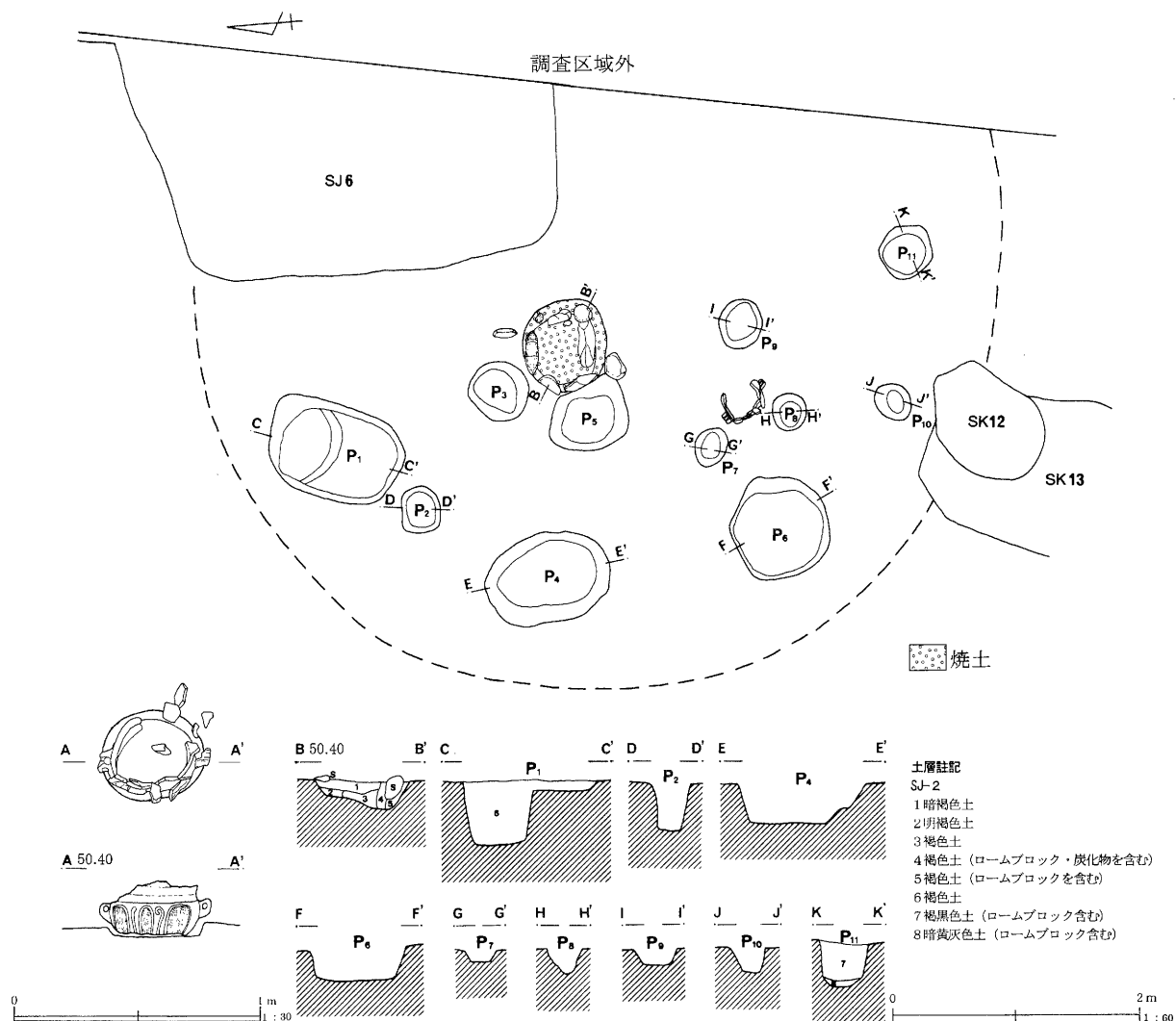
131は磨石である。扁平な自然礫の表裏面と片側側縁に擦痕が観察される。表面は全体、裏面は主に礫の外縁部を使用している。側縁は繰り返しの使用によって平坦な面が形成される。

第2号住居跡（第13図）

E・F-1・2グリッドに位置する。東側半分は調査区外のため未検出である。他遺構との重複関係は、住居跡北東側では第6号住居跡によって、南側では第12・13号土坑によって切られている。住居跡の掘り方はローム土に達せず黒色土中に掘り込まれており、正確な平面形を確認することはできなかった。そのため平面プランは炉跡の位置、ピットの配置、遺物の分布域などからの推定である。

床面からは炉跡、埋甕、ピットが検出された。ピットは12基検出されている。それぞれの深さはP1=50cm、P2=38cm、P4=34cm、P6=30cm、P7=10cm、P8=20cm、P9=14cm、P11=40cmであり、住居址の内側に位置するP7、P8、P9よりも、外側に位置するP1、P2、P4、P6、P11のほうが相対的に深く、規模も大きい。またそれらが弧状に配置されることから柱穴とみなされる。P1とP3からは土器が検出されている。

炉跡は住居跡中央やや西よりに位置する。周囲に円礫を配した東西にやや長い円形の石囲炉で、掘り方は長軸80cm、短軸74cm、深さは最深部で23cmを測る。



第13図 第2号住居跡

埋甕は住居跡南よりで検出された。胴下半部を欠損した加曾利E式の両耳壺を正位に埋設している。埋甕の掘り方は長軸43cm、短軸40cmであり用いられた土器サイズとほとんど変わらぬ規模である。深さは5cmとたいへん浅く、確認できなかったが、本来、床面はかなり上位にあったものと思われる。

出土遺物（第14図～第16図）

遺物は覆土中、ピット内から、また埋甕として土器が出土している。土器は天箱にして2箱程度であり、石器は1点のみである。

第14図1は埋甕である。加曾利E式期の両耳壺で口縁部および胴下半部を欠失する。胴上半部で最大径をはかり、胴部正面には渦巻文が配され、逆U字状の隆帯区画が施される。区画内は横位のRL単節縄文を充填する。



第14図 第2号住居跡出土遺物(1)

2はL撚りの撚糸文を縦位施文とする連弧文類深鉢で、口縁部および底部を欠損する。頸部には2条一組の沈線による弧文を描出し、頸部と胴部の区画は3条の横沈線により行われる。

胴部は全周する個体の50%が残存しているが、頸部と胴部を分帯する沈線区画での直径が14cmを計測し、器高に対し径の値が低い円筒状を呈する。現存高19.0cm。

3は口縁部～胴上半部にかけて残存する4単位波状口縁深鉢である。胴部上半がくびれ、頸部に最大径をもつ。口縁部に向かってやや外側に開きながら内湾し、波頂部は緩やかに外反する。頸部には浅い幅広沈線を施した後、楕円形の刺突文列を巡らせる。口縁部は無文であり、刺突文列以下の地文は横位のLR単節縄文である。胴上半部には幅広沈線による波状モチーフが描出される。

4は口縁部～胴上半部にかけての水平口縁深鉢である。胴部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がり、波頂部は緩やかに外反する。口縁部直下には沈線を2段に巡らせ、円形刺突文列を施す。胴部は横位のLR単節縄文を地文とし、沈線による逆U字状の区画を描出しその中を磨消す。

5は口縁部～胴上半部にかけて残存する大型の4単位波状口縁深鉢である。口縁部直下には波状口縁に沿った沈線が配され、口縁部無文帯を形成する。胴上半部は膨らみ下半部に向かいくびれる。胴上半部には2条一組の沈線により大形渦巻文が描出され、沈線区画内は磨消される。地文はLR単節縄文を文様に沿って施文する。

6～11はキャリパー類深鉢の波状口縁と思われる。6・7・8・10は口縁部が内湾して立ち上がり、波頂部で外反する。10は渦巻文が施される。11は楕円形区画文が施文される。

12・13は水平口縁の深鉢であり、2条一組の幅広沈線により楕円形区画文が描出される。12は区画内外にRL単節縄文が充填される。13は口唇部が肥厚し、口縁端部に沈線を施す土器である。

14は波状口縁深鉢で磨消し縄文を持つ土器である。地文はRL単節縄文である。

15・16は口縁下に沈線を施し、口縁部が無文になる土器である。ともに口唇部は肥厚する。

17も口縁下に隆帯区画をし、口縁部無文帯を形成する。地文はRL単節縄文である。

18は連弧文類深鉢の口縁部であろうか。口唇部が内屈し、水平口縁の直下には2条の沈線が横走する。

19～21は磨消し懸垂文の土器である。20はRL単節縄文を縦位に施文する。

22・23は頸部から胴上半部の同一個体の破片である。22は頸部に竹管状工具による押引文が横走し、胴部には逆U字状の文様が施される。地文は無文である。23は地文が無文で蕨手状文様が描出される。

24は頸部から胴部の破片で地文にLR単節縄文が施される。くびれた頸部には隆帯が施される。

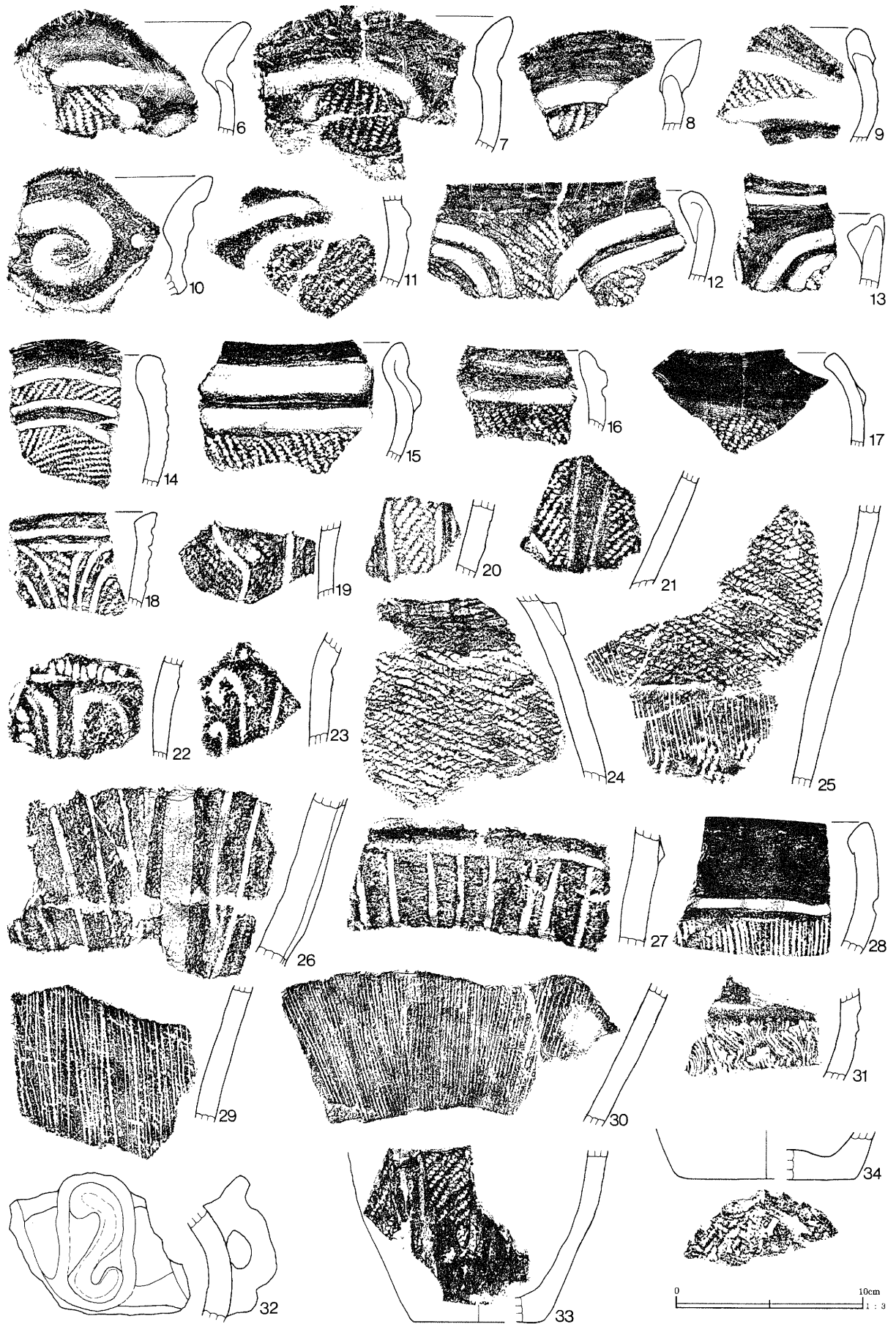
25は地文に縄文と条線文をもつ土器である。上段は縦位のLR単節縄文、中段は条線文、下段は縦位のRL単節縄文である。それぞれの施文域は重複しており、縄文は条線施文に先行している。

26・27は地文が無文で縦位の沈線が施される土器である。26は2本隆帯を懸垂する。27は横位の隆帯を施しそこから沈線が垂下する。

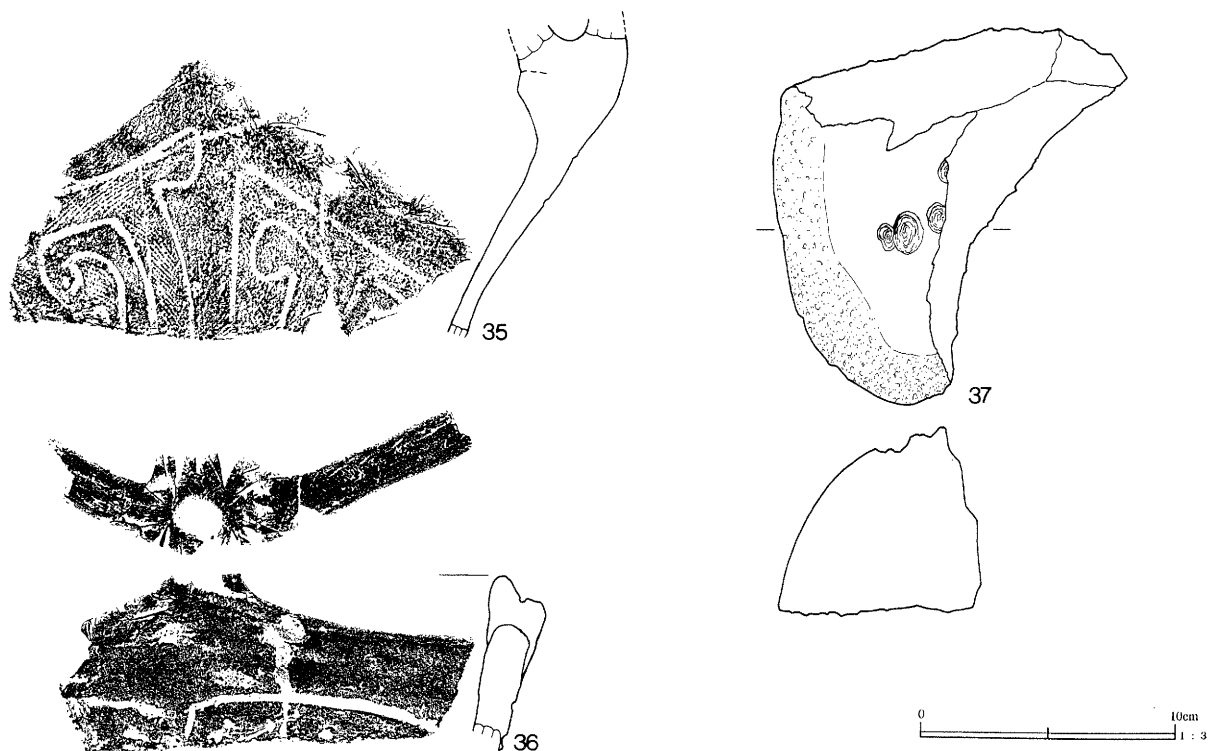
28～30は地文条線文の浅鉢である。28は水平口縁の浅鉢で、口縁部は緩やかに内湾して立ち上がり、口唇部は内屈する。頸部に横方向の沈線区画を行い、上位は無文帯、下位は縦位の条線文を施す。

31は浅鉢である。28同様、頸部に横沈線による区画を行い、上部は無文帯、下部は櫛歯状工具による縦方向の波状文が施される。32は両耳壺の把手である。

33・34は底部破片である。33は胴下半部～底部の破片で、地文は縦位のRL単節縄文で2条一組の沈線区画内は磨消される。34は底部のみの破片であるが、底面に網代痕を残す。



第15图 第2号住居跡出土遺物(2)



第16図 第2号住居跡出土遺物(3)

35・36は後期称名寺式の深鉢である。35は波状口縁深鉢で波頂部に突起を有する。上半を欠損した突起は円孔を有していたと思われる。文様モチーフは沈線により描出され、内部をRL単節縄文で充填する。36は水平口縁で小波状の突起を持つ。地文は無文で沈線による区画内には列点状刺突文が配される。

37は本住居跡出土の唯一の石器である。砂岩製の凹石で自然礫の平坦面に4箇所の凹みが穿たれる。

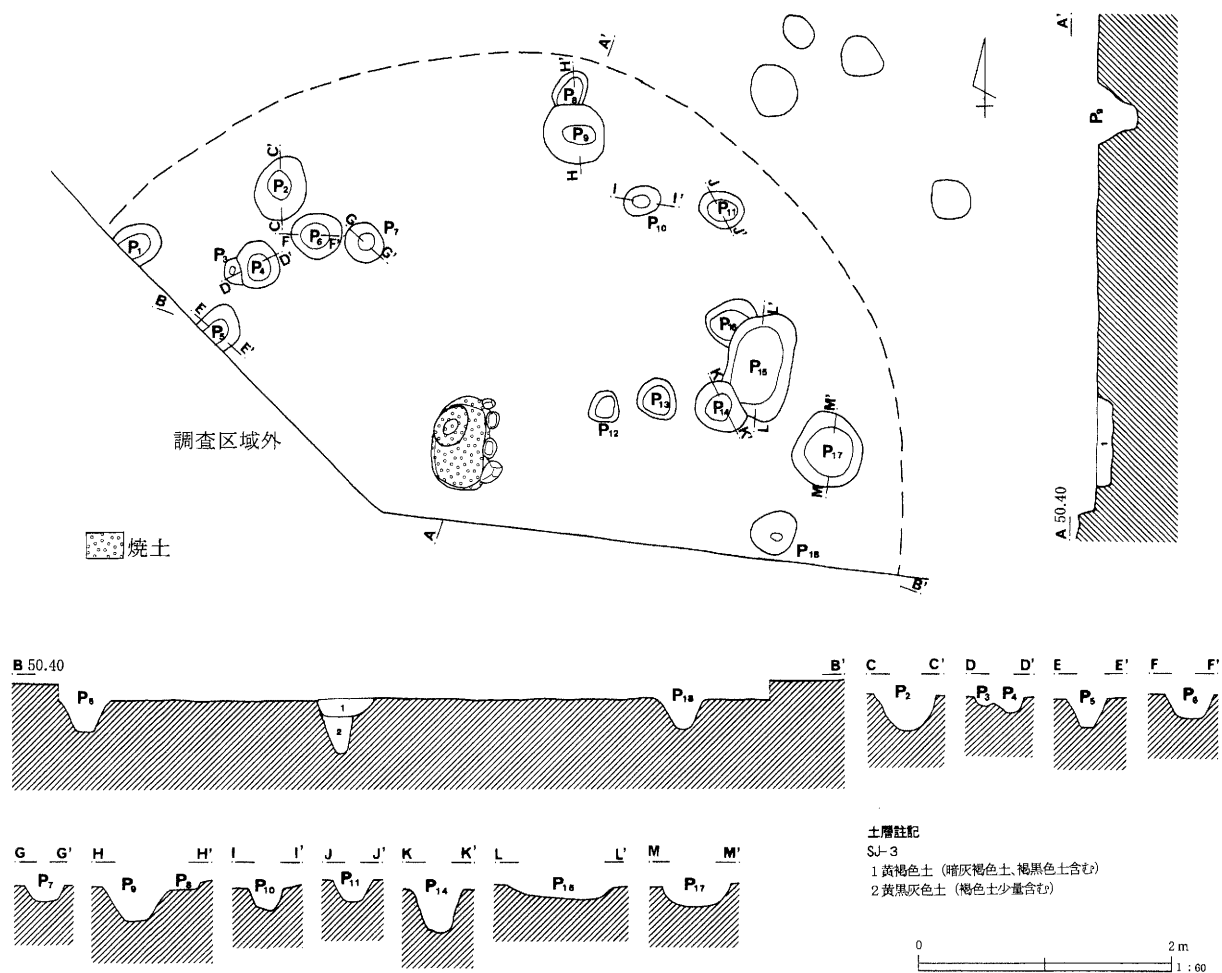
第3号住居跡 (第17図)

J-6グリッドに位置する。他遺構との重複関係はないが、南側半分は調査区域外に位置するため未検出である。第2号住居跡同様、平面プランの確定ができなかったため、炉跡やピットの位置、遺物の分布などから推定した。推定された住居跡の規模は直径約7mの円形である。住居跡内のピットは18基を数える。分布は不規則であるが、住居跡内でも外側に分布する傾向にある。深さはそれぞれP2=28cm、P3=6cm、P4=12cm、P5=22cm、P6=19cm、P7=11cm、P8=6cm、P9=27cm、P10=18cm、P11=18cm、P14=34cm、P15=10cm、P17=18cmである。住居跡の北東、約1mの地点にピット4基が検出されているが、本住居跡と何らかの形で関連している可能性がある。

炉跡は住居址ほぼ中央に位置する石囲炉であるが、東側半分は削平され旧状を留めていない。長軸80cm、短軸68cm、深さ15cmの浅い掘り方底面に、長軸35cm、短軸25cm、深さ29cmのピットが穿たれる。

出土遺物 (第18図)

住居址覆土より土器と石器が少量出土している。完形で出土した個体は少なく、多くは破片での出土である。第18図1は両耳壺の頸部～胴下半部の破片である。把手部は確認されていないが胴上半部には把手の剝落が観察される。頸部は無文で1条の隆帯を貼り付ける。胴部は沈線による逆U字状の区画を配し、区画内をLR単節縄文で施文する。区画間は磨消される。



第17図 第3号住居跡

2は水平口縁の深鉢と思われる個体で、胴部以下を欠損している。口縁部は外反して立ち上り、頸部はくびれ、胴上半部に向かって緩やかに広がる。口唇部はやや肥厚し内湾する。頸部には棒状工具による2条の沈線が施され、胴部には2条1組の蛇行懸垂文が施される。地文は同工具による縦方向の条線である。地文となる条線はモチーフ同様、かなり深く施文される。

3はキャリパー類深鉢の口縁部である。内湾して立ち上がり口唇部で外反する。口縁直下には沈線がめぐり、下位には渦巻文が施される。

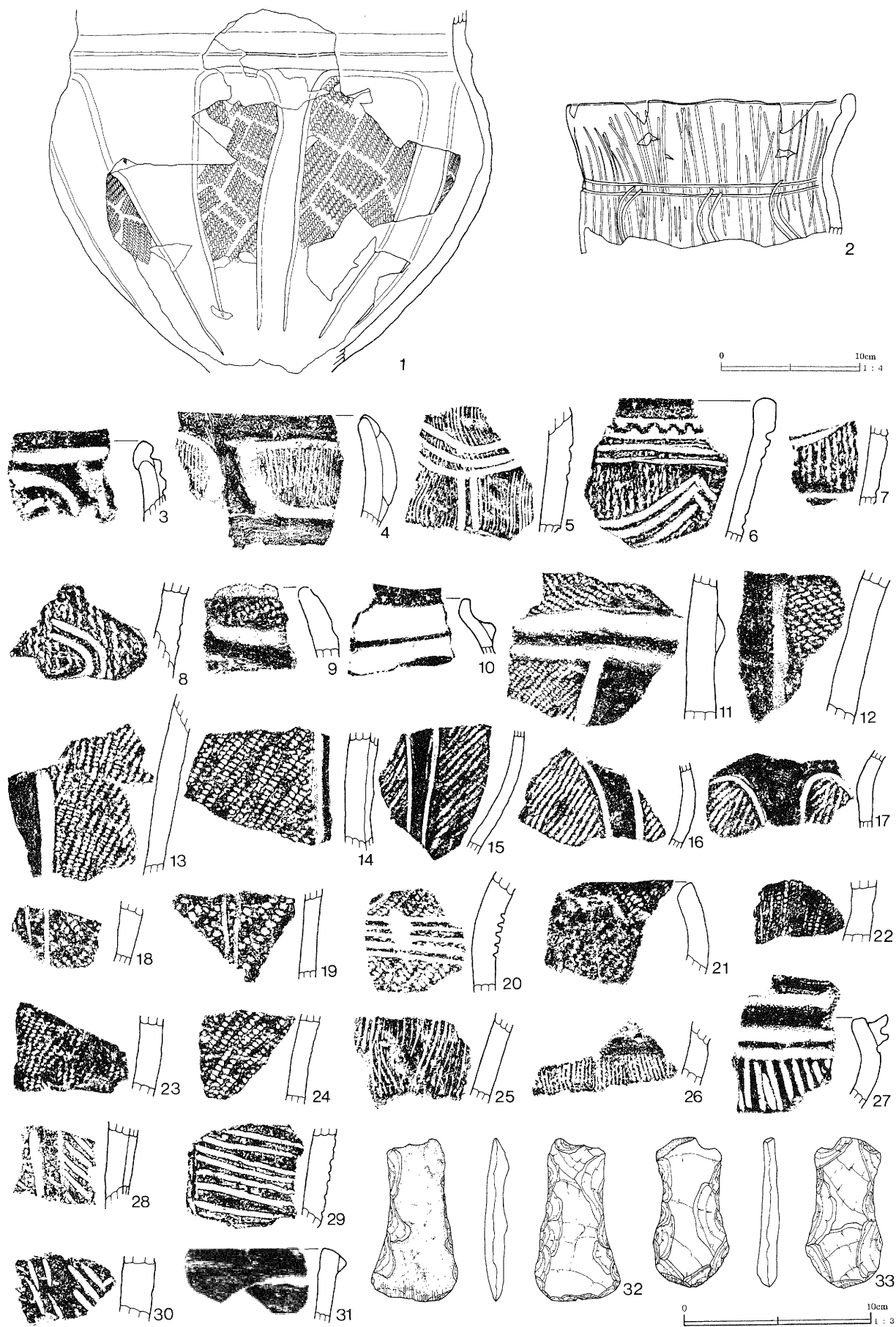
4・5は地文が条線文の土器である。4は隆帯による楕円形区画が施される深鉢の口縁部である。5は3本沈線で描かれた弧文から2本沈線が垂下する。

6～8は撚糸文を地文に持つ連弧文類深鉢である。6は口縁下に小波状モチーフを配し、弧文は3本沈線で描出される。8は2本沈線で蛇行懸垂文が描かれる。

9は楕円形区画の施された土器で、10は口唇部が外反し、口縁に沿った隆帯がめぐり、

11～13は磨消し懸垂文を施す土器である。11は頸部と胴部に横方向の隆帯がめぐり、そこから磨消し懸垂文が施される。14は隆帯懸垂文を施す。15・16・17は磨消し縄文を持つ深鉢の胴部破片である。

18・19は2本沈線による懸垂文が施される。18は横位、19は縦位のRL単節縄文を地文にもつ。



第18图 第3号住居跡出土遺物

20は地文に RL 単節縄文を施し、くびれ部に 5 条の沈線を横走させる。

21～24は地文縄文である。21は口縁端部が内屈する。23・24は RL 単節縄文を地文にもつ。

25・26は地文が条線文の土器である。26は浅鉢で横方向の浅い幅広沈線が施される。

27は内湾する口縁部破片で口縁直下に沈線の施された隆帯を巡らせる。隆帯下は斜位の沈線を施す。

28は隆帯懸垂文が、29は沈線による懸垂文が施され、懸垂文間は斜位ないしは横位の沈線が施される。

30・31は地文が無文の土器である。30は矢羽状沈線が施される。32は口唇部が肥厚する。

33・34は打製石斧である。33は正面に自然面を明瞭に残す。34は正面に大きな剝離面を残す。

(2) 土 坑

第 1 号土坑 (第19図)

B-2 グリッドに位置し、東側を第 1 号住居跡に切られる。壁は緩やかに立ち上がり、底面は西から東へ緩やかに下がる。2 層上面からは 5～20cm ほどの礫が 30 点ほど面的に出土している。現存する土坑掘り方の規模は長軸 148cm、短軸 76cm、深さ 70cm を測る。

出土遺物 (第20図)

覆土からは縄文土器破片が数点出土したが、いずれも小片で図示できるものは 1 点のみである。1 は地文に条線を施した深鉢の頸部から胴上半部の破片である。頸部には 2 本の隆帯を横走させる。

第 2 号土坑 (第19図)

A-3 グリッドに位置し、北側は調査区外にかかっており未検出である。底面は西から東へ緩やかに下がる。現存する規模は長軸 144cm、短軸 68cm、深さ 40cm を測る。

出土遺物 (第20図)

覆土からは縄文土器破片が 20 点ほど出土した。1 は地文に LR 単節縄文を持つ胴部破片である。2 は地文が RL 単節縄文に沈線を垂下させる胴部破片である。3 は沈線による横 S 字文を連続させたものを 2 段に配する。4 は底部付近の破片である。2 条 1 組の沈線を懸垂する。地文は横位の LR 単節縄文である。5 は条線を地文とする頸部付近の破片で、くびれ部に 2 条の沈線を横走させる。6 は地文が無文であり、沈線による鋸歯状文をモチーフとする。7 は打製石斧である。刃部と基部の一部を欠損しており、正面にはわずかに自然面が残る。両面に素材の剝離面を大きく残し、両側縁には周辺加工を施す。

第 3 号土坑 (第19図)

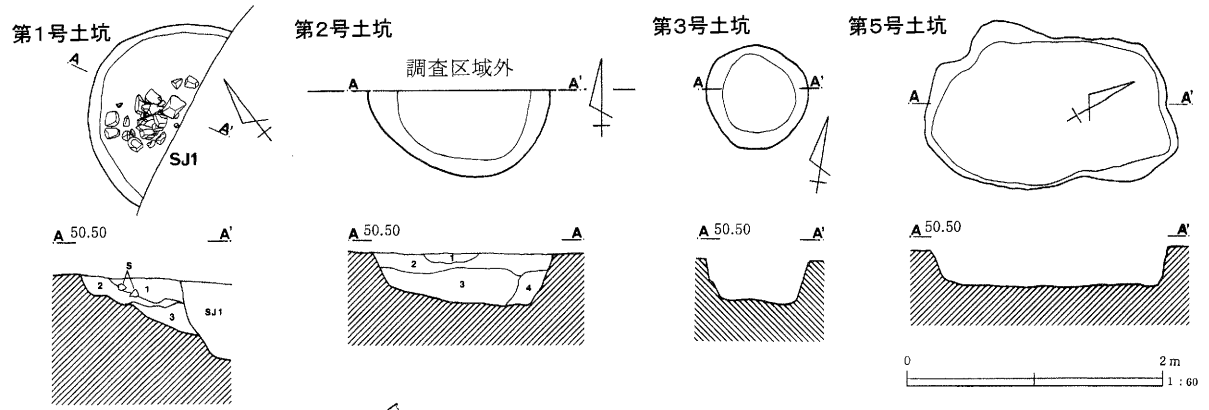
B-3 グリッドに位置し、第 2 号土坑とは 1.4m の距離にある。平面形は円形を呈し、規模は長短軸ともに 80cm、深さは 36cm である。底面は比較的平坦であり、壁は急に立ち上がる。

出土遺物 (第20図)

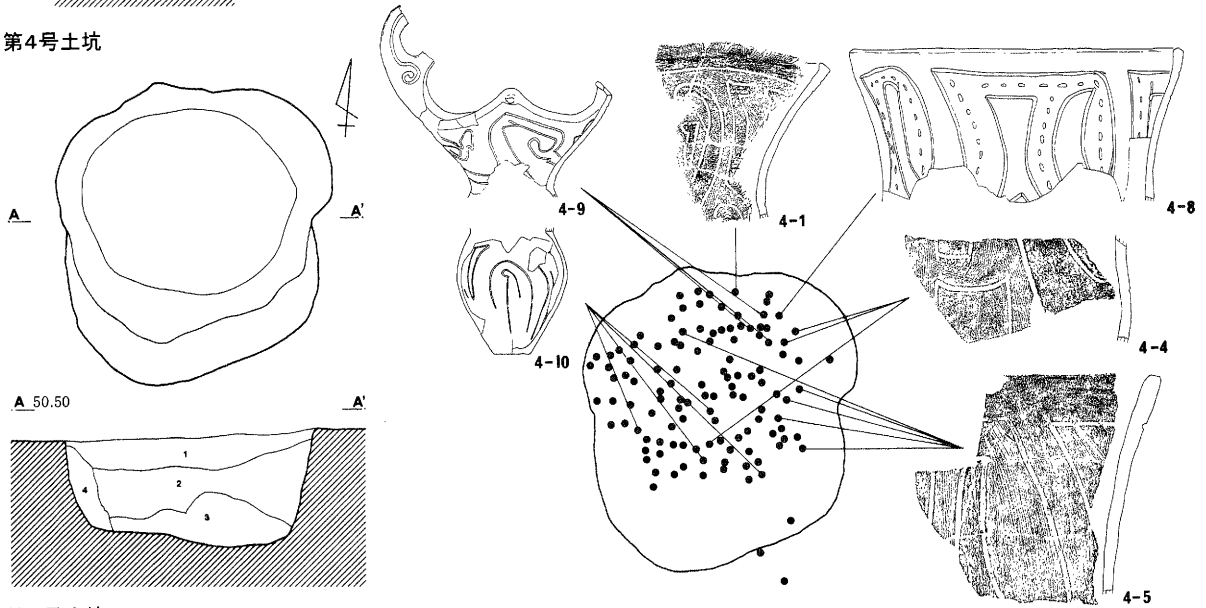
覆土からは加曾利 E 式の縄文土器破片が 10 数点、石器 1 点が出土した。1 は LR 単節縄文を地文にもち、沈線による弧状モチーフを描く土器である。2～5 は地文が条線の土器である。2 は隆帯および沈線を垂下させる。4 と 5 は横方向の沈線を施す同一個体である。4 は横沈線から 2 条一組の沈線による蛇行懸垂文を施し、5 は弧文と渦巻文を描出する。6 の打製石斧は基部と刃部の一部を欠損する。

第 4 号土坑 (第19図)

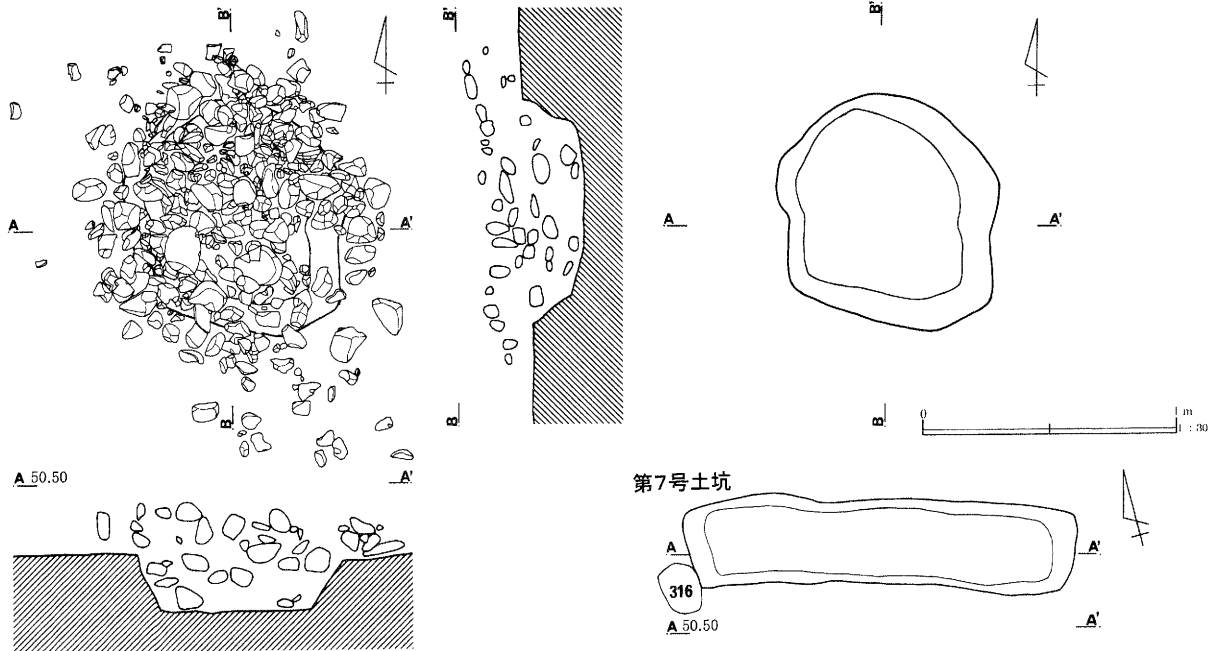
B-6 グリッドに位置し、後述する第 1 号埋甕とは 2.8m の距離にある。南北に長い楕円形を呈し、規模は長軸 120cm、短軸 93cm、深さ 43cm を測る。底面は平坦であり、壁は比較的急に立ち上がるが、南壁に



第4号土坑



第6号土坑



土層註記

SK-1

- 1 暗灰褐色土 (下層に礫包含)
- 2 暗褐色土
- 3 暗黄褐色土

SK-2

- 1 黄褐色土
- 2 暗黄褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗黄褐色土

SK-4

- 1 暗黄褐色土 (礫多量に含む)
- 2 暗黄褐色土 (明黄褐色土)
- 3 暗黄褐色土 (土器包含)
- 4 暗黄褐色土 (礫、土器多量に含む)

第19图 第1~7号土坑

限り壁上部で外側に開く。覆土はブロック投入土である。

出土遺物（第20・21図）

底面から覆土下層にかけては大量の礫を伴って、多くの称名寺式期の縄文土器破片、少量の石器が出土した。大型破片が比較的多く、また接合関係を持つものが少なくない。破片数としては130点を数える。

1～3は口縁部が外反して立ち上がる称名寺式深鉢で口唇部は内屈する。これら3点は同一個体と思われる。4・5は沈線モチーフ内を条線で充填する称名寺式深鉢である。5は口縁部破片で胴上半部がくびれ、口縁部に向かって緩やかに外反する。6は底部破片である。

7は黒色緻密安山岩製の礫器である。両刃を持ち下部は自然面を多く残す。混入品の可能性もある。

8は水平口縁の称名寺式深鉢であり、頸部にくびれをもち、口縁部に向かって緩やかに外反する。地文は無文で沈線により文様モチーフを描き、列点状刺突を施す土器である。口径45.5cm。

9・10は称名寺式深鉢で同一個体と思われる。9と10の文様がどのように接続するのかは、残存部位の関係により把握できなかった。9は口縁部から胴上半部の破片で4単位波状口縁である。口縁端部はくの字に屈曲し、波頂部には楕円形の円孔が観察される。4単位の波状口縁の一方には大きな突起が配される。突起の両側面には沈線による渦巻文が施される。地文は無文で沈線によりモチーフが描かれる。10は胴下半部～底部である。口径27.6cm、底径5.0cm、現存高40.1cmである。

第5号土坑（第19図）

E-6グリッドに位置し、第60・61号土坑と近接する。平面形は不整ではあるが南北に長い台形を呈する。規模は長軸200cm、短軸110cm、深さ32cmを測る。底面は平坦である。

出土遺物（第21・22図）

覆土中～下層に縄文土器破片を比較的多く包含する。破片数にすると約100点ほどである。

1は連弧文類深鉢で口縁直下の沈線間に、上下の交互刺突による小波状モチーフを描出する。地文はL燃りの捺糸文であり、胴部文様帯は口縁部と胴部中段の2本沈線により区画される。区画内は上段の3本沈線による連弧文、下段の3本沈線による波状文で構成される。

2は地文が櫛歯状工具による縦位の波状文の土器である。3は地文条線文の浅鉢の胴部破片である。

4は地文を無文とし沈線でモチーフを描き出す。沈線区画内はRL単節縄文で充填され、棒状工具で刺突文が施される。緩やかに内湾して立ち上がり、口唇部は肥厚する。

5は称名寺式深鉢の胴くびれ部である。6は隆帯が懸垂する胴部破片である。沈線により文様が描出され、横位のLR単節縄文で区画内を充填する。

7・8は浅鉢の口縁部である。7は水平口縁で口唇部が外反する。胴部は屈曲し上半部に文様が施され、下半部は丁寧に研磨される。文様は沈線による区画を行い、区画内をRL単節縄文で充填し、棒状工具による列点を施す。8は屈曲部をもたず内湾して立ち上がるが、胴部の最大径にあたる位置に縦方向の刻みをもつ隆帯が巡る。地文はなく沈線により文様が描出される。9は長円形を呈する突起で、中央には円孔を有する。

10は称名寺式の水平口縁深鉢である。胴下半部がやや張り中段でくびれ、口縁部に向かって外方へ緩やか広がる。口縁に貼り付けられた長円形の突起は2単位であり、貼り付け部のみ小波状となる。突起からは刺突の加わった隆帯懸垂文が胴上半部へ垂下し胴部中段のくびれ部に至る。くびれ部には口縁部と同様の突起が配され、隆帯懸垂文が垂下し、胴上半部の反復が行われる。文様は沈線により描出され、

沈線区画内部をRL単節縄文によって充填する。口径44.7cm。現存高54.2cm。

11は称名寺式の波状口縁深鉢である。胴上半部が強く張り中段でくびれる。波頂部には突起がつき、そこからは隆帯懸垂文が施される。文様は沈線により描出され、沈線区画内はRL単節縄文によって任意に充填される。現存高18.3cm。

12・13は打製石斧である。12は基部を、13は刃部の一部を欠損している。12・13ともに自然面をよく残す。

第6号土坑（第19図）

J・K-3グリッドに位置する。平面形は不整形円形を呈し、規模は長軸91cm、短軸80cm、深22cmを測る。底面は平坦であり、壁は比較的緩やかに立ち上がる。覆土には5～40cm程度の礫が、上層下層を問わず大量に包含されているが、上層での礫の広がり著しい。

出土遺物（第23図）

出土遺物は縄文土器の小破片が50点ほど出土している。

1は連弧文類深鉢である。弧文は3本沈線によって施される。2・3は撚糸文の土器である。3は頸部に隆帯区画が巡り、そこから隆帯による懸垂文が垂下する。4はRL単節縄文が縦位回転される。

5は口縁部からは隆帯懸垂文が垂下し、それを起点として沈線による弧文が重なる。曾利系であろう。

6は自然礫を用いた凹石兼磨石である。正面の中央平坦面には6箇所の変形が確認でき、凹石として用いられているが、同時に擦痕も認められ、磨石としても用いられている。擦痕は窪みをさけた、礫平坦面の外周に部分的に観察される。特に正面左下部に観察された擦痕は稜が形成され、高頻度の使用が推測される。左下部に縦走する、2条の浅い窪みは左一長さ10.2cm、幅2.2cm、右一長さ7.4cm、幅2.3cmを測る。裏面は磨石としてのみ使用されている。正面に比して礫平坦面の面積が広く、擦痕は平坦面のほぼ全域に観察される。平坦面のほぼ中央には長さ14.0cm、幅2.2cmの縦走する浅い窪みが観察され、高頻度の使用が推測される。正面で2条、裏面で1条観察された浅い窪みは長さは異なるものの、幅は近似した数値を測り、同一使用目的の可能性が考えられる。

7・8は打製石斧である。7は中央に深いえぐりが入る。周辺加工は荒く施される。

第7号土坑（第19図）

I-6グリッドに位置する。平面形は東西に軸を持つ長方形である。規模は長軸311cm、短軸61cmを測り、深さは26cmと浅い。底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。

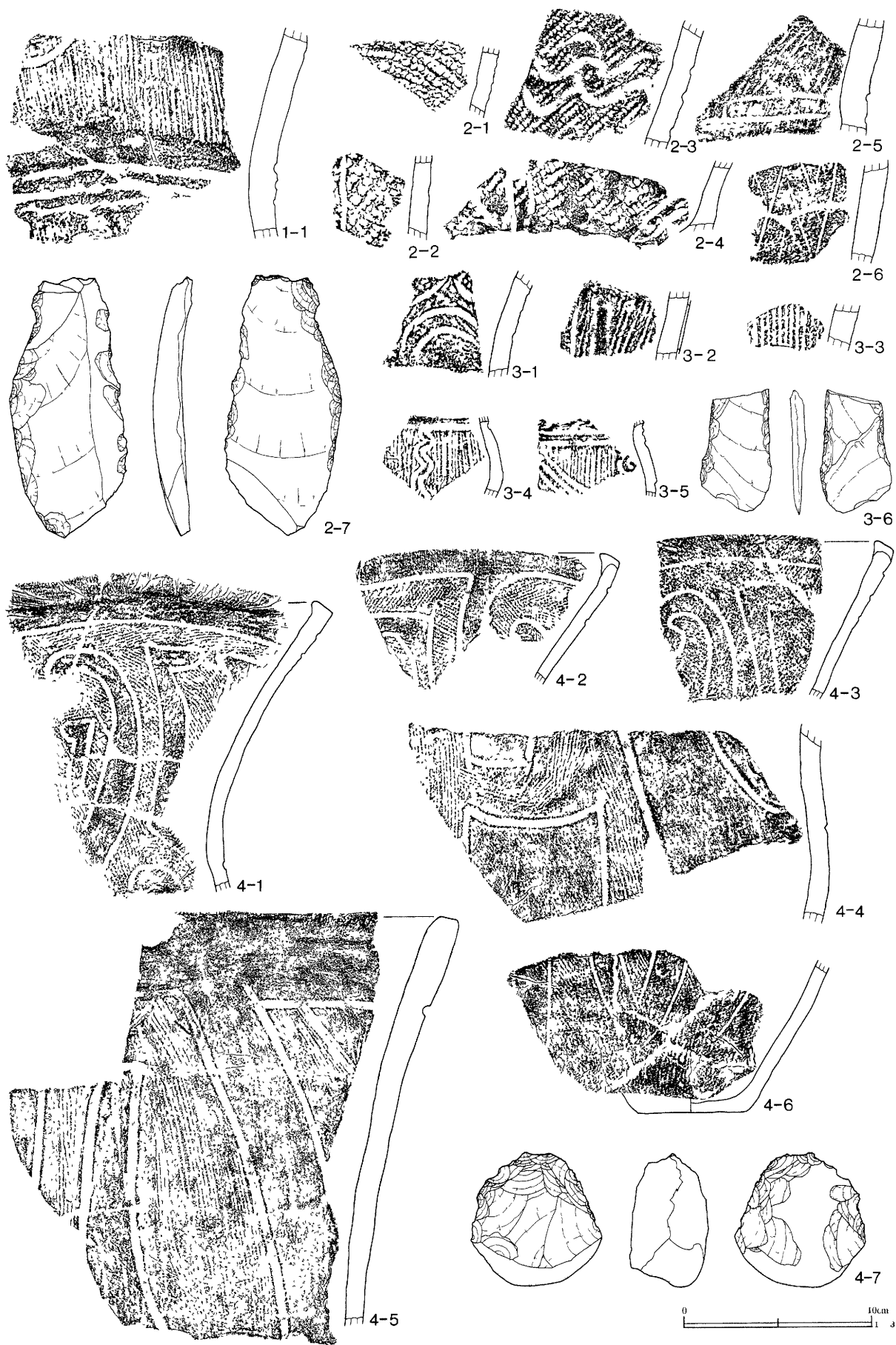
出土遺物（第23図）

覆土からは縄文土器破片が二、三十点出土している。

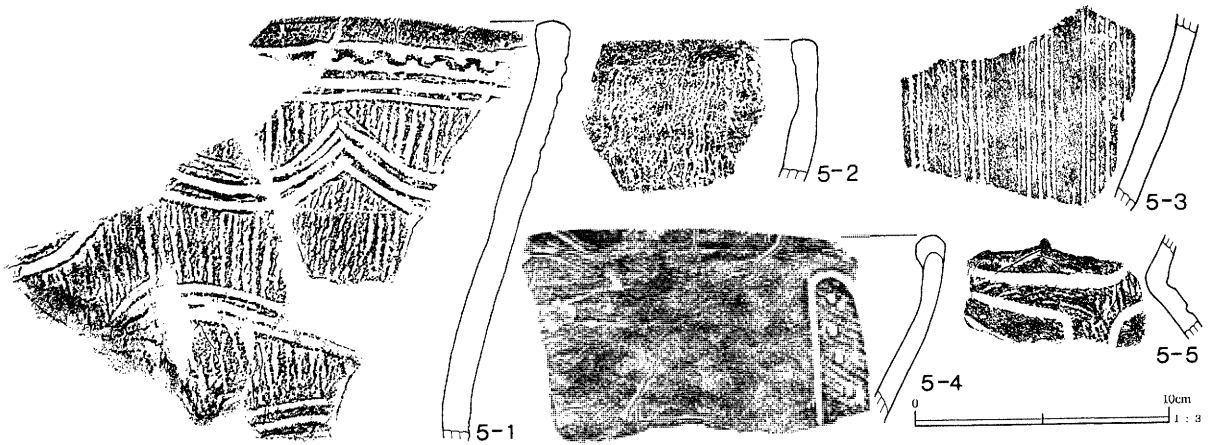
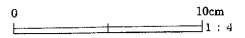
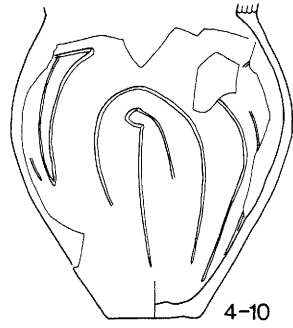
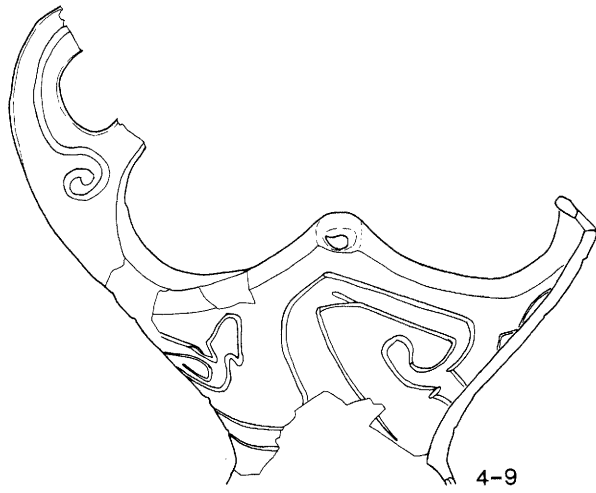
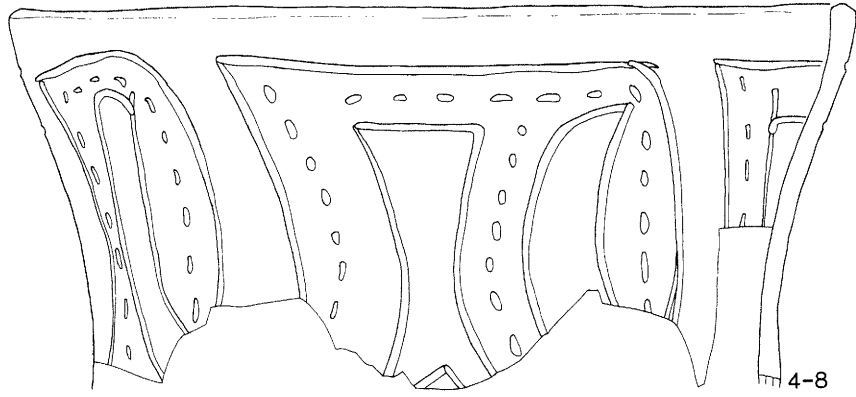
1は浅鉢である。胴部とは横方向の沈線で区画され胴部はRL単節縄文が施される。

2・3は胴部破片である。2は沈線を懸垂し、3は磨消し懸垂文となる。4は胴部破片である。横方向の隆帯を境に上位を縦位にLR単節縄文、下位に櫛歯状工具による縦位の波状文を施す。5も櫛歯状工具による縦位の波状文が施される口縁部破片である。6は地文が無文で、沈線により懸垂文と列点状刺突が施される。7・8は隆帯懸垂文が垂下する土器で、7は縦位の、8は斜位の沈線文が施される。

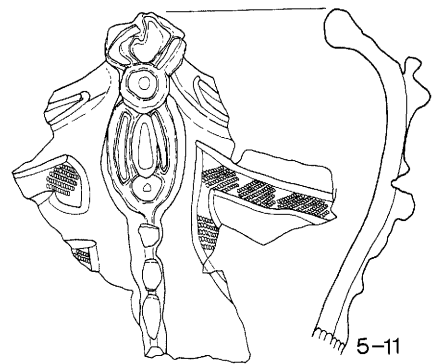
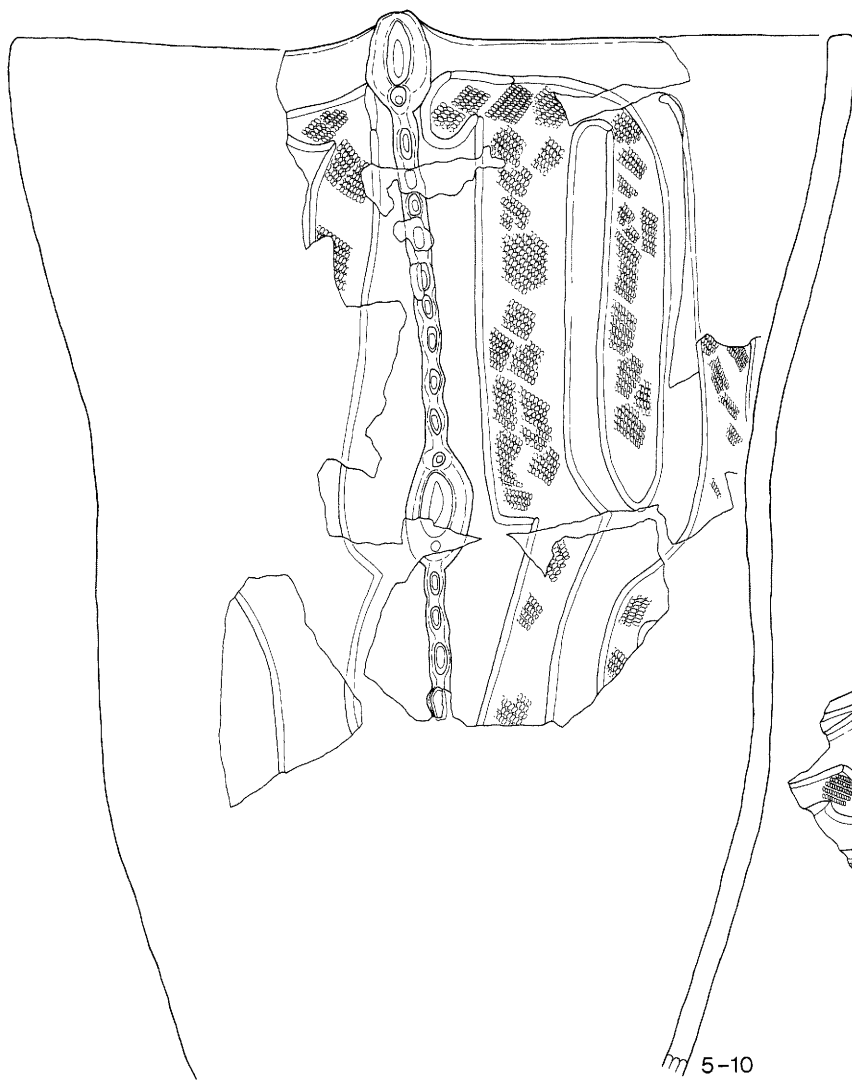
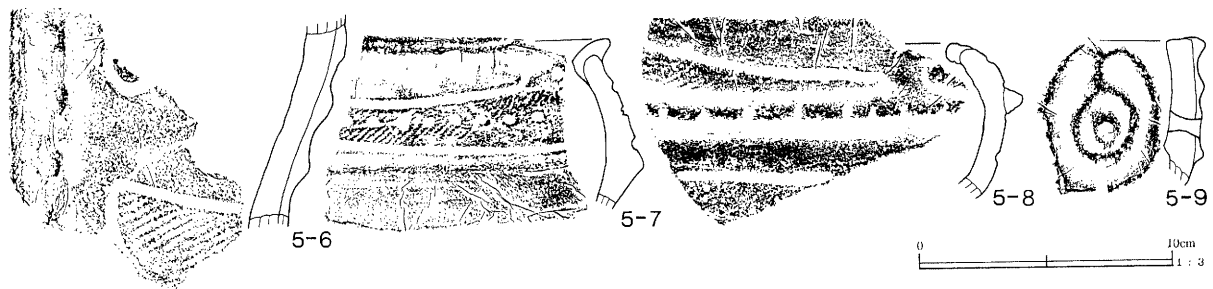
9は水平口縁の浅鉢である。沈線により口縁部と胴部を画し、口縁部は無文、胴部以下は縦方向の条線文が施される。



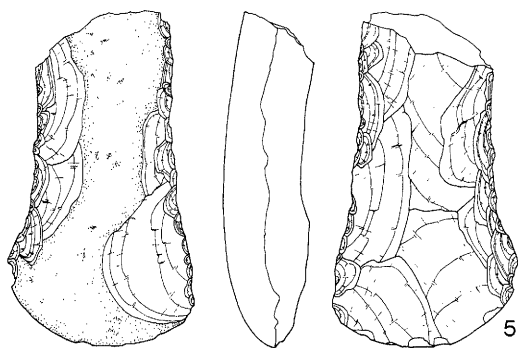
第20图 土坑出土遗物(1)



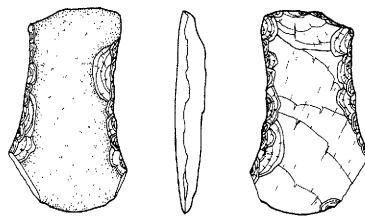
第21图 土坑出土遺物(2)



0 10cm
1 : 4



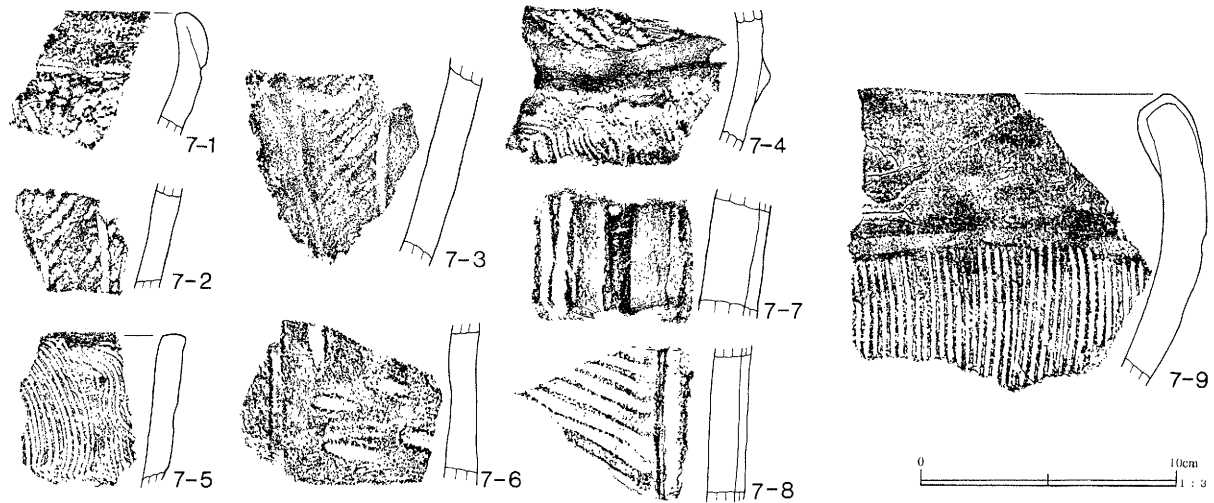
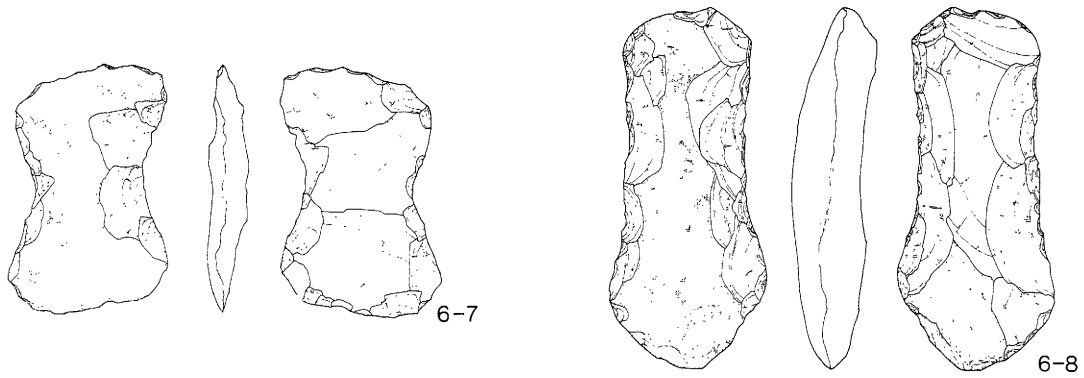
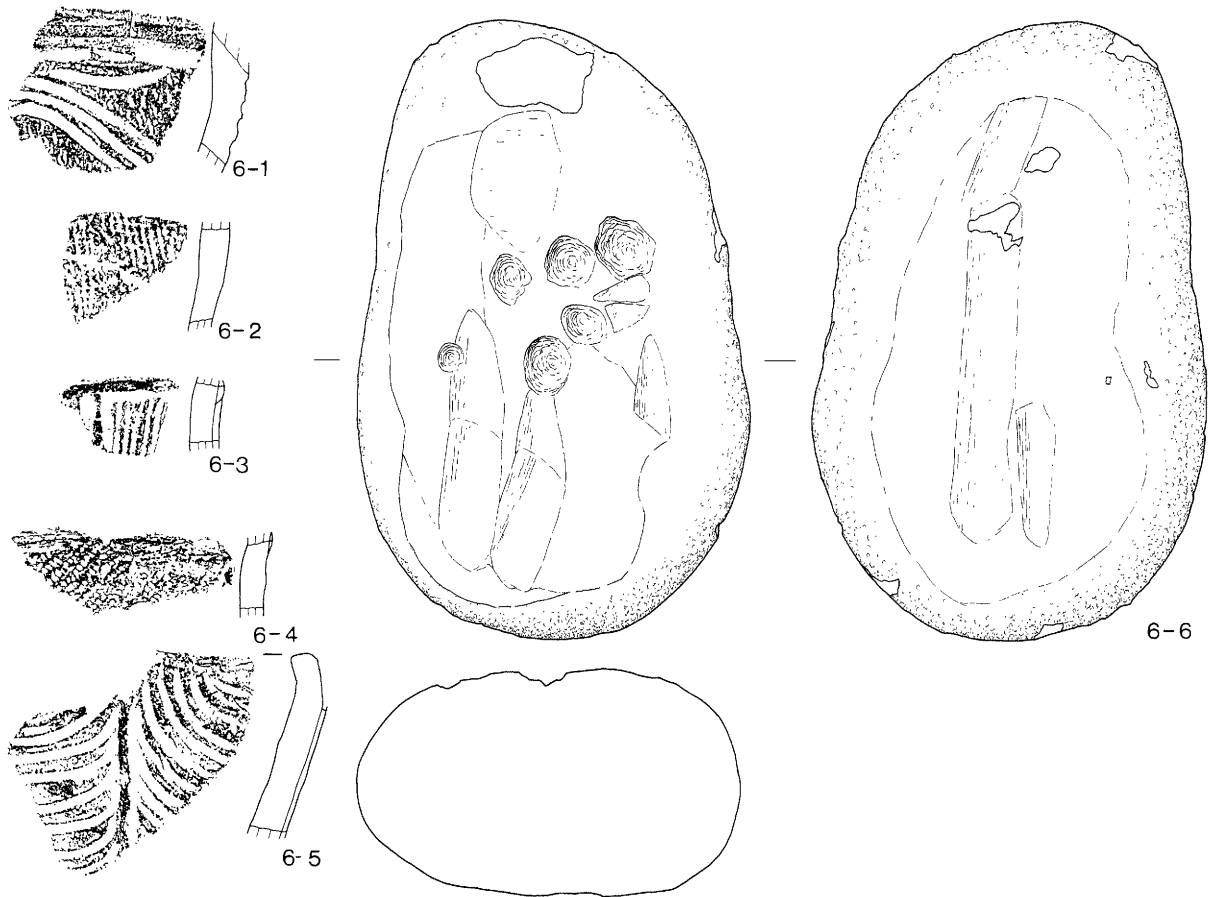
5-12



5-13

0 10cm
1 : 3

第22图 土坑出土遺物(3)



第23图 土坑出土遗物(4)

(3) 埋 甕

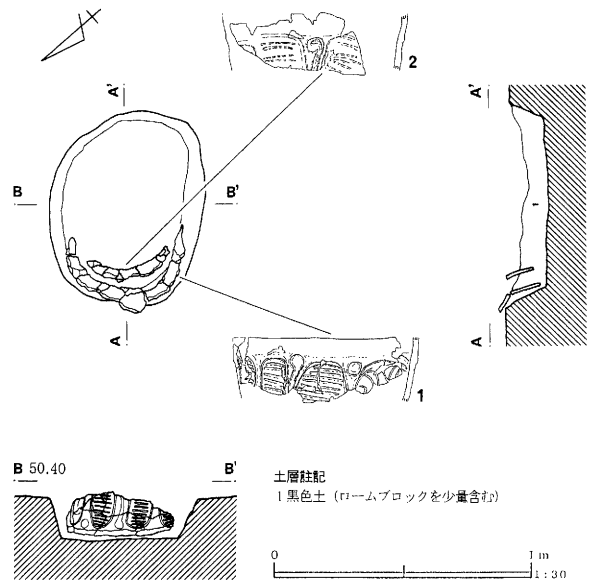
第1号埋甕 (第24図)

C-6グリッドに位置し、第4号土坑とは2.8mの距離にある。掘り方は長軸78cm、短軸62cmの南北に長い長円形を呈し、深さは17cmを測る。土器は掘り方の北西壁側に集中して埋設されている。

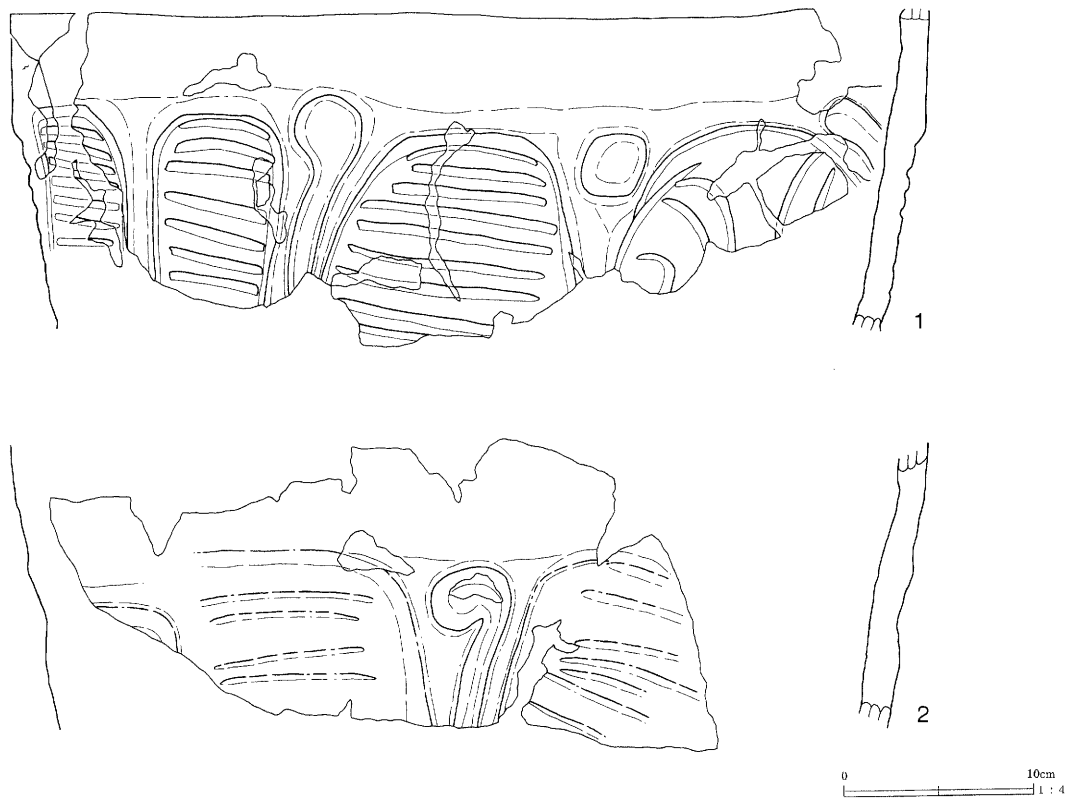
第25図1・2の土器は同一個体の加曾利E式浅鉢で、頸部～胴部中段にかけての土器である。1は掘り方内の外側に逆位で、2はその内側に正位で、入れ子状に埋設されていた。

1は逆U字状区画を10単位に配し、区画内は棒状工具により横線や弧線を充填し、区画間間は蕨手状文を描出する。1・2ともに器面の風化・摩滅が進むが、2は特にその進行が著しい。

1は現存高18.5cm。2は現存高15.0cm。



第24図 第1号埋甕出土状況



第25図 第1号埋甕出土遺物

(4) 倒木痕

第1号倒木痕 (第26図)

もっとも北寄りに確認されており、G・H-2グリッドに位置する。東側が調査区外にあたり未検出、中央は攪乱によって破壊されている。現存する長軸は3.5mであり、平面形はほぼ円形である。底面はフラットであり安定している。土層には明瞭な捻転が観察されるが、転倒方位は不明である。

出土遺物 (第28・29図)

覆土からは大量の縄文土器破片と少量の完形個体、石器が出土した。1は4単位波状口縁のキャリパー類深鉢で、口縁部から胴部の一部まで残存する個体である。口縁部文様帯は隆帯による渦巻文と楕円形区画文によって構成され、区画内はLR単節縄文が充填される。胴部以下はほとんど残っていないが、沈線による懸垂文と蛇行懸垂文が施されるようである。口径32.8cm、現存高16.2cm。

2は口縁部から胴上半部にかけての水平口縁深鉢である。外側へ向かってほぼ直線的に立ち上がる。口縁部文様帯と胴部以下に分けられ、口縁部は隆帯によって渦巻文が6単位に配される。胴部は渦巻文下位から2条沈線による懸垂文が施され、同じく6分割される。懸垂文間には波状文や弧文、コの字状文などが幅広沈線で施されるが、器面の乾燥がかなり進行した段階での施文なのだろうか、文様は非常に浅く施される。口径は17.0cm、現存高は10.4cm。

3は両耳壺である。口縁部は無文で胴部に文様帯をもつ。両者は隆帯によって区画される。胴部文様帯は沈線によって楕円形に区画され、無節縄文が充填される。左右の把手の接続位置は胴部文様帯の幅に一致する。胴下半部は縦方向の条線が施される。口径23.6cm、底径7.0cm、器高34.0cm。

4はキャリパー類深鉢の口縁部文様帯で、楕円形区画文間には沈線による円形区画文が描出され、楕円形区画文内はLR単節縄文が、また、円形区画文内は円形刺突文が施される。

5はキャリパー類深鉢で、口縁部は小波状を呈する。口縁部は内湾して立ち上がり、口唇部で肥厚し外反する。口縁直下には小波状に沿った幅広の沈線が施され、波頂部で断絶する。文様は沈線により楕円形区画文を施し、区画内は縦位のLR単節縄文を施文する。6は浅鉢であろうか。頸部に隆帯がめぐり、そこから上部を無文とする。楕円形区画文が配される。区画内はRL単節縄文を横位に施文する。

7は2本隆帯による弧文から2本の隆帯懸垂文が派生する土器である。地文はRL単節縄文である。楕円形区画文どうしの接点には円文が施される。8は磨消し懸垂文が施される胴部破片である。地文はRL単節縄文を縦位回転する。9は水平口縁深鉢であり、口縁部は無文で、無文部以下はRL単節縄文が施文される。

10は隆帯による懸垂文が施され、地文は縦位の沈線文である。11は内屈した口縁端部に沈線が巡り、これと直行するように短沈線が施される。文様は口縁部直下に2条の沈線が巡り、下位に山形の沈線が描かれる。地文はRL単節縄文である。

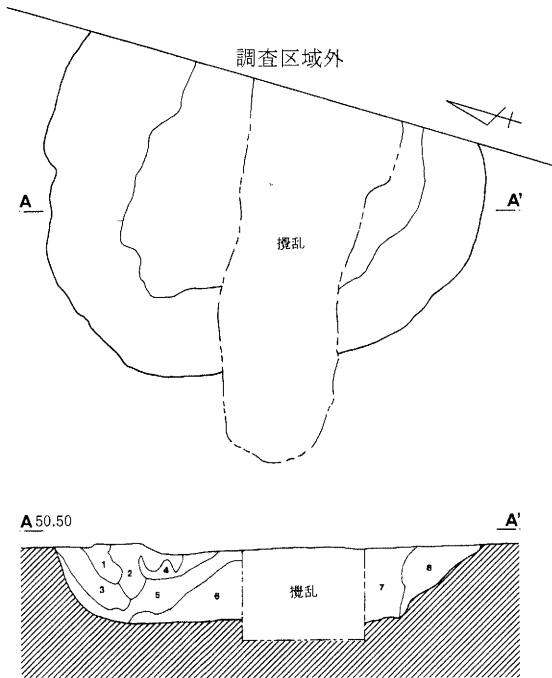
12は地文条線文の土器で、13は地文にRL単節縄文をもつ土器である。

14・15は打製石斧である。14は正面に自然面を明瞭に残し、周辺加工が行われる。刃部は欠損する。

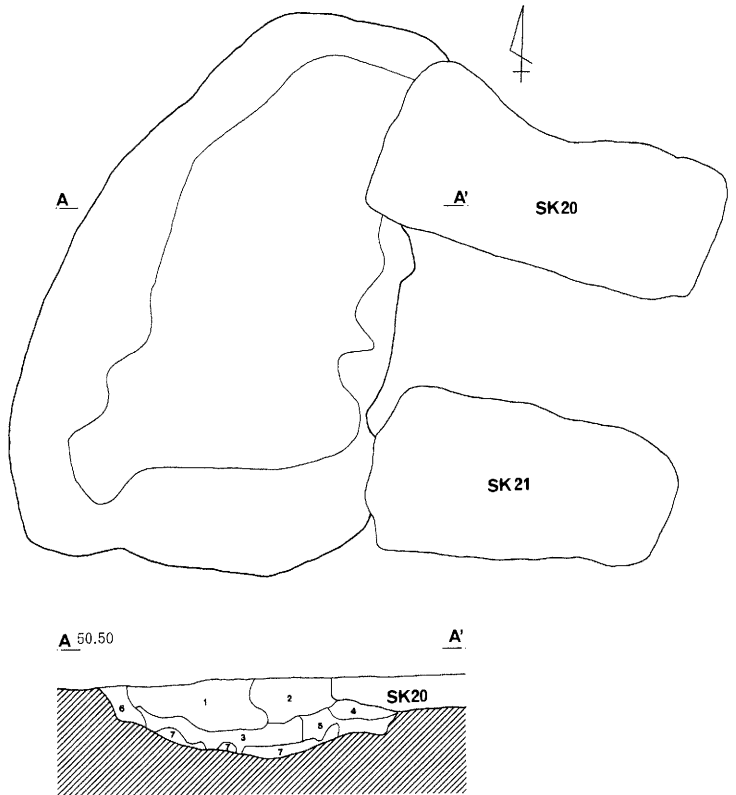
第2号倒木痕 (第26図)

G・H-2グリッドに位置する。北東で第20号土坑に、南東で第21号土坑に切られる。平面形は南北に長い不整形を呈し、長軸455cm、短軸265cm、深さ65cmを測る。倒木方位は不明である。底面は中央が最も低く、浅い播鉢状を呈する。

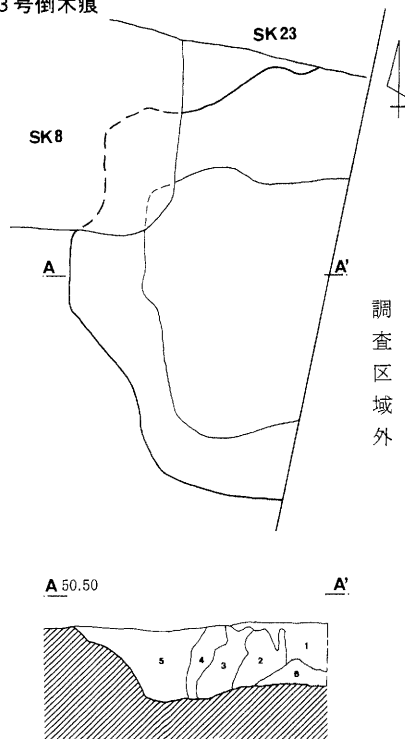
第1号倒木痕



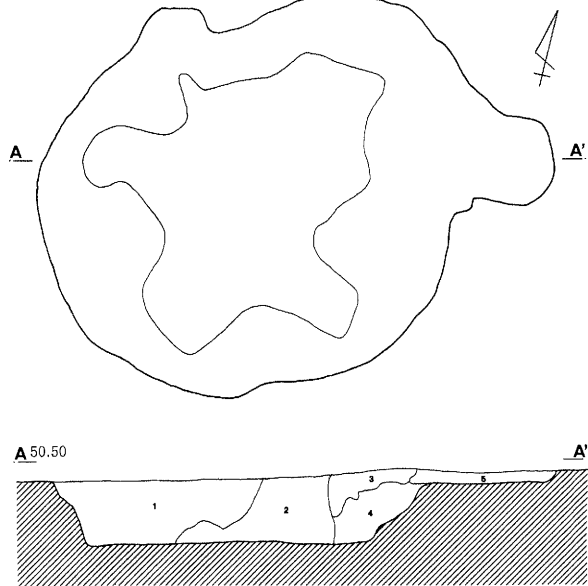
第2号倒木痕



第3号倒木痕



第4号倒木痕



土層註記

第1号倒木痕

- 1 褐黑色土
- 2 暗褐色土
- 3 褐色土 (褐黑色土、ロームブロック含む)
- 4 褐黑色土 (褐色土、ロームブロック含む)
- 5 暗黄褐色土
- 6 褐色土 (ロームブロック多量に含む)
- 7 褐色土 (ロームブロック少量含む)
- 8 褐色土 (ロームブロック多量に含む)

第2号倒木痕

- 1 褐黑色土
- 2 褐灰色土
- 3 黄灰色土
- 4 褐黑色土 (ロームブロック含む)
- 5 灰黄色土
- 6 暗黄灰色土
- 7 黄灰色土

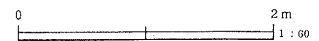
第3号倒木痕

- 1 暗黄灰色土
- 2 黒褐色土 (ロームブロック含む)
- 3 灰黄色土 (ロームブロック含む)
- 4 暗灰色土
- 5 褐黑色土
- 6 暗褐色土

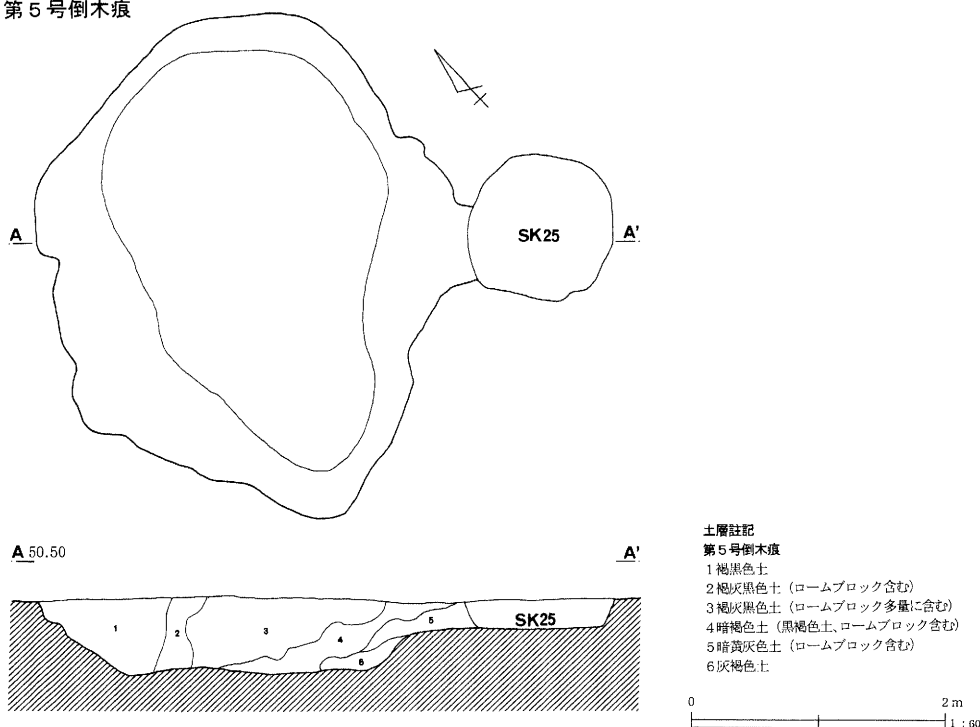
第4号倒木痕

- 1 暗灰黄色土
- 2 黄灰色土
- 3 暗灰黄色土・灰黄色土
- 4 黒色土
- 5 黒褐色土

第26図 第1～4号倒木痕



第5号倒木痕



第27図 第5号倒木痕

出土遺物 (第29図)

覆土からは数点の縄文土器破片が出土した。1は水平口縁の口縁部である。頸部はくびれ無文である。2・3は磨消し懸垂文の胴部破片である。2は地文に縦位のRL単節縄文をもつ。

第3号倒木痕 (第26図)

I-2グリッドに位置する。東側半分は調査区外にあたり未検出であり、北側で第8号土坑に切られる。長軸は348cm、深さは60cmを測り、底面は凹凸がやや激しく、壁は緩やかに立ち上がる。土層には捻転の様子が明瞭に観察される。

出土遺物

出土遺物は見られない。

第4号倒木痕 (第26図)

G-3グリッドに位置し、他遺構との重複関係はない。平面形は不整形であり、長軸408cm、短軸295cmを測る。底面はほぼフラットであり、壁は比較的急に立ち上がる。深さは50cmを測る。倒木方位は東である。

出土遺物

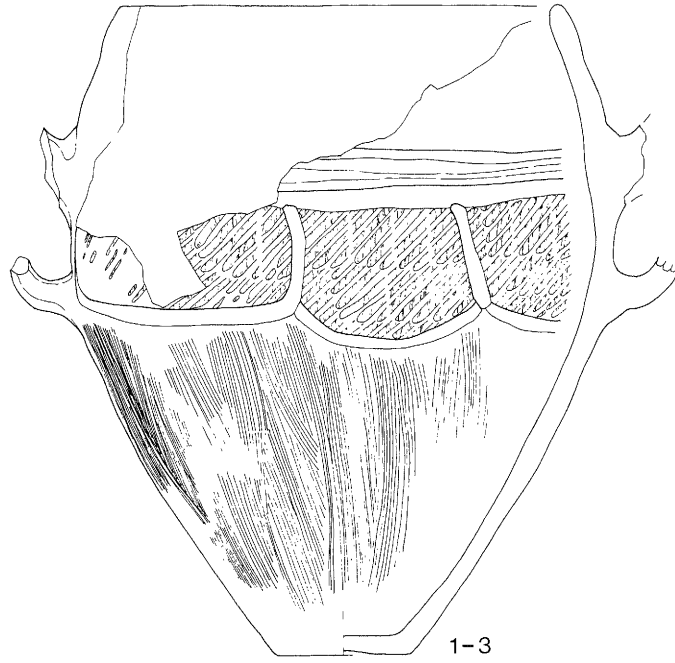
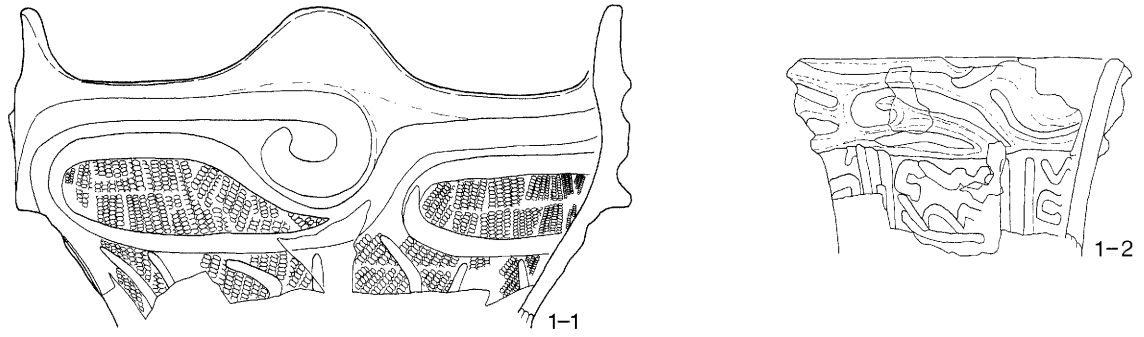
出土遺物は見られない。

第5号倒木痕 (第27図)

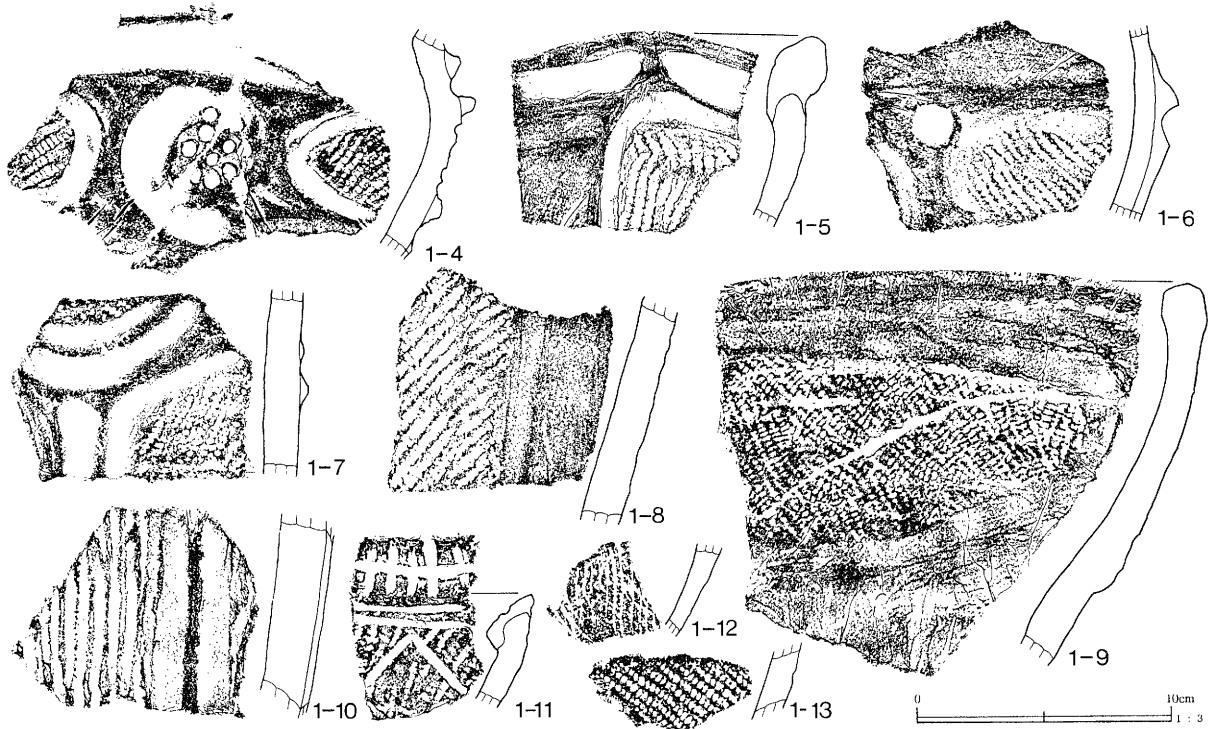
G・H-2グリッドに位置する。東側を第25号土坑に切られる。平面形は南北に長い不整形を呈し、長軸408cm、短軸325cm、深さ60cmを測る。底面はほぼフラットであり、壁は緩やかに立ち上がる。土層には捻転が明瞭に観察される。倒木方位は南東と思われる。

出土遺物 (第29図1)

石器が1点出土している。1は正面を石皿、裏面を凹石として使用している。正面はかなり使用されており使用面が深く窪む。裏面は6箇所の変形が確認される。

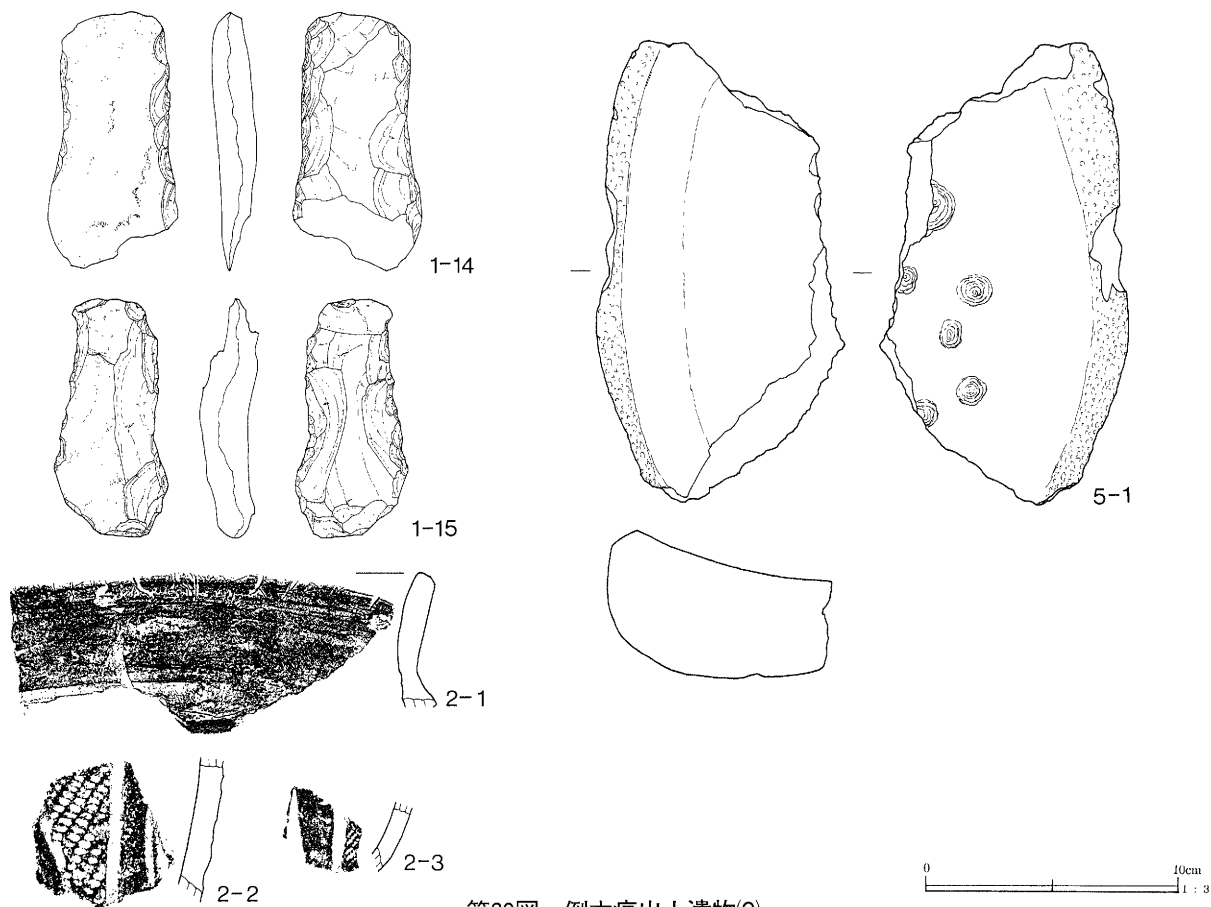


0 10cm
1:4



0 10cm
1:3

第28图 倒木痕出土遺物(1)



第29図 倒木痕出土遺物(2)

(5) 遺構外出土遺物

1) 土器 (第30～34図)

当遺跡における遺構外出土土器の分布は縄文時代の遺構の分布と一致を見せており、調査区の北端、東端、南端などの外縁部で多く出土する。時期としては縄文時代前期後半から後期後半までを見ることができ、このうち主体となるのは中期後半加曾利E式土器であり、天箱にして30箱を数える。後期初頭の称名寺式土器も散見され、天箱2箱を数える。縄文前期後半諸磯c式、後期中葉堀之内式、後期後半安行式などもわずかに見られるが、破片数点にとどまる。ここではこれらの土器群を、以下のように時期ごとに大別し説明を行う。

第I群土器…前期後半の土器を一括する。

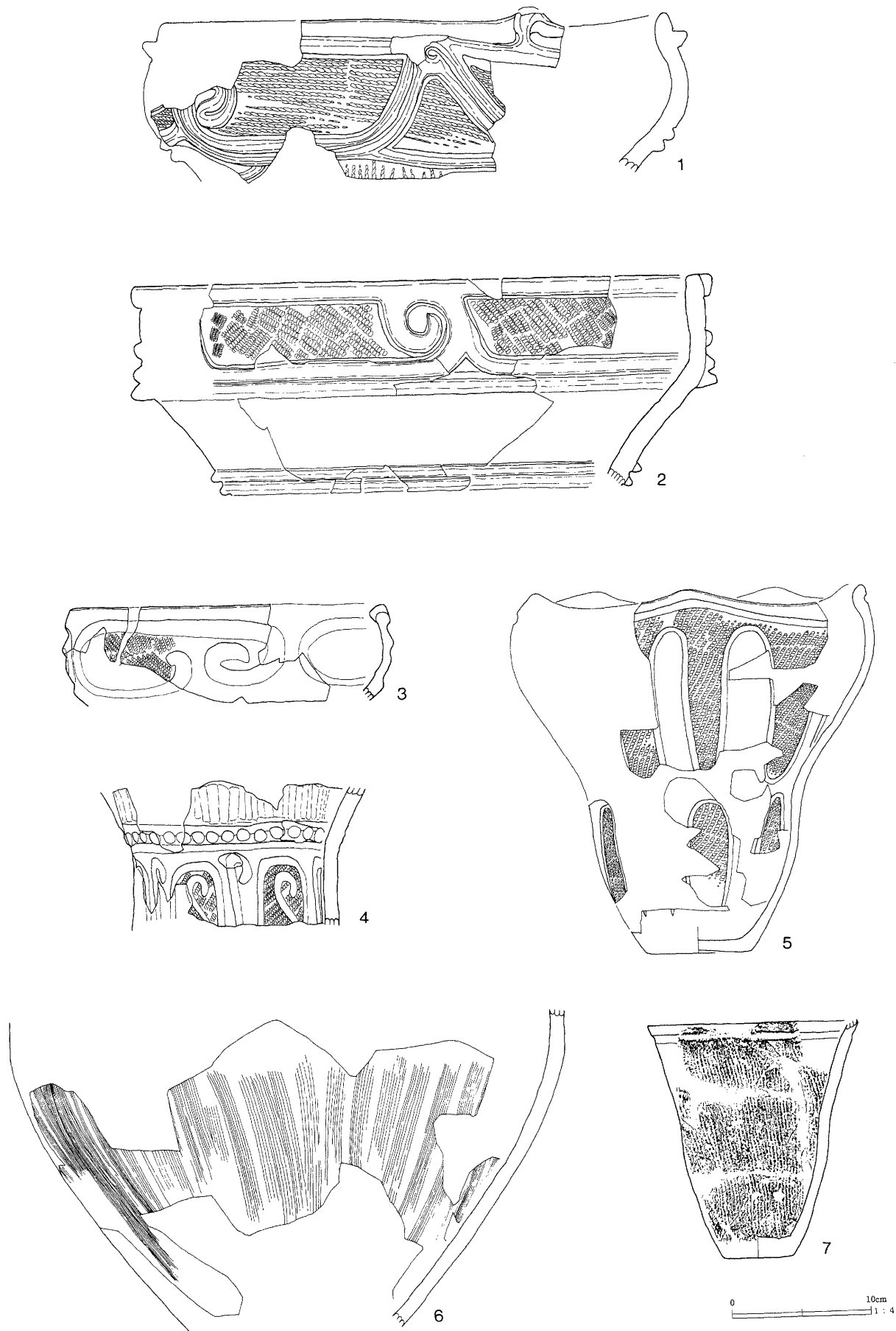
第II群土器…中期後半の土器を一括する。

第III群土器…後期初頭の土器を一括する。

第IV群土器…後期中葉の土器を一括する。

第I群土器 (第31図 8～13)

8～13は前期後半諸磯c式土器である。8～11は地文集合沈線に耳朶状貼付文のつく深鉢の口縁部である。8は表裏両面に斜方向の集合沈線が施され、口縁が外反して立ち上がるタイプの土器である。9・10は口縁が屈曲するタイプの土器で口唇部には斜方向、屈曲部下位には横方向の集合沈線が施される。9と10は同一個体と思われる。11は口縁が緩やかに内湾する。12・13は同一個体で器面に弧状の結節沈



第30圖 遺構外出土遺物(1)

線文が描出される。13は弧文の連結部分に2個の円形貼付文を配する。

第II群土器（第30図1～7、第31図14～34図127）

第30図1はキャリパー類深鉢の口縁部である。口縁部は緩やかに内湾し頸部は強くくびれる。口縁部文様帯には2条一組の弧状隆帯が連続し、文様带上端を区画する隆帯と接続する。接続部分には渦巻状の文様が描出される。口縁部はL撚りの撚糸文の縦位回転、胴部は横位回転施文する。口径36.5cm、現存高11.8cm。

2はキャリパー類の深鉢であり、頸部はハの字状に広がり、口縁部はほぼ直立して立ち上がる。成形は非常に丁寧である。口縁部には隆帯がめぐり、渦巻文によって区画された内部をRL単節縄文で充填する。頸部は無文であり、2本隆帯によって胴部以下と区画する。口径42.2cm、現存高15.6cm。

3は水平口縁のキャリパー類深鉢で、口縁部全周の30%程度の破片である。口縁部は緩やかに内湾し、口唇部は肥厚する。文様は渦巻文と楕円形区画文が融合したモチーフであり、4単位に配されるものと思われる。区画内はRL単節縄文が充填される。口径22.8cm、現存高7.0cm。

4は頸部から胴上半部の破片である。頸部は無文であり縦方向に研磨される。2条の浅い幅広沈線間に円形刺突文列を配し頸部と胴部を画する。胴部は蕨手文と逆U字状の区画が交互に8単位に配される。区画内はLR単節縄文を地文とし、沈線によりS字状文が描かれる。3と同一個体になる可能性がある。

5は5単位の波状口縁深鉢である。胴部中段にくびれをもち、胴上半部で最大径を測る。口縁部に向かって緩やかに内湾して立ち上がる。口縁部直下には沈線がめぐり、文様帯は胴上半部と下半部に分けられる。胴上半部の文様帯は幅の狭い波状沈線文を描出し、胴下半部はこれに対応しながら、逆U字状文が施される。地文は縦位のRL単節縄文である。口径24.8cm、底径7.6cm、現存高25.8cm。

6は器面全体に縦位の条線が施された、浅鉢ないしは両耳壺の胴部破片と思われる。現存高22.2cm。

7は水平口縁の小型深鉢である。口縁直下に沈線が巡り、器面全体に櫛歯状工具による縦位の条線が施される。口径15.0cm、底径5.0cm、器高16.8cm。

14～17は渦巻文を持つ口縁部の破片である。14は口縁下に隆帯を巡らせ、楕円形区画間に渦巻文を配した土器と思われる。15は波状口縁深鉢で口縁に沿って弧状の隆帯が巡る。内湾して立ち上がるが、口唇部付近でくの字に外反する。地文はLR単節縄文である。16は内湾して立ち上がり、口唇部付近で緩やかに外反する土器である。隆帯により渦巻文が描出される。17に描出された幅広沈線による渦巻文は非常に浅く、器面の乾燥の進んだ段階で施文されたものと思われる。

18・19は円形区画文を描出する土器である。18は円文内にRL単節縄文を、19はLR単節縄文を充填する。

20～32は連弧文類深鉢である。20～27は口縁部直下に2条ないし3条の平行沈線が施される。20～22は2条の沈線間に棒状工具による上下の交互刺突が施され、結果として小波状モチーフが描出される。20・26・30は2本一組、21・28・29は3本一組の沈線で弧文が描かれる。28は最下段の弧文から2条沈線の懸垂文が派生する。29は弧文と口縁部文様帯下端の横沈線との間に「()」状モチーフが描かれる。31～33は撚糸文を地文とする土器である。31は2本一組の沈線によって渦巻状モチーフが描かれるが、弧文連結部に配されたものであろうか。32はR撚りの撚糸文を横位に回転施文する。33はL撚りの撚糸文を横位施文し、2本隆帯によって弧文を描出し、隆帯間は磨消される。

34～39・47は口縁部に横位の隆帯区画をめぐらせ、口縁部を無文とする土器である。34・35は横位の隆帯区画から派生する隆帯懸垂文が伴う。38と39は横位の隆帯区画にRL単節縄文を横位施文する。



第31图 遺構外出土遺物(2)

40～46は口縁部に横位の沈線区画を施し、それより上位を無文とし下位に縄文を施した土器である。45・46は胴部に沈線による波状モチーフが描出される。文様モチーフ内は無文である。

48～50は口縁下に円形刺突文列を伴う土器である。48は口縁部に沿った浅い沈線上に刺突文列を施し、口縁部を無文とする。胴部は沈線により逆U字状文を描出し内部を磨消す。49はLR単節縄文の地文が口縁部まで施文される。口縁下に2段の浅い横沈線を施し、この沈線上に刺突文列を2段に配する。50は隆帯渦巻文の施される土器で、口縁下に円形刺突文列を波状に配する。地文は無文である。

51～54は口縁部に楕円形区画文を有する土器である。51は楕円形区画文内を縦位のRL単節縄文で充填する。52は口唇部に至り緩やかに外反する波状口縁深鉢である。53・54は楕円形区画文内をRL単節縄文で充填する。

55～58は地文が無文の土器である。55・56は横位の矢羽根状沈線を描出する土器で、58は文様の上位に2条の幅広横沈線を施す。57は沈線による蕨手状文が施される。58は口縁端部に沈線が施される。

59～73は隆帯懸垂文を施す胴上半部～底部破片である。59は横方向の2本隆帯により頸部と胴部が画され、そこから2本の隆帯懸垂文と1本の蛇行懸垂文が垂下する。地文は縦位のRL単節縄文である。63は縦方向に隆帯が懸垂し、隆帯懸垂文からは左右に弧状の隆帯が派生する。60・62・64・65・70・71は磨消し懸垂文の土器である。66～69・73は2本一組の隆帯による懸垂文の施される底部付近の破片である。

74は磨消し縄文の土器である。地文はLR単節縄文を縦位に施文する。

75～78は沈線による逆U字状の区画をもつ胴部破片である。

80～94は磨消し懸垂文の土器である。80はRL単節縄文の地文上に蛇行懸垂文が施される。86は横位のLR単節縄文の地文上に懸垂文および蛇行懸垂文が施される。95は地文が無文で隆帯懸垂文が施される。

96～99は波状の条線が縦位施文される土器で、99は磨消し懸垂文が施される。100～104は地文条線文の土器で、100は隆帯による蛇行懸垂文が施される。105は横方向の浅い隆帯を境として上位に縦位のLR単節縄文を、下位に縦位の条線文を施す土器である。106・107は櫛歯状工具による縦方向の施文が、比較的まばらに行われる土器である。

108～110は底部を一括する。109は脚台部で表面は縦方向に丁寧な研磨が見られる。底径6.8cm。

111～118は地文が無文で沈線によって文様が描出される土器である。111は隆帯懸垂文が垂下し、懸垂文間に重弧文が描出される。112は口縁が折り返され肥厚し、口縁下に幅広沈線が横走する。沈線下は斜位の沈線が施される。113は隆帯が垂下し、縦方向の沈線を施す。115は2本の隆帯懸垂文を垂下させ、斜位の沈線を施す。116は沈線による格子目文が描出され、隆帯による蛇行懸垂文が施される。

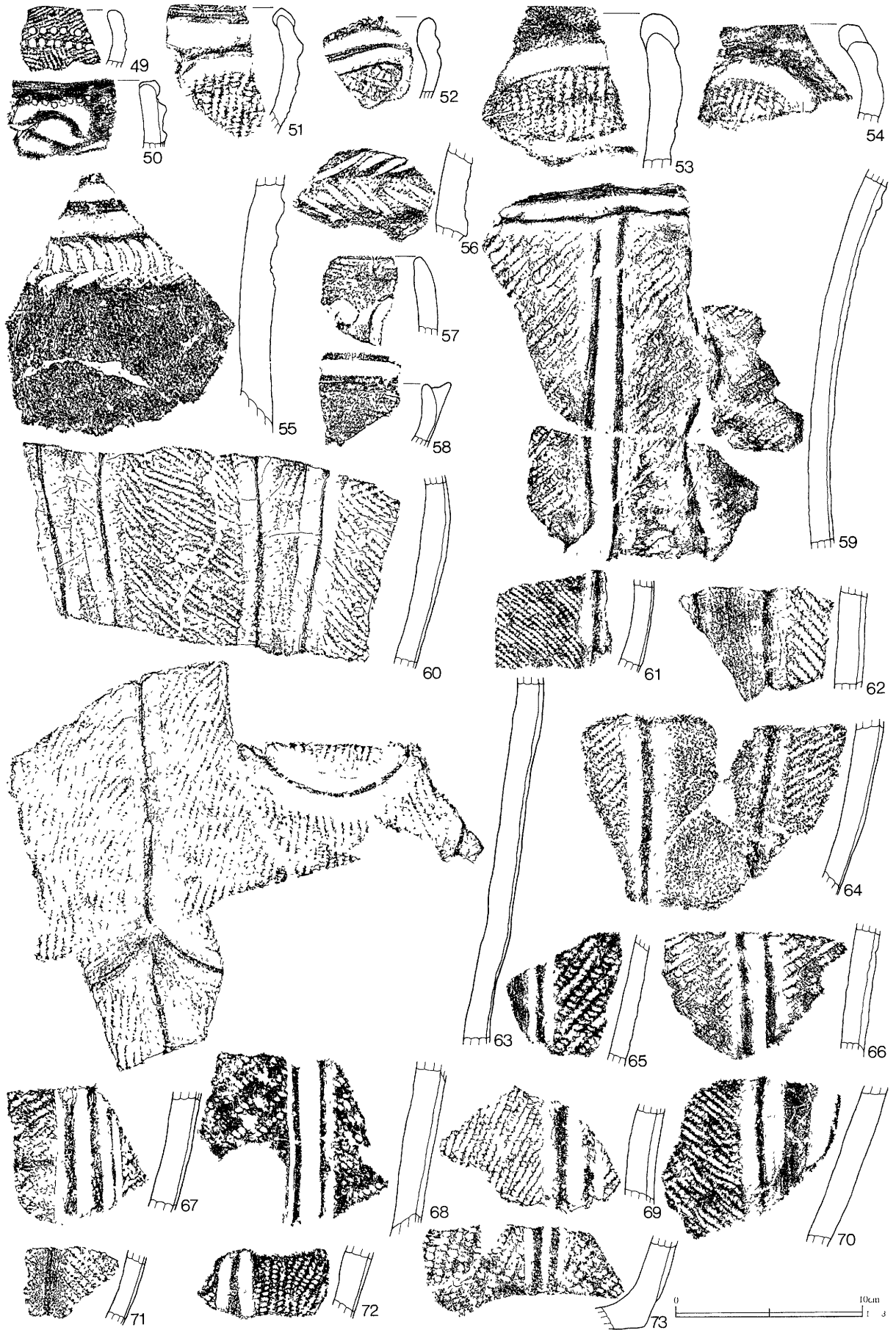
119は胴部文様帯をもつ浅鉢である。地文は無文で渦巻文や方形沈線区画が描出される。沈線区画内は縦位の沈線が充填される。120～123は口縁部無文帯の浅鉢である。横沈線によって口縁部と胴部が区画され、120～122は胴部以下に縦位の条線文を、123はRL単節縄文を施文する。

124・125はともに口縁部が肥厚するタイプの土器で、124は口縁部に楕円形区画文を描出し、区画内をRL単節縄文で充填する。125は口縁下に幅広沈線を巡らせ、それ以下は縦位のLR単節縄文が施される。

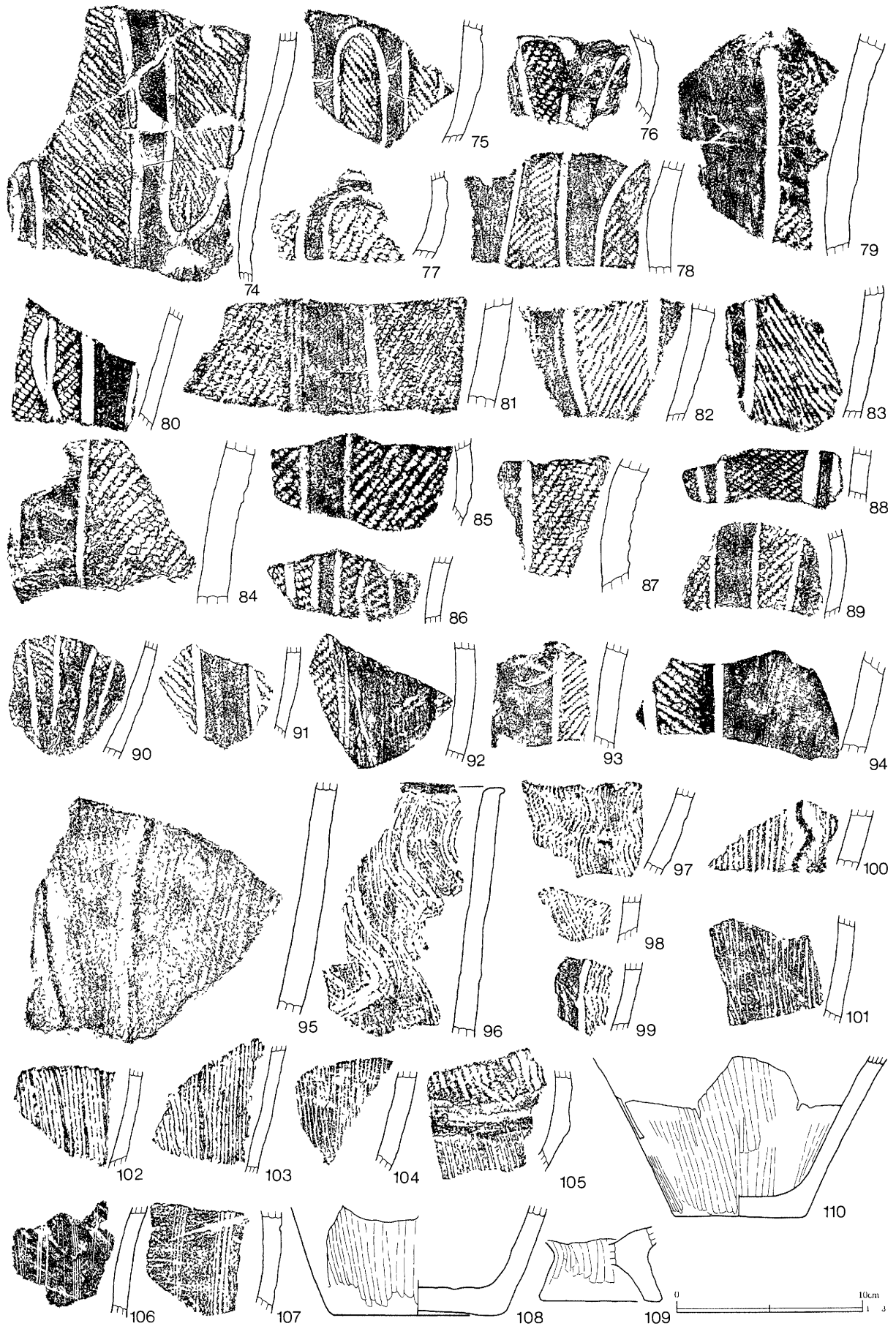
126は口縁部無文帯を有する土器である。胴部以下との区画をもたないが、胴部以下の地文であるLR単節縄文は屈曲部を起点にして横位に施される。127は口縁部が無文である。浅鉢であろうか。

第Ⅲ群土器（第34図128～143）

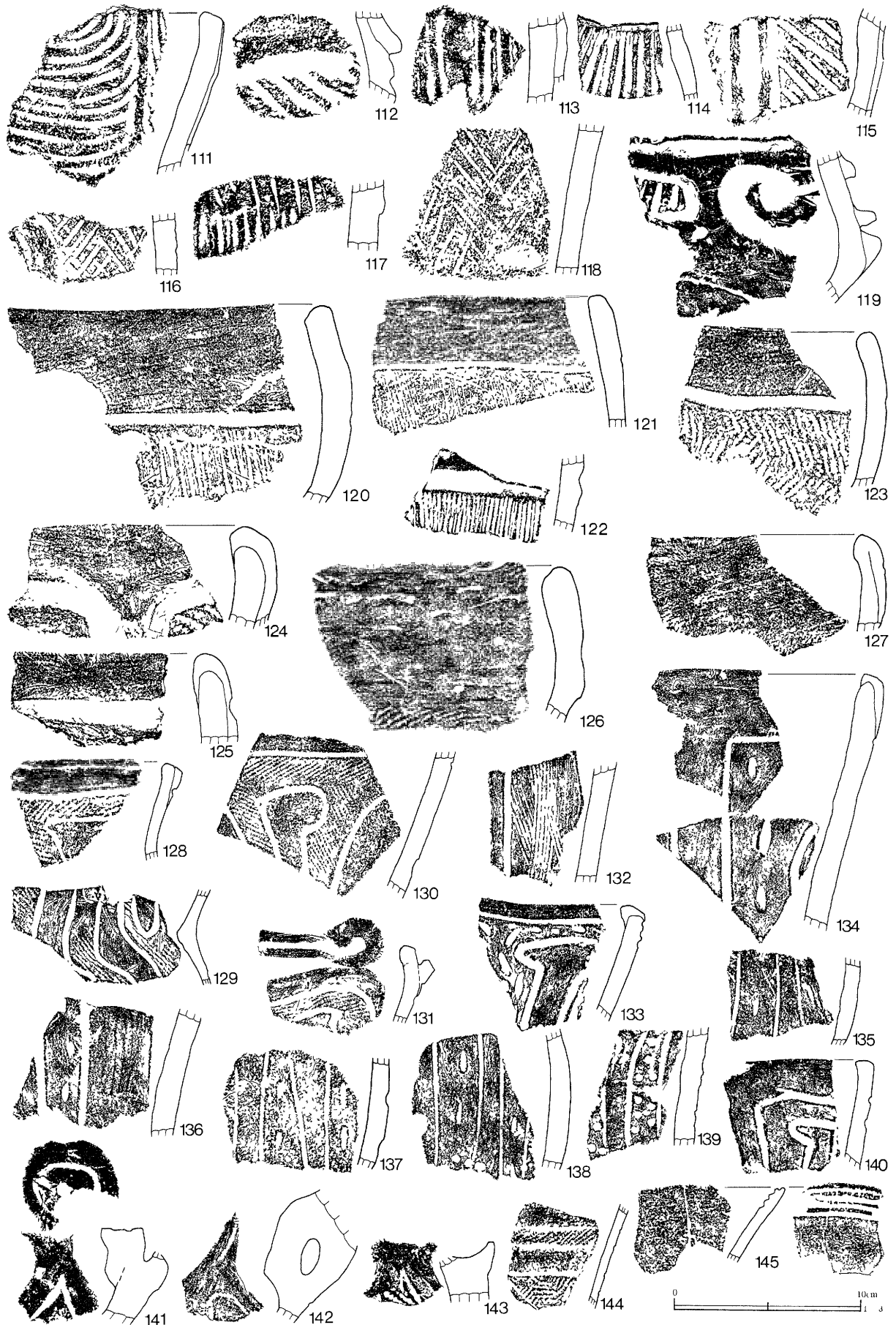
128～131は磨消し縄文により文様モチーフが描出される称名寺式深鉢である。128は口縁部がわずかに



第32图 遺構外出土遺物(3)



第33图 遺構外出土遺物(4)



第34図 遺構外出土遺物(5)

肥厚する。130はモチーフ内を RL 単節縄文で充填する。131は波状口縁で口縁部が肥厚し、口縁端部には沈線がめぐる。132は磨消し懸垂文の土器であり、地文は櫛歯状工具による条線文である。

133～138は地文が無文で沈線による文様モチーフ内に列点状刺突文を描出する土器である。139も文様モチーフ内に刺突を行う点では同じであるが、その描出方法において異なる。140はモチーフ内に刺突を伴わない。

141～143は波状口縁の波頂部につく突起である。141は上部に平坦面をもち、沈線による渦巻文が描出される。142は突起中央に円孔を持つ長楕円形の鱗状の突起である。

第Ⅳ群土器（第34図144・145）

144は堀之内2式深鉢の胴部破片である。平行沈線間には RL 単節縄文が充填される。

145は加曾利B式深鉢の口縁部である。土器外面は無文であるが、口縁部内面に4条の沈線が施される。

2) 石器（第35～37図、第1表）

本遺跡から出土した石器の総数は打製石斧81点、磨製石斧3点、礫器1点、磨石3点、敲石1点、凹石4点、石皿3点である。遺構外出土石器としたものには表採資料や試掘調査時に出土した資料も含めており、このうち残存率の良い資料や特徴的な資料を図示した。以下ではこれらの資料を器種ごとに分け、必要に応じて説明を加えていく。なお計測値については第1表に示した。

打製石斧（第35図146～第36図169）

図示したのは24点である。形態によりいくつかのタイプに分類される。両側縁に浅いえぐりの入るタイプ（146～153）、台形を呈するタイプ（154～157）、長方形に近いタイプ（158～160）、楕円形を呈するタイプ（167・168）、深いえぐりが入り、明瞭に肩のはるタイプ（170～173）、分銅型（174）などに分けられる。自然面を明瞭に残す個体が比較的多く、中には158のように正面、裏面ともに自然面の観察できる個体もある。全体的に風化・摩滅が著しく、ほとんどの個体において使用は観察できなかった。

磨製石斧（第36図170～172）

3点出土している。170は基部が若干欠損するものの完形に近い個体である。表面は丁寧に研磨される。

171は基部のみの個体である。全体的に丁寧に研磨されるが、両側面の研磨は特に丁寧である。基部上面から両側面の上方にかけては敲打痕が観察される。敲打範囲が研磨範囲に侵食していることから「研磨→敲打」の先後関係が理解できる。破損部位縁辺にも敲打痕が観察されることから、磨製石斧として機能を失った後、敲石のような用途に転用されたものと判断される。

9は刃部側が欠損する個体である。全体的に研磨は丁寧に行われている。

敲石（第36図173）

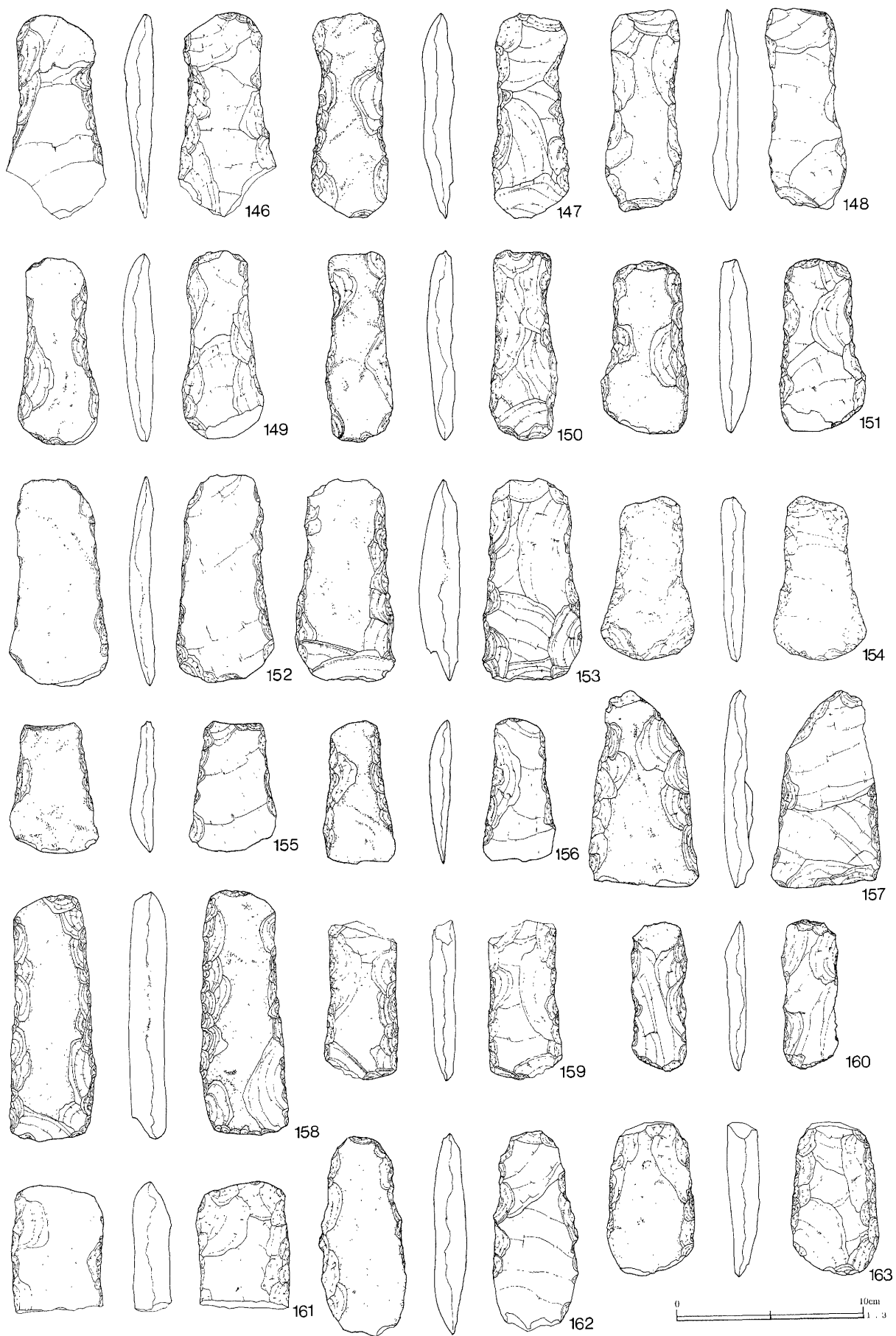
173は細長い自然礫を用いたもので、縁辺の一辺に敲打痕が観察される。敲打範囲には使用中の欠損と思われる、風化の進んだ剝離が見られる。

磨石（第36図174）

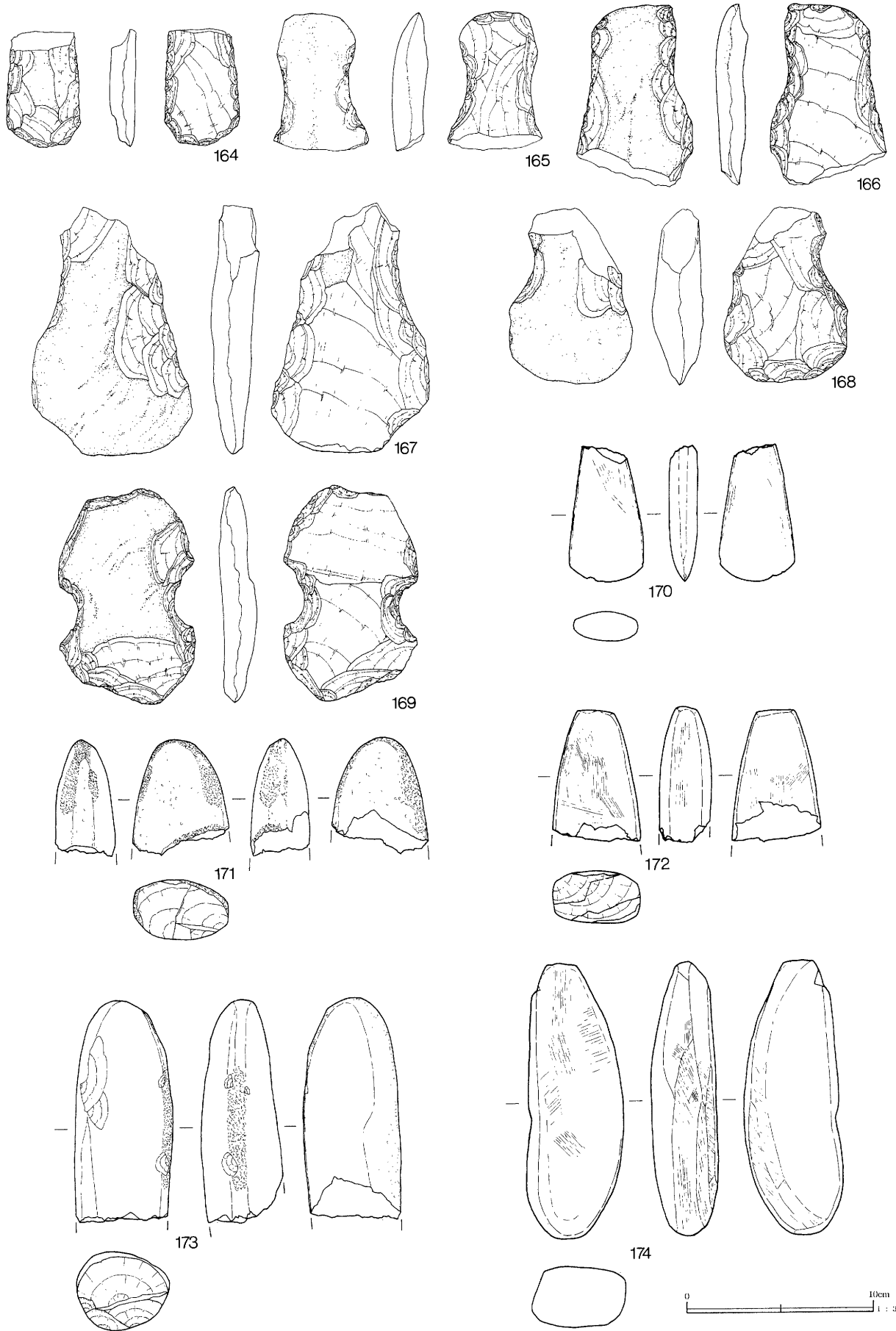
自然礫を用い正面と側面の一方に擦痕が観察される。正面は上部を中心に縦方向の擦痕が、側面は下部を中心に縦方向の擦痕が観察される。特に側面下部は稜が形成され、高頻度の使用がうかがえる。

石皿（第37図175・176）

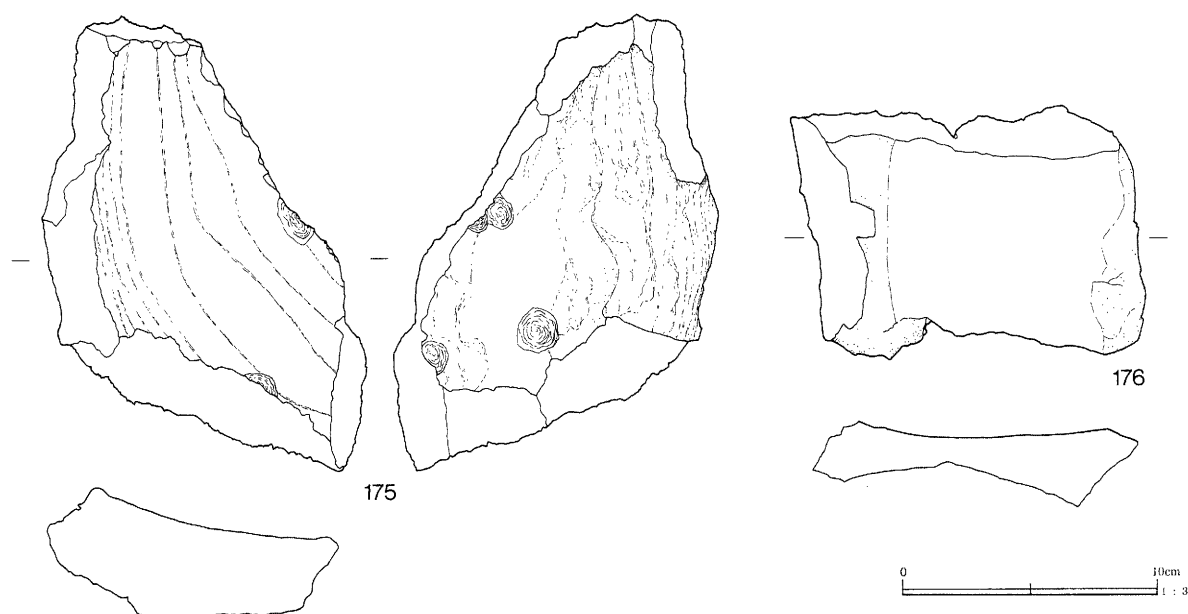
175は正面を石皿として使用する他に、両面を凹石としても使用する。正面は皿状に窪んだ底面と立ち上がり部に1箇所ずつ、裏面には平坦面に4箇所の凹みを持つ。181は個体の多くを欠損する。



第35図 遺構外出土遺物(6)



第36図 遺構外出土遺物(7)



第37図 遺構外出土遺物(8)

第1表 石器一覧表

番号	出土位置	器種	長さ × 幅 × 厚さ (cm)	重量 (g)	石材	番号	出土位置	器種	長さ × 幅 × 厚さ (cm)	重量 (g)	石材
11-108	B-1	打製石斧	(11.4) × 5.5 × 2.0	112	粘板岩	29-5-1	倒木痕5	兼凹石	18.0 × 8.6 × 4.7	—	—
11-109	C-2	打製石斧	11.4 × 4.8 × 3.6	160	ホルンフェルス	29-1-14	倒木痕1	打製石斧	10.2 × 5.1 × 1.6	100	ホルンフェルス
11-110	C-2	打製石斧	10.6 × 5.7 × 2.0	110	ホルンフェルス	35-146	G-3	打製石斧	(10.9) × 5.2 × 1.6	85	中粒砂岩
11-111	B-1	打製石斧	9.8 × 4.2 × 1.3	60	ホルンフェルス	35-147	I-2	打製石斧	10.9 × 4.1 × 1.6	105	ホルンフェルス
11-112	B-2	打製石斧	(8.8) × 5.5 × 1.8	120	中粒砂岩	35-148	G-2	打製石斧	10.7 × 4.2 × 1.3	70	ホルンフェルス
11-112	B-2	打製石斧	(15.5) × 5.8 × 1.7	95	ホルンフェルス	35-149	SJ7	打製石斧	10.1 × 4.4 × 1.6	95	ホルンフェルス
11-113	B-1	打製石斧	(9.6) × 4.8 × 1.7	95	結晶片岩	35-150	一括	打製石斧	10.1 × 3.6 × 1.3	70	ホルンフェルス
11-114	B-1	打製石斧	(8.0) × 4.7 × 2.2	95	中粒砂岩	35-151	I-2	打製石斧	9.4 × 4.6 × 1.7	85	中粒砂岩
11-115	C-1	打製石斧	8.4 × 3.9 × 1.5	55	中粒砂岩	35-152	J-3	打製石斧	11.2 × 5.2 × 1.2	95	ホルンフェルス
11-116	C-1	打製石斧	10.3 × 4.3 × 1.8	110	中粒砂岩	35-153	I-2	打製石斧	10.8 × 5.3 × 2.2	150	ホルンフェルス
11-117	B-1	打製石斧	(8.4) × 3.6 × 1.4	55	中粒砂岩	35-154	G-3	打製石斧	8.8 × 5.0 × 1.3	70	結晶片岩
11-118	C-1	打製石斧	10.4 × 4.3 × 1.4	75	ホルンフェルス	35-155	一括	打製石斧	7.1 × 4.7 × 1.2	45	ホルンフェルス
11-119	C-1	打製石斧	9.2 × 4.0 × 1.0	35	ホルンフェルス	35-156	一括	打製石斧	7.6 × 3.9 × 1.1	35	ホルンフェルス
11-120	B-1	打製石斧	11.0 × 5.0 × 1.6	90	ホルンフェルス	35-157	B-3	打製石斧	10.6 × 5.8 × 1.6	120	中粒砂岩
11-121	B-1	打製石斧	11.5 × 5.0 × 2.4	110	ホルンフェルス	35-158	K-4	打製石斧	13.3 × 4.4 × 2.0	205	変斑レイ岩
11-123	B-1	打製石斧	(8.9) × 6.0 × 2.1	95	細粒砂岩	35-159	一括	打製石斧	(8.5) × 4.0 × 1.4	60	ホルンフェルス
11-124	C-1	打製石斧	7.3 × 4.9 × 1.5	70	中粒砂岩	35-160	一括	打製石斧	8.1 × 3.5 × 1.0	30	ホルンフェルス
11-125	B-2	打製石斧	6.8 × 3.5 × 1.0	25	ホルンフェルス	35-161	I-2	打製石斧	(6.8) × 5.0 × 2.0	90	中粒砂岩
12-126	C-1	打製石斧	12.3 × 4.0 × 1.8	85	ホルンフェルス	35-162	H-2	打製石斧	10.6 × 4.6 × 1.7	110	中粒砂岩
12-127	B-1	打製石斧	7.0 × 3.2 × 1.5	35	ホルンフェルス	35-163	一括	打製石斧	(8.2) × 4.8 × 1.7	90	中粒砂岩
12-128	B-1	打製石斧	(5.4) × 4.7 × 1.4	40	ホルンフェルス	36-1	一括	打製石斧	(6.2) × 4.0 × 1.3	50	ホルンフェルス
12-129	B-1	打製石斧	(6.8) × 5.3 × 1.5	70	中粒砂岩	36-168	H-2	打製石斧	(13.4) × (8.4) × 2.2	180	ホルンフェルス
12-130	C-1	石皿兼磨石	15.9 × 10.9 × —	645	砂岩	36-170	表採	磨斧	7.2 × 3.7 × 1.6	80	—
16-37	F-2	凹石	14.2 × 8.2 × —	—	—	36-171	一括	磨斧、転用	5.8 × 4.8 × 3.0	150	—
18-33	J-6	打製石斧	8.8 × 4.6 × 1.2	50	ホルンフェルス	36-172	一括	敲石	7.0 × 4.1 × 2.7	180	—
18-34	J-6	打製石斧	8.1 × 4.1 × 1.1	40	粘板岩	36-173	一括	敲石	11.8 × 5.2 × 4.0	470	—
20-2-7	SK2	打斧	(13.2) × (4.5) × (1.6)	180	—	36-174	一括	磨石	15.0 × 5.2 × 3.4	405	—
20-3-6	SK3	打製石斧	6.2 × 3.4 × 0.7	25	ホルンフェルス	36-2	B-3	打製石斧	(7.4) × 5.1 × 1.7	80	ホルンフェルス
20-4-7	C-6	礫器	6.2 × 5.9 × —	240	黒色緻安山岩	36-3	A-3	打製石斧	(9.7) × 6.3 × 1.6	140	中粒砂岩
22-5-12	SK5	打製石斧	13.3 × 7.3 × 3.3	370	中粒砂岩	36-4	H-2	打製石斧	(13.4) × 8.4 × 2.2	280	ホルンフェルス
22-5-13	SK5	打製石斧	8.0 × 4.6 × 1.2	50	中粒砂岩	36-6	G-3	打製石斧	11.7 × 7.3 × 1.8	205	ホルンフェルス
23-6-6	SK6	凹石兼磨石	24.6 × 15.4 × 9.0	—	—	37-175	一括	兼凹石	15.6 × 11.4 × —	—	緑泥片岩
23-6-7	SK6	打製石斧	9.7 × 6.4 × 1.6	95	中粒砂岩	37-176	一括	石皿	9.8 × 12.8 × —	620	—
23-6-8	B-3	打製石斧	14.2 × 6.2 × 2.9	300	ホルンフェルス	42-15	SJ6	打製石斧	(7.8) × 4.1 × 1.2	45	ホルンフェルス
29-1-15	倒木痕1	打製石斧	9.4 × 3.6 × 1.9	85	ホルンフェルス						

2 古墳時代～奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

古墳時代の住居跡は総数4軒検出された。時期はすべて後期に所属する。第4・5・7号住居跡は後述する中世土坑群の集中地点に検出され、第6号住居跡は分布が離れ、東側調査区域外付近に単独で検出された。第4・5号住居跡は重複関係にあり、7号住居跡と近接している。また第6号住居跡は縄文時代の第1号住居跡と重複関係にある。土層や出土遺物の観察からは第4・5号住居跡には若干の時期差が認められた。時期的には第4号住居跡、第5号住居跡、第6号住居跡・第7号住居跡という順に新しくなると考えられる。

古墳時代以外では平安時代の住居跡が1軒検出されている。古墳時代の住居跡とはやや離れた、調査区北側に位置している。

第4号住居跡（第38・39図、第2表）

H-5・6グリッドに位置する。第5号住居跡、第143・144・147・149・150～153・155・156号土坑の他、十数基のピットと重複関係にあり、ほとんどすべての遺構に切られているが、唯一第87号ピットを本遺構が切っている。平面形は他遺構の切り合いが激しく推定であるが、長軸5.05m、短軸4.95mのほぼ正方形のプランで、面積は約24.99㎡を測る。主軸はN-75°-Eを指す。

住居の壁はやや傾斜しており、壁溝が東壁の一部と南壁から西壁にかけて断続的に検出された。溝幅は10～15cm、深さは約15～20cmを測る。覆土は自然堆積と考えられる。

カマドは他遺構との重複により不明であるが、主軸方向である東壁に設置されていた可能性がある。柱穴、貯蔵穴などは検出できなかった。

出土遺物は住居の全体に分布するが、特に北西隅に集中している。遺物の種類としては土師器坏・甕、土錘、編み物石などが認められる。土師器坏は住居跡北西部の、比較的狭い位置に集中して出土した。丸底の土師器甕は頸部より上部が欠損していたが、土圧による破損を想定しうる出土状態であった。編み物石は7点が南西隅に纏まって出土した。

第5号住居跡（第38・40図、第3表）

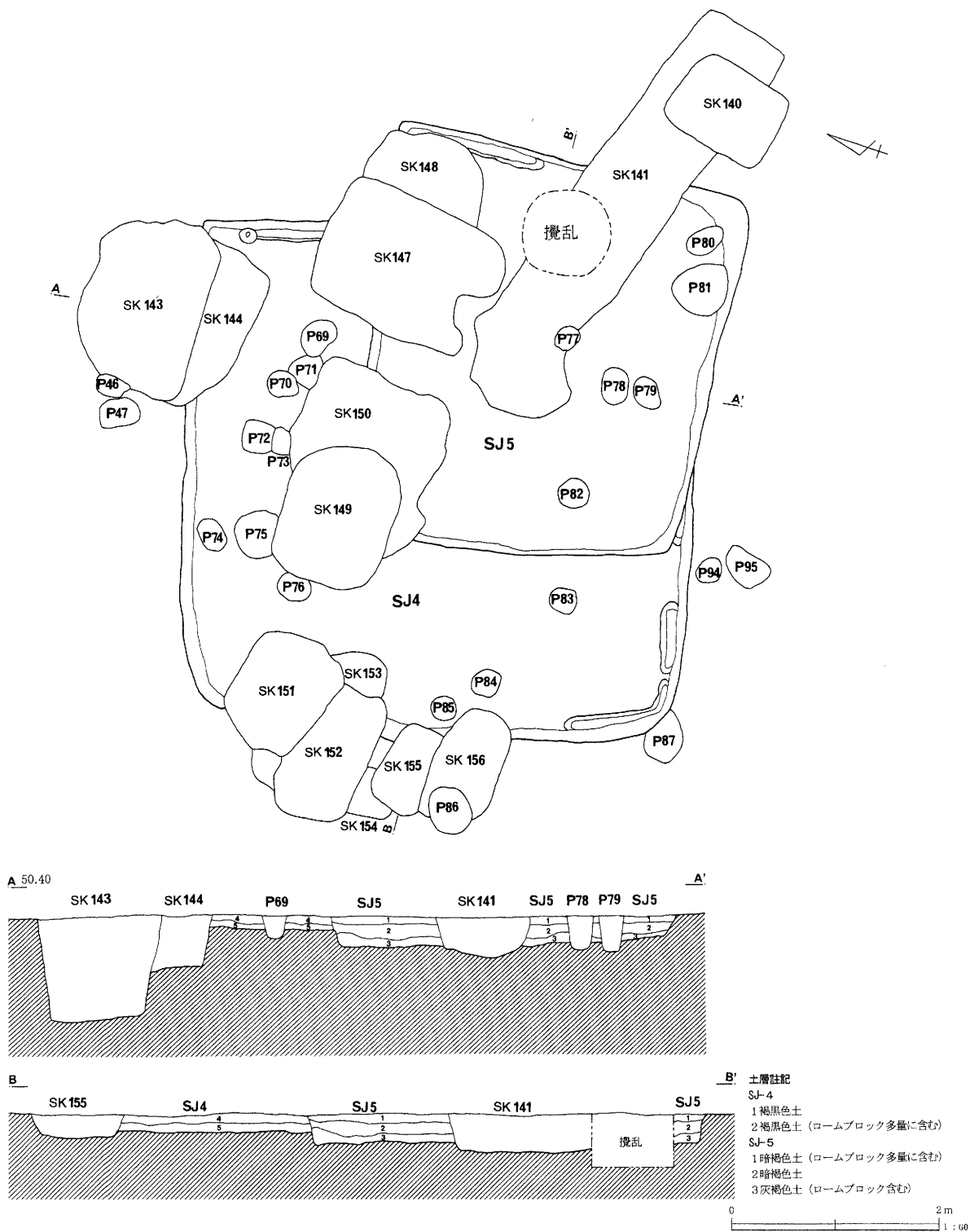
H-5・6グリッドに位置する。第4号住居跡、第141・147～150号土坑の他、6基のピットと重複する。切り合い関係としては第4号住居跡を切り、その他の遺構に切られている。住居跡中央東寄りでも一部攪乱を受ける。平面形は、長軸4.03m、短軸は推定であるが3.35mのやや台形気味の長方形プランで、面積は約13.5㎡を測る。主軸は短軸方向と推定され、N-7°-Eを指す。

床までの深さは約30cmで、覆土は自然堆積と考えられる。

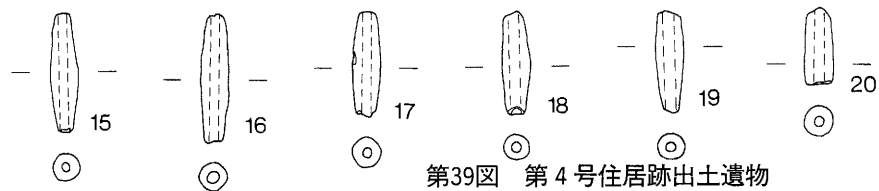
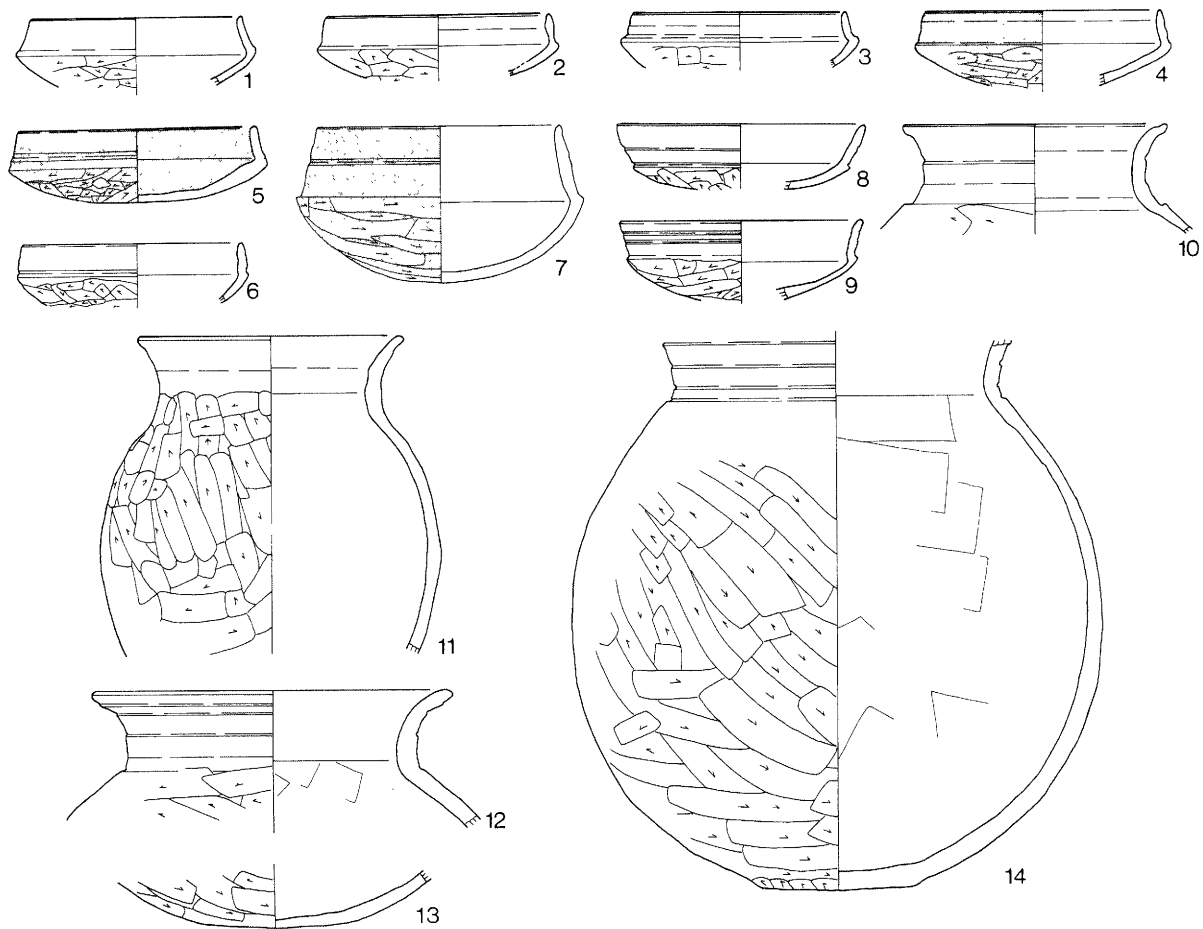
カマドは土坑との重複により不明であるが、北壁に設置されていた可能性が考えられる。おそらく、第147号土坑付近と推定される。

住居跡の壁はほぼ垂直の箇所と、やや傾斜している箇所が認められた。壁溝は東壁の北東隅付近に、長さ1.4m程検出できた。その規模は、幅約13cmを測る。柱穴・貯蔵穴などは検出できなかった。

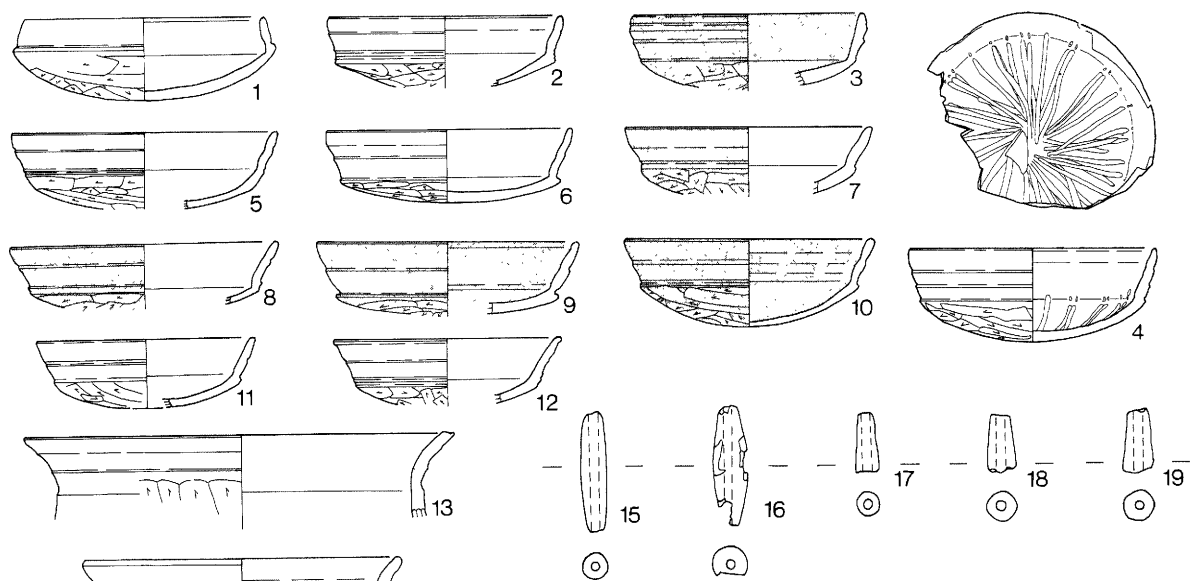
出土遺物は住居跡全体に広く分布している。種類としては土師器坏・甕、土錘などである。坏の出土が目立ち、内面に放射状の暗文を施したものも確認された。住居の中央部付近には土錘が纏まって検出されている。



第38図 第4・5号住居跡



第39图 第4号住居跡出土遺物



第40图 第5号住居跡出土遺物

第2表 第4号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器坏	(11.2)	—	—	ABJK	にぶい赤褐色	A	15%	外面黒色処理。 内外面黒色処理。
2	土師器坏	(12.1)	—	—	ABHK	にぶい褐色	A	10%	
3	土師器坏	(11.4)	—	—	ABJ	橙色	A	10%	
4	土師器坏	(12.4)	—	—	ABEH	橙色	A	20%	
5	土師器坏	(12.5)	3.9	—	AHJN	赤褐色	A	50%	
6	土師器坏	(11.4)	—	—	ABDK	橙色	A	15%	
7	土師器坏	13.0	8.3	—	ABD	にぶい橙色	A	95%	
8	土師器坏	(13.0)	—	—	ABJK	橙色	A	40%	
9	土師器坏	(12.8)	—	—	ABJ	橙色	A	25%	
10	土師器甕	(13.8)	—	—	ABHJK	にぶい黄橙色	A	10%以下	
11	土師器甕	(13.8)	—	—	ABEHJMN	橙色	B	20%	
12	土師器甕	(18.5)	—	—	ABHJK	にぶい橙色	A	10%	
13	土師器甕	—	—	—	ABH	褐色灰色	A	10%以下	
14	土師器甕	—	—	8.0	ABJKN	橙色	A	60%	
15	土錘	長さ6.2	幅1.5	厚さ1.5	—	にぶい褐色	—	完存	重さ10.2g。
16	土錘	長さ6.7	幅1.5	厚さ1.5	—	にぶい褐色	—	完存	重さ12.7g。
17	土錘	長さ5.6	幅1.5	厚さ1.6	—	にぶい褐色	—	一部欠損	重さ11.0g。
18	土錘	長さ5.4	幅1.5	厚さ1.4	—	にぶい褐色	—	一部欠損	重さ8.3g。
19	土錘	長さ5.3	幅1.5	厚さ1.4	—	灰褐色	—	一部欠損	重さ9.7g。
20	土錘	長さ4.1	幅1.6	厚さ1.6	—	にぶい褐色	—	欠損	重さ9.0g。

第3表 第5号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器坏	(12.7)	4.3	—	BJK	明赤褐色	A	60%	口縁部使用による剥離。
2	土師器坏	(12.2)	—	—	ABIK	明赤褐色	A	15%	内外面黒色処理。 内面放射状暗文。
3	土師器坏	(12.2)	—	—	ABCEI	にぶい褐色	B	25%	
4	土師器坏	(13.0)	5.0	—	ABEHKM	明赤褐色	A	60%	
5	土師器坏	(14.0)	—	—	ABJMN	灰白色	B	20%	
6	土師器坏	(13.0)	3.8	—	ABJK	橙色	A	75%	
7	土師器坏	(13.2)	—	—	ABJ	にぶい黄褐色	B	20%	
8	土師器坏	(14.0)	—	—	ABH	にぶい褐色	A	15%	
9	土師器坏	(13.8)	—	—	ABJK	にぶい褐色	A	40%	
10	土師器坏	(13.1)	4.7	—	ABEHJN	にぶい褐色	A	40%	
11	土師器坏	(11.6)	(3.7)	—	AJ	橙色	A	20%	
12	土師器坏	(11.8)	—	—	ABHK	橙色	A	15%	
13	土師器甕	(23.0)	—	—	ABEJKN	橙色	A	10%以下	
14	土師器甕	(16.6)	—	—	ABHJMN	橙色	A	10%	
15	土錘	長さ6.2	幅1.4	厚さ1.4	—	黒褐色	—	完存	
16	土錘	長さ6.3	幅1.9	厚さ1.9	—	黒色	—	一部欠損	重さ13.7g。
17	土錘	長さ3.1	幅1.2	厚さ1.3	—	褐色	—	欠損	重さ3.2g。
18	土錘	長さ3.0	幅1.6	厚さ1.6	—	にぶい褐色	—	欠損	重さ5.4g。
19	土錘	長さ3.2	幅1.7	厚さ1.6	—	にぶい褐色	—	欠損	重さ7.0g。

第6号住居跡（第41・42図、第4表）

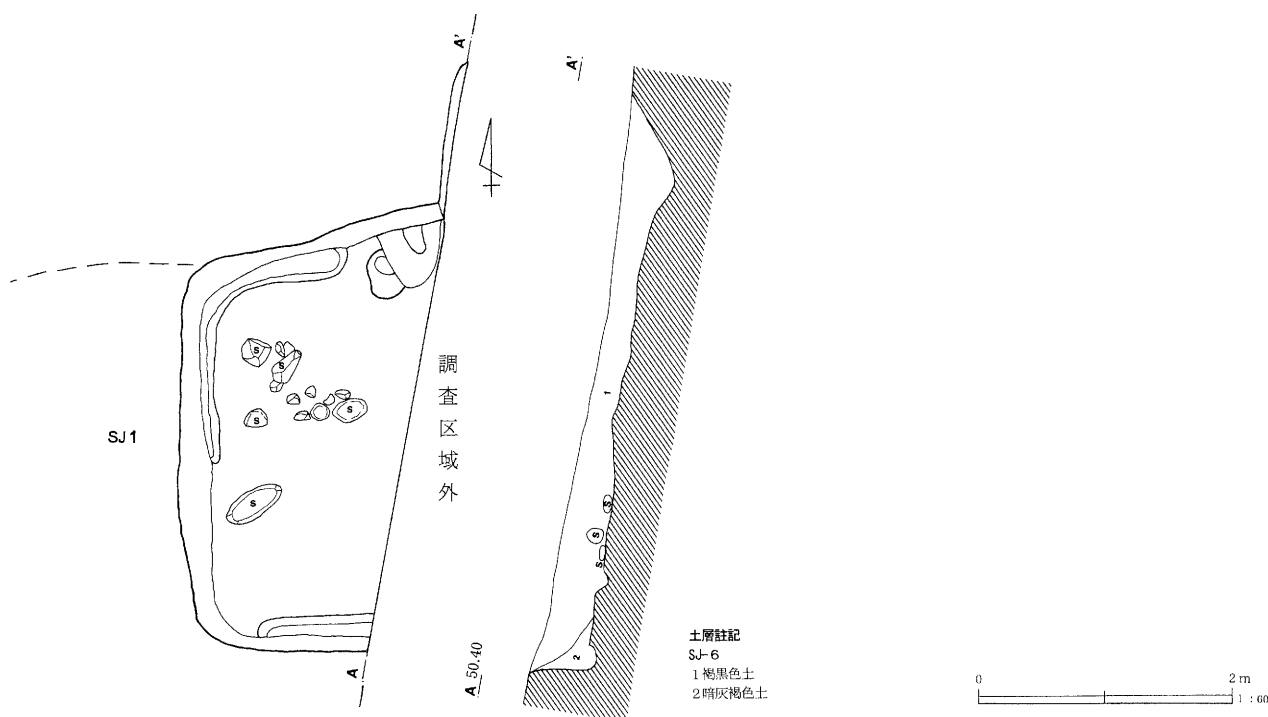
E-1グリッドを中心に位置する。縄文時代第2号住居跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。平面形は一方軸が3.47mを測る正方形ないしは長方形のプランである。主軸はN-6°-Wを指すと推定される。

床面は起伏が激しく、床までの深さは約27cmから35cmを測る。覆土は自然堆積と考えられる。

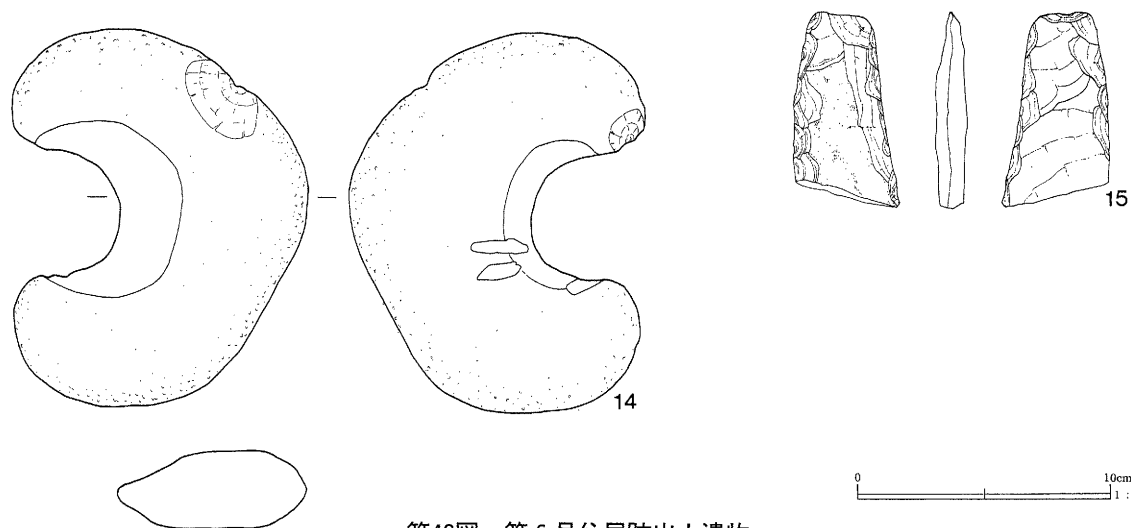
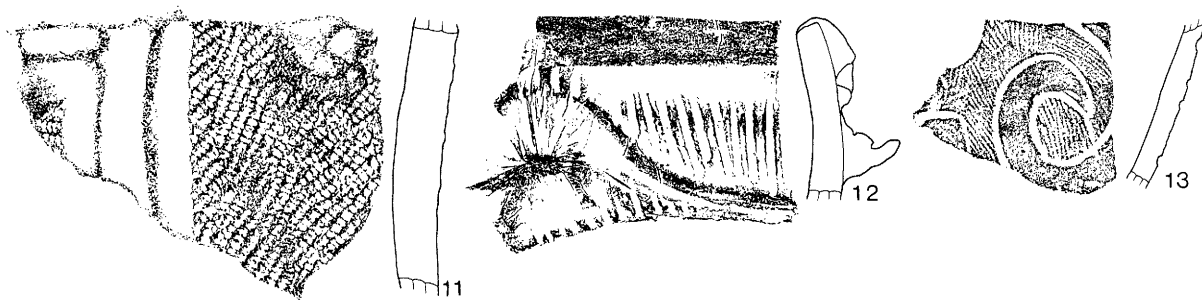
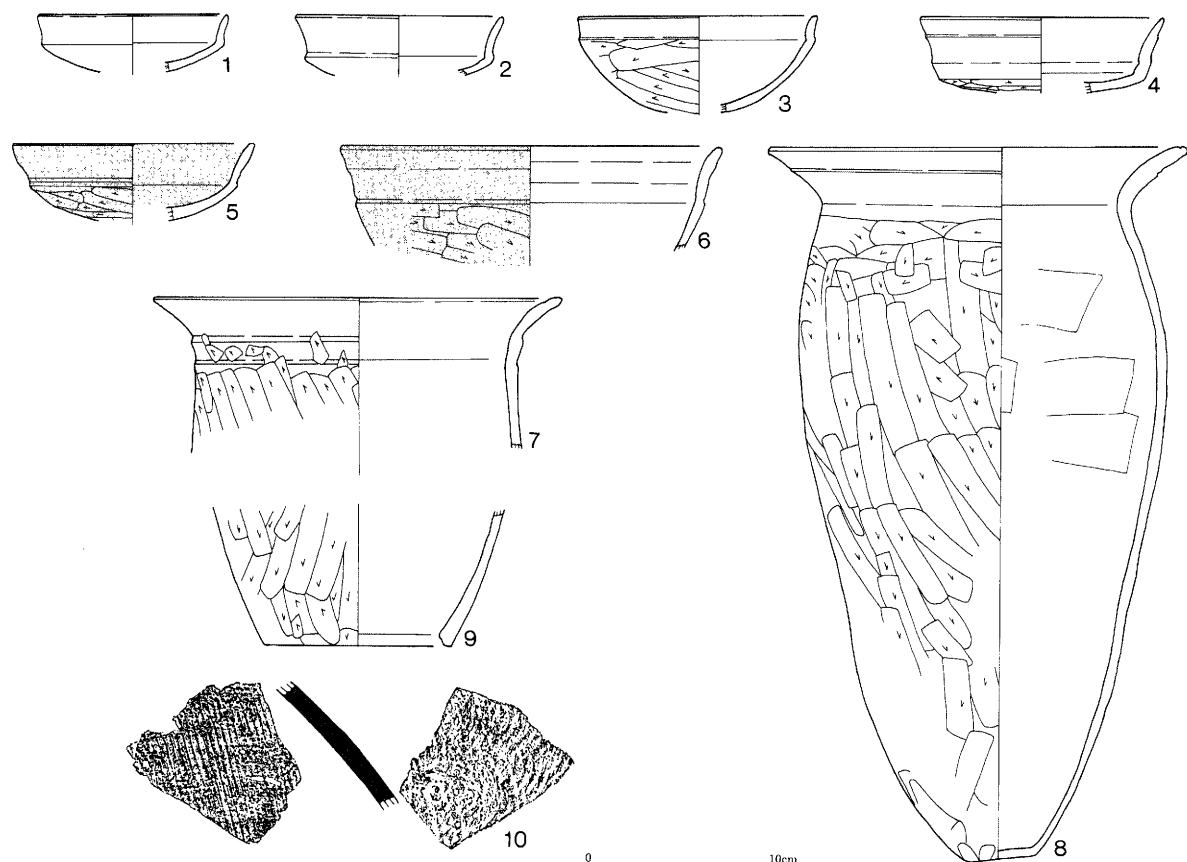
カマドは北壁の調査区域外付近において左側の袖が確認されたことから、北壁に設けられていたと考えられる。燃焼部は土層観察の結果、痕跡のみの確認であった。最深部で床面から約12cm掘り窪められていた。

壁はほぼ直立しており、壁溝は北壁の北側半分から西壁はカマドの袖付近まで検出され、幅は広いところで約23cm、狭いところで約10cm、深さは8cmを測る。また南壁においても壁溝を確認している。溝幅は平均18cmを測り、深さは平均10cmを測る。柱穴、貯蔵穴等は検出されなかった。

出土遺物は住居跡全体に分布しており、土師器杯・甕・甑などが大型の礫を伴って出土した。礫は最大のもので長軸50cmを測る。遺物はこの他に縄文土器、打製石斧、勾玉形石器が確認された。縄文土器や打製石斧は、縄文時代の第2号住居跡との重複による混入遺物と考えられたが、勾玉形石器はその用途所属時期が不明である。



第41図 第6号住居跡



第42图 第6号住居迹出土遺物

第4表 第6号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器坏	(9.8)	—	—	ABJ	橙色	C	10%以下	全体的に風化。摩滅著しい。 内外面黒色処理。 外面黒色処理。 外面平行叩き目。内面青海波文。 勾玉形用途不明石製品。砂岩製。 短冊形。ホルンフェルス製。
2	土師器坏	(10.9)	—	—	ABJ	橙色	C	15%	
3	土師器坏	(11.4)	—	—	ABJ	明赤褐色	B	20%	
4	土師器坏	(12.8)	—	—	ABDHJM	橙色	C	20%	
5	土師器坏	(12.5)	—	—	ABEJ	灰白色	A	20%	
6	土師器鉢	(19.8)	—	—	ABCHIM	暗赤褐色	A	10%	
7	土師器甕	21.4	—	—	ABKL	にぶい褐色	A	20%	
8	土師器甕	21.8	38.2	3.5	ABHJK	にぶい橙色	A	75%	
9	土師器甕	—	—	(10.0)	ABDHKM	にぶい黄橙色	B	10%	
10	須恵器甕	—	—	—	ABCI	灰色	A	胴部	
11	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDGJMN	にぶい黄橙色	—	胴部	
12	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDGJMN	にぶい黄橙色	—	口縁部	
13	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDHJM	にぶい橙色	—	胴部	
14	石製品	長さ14.9	幅7.5	厚さ3.0	—	—	—	ほぼ完存	
15	打製石斧	長さ7.8	幅4.1	厚さ1.2	—	—	—	刃部欠損	

第7号住居跡（第43図、第5表）

F・G-5・6グリッドに位置する。第102～105・107・109～113・118～120・157・169号土坑や数多くのピットと重複関係にあり、それぞれに切られている。

平面形は多数の土坑・ピットによって切られてしまっているが、わずかに確認できたプランから、推定長軸5.43m、短軸5.35mのほぼ正方形プランであったと推測される。推定面積は、約29.05㎡を測る。主軸は不明である。

カマドは他遺構との重複が激しく不明であるが、可能性としては、東壁の北寄り、もしくは西壁に構築されていたと考えられる。燃焼部、袖は検出できなかった。

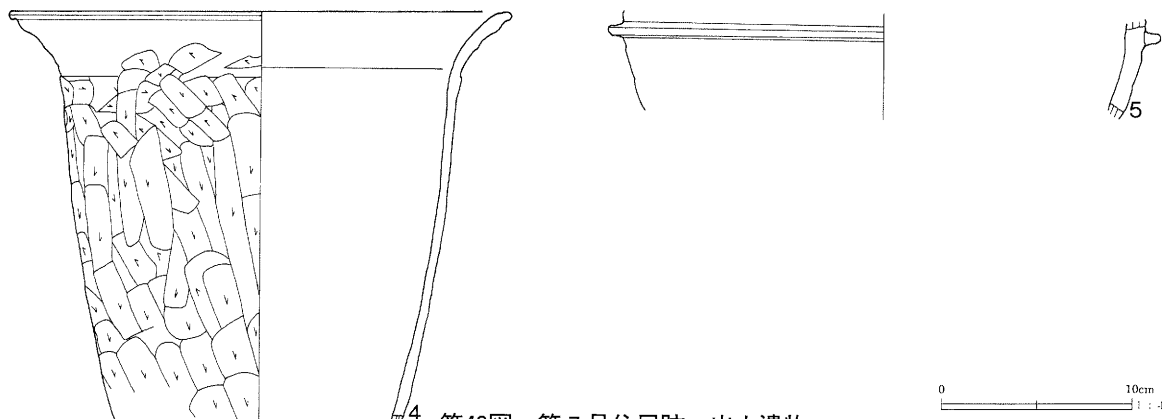
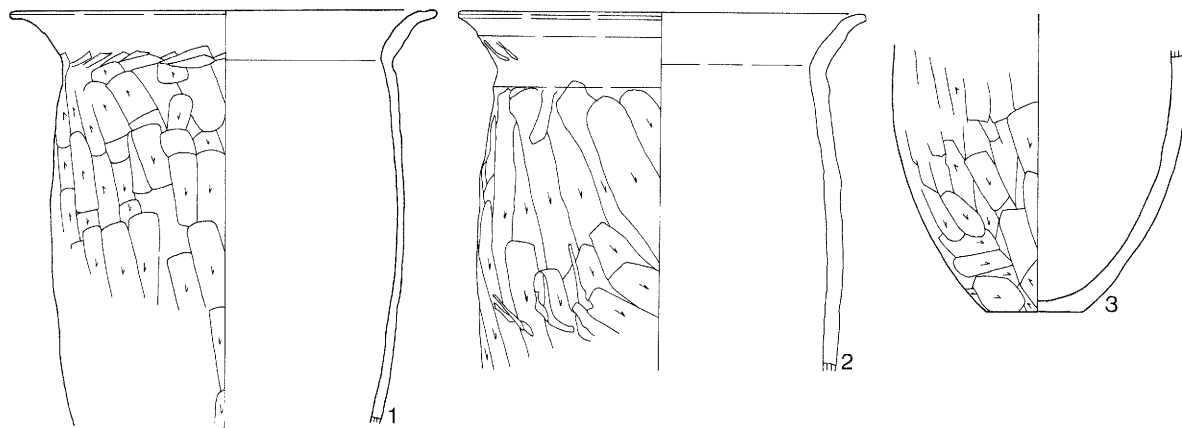
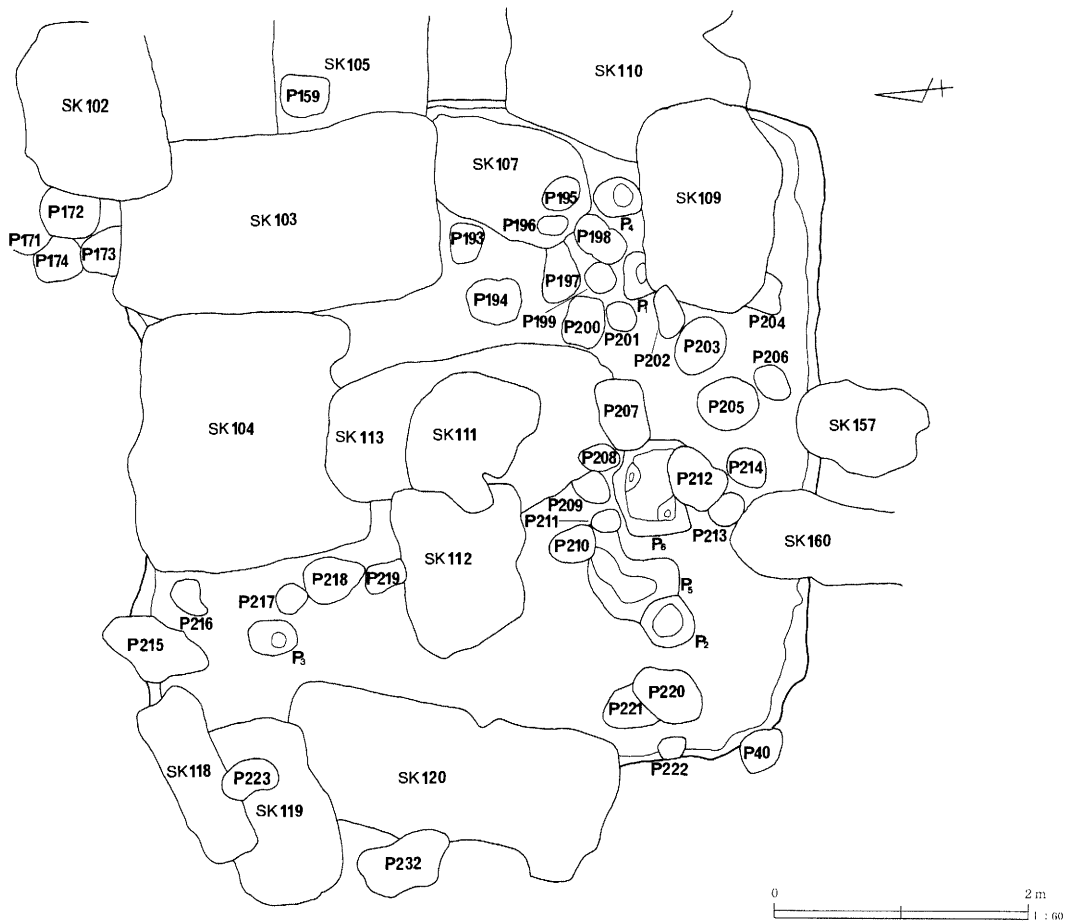
柱穴は3基確認された。規模はP1が径35cm、P2が径42×38cm、P3が径40×28cmを測る。その他ピットの規模はP4が径28×30cm、P5が推定長軸90cm、短軸45cm、P6が長軸74cm、推定短軸56cmを測る。

壁溝、貯蔵穴等は検出できなかった。

遺物の出土量は少なく、図示できたのは土師器甕3点である。甕以外の個体は確認されていない。

第5表 第7号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器甕	22.4	—	—	ABEHJKM	橙色	A	30%	混入遺物。
2	土師器甕	21.4	—	—	BEHJ	浅黄橙色	A	30%	
3	土師器甕	—	—	5.1	ABJM	にぶい褐色	C	20%	
4	土師器甕	26.4	—	—	ABCIJKM	橙色	A	25%	
5	須恵器羽釜	—	—	—	ALN	灰色	A	10%以下	



第43図 第7号住居跡・出土遺物

第8号住居跡 (第44図、第6表)

C-4・5グリッドに位置する。第9～11号土坑、第1号ピットに切られている。

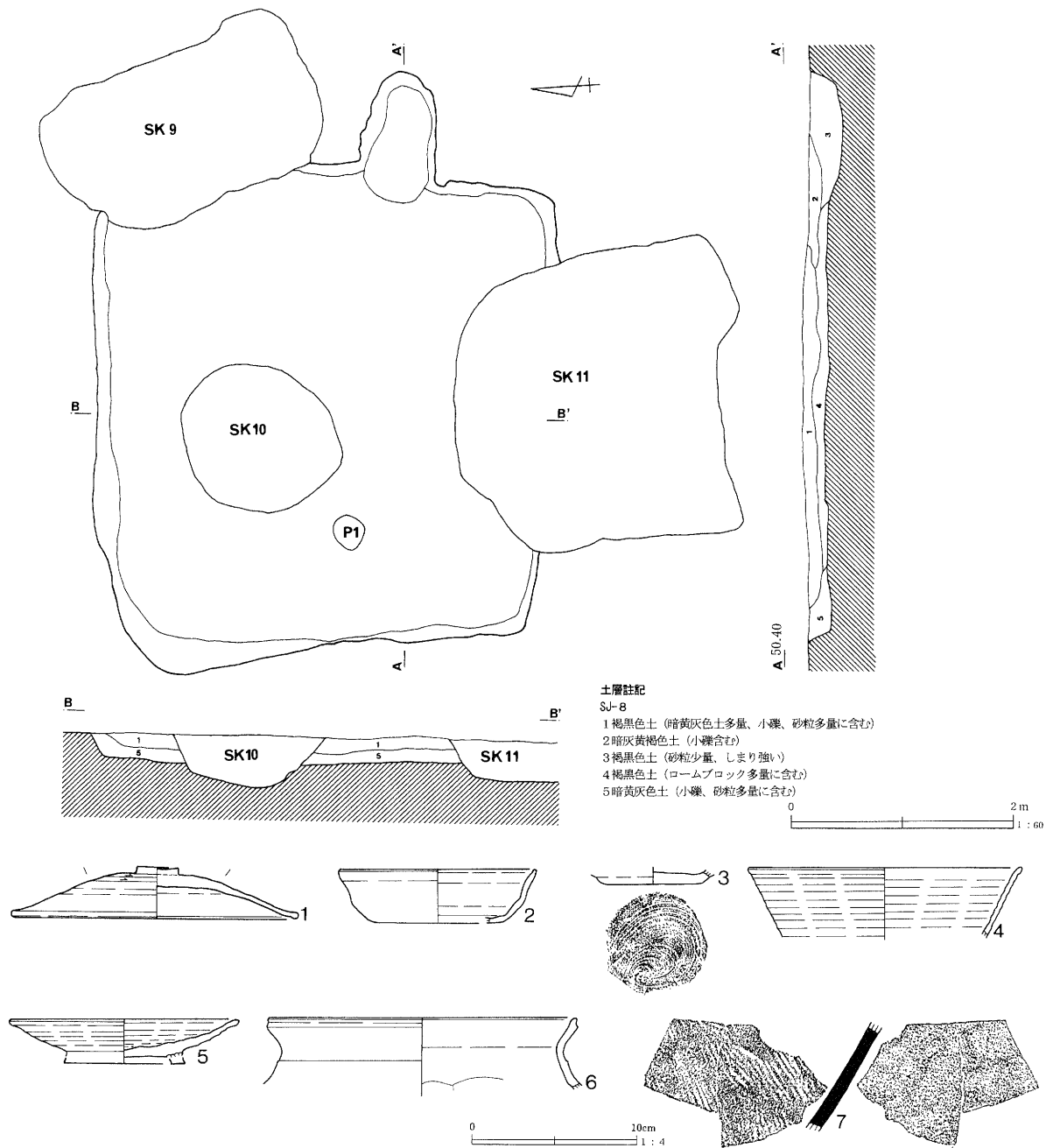
平面形は、長軸4.40m、短軸4.17mのやや長方形のプランで、面積は約13.35㎡を測る。主軸はN-92°-Eを指し、ほぼ真東であった。

床面はやや起伏があるが、深さは20cm前後を測った。覆土は自然堆積と考えられる。

カマドは東壁のやや南寄りに設けられ、煙道は幅約60cmで、長さ約80cm東を測る。燃烧部は床面から約10cm掘り窪められていた。袖は検出できなかった。

壁はやや緩い傾斜であった。

壁溝、柱穴、貯蔵穴等は検出できなかった。



第44図 第8号住居跡・出土遺物

出土遺物は住居跡全体、特にカマド内及びその周辺において、多器種にわたる土器が確認された。土師器坏・甕、須恵器蓋・坏・碗・皿・甕などが見られた。

第6表 第8号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器蓋	(17.4)	3.1	—	ABDKN	明褐色	C	40%	末野産。 高台剥落。末野産。 外面平行叩き目。南比企産。
2	土師器坏	(11.8)	3.3	(7.7)	ABI	にぶい橙色	A	10%	
3	須恵器坏	—	—	5.7	ABHK	橙色	C	20%	
4	須恵器碗	(16.4)	—	—	ABN	暗灰黄色	C	10%	
5	須恵器皿	(13.6)	—	—	ABDIM	浅黄色	C	20%	
6	土師器甕	(18.6)	—	—	AB	橙色	A	10%以下	
7	須恵器甕	—	—	—	AF	青灰色	A	胴部	

(2) 土坑

土坑は1基検出している。時期は奈良時代であり、当該期唯一の遺構であった。

第8号土坑（第45図、第7表）

I-2グリッドに位置し、北側で第23号土坑に切られ、南東において第3号倒木痕を切る。平面形は東西にやや長い長方形を呈し、長軸227cm、短軸196cmを測る。底面までの深さは40cmである。

底面はやや起伏があるものの、ほぼフラットであった。壁の立ち上がりは、やや傾斜をもち断面形状が台形を呈していた。

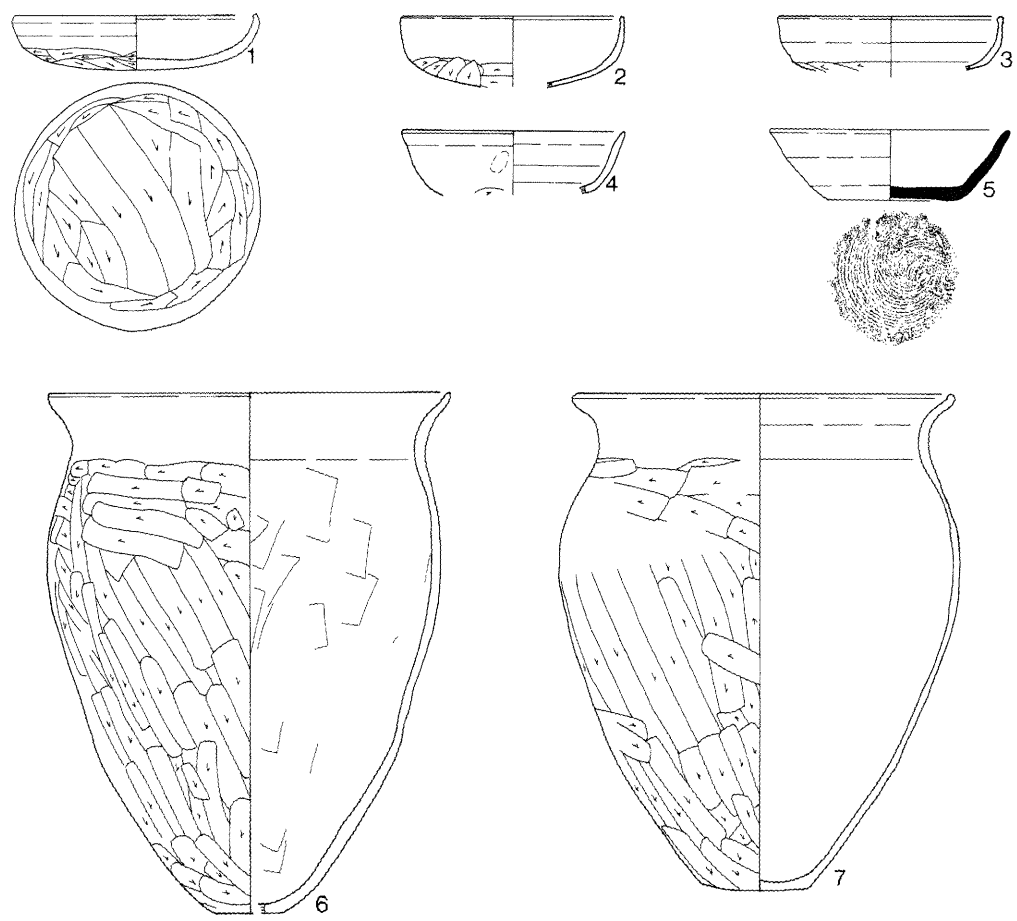
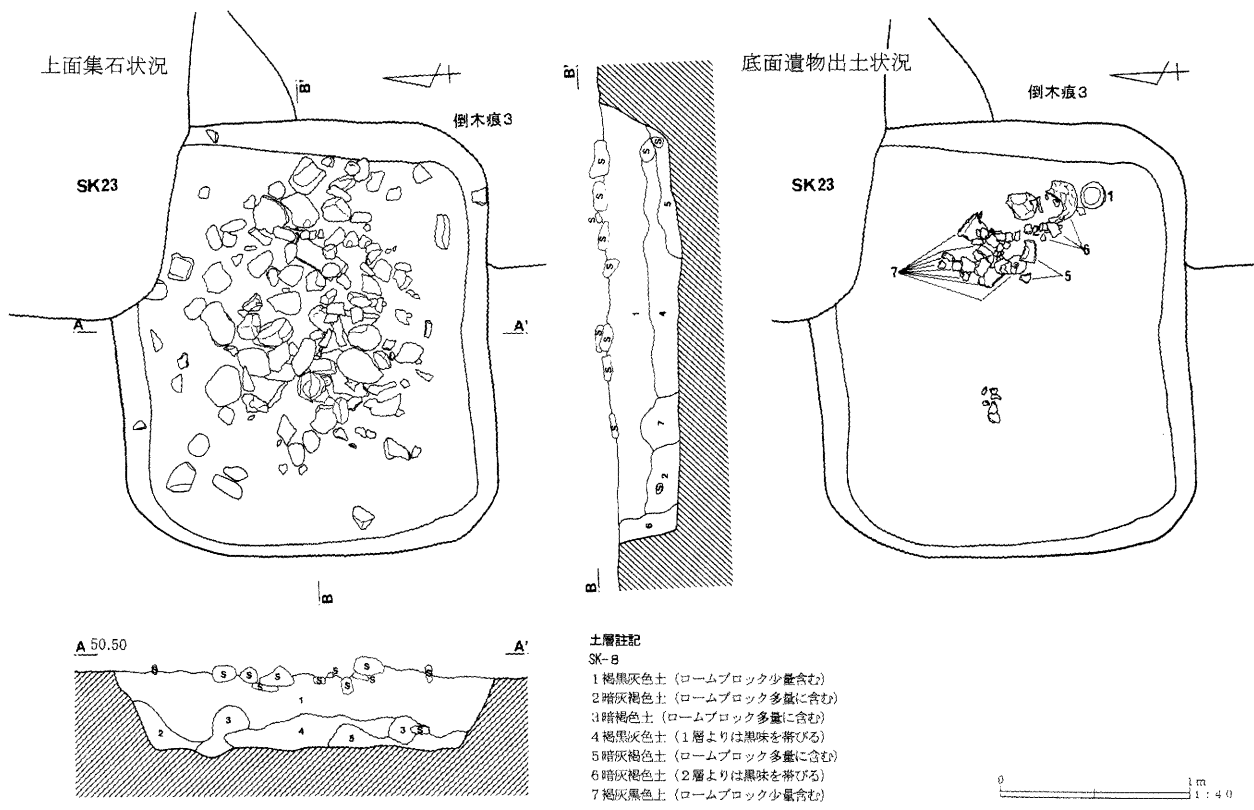
覆土上層の遺構確認面レベルでは礫が多量に散らばって検出されている。底面直上には、土師器坏・甕、須恵器坏が検出された。覆土は複雑に堆積しており、人為的に埋められたと考えられる。

出土遺物は土師器坏4個体、須恵器坏1個体、土師器甕2個体などである。出土位置はいずれも東側にまとまっており、土師器坏3点を除くと比較的良好な状態であった。

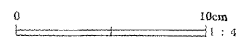
本遺構は埋土の状態、土器の出土状態や器種構成から墓の可能性が考えられる。

第7表 第8号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器坏	12.8	2.9	—	AIJ	灰褐色	A	100%	体部外面火だすき。末野産。
2	土師器坏	(11.6)	—	—	ABCIJM	にぶい黄褐色	A	20%	
3	土師器坏	(11.6)	—	—	ABCIJM	にぶい褐色	A	10%	
4	土師器坏	(11.8)	—	—	ABJKM	明赤褐色	A	10%	
5	須恵器坏	12.8	3.7	7.0	ABKLN	灰色	B	80%	
6	土師器甕	21.2	27.6	3.6	ABEHJKM	橙色	A	70%	
7	土師器甕	20.0	26.5	5.5	ABCIKM	橙色	A	80%	

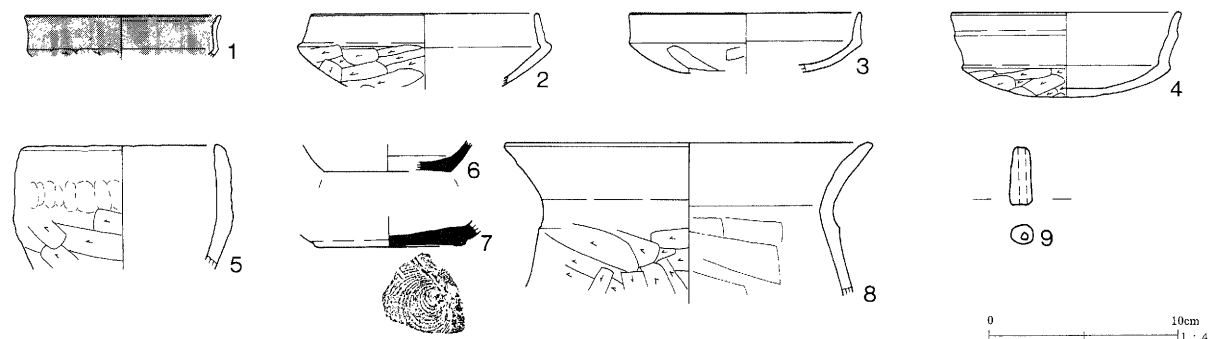


第45図 第8号土坑・出土遺物



(3) 遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物、遺構外グリッド出土遺物及び表採遺物のうち、当該期の遺物を掲載する(第46図、第8表)。遺物の種類としては、古墳時代後期の土師器坏・椀・甕、平安時代の須恵器坏などが見られた。



第46図 遺構外出土遺物(9)

第8表 遺構外出土遺物(9)観察表

番号	器種	出土位置	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器坏	G-2	(10.3)	—	—	ABKN	にぶい橙色	A	10%以下	内外面赤彩。
2	土師器坏	G-6	(12.0)	—	—	ABHM	明赤褐色	A	15%	
3	土師器坏	E-2	(12.4)	—	—	AHIK	橙色	C	15%	
4	土師器坏	一括	(12.2)	4.5	—	AHJK	にぶい黄橙色	B	50%	内外面黒色処理。
5	土師器鉢	C-1	10.4	—	—	ABIJ	にぶい褐色	A	15%	
6	須恵器坏	B-2	—	—	(6.8)	AF	灰色	A	10%	南比企産。
7	須恵器坏	B-1	—	—	(8.0)	ABFK	灰色	A	10%	南比企産。
8	土師器甕	一括	(19.3)	—	—	AFHJ	橙色	A	10%	
9	土錘	G-6	長さ3.1	幅1.2	厚さ1.0	—	にぶい橙色	—	半欠損	重さ3.5g。

3 中世・近世

(1) 土坑・ピット

本遺跡では土坑は184基、ピットは328基が検出された。土坑の分布は調査区のほぼ全域に及ぶが、南北はEグリッドからIグリッドまで、東西は4グリッドから調査区域外までが特に集中する地点である。一方、ピットの分布もほぼ例外なく土坑の分布と一致し、両者の関係をうかがわせる。

土坑間、ピット間、または土坑とピットで互いに複雑な重複関係を見せ、そこに規則性を認めることはできない。土坑の平面プランは長方形、楕円形、円形、不整形に大別できるが、長方形プランを呈するものが圧倒的に多い。長方形の土坑は長軸が大きくぶれることなく、南北か東西のどちらかに向く場合がほとんどである。分布の規則性は認められないが、主軸の規則性を指摘することはできるだろう。

土坑の覆土を見てみると、ロームブロックを含む1) 単一層ないしは2) 複雑に堆積する複数層、の二者が認められ、いずれの場合においても自然堆積ではなく、人為的に埋められていることを示している。また切り合い関係を有する土坑間では覆土が近似しており、重複を見せた前後の土坑覆土に相違はほとんど見られず、そこに土坑の短期間の形成を読むことができる。機能の特定はできないが、以上の事実を顧慮するなら、当遺跡で確認された土坑の多くは、比較的短期間に形成され、人為的に埋め戻されたものということができる。

土坑の時期は、出土遺物の希少性ゆえにそのすべてを把握することは不可能であったが、少数の出土遺物や他時期の遺構との切り合い関係を見る限りでは中世のものと判断される。直接遺物を伴わない土坑がほとんどであるが、覆土の観察と土坑の群集性からは他の土坑も該期のものと判断されよう。

当遺跡で検出された土坑のうち、第19号土坑と第192号土坑からは人骨が検出され、墓坑という機能を推定できた。以下ではこの2基を個別に取り上げたい。

第19号土坑 (第63図)

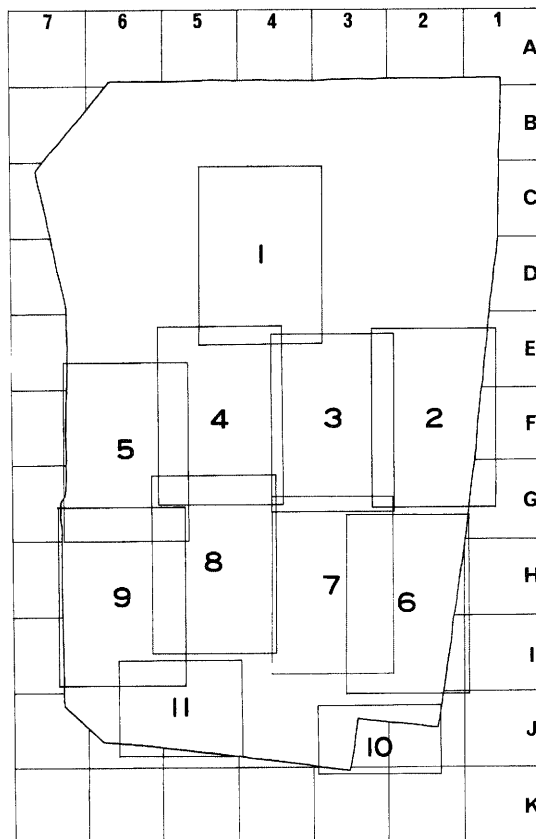
G-2グリッドに位置し、土坑群の分布とは離れる。平面形は隅丸方形を呈し、長軸95cm、短軸41cm、深さ15cmを測る。土坑長軸はほぼ真北を向く。土坑底面は中央が緩やかに低く、壁はほぼ直立して立ち上がる。

人骨は頭骨・頸骨・大腿骨の一部が残存していた。検出状況からは頭位は北で、顔は西を向いた屈葬であったことがわかる。

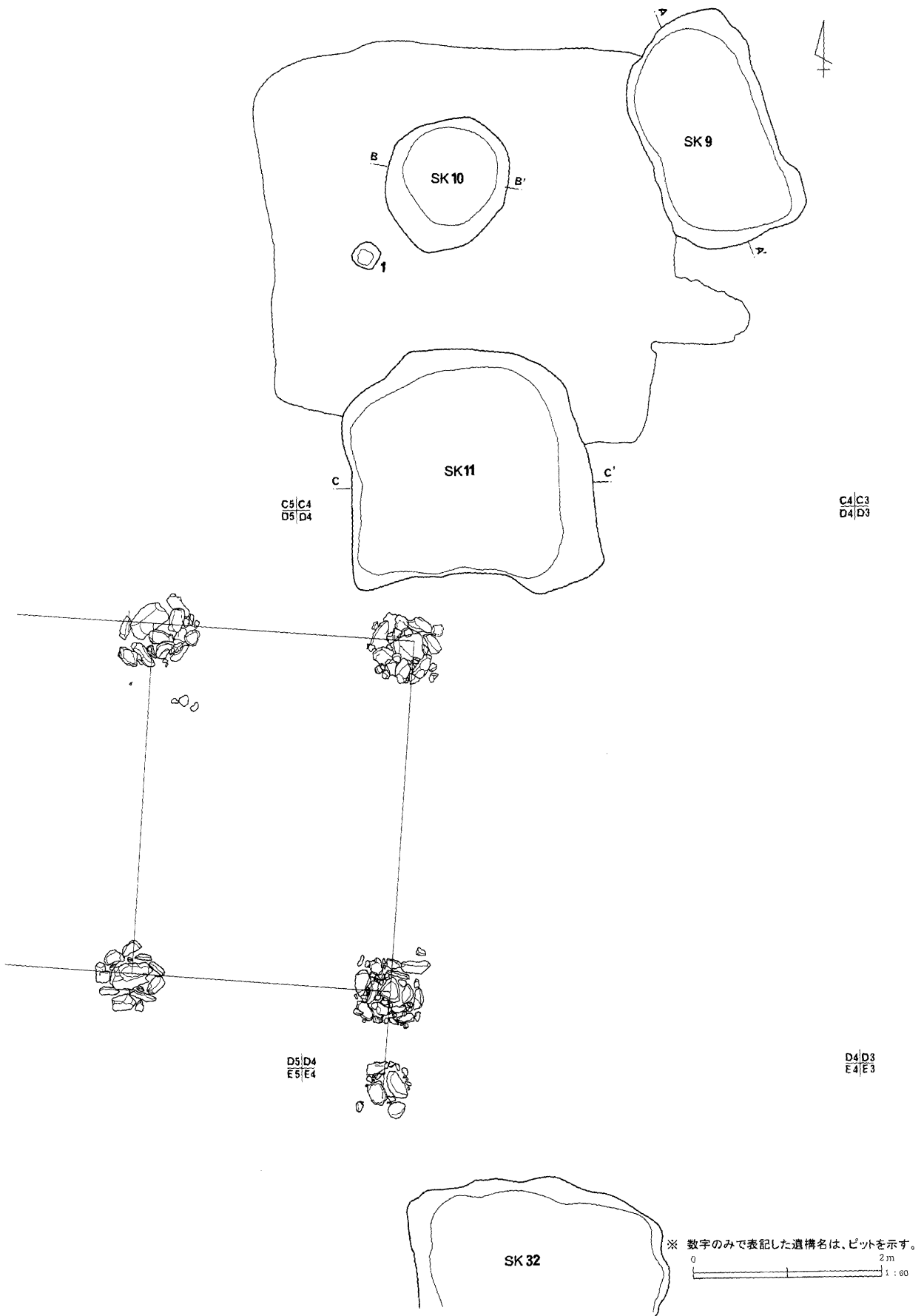
第192号土坑 (第63図)

I-6・7グリッドに位置し、土坑群の分布とはやはりやや離れている。土坑長軸はほぼ真北を向き、平面形は方形に近く、長軸93cm、短軸58cm、深さ18cmを測る。底面はフラットで壁もほぼ直立する。

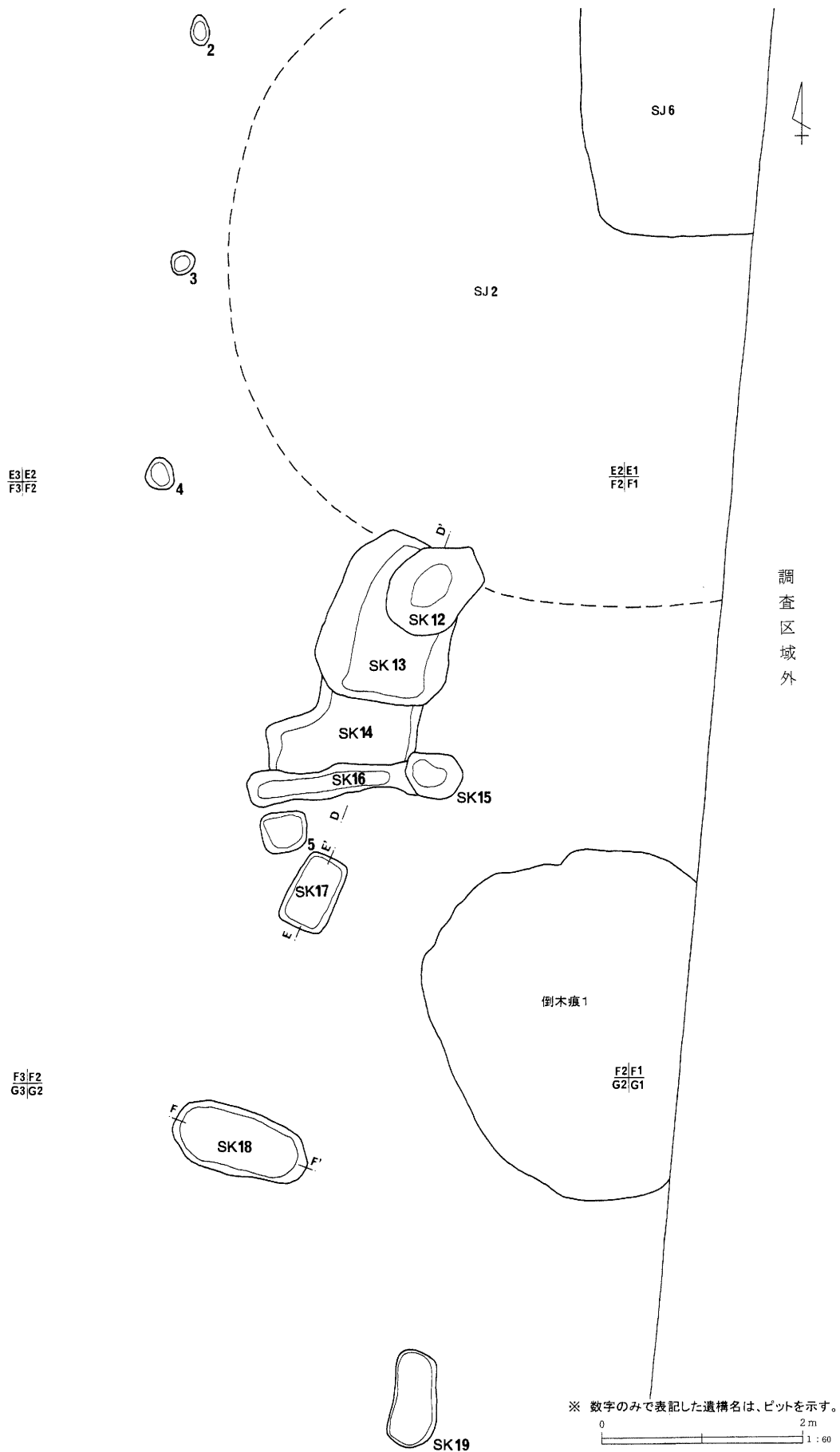
人骨は頭骨の一部が残存するのみである。検出状況からは頭位は北、顔は西向きであることがわかる。底面近くからは縄文時代中期後半加曾利E式の深鉢破片が出土したが混入と思われる。



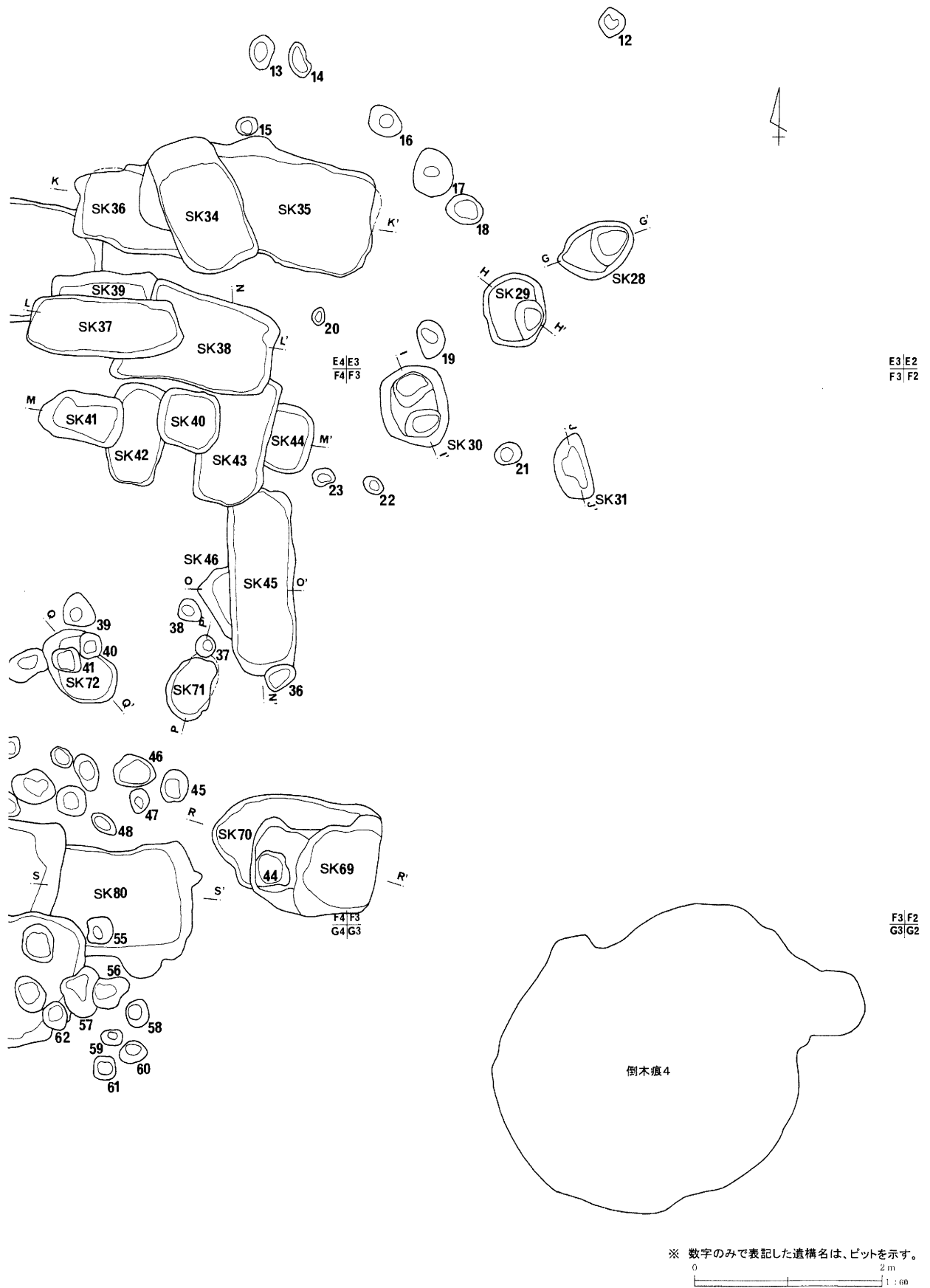
第47図 土坑・ピット全体図区割図



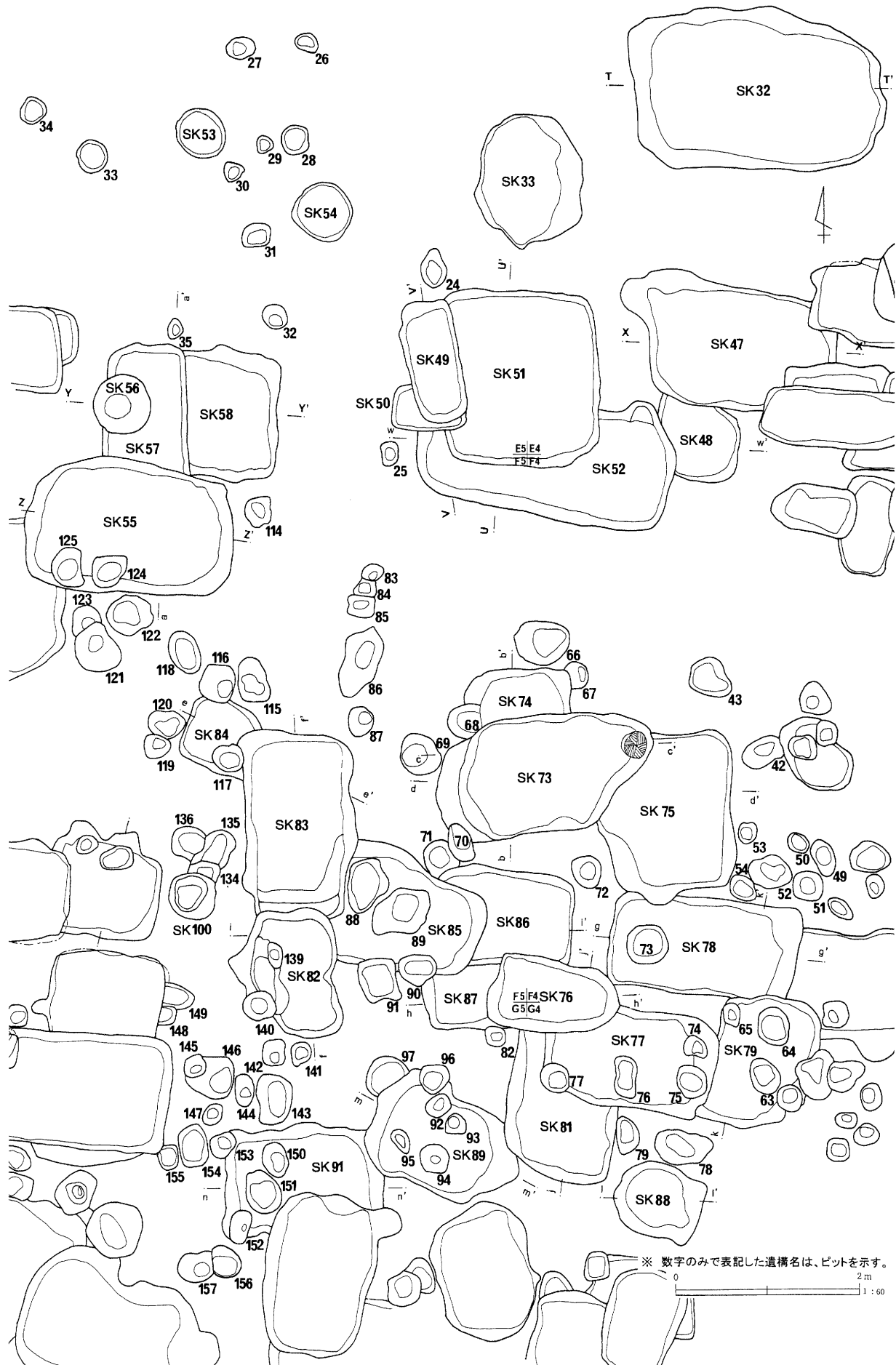
第48図 土坑・ピット全体図(1)



第49図 土坑・ピット全体図(2)

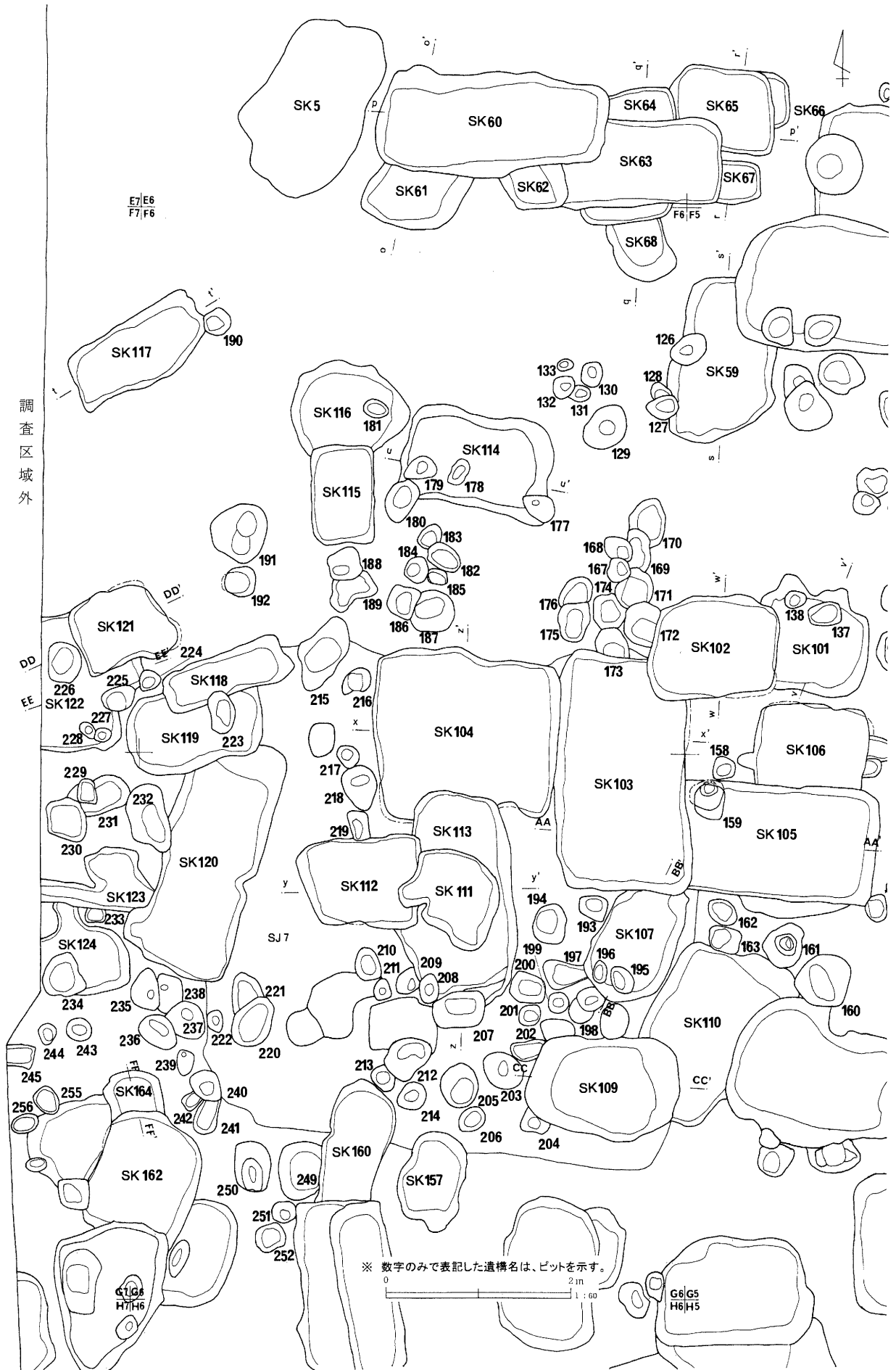


第50図 土坑・ピット全体図(3)

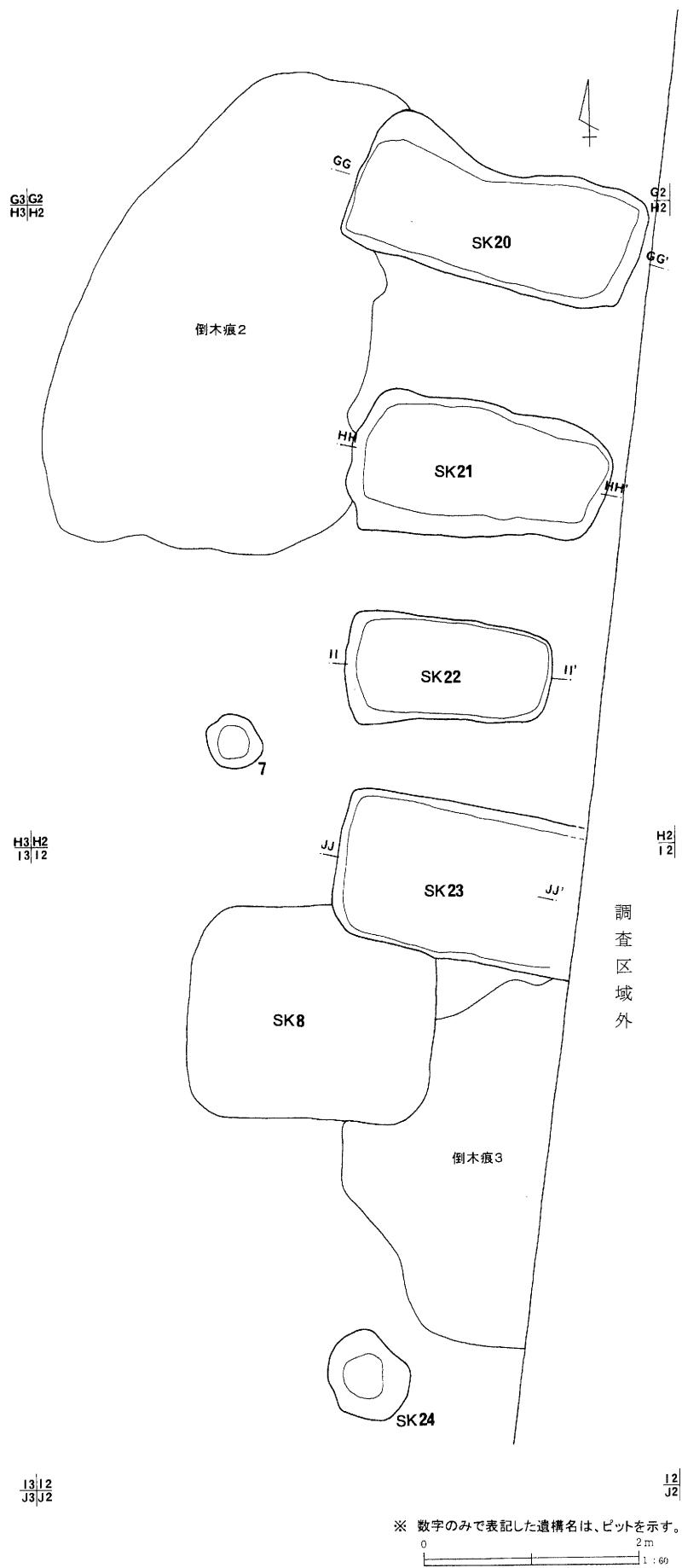


第51図 土坑・ピット全体図(4)

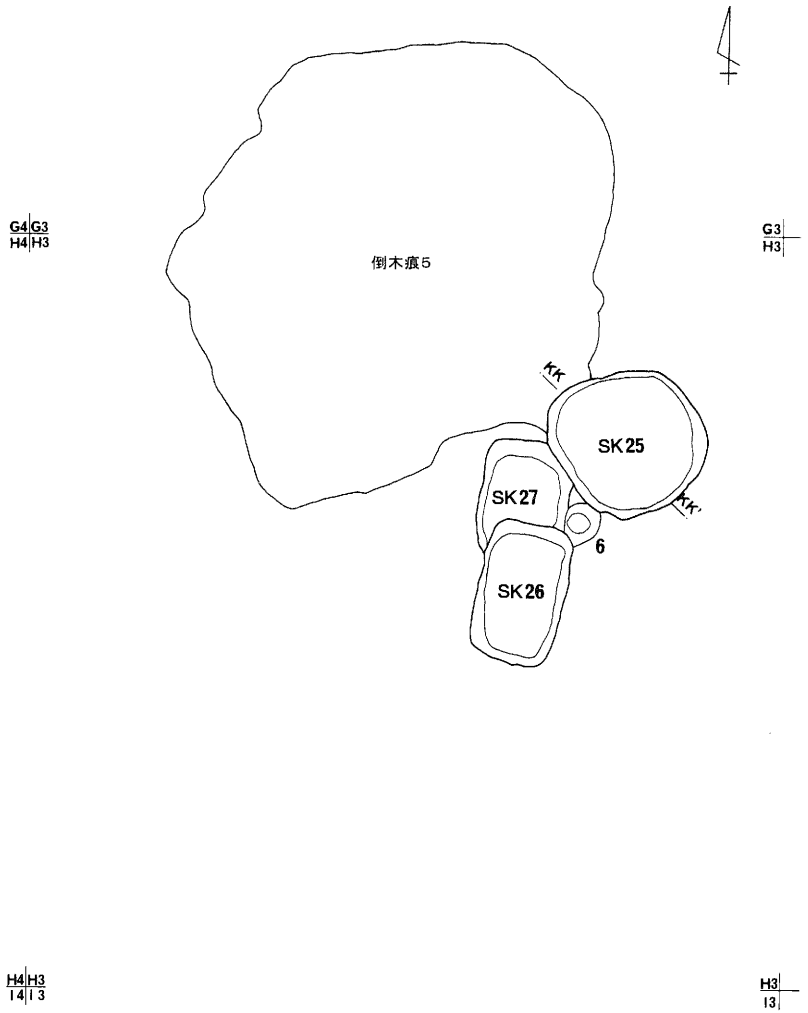
調査区域外



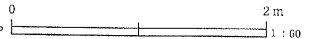
第52図 土坑・ピット全体図(5)



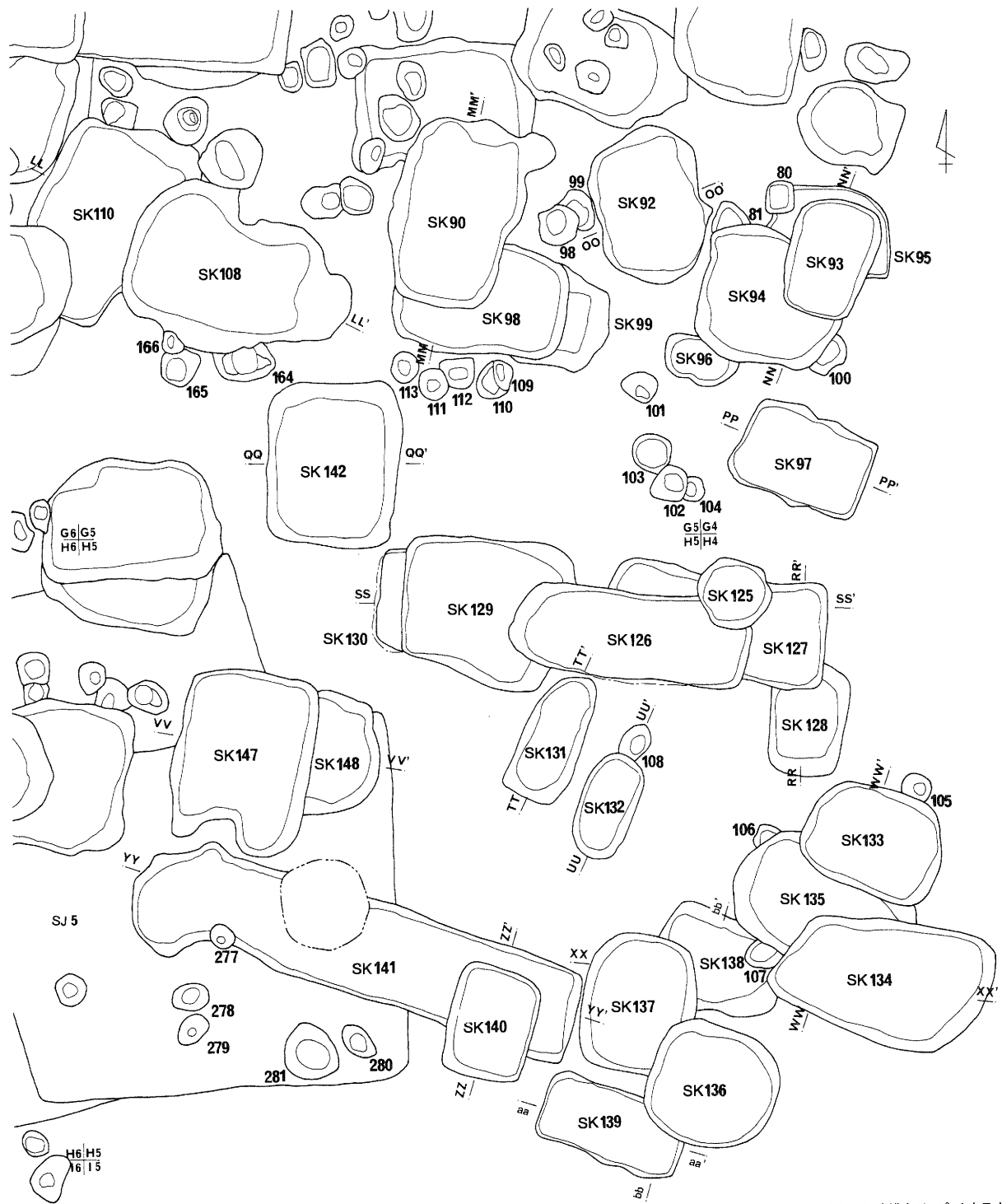
第53図 土坑・ピット全体図(6)



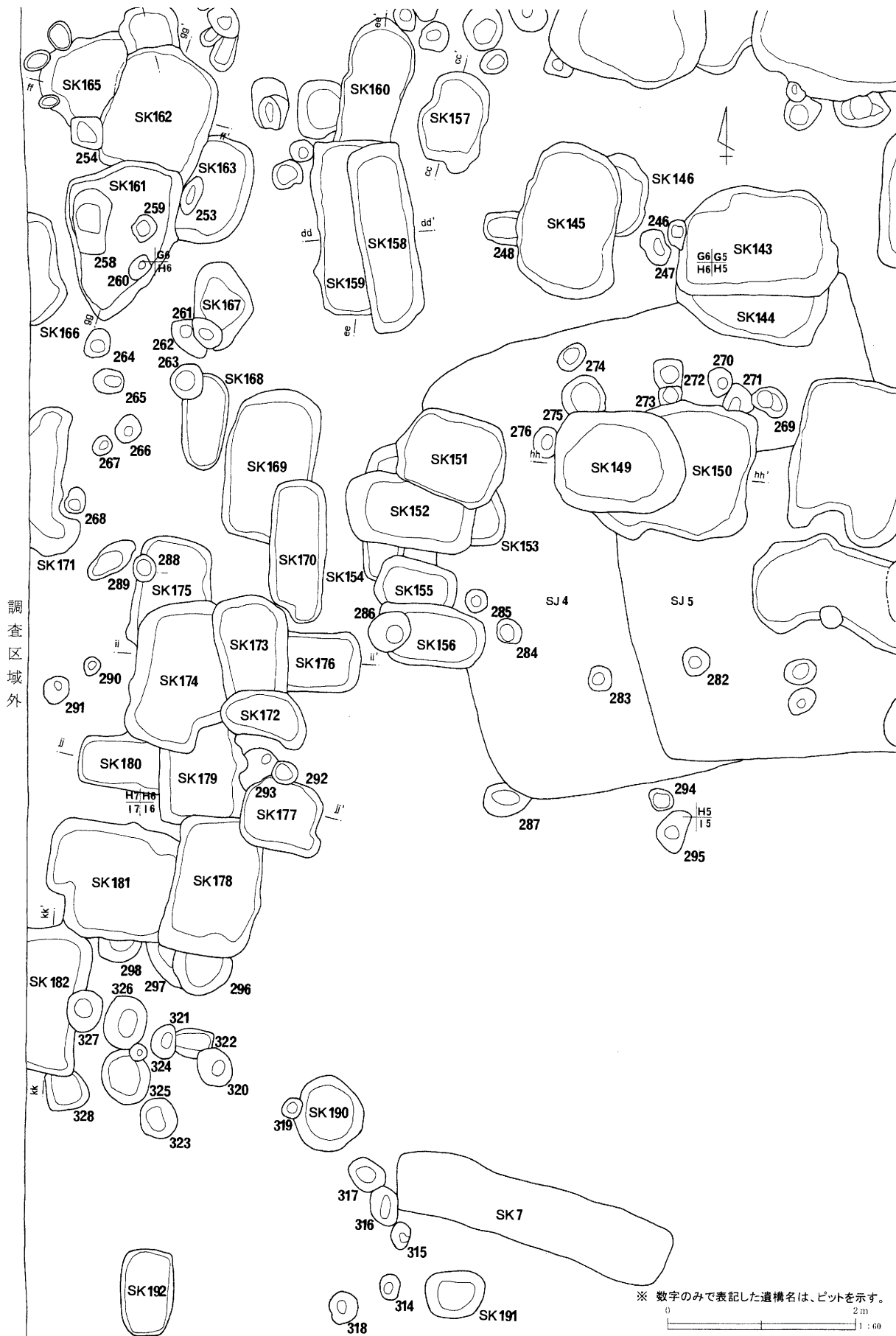
※ 数字のみで表記した遺構名は、ピットを示す。



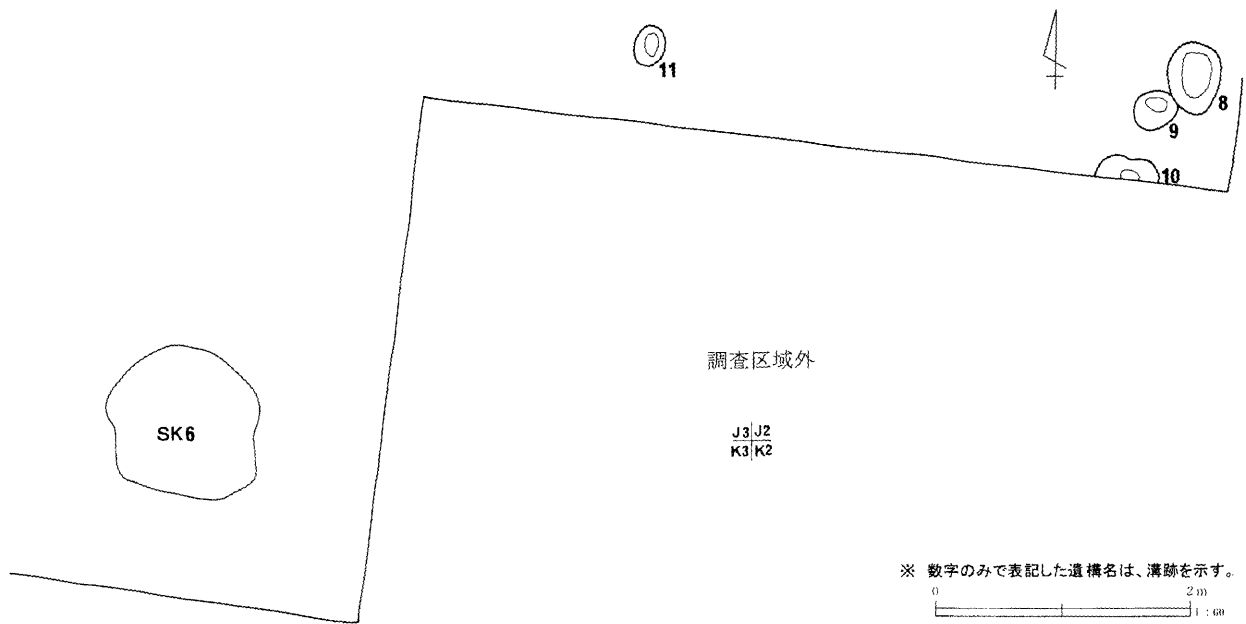
第54図 土坑・ピット全体図(7)



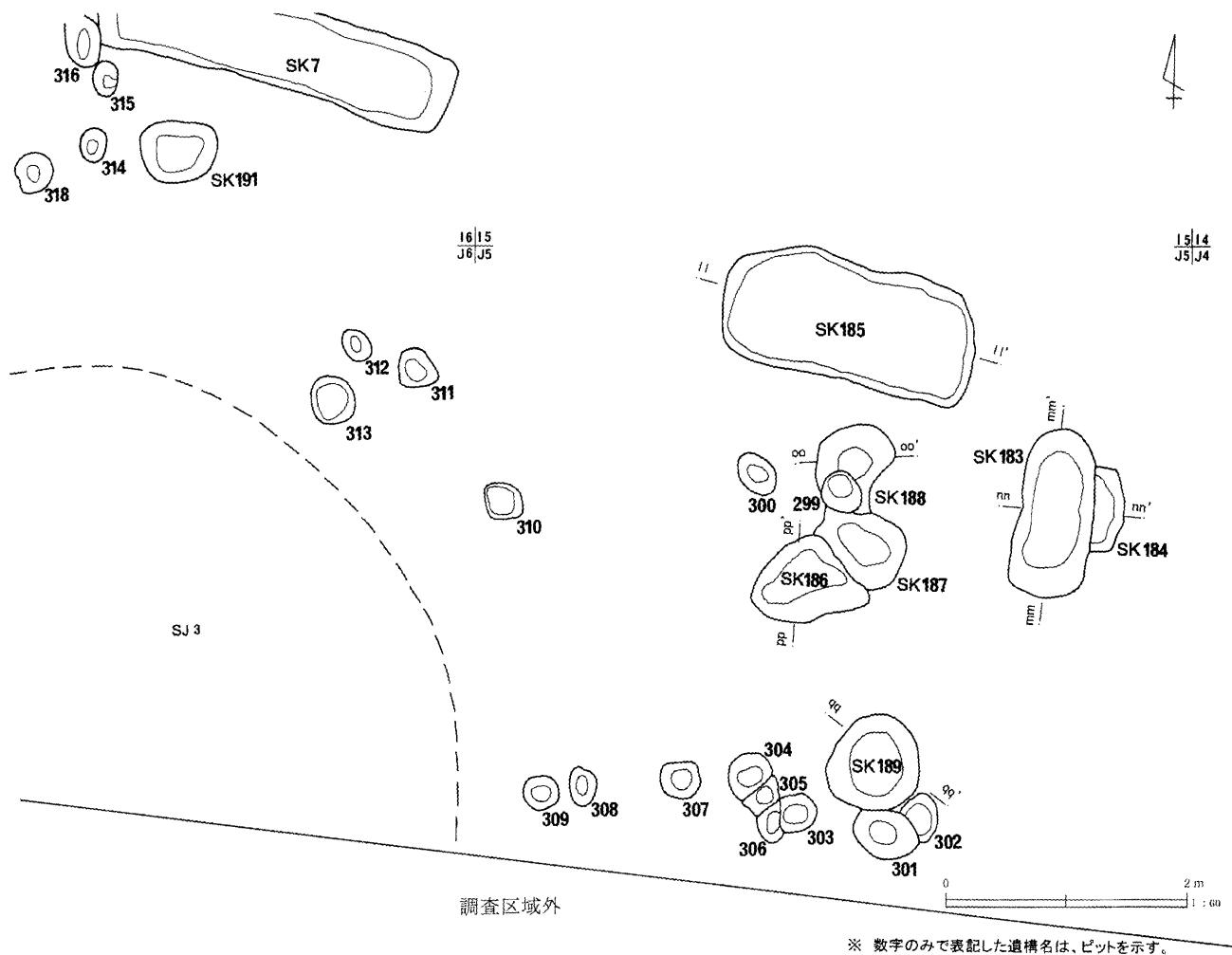
第55図 土坑・ピット全体図(8)



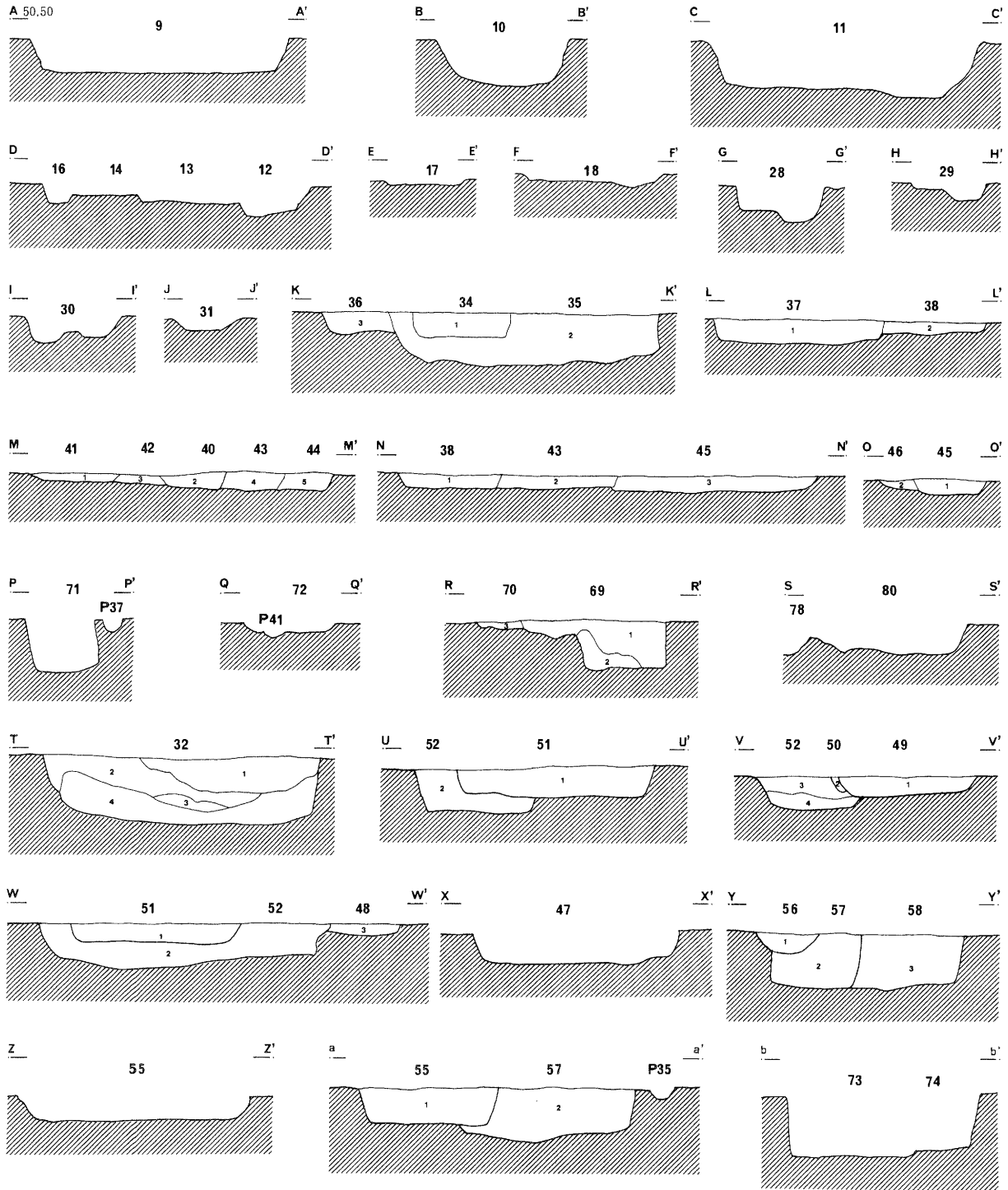
第56図 土坑・ピット全体図(9)



第57図 土坑・ピット全体図(10)



第58図 土坑・ピット全体図(11)



土層註記
SK-34・35・36

- 1 暗褐色土 (ローム粒子含む)
- 2 黒褐色土 (ロームブロック・粒子含む)
- 3 暗褐色土 (ローム粒子多量に含む)

SK-37・38

- 1 暗褐色土 (ロームブロック・粒子多量に含む)
- 2 暗褐色土 (ロームブロック・粒子少量含む)

SK40~44

- 1 暗褐色土 (ローム粒子含む)
- 2 暗褐色土 (ロームブロックを多量に、粒子を少量含む)
- 3 暗褐色土 (ローム粒子含む)
- 4 暗褐色土 (ロームブロック・粒子含む)
- 5 暗褐色土 (ローム粒子含む)

SK-38・43・45

- 1 暗褐色土 (ローム粒子含む)
- 2 黒褐色土 (ロームブロック・粒子含む)
- 3 暗褐色土 (ローム粒子多量に含む)

SK45・46

- 1 暗褐色土 (ロームブロック・粒子含む)
- 2 暗褐色土 (ロームブロック・粒子少量含む)

SK-69・70

- 1 黒褐色土 (ローム粒子含む)
- 2 黄褐色土 (ロームブロックを含む)
- 3 暗褐色土

SK-32

- 1 暗褐色土 (ローム粒子少量含む)
- 2 暗褐色土 (ロームブロック・粒子多量に含む)
- 3 暗褐色土 (1より黒い)
- 4 黒褐色土 (ロームブロック・粒子、炭化物少量含む)

SK-51・52

- 1 暗褐色土 (ロームブロック少量、褐色土含む)
- 2 黒色土 (ロームブロック有機質、暗黄褐色土含む)

SK-49・50・52

- 1 暗灰褐色土
- 2 暗灰褐色土 (ロームブロック含む)
- 3 暗黄褐色土
- 4 黒褐色土

SK-48・51・52

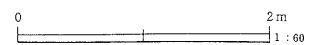
- 1 暗褐色土 (ローム粒子含む)
- 2 暗褐色土 (ロームブロック・粒子含む)
- 3 黒褐色土 (ロームブロック含む)

SK-56・57・58

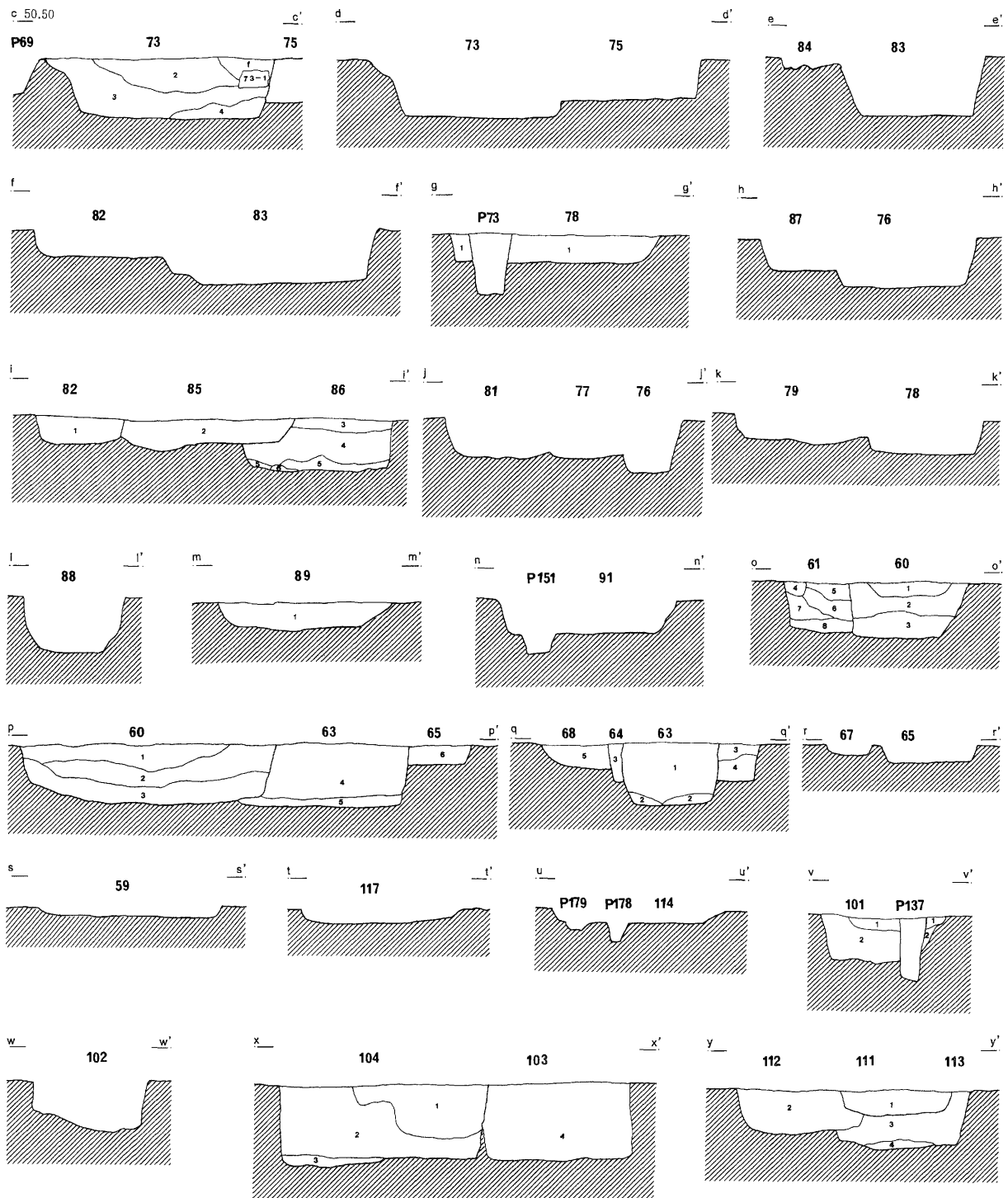
- 1 黒褐色土 (ローム粒子含む)
- 2 黒褐色土 (ロームブロック・粒子含む)
- 3 黒褐色土 (ローム粒子を大量に含む)

SK-55・57

- 1 黒褐色土 (ロームブロック・粒子多量に含む)
- 2 暗褐色土 (ロームブロック・粒子多量に含む)



第59図 土坑・ピット断面図(1)



土層註記

SK-73

- 1 黒褐色土 (ローム粒子少量含む)
- 2 暗褐色土 (ロームブロック・粒子含む)
- 3 暗褐色土 (ローム粒子含む)
- 4 黒褐色土 (ローム粒子少量含む)

SK-78

- 1 暗褐色土 (ロームブロック・粒子含む)

SK-82-85-86

- 1 暗褐色土 (ロームブロック・粒子含む)
- 2 暗褐色土 (ロームブロック・粒子多量に含む)
- 3 暗褐色土 (ローム粒子含む)
- 4 暗褐色土 (ロームブロック粒子多量に含む)
- 5 暗褐色土 (ローム粒子、焼土、炭化物多量に含む)
- 6 焼土層

SK-89

- 1 暗褐色土 (ロームブロック含む)

SK-60-61

- 1 黒褐色土 (ロームブロック少量含む)
- 2 暗褐色土 (ロームブロック少量含む)
- 3 暗灰褐色土 (ロームブロック少量含む)
- 4 暗灰褐色土 (ロームブロック少量含む)
- 5 褐色土
- 6 暗灰褐色土
- 7 暗黄褐色土
- 8 暗黄灰色砂質土

SK-60-63-65

- 1 黒褐色土 (ロームブロック少量含む)
- 2 暗褐色土 (ロームブロック少量含む)

- 3 暗灰褐色土 (ロームブロック少量含む)
- 4 暗褐色土 (ロームブロック少量含む)
- 5 黒褐色土 (やや粘性強い)
- 6 黒褐色土

SK-63-64-68

- 1 暗褐色土 (ロームブロック多量に含む)
- 2 黒褐色土 (粘性強い)
- 3 暗褐色土 (ロームブロック少量含む)
- 4 暗褐色土 (ロームブロック多量に含む)
- 5 暗褐色土 (ロームブロック多量に含む)

SK-101

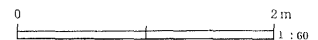
- 1 暗褐色土 (黄褐色土少量含む)
- 2 暗褐色土 (ロームブロック、粒子少量含む)

SK-103-104

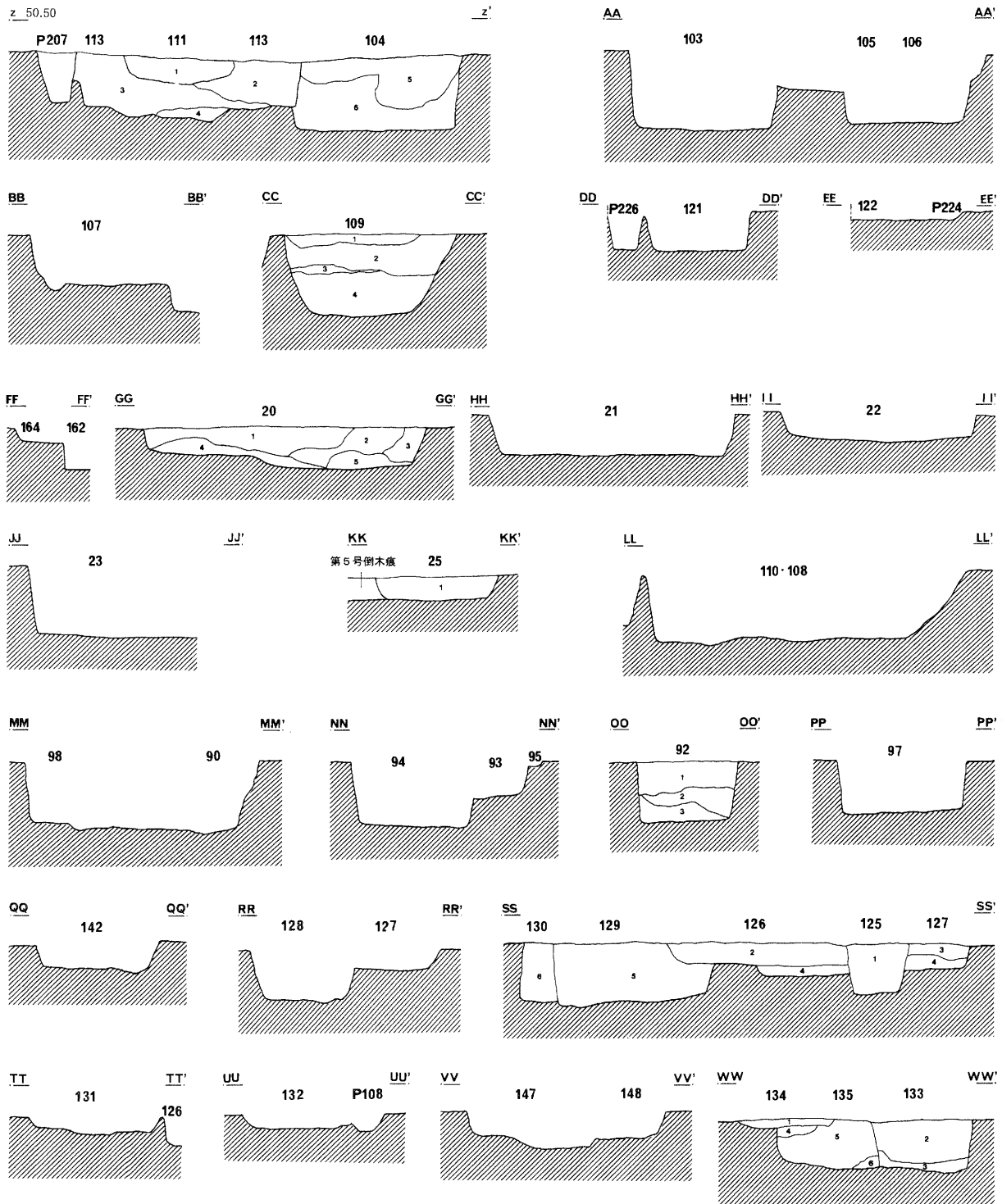
- 1 黄褐色土 (ロームブロック多量に含む)
- 2 暗褐色土 (ロームブロック少量、ローム粒子多量に含む)
- 3 暗褐色土 (ロームブロック多量に含む)
- 4 暗褐色土 (ロームブロック・粒子含む)

SK-111-112-113

- 1 暗褐色土 (ロームブロック粒子少量含む)
- 2 暗褐色土 (ロームブロック多量、粒子少量含む)
- 3 暗褐色土 (ロームブロック、粒子多量に含む)
- 4 暗褐色土 (ロームブロック、粒子多量に含む)



第60図 土坑・ピット断面図(2)



土層註記

SK-104-111-113

- 1 暗褐色土 (ローム粒子少量含む)
- 2 暗褐色土 (ロームブロック・粒子含む)
- 3 暗褐色土 (ロームブロック・粒子多量に含む)
- 4 暗褐色土 (ロームブロック多量に含む)
- 5 黄褐色土 (ロームブロック・粒子多量に含む)
- 6 黄褐色土 (ロームブロック少量、ローム粒子多量に含む)

SK-109

- 1 暗褐色土 (ローム粒子含む)
- 2 暗褐色土 (ロームブロック・粒子多量に含む)
- 3 暗褐色土 (礫多量に含む)
- 4 暗褐色土 (ロームブロック少量、ローム粒子多量に含む)

SK-20

- 1 黒灰褐色土
- 2 黒灰褐色土 (ロームブロック含む)
- 3 黒灰褐色土
- 4 褐黒色土 (ロームブロック含む)
- 5 褐黒色土 (灰黄色土、ロームブロック含む)

SK-25

- 1 暗黄灰色土 (ロームブロック)

SK-92

- 1 暗褐色土 (ロームブロック少量、ローム粒子多量に含む)
- 2 暗褐色土 (ロームブロック多量に含む)
- 3 黄褐色土

SK-125-126-127-129-130

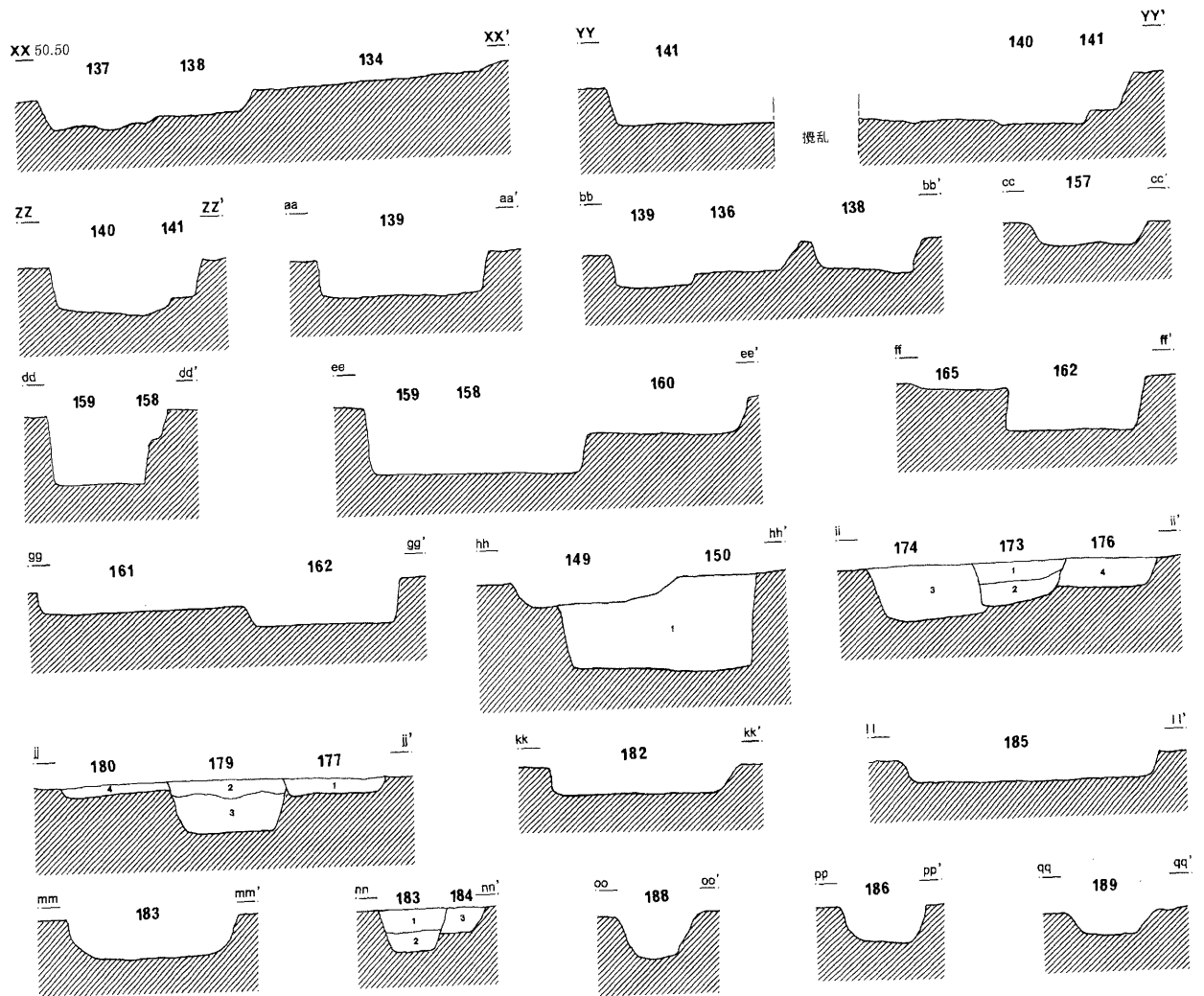
- 1 褐色土 (ロームブロック多量に含む)
- 2 黒褐色土 (ロームブロック含む)
- 3 暗褐色土 (ロームブロック含む)
- 4 黒褐色土 (ロームブロック多量に含む)
- 5 暗灰褐色土 (ロームブロック多量に含む)
- 6 黒褐色土 (ロームブロック多量に含む)

SK-133-134-135

- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土 (ロームブロック含む)
- 3 暗灰褐色土
- 4 褐色土 (ロームブロック含む)
- 5 黒褐色土 (ロームブロック含む)
- 6 暗灰褐色土



第61図 土坑・ピット断面図(3)



土層註記

SK-150

1 暗褐色土

SK-173-174-176

1 灰褐色土 (黒褐色土ブロック、ロームブロック含む)

2 暗灰褐色土 (ロームブロック含む)

3 暗褐色土 (ロームブロック含む)

4 黒褐色土 (ロームブロック含む)

SK-177-179-180

1 黒褐色土 (ロームブロック含む)

2 暗灰褐色土 (ロームブロック含む)

3 暗褐色土 (ロームブロック含む)

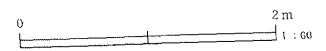
4 褐色土 (ロームブロック含む)

SK-183-184

1 黒褐色土 (ロームブロック含む)

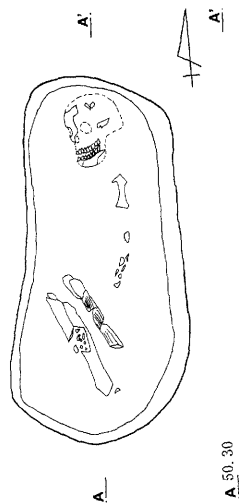
2 暗褐色土 (ロームブロック含む)

3 暗灰褐色土 (ロームブロック含む)

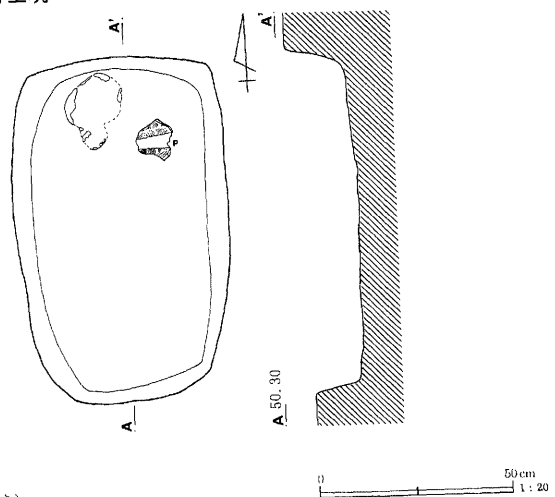


第62図 土坑・ピット断面図(4)

第19号土坑



第192号土坑



土層註記

SK-19

1 暗褐色土 (ローム粒子多量に含む)

第63図 第19号・192号土坑

第9表 土坑一覽表

番号	位置(グリッド)	プラン	長軸 × 短軸 × 深さ(m)	出土遺物	時 期	重複関係	備考
9	C-4	長方形	250 × 132 × 30			SJ8	
10	C-4	円形	152 × 130 × 45			SJ8	
11	C・D-4	不整形	258 × 240 × 54			SJ8	
12	F-2	楕円形	107 × 74 × 30			SK13, SJ1	
13	F-2	隅丸方形	170 × 124 × 18			SK12・13, SJ1	
14	F-2	不整形	150 × 63 × 10			SK13・16, P15	
15	F-2	隅丸方形	57 × 43 × 一				
16	F-2	長方形	160 × 26 × 18			SK14・15	
17	F-2	長方形	78 × 47 × 6				
18	G-2	楕円形	138 × 60 × 10				
19	G-2	楕円形	95 × 41 × 15	人骨			
20	G・H-2	不整形	273 × 102 × 40			風倒木2	
21	H-2	不整形	241 × 108 × 40			風倒木2	
22	H-2	長方形	192 × 90 × 24	縄文土器			
23	H・I-2	長方形	一 × 143 × 65			SK8	
24	I-2	楕円形	86 × 64 × 一				
25	H-3	円形	116 × 114 × 一			SK27・P6, 風倒木5	
26	H-3	長方形	110 × 69 × 一			SK27, P6	
27	H-3	長方形	(90) × 69 × 一			SK25・26, P6	
28	E-3	楕円形	86 × 58 × 34	縄文土器			
29	E-3	円形	80 × 66 × 17				
30	F-3	長方形	88 × 72 × 24				
31	F-3	楕円形	70 × 36 × 12	縄文土器			
32	E-4	不整形	270 × (130) × 63	縄文土器			
33	E-4・5	不整形	150 × 110 × 一				
34	E-4	長方形	150 × 80 × 24			SK35・36	
35	E-4・F-2	長方形	252 × 116 × 53			SK34・36	
36	E-4	長方形	一 × 74 × 22			SK34・35	
37	E・F-4	長方形	160 × 63 × 24			SK38・39・47	
38	E・F-4	長方形	(150) × 98 × 15			SK37・39・43	
39	E-4	長方形	110 × (28) × 一			SK37・38・47	
40	F-4	正方形	68 × 62 × 17			SK42・43	
41	F-4	楕円形	90 × 50 × 8			SK42	
42	F-4	長方形	108 × 58 × 8			SK40・41	
43	F-4	長方形	(142) × 74 × 19			SK38・40・44・45	
44	F-4	長方形	74 × 44 × 18			SK43	
45	F-4	長方形	200 × 68 × 16			SK43・46, P36	
46	F-4	不明	(64) × (38) × 8	縄文土器		SK45	
47	E-4	不整形	(124) × (80) × 32			SK36・37・39・48	
48	E・F-4	不整形	91 × 90 × 10			SK47・52	
49	E-5	長方形	142 × 55 × 19			SK50~52	
50	E-5	長方形	80 × 50 × 14			SK49・51・52	
51	E・F-4・5	正方形	166 × 142 × 39			SK49・50・52	
52	E・F-4・5	不整形	278 × 128 × 46			SK49~51	
53	E-5	円形	52 × 52 × 一				
54	E-5	円形	68 × 64 × 一				
55	F-5	隅丸方形	228 × 146 × 34			SK57・59, P124・125	
56	E-5	円形	64 × 62 × 18			SK57	
57	E・F-5	長方形	(138) × 88 × 54			SK55・56・58	
58	E・F-5	長方形	150 × (98) × 54			SK57	
59	F-5・6	不整形	180 × 104 × 10			SK55, P126~128	
60	E-6	長方形	250 × 90 × 60			SK61~64	
61	E・F-6	長方形	98 × 64 × 48			SK60	
62	E-6	長方形	70 × 47 × 一			SK60・63	
63	E-5・6	長方形	(170) × 92 × 60			SK60・62・64・67	
64	E-6	長方形	98 × 18 × 38			SK60・63・65・68	
65	E-5・6	不整形	110 × 88 × 9			SK63・64・66	
66	E-5	長方形	60 × 20 × 一			SK65	
67	E-5	正方形	48 × 42 × 14			SK63	
68	F-6	不整形	66 × 55 × 25			SK64	
69	F-3・4	不整形	108 × 84 × 44			SK70, P44	

番号	位置(グリッド)	プラン	長軸 × 短軸 × 深さ(m)	出土遺物	時 期	重複関係	備考
70	F-3・4	不整形	160 × 96 × 8			SK69、P44	
71	F-4	楕円形	68 × 48 × 52			P37	
72	F-4	不整形	90 × 54 × 9			P40~42	
73	F-4・5	不整形	244 × 130 × 58	石臼	中世?	SK74・75、P68・70	
74	F-4・5	不整形	117 × 56 × 56			SK73、P67・68	
75	F-4	不整形	188 × 135 × 42			SK73・78	
76	F・G-4・5	長方形	140 × 80 × 52	縄文土器		SK77・78・81・86・87	
77	F・G-4	不整形	188 × 104 × 40			SK76・79・81、P74~77	
78	F-4	長方形	204 × 107 × 36			SK75・76・79・80、P73	
79	F・G-4	不整形	150 × 110 × 24			SK77・78・80、P57・62~65	
80	F・G-4	不整形	150 × 138 × 30			SK78・79、P55	
81	G-4・5	長方形	(148) × 122 × 40	縄文土器		SK76・77・89、P77・79	
82	F-5	不整形	140 × 95 × 28			SK83・85、P139・140	
83	F-5	長方形	(200) × 114 × 58			SK82・84・85、P117	
84	F-5	隅丸方形	(80) × 75 × 10			SK83、P116・117	
85	F-5	不整形	160 × 100 × 29			SK82・83・86・87、P71・88~91	
86	F-4・5	長方形	148 × 90 × 52			SK76・85・87、P71	
87	F・G-5	長方形	(118) × 76 × 30			SK76・85・86、P82・90	
88	G-4	楕円形	95 × 80 × 52	土錘			
89	G-5	不整形	176 × 105 × 26			SK81・91、P92~97	
90	G-5	長方形	182 × 116 × 72			SK91・98	
91	G-5	長方形	173 × 110 × 51			SK89・90、P150~153	
92	G-4・5	楕円形	154 × 100 × 58				
93	G-4	隅丸方形	108 × 80 × 31			SK94・95	
94	G-4	正方形	(84) × 74 × 62	縄文土器		SK93・95・96、P81・100	
95	G-4	不整形	(122) × (64) × 5			SK93・94、P80	
96	G-4	楕円形	70 × 40 × ー	土師器坏	7世紀前半	SK94	
97	G-4	長方形	130 × 86 × 50				
98	G-5	長方形	(137) × 104 × 60			SK90・99	
99	G-5	不整形	100 × 44 × ー			SK98	
100	F-5	円形	50 × 49 × 68				
101	F-5	不整形	146 × 98 × 60			SK102、P137・138	
102	F-5・6	長方形	135 × 109 × 50			SK101・103、P172、SJ7	
103	F・G-5・6	長方形	254 × 140 × 76			SK102・104・105・107、P173、SJ7	
104	F・G-6	不整形	204 × 157 × 76			SK103・113、SJ7	
105	G-5	長方形	205 × 123 × 70			SK103・106、P155・159、SJ7	
106	F・G-5	不整形	120 × 90 × ー			SK105、P148・149	
107	G-6	楕円形	130 × 80 × 76			SK103、P195~198、SJ7	
108	G-5	不整形	220 × 126 × 67			SK110、P160・164~166	
109	G-6	隅丸方形	170 × 104 × 82			SK110、P198・202・204、SJ7	
110	G-5・6	長方形	206 × (110) × 66	瓦質土器内耳土鍋、縄文土器	15世紀後半	SK108・109、P160・161・163、SJ7	
111	G-6	不整形	122 × 64 × 70	縄文土器		SK112・113、SJ7	
112	G-6	長方形	136 × 92 × 42			SK111・113、P219、SJ7	
113	G-6	不整形	230 × 102 × 43			SK104・111・112、P207~209、SJ7	
114	F-6	長方形	160 × 100 × 30			P177~180	
115	F-6	長方形	110 × 68 × ー			SK116	
116	F-6	楕円形	130 × 93 × ー			SK115、P181	
117	F-6・7	長方形	156 × 64 × 14			P190	
118	F-6	長方形	142 × 48 × ー			SK119、P223、SJ7	
119	F・G-6・7	長方形	150 × 88 × ー			SK118・120、P223、SJ7	
120	F-6、G-6・7	不整形	266 × 92 × ー	須恵器椀(転用碗)、縄文土器		SK119・123、P232、SJ7	
121	F-6・7	不整形	(106) × 80 × 37			SK122	
122	F-6・7	不整形	150 × 110 × 9	土師器坏	6世紀末~7世紀初頭	SK121、P224~228	
123	G-6・7	不整形	(118) × 22 × ー			SK120・124、P233	
124	G-7	瓢箪形	108 × 23 × ー			SK123、P234	
125	H-4・5	円形	70 × 64 × 48			SK126・127	
126	H-4・5	長方形	230 × 86 × 20			SK125・127・129	
127	H-4	長方形	212 × 98 × 32			SK125・126・128	
128	H-4	隅丸方形	108 × 70 × 54			SK127	
129	H-5	長方形	164 × 122 × 61			SK126・130	
130	H-5	長方形	100 × (22) × 56			SK129	
131	H-5	楕円形	128 × 50 × 18				

番号	位置(グリッド)	プラン	長軸 × 短軸 × 深さ(m)	出土遺物	時期	重複関係	備考
132	H-5	楕円形	104 × 54 × 15			P108	
133	H-4	隅丸方形	130 × 98 × 51			SK135、P105	
134	H-4	不整形	190 × 114 × 10			SK135・138、P107	
135	H-4	楕円形	(170) × 108 × 49			SK133・134・138、P106・107	
136	H-4・5	円形	124 × 120 × 22			SK137・139	
137	H-5	隅丸方形	134 × 108 × 24			SK136・138	
138	H-4・5	不整形	(120) × 88 × 28			SK134・135・137、P107	
139	H-5	長方形	140 × 63 × 34			SK136	
140	H-5	長方形	108 × 80 × 46			SK141	
141	H-5	不整形	444 × 90 × 30			SK140、P277、SJ4・5	
142	G-5	長方形	160 × 129 × 32				
143	G・H-5・6	不整形	170 × 114 × —			SK144、P246、SJ4	
144	H-5・6	不整形	162 × — × —			SK143、SJ4	
145	G・H-6	隅丸方形	168 × 100 × —			SK146、P248	
146	G-6	不整形	89 × 28 × —			SK145	
147	H-5	不整形	175 × 78 × 38			SK148、SJ4・5	
148	H-5	不整形	120 × — × 24			SK147、SJ4・5	
149	H-6	隅丸方形	140 × 108 × 20			SK150、P275・276、SJ4・5	
150	H-5・6	不整形	166 × (132) × 78			SK149、P271・273、SJ4・5	
151	H-6	隅丸方形	120 × 92 × —			SK152~154、SJ4	
152	H-6	長方形	138 × 73 × —			SK151・153・154、SJ4	
153	H-6	不整形	(60) × (32) × —			SK151・152、SJ4	
154	H-6	長方形	144 × 43 × —			SK151・152・155	
155	H-6	隅丸方形	82 × 54 × —			SK154・156、SJ4	
156	H-6	楕円形	112 × 66 × —			SK155、P286、SJ4	
157	G-6	不整形	110 × 62 × 18				
158	G・H-6	長方形	188 × 62 × 54			SK159・160	
159	G・H-6	長方形	187 × (39) × 60			SK158・160、P251	
160	G-6	不整形	134 × 66 × 29			SK158・159、P213・249	
161	G・H-6・7	不整形	152 × 120 × 15			SK162・163、P253・258~260	
162	G-6・7	隅丸方形	127 × 110 × 45			SK161・163~165、P253・254	
163	G・H-6	長方形	120 × (64) × —			SK161・162、P253	
164	G-6・7	長方形	60 × 46 × 14			SK162・165	
165	G-7	不整形	(112) × (78) × 4	瓦質土器内耳土鍋	15世紀後半	SK162・164、P254~257	
166	G・H-7	不整形	108 × (24) × —				
167	H-6	不整形	96 × 62 × —			P261・262	
168	H-6	楕円形	102 × 48 × —			P263	
169	H-6	長方形	168 × 96 × —			SK170	
170	H-6	不整形	154 × 60 × —			SK169	
171	H-7	不整形	160 × — × —				
172	H-6	楕円形	92 × 48 × —			SK173・174・179	
173	H-6	隅丸方形	(100) × 74 × 36			SK172・174・176	
174	H-6・7	不整形	158 × — × 44			SK172・173・175・179・180	
175	H-6・7	長方形	110 × 82 × —	古銭	中世	SK174、P288	
176	H-6	長方形	(78) × 62 × 24			SK173	
177	H・I-6	不整形	83 × 77 × 14			SK178・179、P292・293	
178	I-6	長方形	150 × 92 × —			SK177・179・181、P296・297	
179	H・I-6	不整形	(138) × 85 × 44			SK172・174・177・178・180、P293	
180	H-6・7	長方形	(114) × 55 × 8			SK174・179	
181	I-6・7	不整形	(156) × 84 × 84			SK178・182、P297・298	
182	I-7	長方形	156 × — × 24			SK181、P327・328	
183	J-5	楕円形	142 × 58 × 34	土師質土器坏	15世紀末~16世紀初頭?	SK184	
184	J-5	不整形	72 × — × 20	古銭	中世	SK183	
185	J-5	長方形	218 × 94 × 22	縄文土器			
186	J-5	不整形	80 × 64 × 32			SK187	
187	J-5	不整形	76 × 54 × —			SK186・188、P299	
188	J-5	不整形	(74) × 64 × 35			SK187、P299	
189	J-5	円形	82 × 80 × 18	縄文土器		P301	
190	I-6	円形	80 × 74 × —			P319	
191	I-6	隅丸方形	64 × 52 × —				
192	I-6・7	長方形	93 × 58 × 18	人骨、縄文土器			

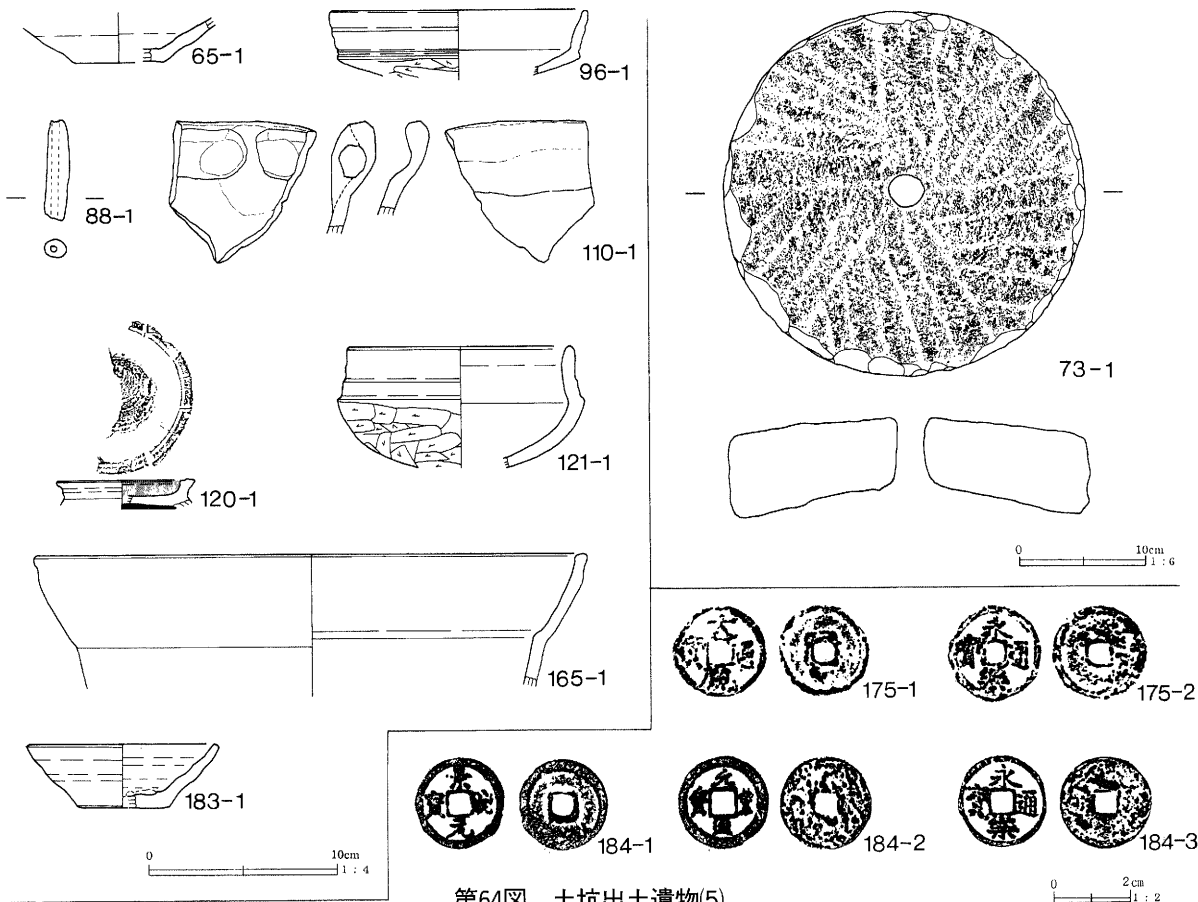
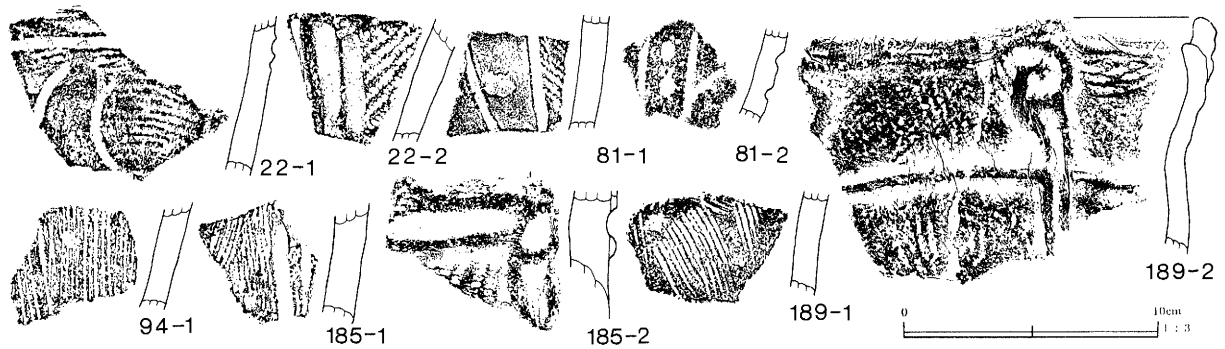
(2) 土坑・ピット出土遺物

土坑から出土した遺物は様々な時期の多種にわたるが、土坑に伴う遺物は、土師質土器坏1点、瓦質土器内耳土鍋2点、石臼1点、古銭5点である。土師質土器坏は16世紀のもので、瓦質土器内耳土鍋は15世紀代のものであろう。古銭5点はいずれも渡来銭であり、すべて中世におさまるものである。

これらの遺物の他に縄文土器、土師器、椀、土錘などが出土しているが、いずれも混入品と考えられる。

図示できた縄文土器は9点である。第189号土坑で出土した1点以外はすべて小破片である。時期は中期後半加曾利E式～後期初頭称名寺式期であり、土坑周辺に分布する縄文時代遺構の時期と一致する。

特徴的なものについて記すと、第189号土坑出土の2は口縁部～胴部にかけて全周の4分の1が残存する水平口縁の小型深鉢である。口縁部には4単位の小突起をもち、小突起直下の、隆帯による渦巻文からは2本隆帯が懸垂する。頸部のくびれ部には隆帯を巡らせる。口径15.0cm、現存高10.0cm。



第64図 土坑出土遺物(5)

第10表 土坑出土遺物(5)観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
22-1	縄文土器深鉢	—	—	—	ABD	にぶい黄褐色	B	胴部	称名寺式。磨消縄文によるJ字状文。
22-2	縄文土器深鉢	—	—	—	ABJM	明赤褐色	A	胴部	2本隆帯の懸垂文。縦位のRL。
81-1	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJM	明赤褐色	A	胴部	磨消懸垂文。地文横位のRL。
81-2	縄文土器深鉢	—	—	—	ABM	にぶい黄褐色	B	胴部	沈線モチーフ内に列点状刺突。称名寺式。
94-1	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJM	にぶい橙色	A	胴部	地文条線文。
185-1	縄文土器深鉢	—	—	—	ABJM	にぶい褐色	B	胴部	2条沈線による懸垂文。地文条線文。
185-2	縄文土器深鉢	—	—	—	ABJM	にぶい橙色	B	胴部	頸部2本隆帯。2本隆帯懸垂文。交点渦巻文。
189-1	縄文土器深鉢	—	—	—	ABJM	にぶい褐色	B	胴部	地文条線文。
189-2	縄文土器深鉢	(15.0)	—	—	ABJMN	にぶい褐色	B	口縁部	小波状突起下渦巻文。2本隆帯懸垂文。
65-1	土師質土器坏	—	—	(4.6)	ABEJ	黒色	A	10%	ロクロ成形。
73-1	石臼	径28.5	高さ7.8	—	—	—	—	完存	下臼。孔径2.0cm。底面一部被熱。安山岩製。
88-1	土錘	長さ5.3	幅1.2	厚さ1.0	—	にぶい黄色	—	一部欠損	重さ7.3g。混入遺物。
96-1	土師器坏	(14.4)	—	—	ABDHKM	明赤褐色	A	10%以下	混入遺物。
110-1	瓦質土器内耳土鍋	—	—	—	—	にぶい褐色	—	10%以下	在地産。
120-1	須恵器椀	—	—	—	ABI	灰色	A	15%	転用硯。外面朱墨。内面墨。混入遺物。
122-1	土師器坏	(11.7)	—	—	AKHJ	橙色	A	40%	混入遺物。
165-1	瓦質土器内耳土鍋	(29.0)	—	—	—	にぶい褐色	—	10%以下	在地産。
175-1	古銭	直径2.47	—	—	—	—	—	完存	大観通寶。真書体。初鑄年北宋1107年。
175-2	古銭	直径2.53	—	—	—	—	—	完存	永樂通寶。真書体。初鑄年明1408年。
183-1	土師質土器坏	(9.9)	3.4	(4.9)	ABDJ	灰白色	A	35%	—
184-1	古銭	直径2.47	—	—	—	—	—	完存	景德元寶。行書体。初鑄年北宋1004年。
184-2	古銭	直径2.48	—	—	—	—	—	完存	元豊通寶。行書体。初鑄年北宋1078年。
184-3	古銭	直径2.46	—	—	—	—	—	完存	永樂通寶。真書体。初鑄年明1408年。

第11表 ピット一覧表

番号	位置(グリッド)	プラン	長軸 × 短軸 × 深さ(m)	出土遺物	時期	重複関係	備考
1	C-4	円形	28 × 27 × —			SJ7	
2	E-2	楕円形	30 × 18 × 14				
3	E-2	円形	25 × 22 × 13				
4	E・F-2	円形	30 × 27 × 13				
5	F-2	隅丸方形	44 × 40 × 20				
6	H-3	円形	32 × 28 × 18			SK25~27	
7	H-2	円形	52 × 48 × 32				
8	J-2	楕円形	48 × 43 × 11			P9	
9	J-2	楕円形	36 × 30 × 18			P8	
10	J-2	不整形	52 × — × 20				
11	J-3	楕円形	32 × 23 × 14				
12	E-3	隅丸方形	26 × 24 × 18				
13	E-4	楕円形	38 × 26 × 10				
14	E-4	不整形	40 × 18 × 8				
15	E-4	円形	23 × 18 × 8				
16	E-3	楕円形	40 × 30 × 24				
17	E-3	楕円形	53 × 42 × 15				
18	E-3	楕円形	40 × (30) × 10				
19	E-3	楕円形	40 × 28 × 22				
20	E-4	楕円形	20 × 13 × 8				
21	F-3	楕円形	30 × 24 × 14				
22	F-3	楕円形	23 × 16 × 8				
23	F-4	隅丸方形	22 × 18 × 7				
24	E-5	楕円形	43 × 28 × 9				
25	E・F-5	長方形	26 × 18 × —				
26	E-5	楕円形	26 × 18 × 12				

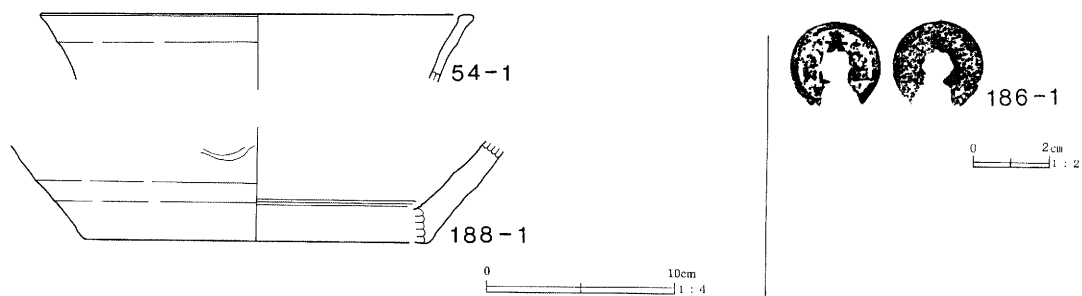
番号	位置(グリッド)	プラン	長軸 × 短軸 × 深さ(m)	出土遺物	時 期	重複関係	備考
27	E-5	楕円形	32 × 23 × 18				
28	E-5	円形	32 × 30 × 10				
29	E-5	円形	19 × 17 × 8				
30	E-5	三角形	22 × 20 × 21				
31	E-5	隅丸方形	31 × 26 × 32				
32	E-5	円形	28 × 26 × 24				
33	E-5	円形	35 × 32 × 60				
34	E-5	円形	28 × 24 × 12				
35	E-5	楕円形	20 × 16 × 14				
36	F-4	楕円形	34 × 24 × 30			SK45	
37	F-4	円形	23 × 21 × 12			SK71	
38	F-4	隅丸方形	24 × 23 × 13				
39	F-4	不整形	36 × 31 × ー				
40	F-4	隅丸方形	28 × 22 × 15			SK72	
41	F-4	隅丸方形	31 × 26 × 51			SK72	
42	F-4	隅丸方形	44 × 25 × 29			SK72	
43	F-4	不整形	50 × 40 × ー				
44	F-4	不整形	40 × 32 × 48			SK69・70	
45	F-4	円形	35 × 28 × 41				
46	F-4	楕円形	46 × 35 × 41				
47	F-4	隅丸方形	24 × 18 × ー				
48	F-4	楕円形	32 × 16 × 39				
49	F-4	楕円形	40 × 23 × 36				
50	F-4	楕円形	26 × 18 × 36				
51	F-4	隅丸方形	32 × 31 × ー				
52	F-4	楕円形	48 × 39 × 34			P54	
53	F-4	円形	24 × 20 × ー				
54	F-4	楕円形	34 × 27 × ー	瓦質土器内耳土鍋		P52	
55	F・G-4	不整形	29 × 26 × ー			SK80	
56	G-4	不整形	43 × 22 × ー			P57	
57	G-4	不整形	55 × (38) × ー			P56、SK79	
58	G-4	隅丸方形	29 × 23 × ー				
59	G-4	楕円形	24 × 17 × ー				
60	G-4	楕円形	29 × 26 × ー				
61	G-4	隅丸方形	26 × 24 × ー				
62	G-4	円形	28 × 27 × ー			SK79	
63	G-4	楕円形	42 × 30 × ー			SK79	
64	G-4	楕円形	41 × 34 × ー			SK79	
65	F・G-4	長方形	23 × 18 × ー			SK79	
66	F-4・5	不整形	48 × 48 × ー				
67	F-4	円形	29 × (24) × ー			SK74	
68	F-5	楕円形	(48) × 38 × 50			SK74	
69	F-5	円形	48 × 40 × 32				
70	F-5	楕円形	43 × 26 × 35			SK73、P71	
71	F-5	円形	(40) × (34) × 15			P70・87、SK85・86	
72	F-4	円形	38 × 32 × ー				
73	F-4	円形	43 × 43 × ー			SK78	
74	G-4	不整形	26 × 21 × ー			SK77	
75	G-4	楕円形	38 × 32 × ー			SK77	
76	G-4	瓢箪形	44 × 21 × 59			SK77	
77	G-4	楕円形	34 × 30 × ー			SK77・81	
78	G-4	不整形	62 × 39 × ー				
79	G-4	隅丸方形	42 × 24 × 44			SK81	
80	G-4	隅丸方形	32 × 26 × 12			SK95	
81	G-4	不明	ー × 36 × ー			SK94	
82	G-5	隅丸方形	21 × 21 × ー			SK87	
83	F-5	楕円形	25 × 18 × ー			P84	
84	F-5	長方形	20 × 18 × ー			P83・85	
85	F-5	長方形	28 × 22 × ー			P84	
86	F-5	不整形	82 × 37 × ー				
87	F-5	楕円形	32 × 26 × ー				
88	F-5	不整形	62 × 41 × ー			SK85	

番号	位置(グリッド)	プラン	長軸 × 短軸 × 深さ(m)	出土遺物	時 期	重複関係	備考
89	F-5	不整形	60 × 48 × ー			SK85	
90	F-5	不整形	40 × 35 × ー			SK85・87	
91	F-5	不整形	47 × 39 × ー			SK85	
92	G-5	隅丸方形	28 × 21 × ー			SK89	
93	G-5	不整形	22 × 22 × ー			SK89	
94	G-5	円形	31 × 31 × ー			SK89	
95	G-5	楕円形	29 × 17 × ー			SK89	
96	G-5	円形	34 × 32 × ー			SK89	
97	G-5	円形	50 × ー × ー			SK89	
98	G-5	不整形	39 × 35 × ー			P99	
99	G-5	不整形	ー × 38 × ー			P98	
100	G-5	不整形	44 × (30) × ー			SK94	
101	G-5	隅丸方形	32 × 28 × 23				
102	G-5	隅丸方形	36 × 30 × ー			P103・104	
103	G-5	円形	38 × 34 × ー			P102	
104	G-4・5	円形	24 × (20) × ー			P102	
105	H-4	円形	28 × (26) × ー			SK133	
106	H-4	不明	ー × 28 × ー			SK135	
107	H-4	楕円形	(48) × 30 × ー			SK134・135・138	
108	H-5	楕円形	ー × 26 × 18			SK132, SJ5	
109	G-5	不整形	32 × 20 × ー			P110	
110	G-5	楕円形	39 × 30 × ー			P109	
111	G-5	円形	30 × 28 × ー			P112	
112	G-5	隅丸方形	32 × 29 × ー			P111	
113	G-5	円形	30 × 26 × ー				
114	F-5	不整形	30 × 29 × 20				
115	F-5	隅丸方形	48 × 30 × ー				
116	F-5	隅丸方形	39 × 35 × ー			SK84	
117	F-5	楕円形	34 × 27 × ー			SK83・84	
118	F-5	楕円形	48 × 32 × 11				
119	F-5	円形	27 × 24 × 27			P120	
120	F-5	不整形	36 × 31 × 24			P119	
121	F-5	隅丸方形	54 × 40 × ー			P123	
122	F-5	不整形	50 × 44 × ー				
123	F-5	不整形	(38) × 30 × ー			P121	
124	F-5	隅丸方形	34 × 34 × ー			SK55	
125	F-5	不整形	47 × 32 × 54			SK55	
126	F-5・6	楕円形	42 × 28 × ー			SK59	
127	F-6	隅丸方形	32 × 22 × 44			P128, SK59	
128	F-6	不明	ー × 20 × ー			P127, SK59	
129	F-6	楕円形	52 × 40 × ー				
130	F-6	隅丸方形	28 × 22 × 17				
131	F-6	楕円形	(24) × 18 × ー			P132	
132	F-6	円形	24 × 23 × ー			P131	
133	F-6	楕円形	17 × 11 × 22				
134	F-5	不明	33 × ー × ー			P115・135, SK100	
135	F-5	不整形	(54) × 29 × 105			P134・136	
136	F-5	不整形	ー × 34 × 65			P135	
137	F-5	隅丸方形	35 × 24 × 62			SK101	
138	F-5	楕円形	24 × 19 × 47			SK101	
139	F-5	楕円形	31 × 14 × 47			SK82	
140	F-5	円形	36 × 30 × 60			SK82	
141	G-5	不整形	22 × 22 × ー				
142	G-5	隅丸方形	28 × 23 × ー				
143	G-5	不整形	55 × 34 × ー				
144	G-5	楕円形	37 × 20 × ー				
145	G-5	円形	24 × 22 × ー			P146	
146	G-5	円形	50 × 40 × ー			P145	
147	G-5	楕円形	26 × 18 × ー				
148	G-5	不明	ー × 21 × ー			P149, SK106	
149	F-5	不明	ー × (28) × 9			P148, SK106	
150	G-5	楕円形	38 × 26 × ー			SK91	

番号	位置(グリッド)	プラン	長軸 × 短軸 × 深さ(m)	出土遺物	時 期	重複関係	備考
151	G-5	楕円形	48 × 38 × ー			SK91	
152	G-5	隅丸方形	37 × 21 × ー			SK91	
153	G-5	隅丸方形	31 × 25 × ー			SK91	
154	G-5	隅丸方形	46 × 30 × ー				
155	G-5	隅丸方形	27 × 20 × ー			SK105	
156	G-5	円形	36 × 34 × ー			P157	
157	G-5	楕円形	ー × 30 × ー			P156	
158	G-5	隅丸方形	25 × 23 × 20				
159	G-5	隅丸方形	38 × 32 × 64			SK105	
160	G-5	円形	62 × 62 × 51			SK108・110	
161	G-5	不整形	48 × 40 × ー			SK110	
162	G-5	楕円形	36 × 24 × 11				
163	G-5	隅丸方形	35 × 26 × 32			SK110	
164	G-5	不整形	53 × (40) × ー			SK108	
165	G-5	不整形	37 × 32 × 37			P166	
166	G-5	不整形	23 × 18 × 18			P165,SK108	
167	F-6	不整形	28 × 23 × 26			P168・169・171	
168	F-6	楕円形	36 × 24 × 19			P167・169	
169	F-6	不整形	ー × 26 × 9			P167・168・170・171	
170	F-6	不整形	54 × 39 × ー			P169	
171	F-6	円形	47 × 39 × 37			P167・169・172~174	
172	F-6	隅丸方形	44 × ー × 55			P171・P174,SK102	
173	F-6	楕円形	(46) × 36 × 45			P174,SK103	
174	F-6	隅丸方形	38 × ー × 21			P171~173	
175	F-6	不整形	42 × 31 × 46			P176	
176	F-6	楕円形	(40) × 34 × 9			P175	
177	F-6	楕円形	38 × 25 × ー			SK114	
178	F-6	楕円形	32 × 20 × 46			SK114	
179	F-6	不整形	36 × 24 × 34			SK114	
180	F-6	隅丸方形	47 × 30 × ー			SK114	
181	F-6	楕円形	28 × 18 × ー			SK116	
182	F-6	楕円形	38 × 25 × 47			P183・185	
183	F-6	隅丸方形	28 × 22 × ー			P182	
184	F-6	円形	28 × 25 × ー			P185	
185	F-6	長方形	20 × 16 × ー			P182・184	
186	F-6	隅丸方形	32 × 30 × ー	古銭		P187	
187	F-6	円形	48 × 46 × ー			P186	
188	F-6	不整形	34 × 31 × 21	陶器大皿		P189	
189	F-6	不整形	52 × ー × 8			P188	
190	F-6	円形	30 × 28 × ー			SK117	
191	F-6	円形	64 × 60 × 39				
192	F-6	円形	33 × 31 × 36				
193	G-6	隅丸方形	31 × 24 × 27			SJ7	
194	G-6	隅丸方形	42 × 34 × 23			SJ7	
195	G-6	楕円形	32 × 22 × 16			SK107,SJ7	
196	G-6	楕円形	24 × 16 × 15			SK107,SJ7	
197	G-6	不整形	ー × 16 × 18			SK107,SJ7	
198	G-6	瓢箪形	46 × 20 × 28			SK109,SJ7	
199	G-6	円形	22 × 22 × 30			SJ7	
200	G-6	隅丸方形	38 × 30 × 38			SJ7	
201	G-6	円形	24 × 22 × 17			SJ7	
202	G-6	隅丸方形	46 × 24 × 34			SK109,SJ7	
203	G-6	円形	48 × 38 × 30			SJ7	
204	G-6	隅丸方形	30 × ー × ー			SK109,SJ7	
205	G-6	楕円形	50 × 42 × 45			SJ7	
206	G-6	楕円形	32 × 26 × 27			SJ7	
207	G-6	隅丸方形	59 × 37 × 34			P208,SK113,SJ7	
208	G-6	楕円形	30 × 21 × 11			P207・209,SK113,SJ7	
209	G-6	楕円形	ー × 24 × 35			P208,SK113,SJ7	
210	G-6	隅丸方形	35 × 26 × 43			SJ7	
211	G-6	隅丸方形	22 × 18 × 19			SJ7	
212	G-6	瓢箪形	53 × 34 × 32			P213,SJ7	

番号	位置(グリッド)	プラン	長軸 × 短軸 × 深さ(m)	出土遺物	時 期	重複関係	備考
213	G-6	楕円形	28 × 22 × 32			P112,SJ7	
214	G-6	円 形	32 × 28 × 27			SJ7	
215	F-6	不整形	81 × 39 × 60				
216	F-6	不整形	38 × 18 × 47				
217	F・G-6	隅丸方形	27 × 20 × ー			P218	
218	G-6	楕円形	49 × 36 × ー			P217	
219	G-6	長方形	34 × 20 × ー			SK112	
220	G-6	楕円形	48 × 40 × 47			P221,SJ7	
221	G-6	不整形	ー × 34 × ー			P220,SJ7	
222	G-6	楕円形	22 × 18 × 10			SJ7	
223	F-6	不整形	46 × 26 × 48			SK118・119	
224	F-6	円 形	22 × 20 × 35			SK122	
225	F-7	楕円形	38 × 26 × 47			SK122	
226	F-7	隅丸方形	42 × 36 × 43			SK122	
227	F-7	楕円形	18 × 14 × 13			P228,SK122	
228	F-7	楕円形	20 × 14 × 3			P227,SK122	
229	G-7	長方形	26 × 18 × 61			P231	
230	G-7	隅丸方形	50 × 42 × 65			P229・231	
231	G-7	楕円形	ー × 37 × 45			P229・230・232	
232	G-6・7	不整形	79 × 41 × 65			P231,SK120	
233	G-7	隅丸方形	22 × ー × ー			SK123	
234	G-6	不整形	48 × 41 × 38			SK124	
235	G-6・7	不整形	47 × 32 × 53			P238	
236	G-6	楕円形	46 × 34 × 49			P237	
237	G-6	楕円形	40 × 40 × 48			P236・238	
238	G-6	楕円形	ー × (28) × 52			P235・237	
239	G-6	隅丸方形	28 × 18 × 18				
240	G-6	楕円形	40 × 31 × 40			P241・242,SJ7	
241	G-6	長方形	ー × 26 × 13			P240	
242	G-6	長方形	ー × 16 × 12			P240	
243	G-7	円 形	26 × 24 × 32				
244	G-7	円 形	20 × 18 × 19				
245	G-7	長方形	ー × 34 × 23				
246	G-6	楕円形	30 × 18 × 24			SK143	
247	G・H-6	楕円形	42 × 24 × 14				
248	G-6	不整形	(52) × 34 × ー			SK145	
249	G-6	不整形	64 × (54) × ー			SK160	
250	G-6	長方形	56 × 40 × 47				
251	G-6	円 形	27 × 23 × 27			SK159	
252	G-6	円 形	34 × 26 × 19				
253	G-6	楕円形	44 × 18 × 21			SK163	
254	G-7	長方形	35 × 32 × 30			SK162・165	
255	G-7	楕円形	32 × 25 × 34			SK165	
256	G-7	楕円形	30 × 20 × ー			SK165	
257	G-7	楕円形	22 × 13 × ー			SK165	
258	G・H-7	長方形	70 × 37 × ー			SK161	
259	G・H-7	隅丸方形	26 × 22 × 40			SK161	
260	H-6・7	楕円形	28 × 18 × 41			SK161	
261	H-6	楕円形	38 × 24 × 40			P262,SK167	
262	H-6	不整形	50 × (36) × 16			P261,SK167	
263	H-6	円 形	39 × 37 × 32			SK168	
264	H-7	隅丸方形	32 × 26 × 38				
265	H-7	楕円形	32 × 26 × 31				
266	H-7	円 形	30 × 24 × 30				
267	H-7	円 形	20 × 18 × 25				
268	H-7	隅丸方形	28 × 18 × 29				
269	H-5	楕円形	40 × 28 × 59				
270	H-5・6	隅丸方形	29 × 26 × 33			P271,SJ4	
271	H-5	不整形	30 × ー × ー			P271,SJ4	
272	H-6	隅丸方形	30 × 30 × ー			P269・270,SK150,SJ4	
273	H-6	隅丸方形	ー × 23 × 84			P273,SJ4	
274	H-6	楕円形	32 × 22 × 25			P272,SK150,SJ4	
						SJ4	

番号	位置(グリッド)	プラン	長軸 × 短軸 × 深さ(m)	出土遺物	時 期	重複関係	備考
275	H-6	円形	48 × — × 35			SK149、SJ4	
276	H-6	円形	34 × 33 × 18			SK149、SJ4	
277	H-5	円形	24 × 20 × —			SK141、SJ5	
278	H-5	楕円形	35 × 26 × 35			SJ5	
279	H-5	楕円形	34 × 22 × 33			SJ5	
280	H-5	楕円形	40 × 24 × 32			SJ5	
281	H-5	円形	57 × 50 × 38			SJ5	
282	H-5・6	円形	31 × 29 × 21			SJ5	
283	H-6	円形	27 × 22 × 41			SJ4	
284	H-6	円形	30 × 26 × 44			SJ4	
285	H-6	円形	24 × 24 × 35			SJ4	
286	H-6	円形	48 × 39 × 17			SK156	
287	H・I-6	隅丸方形	— × 36 × —			SJ4	
288	H-6・7	円形	29 × 24 × —			SK175	
289	H-7	不整形	48 × 24 × —				
290	H-7	円形	21 × 16 × —				
291	H-7	円形	32 × 26 × —				
292	H-6	円形	27 × 25 × —			P293、SK177	
293	H-6	不明	— × — × —			P292、SK177・179	
294	H-6	楕円形	28 × 21 × —				
295	H・I-6	隅丸方形	46 × 28 × —				
296	I-6	不整形	(72) × 62 × —			P297、SK178	
297	I-6	不明	— × — × —			P296、SK178・181	
298	I-6・7	不明	44 × — × —			SK181	
299	J-5	円形	36 × 30 × (18)			SK187・188	
300	J-5	楕円形	39 × 27 × —				
301	J-5	楕円形	56 × 40 × 29			P302、SK189	
302	J-5	不整形	41 × 30 × 10			P301	
303	J-5	隅丸方形	31 × 31 × —			P306	
304	J-5	隅丸方形	38 × 30 × 24			P305	
305	J-5	長方形	34 × 18 × 24			P304・306	
306	J-5	不整形	(30) × — × 24			P303・305	
307	J-5	円形	34 × 32 × —				
308	J-5	楕円形	35 × 22 × 10				
309	J-5	円形	30 × 28 × —				
310	J-5	隅丸方形	31 × 31 × 22				
311	J-6	不整形	32 × 29 × 12				
312	J-6	楕円形	28 × 22 × 9				
313	J-6	円形	41 × 37 × 16				
314	I-6	円形	28 × 20 × —			P316	
315	I-6	楕円形	30 × 20 × —			P315・317、SK7	
316	I-6	楕円形	41 × 30 × —			P316	
317	I-6	楕円形	43 × 32 × 16				
318	I-6	円形	34 × 29 × —			SK190	
319	I-6	円形	22 × 18 × —			P322	
320	I-6	楕円形	44 × 36 × —			P322	
321	I-6	楕円形	36 × 25 × —			P320・321	
322	I-6	隅丸方形	— × 32 × —				
323	I-6	円形	44 × 39 × —				
324	I-6・7	円形	18 × 18 × —			P325・326	
325	I-6・7	円形	61 × 50 × —			P324・326	
326	I-6・7	円形	56 × 43 × —			P324・325	
327	I-7	円形	44 × 38 × —			SK182	
328	I-7	隅丸方形	46 × 41 × —			SK182	



第65図 ピット出土遺物

第12表 ピット出土遺物観察表

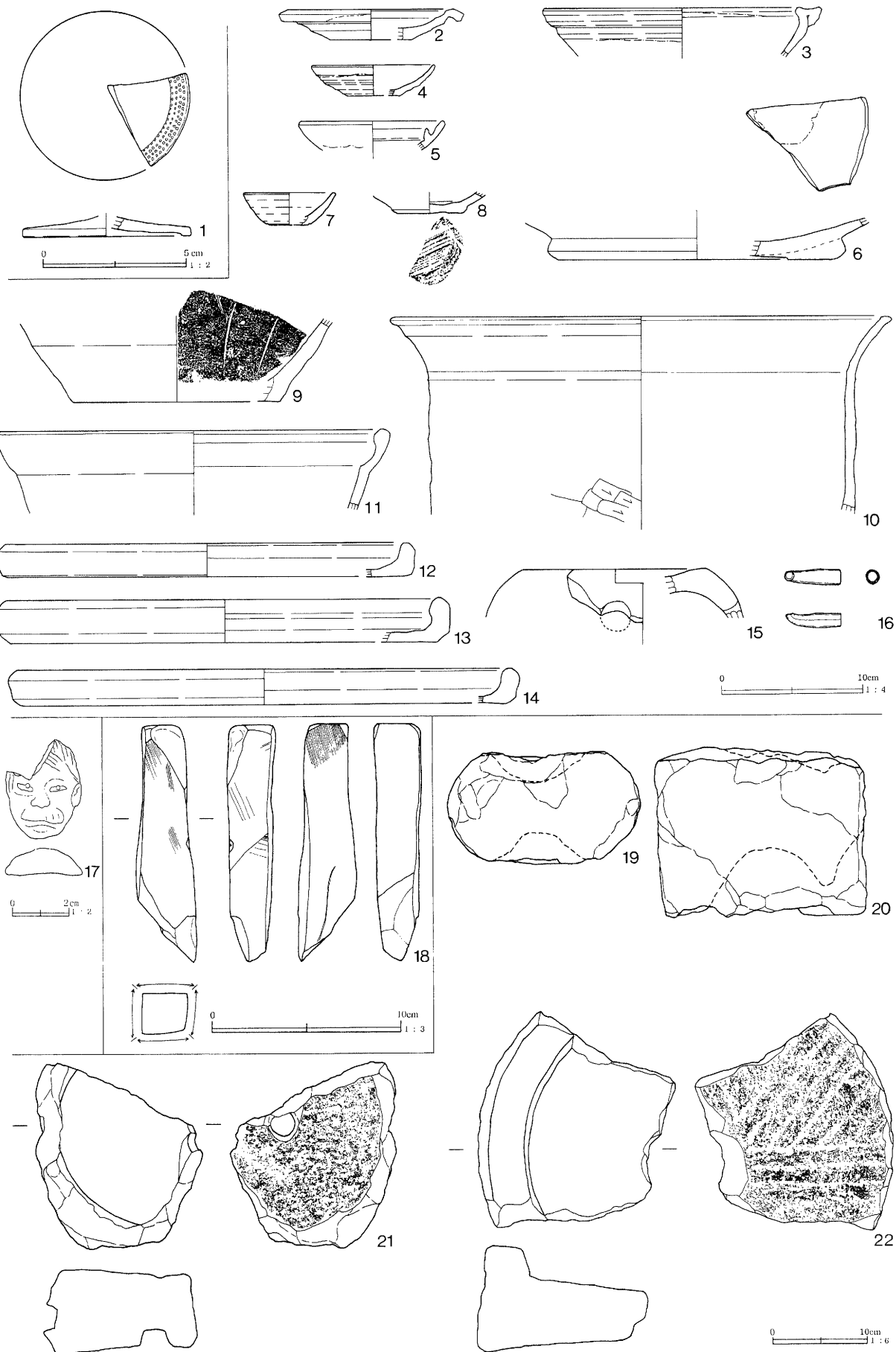
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
54-1	瓦質土器内耳土鍋	(23.0)	—	—	灰色	—	—	10%以下	在地産。
186-1	古銭	直径2.44	—	—	—	—	—	一部欠損	嘉仁通寶。真書体。初鑄年北宋1056年。
188-1	陶器大皿	—	—	(18.4)	黄灰色	—	—	10%以下	灰釉ツケガケ。瀬戸産。

(3) 遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物、遺構外グリッド出土遺物及び表採遺物のうち、当該期の遺物を掲載する(第66図、第13表)。陶器蓋・灯明皿・鉢・鍋、土師質土器坏、瓦質土器搦鉢・内耳土鍋・鍋・焙烙、泥面子、砥石などが見られた。

第13表 遺構外出土遺物(10)観察表

番号	器種	出土位置	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	陶器蓋	J-6	(3.0)	—	—	灰色	—	—	20%	錆釉。外面櫛歯状工具による刺突文めぐる。
2	陶器折縁皿	一括	(13.2)	2.1	(5.9)	灰白色	—	—	15%	鉄釉。底部回転糸切り。瀬戸・美濃産。
3	陶器鉢	一括	(19.5)	—	—	にぶい橙色	—	—	10%以下	口縁部白泥。体部外面・内面透明釉。
4	陶器灯明皿	一括	(8.8)	2.2	(4.7)	灰白色	—	—	10%	鉄釉。瀬戸・美濃産。
5	陶器灯明皿	一括	(10.3)	—	—	灰白色	—	—	10%	受付皿。鉄釉。瀬戸・美濃産。
6	陶器鉢	B-2	—	—	(19.6)	灰白色	—	—	10%以下	内外面灰釉。内面釉ハギ痕。瀬戸・美濃産。
7	土師質土器坏	一括	(6.6)	2.3	(2.8)	AEJK	灰白色	A	20%	ロクロ成形。
8	土師質土器坏	一括	—	—	(4.8)	ABDK	にぶい橙色	A	20%	底部外面柁目痕。
9	瓦質土器搦鉢	一括	—	—	(14.8)	灰白色	—	—	10%以下	底部静止糸切り。在地産。
10	瓦質土器内耳土鍋	H-6	(35.5)	—	—	灰色	—	—	10%	在地産。
11	瓦質土器鍋	G-6	(28.0)	—	—	灰白色	—	—	10%	在地産。
12	土師質土器焙烙	一括	(28.8)	2.4	(29.1)	橙色	—	—	10%以下	在地産。
13	土師質土器焙烙	一括	(30.7)	3.1	(30.5)	橙色	—	—	10%以下	在地産。
14	土師質土器焙烙	D-2	(35.6)	2.5	(34.8)	にぶい橙色	—	—	10%以下	在地産。
15	瓦質土器行火	B-1	(13.0)	—	—	灰オリーブ色	—	—	10%以下	胴部に複数穿孔。
16	煙管	一括	長さ3.9	径0.95	—	—	—	—	火皿部欠損	重さ5.2g。雁首部。銅製。
17	泥面子	H-6	長さ3.5	幅2.7	厚さ0.9	にぶい黄橙色	—	—	80%	重さ6.7g。
18	砥石	一括	長さ25.4	幅2.8	厚さ2.1	—	—	—	—	重さ127g。砥面4面。砂岩製。
19	五輪塔水輪	一括	高さ11.9	幅20.4	厚さ16.2	—	—	—	一部欠損	凝灰岩製。
20	五輪塔地輪	A-2	高さ18.0	幅22.2	—	—	—	—	60%	凝灰岩製。
21	石臼	一括	径(30.0)	高さ9.0	孔径(3.5)	—	—	—	30%	上臼。引き手差し込み穴有り。安山岩製。
22	石臼	一括	径(37.6)	高さ11.3	孔径(3.0)	—	—	—	25%	上臼。安山岩製。

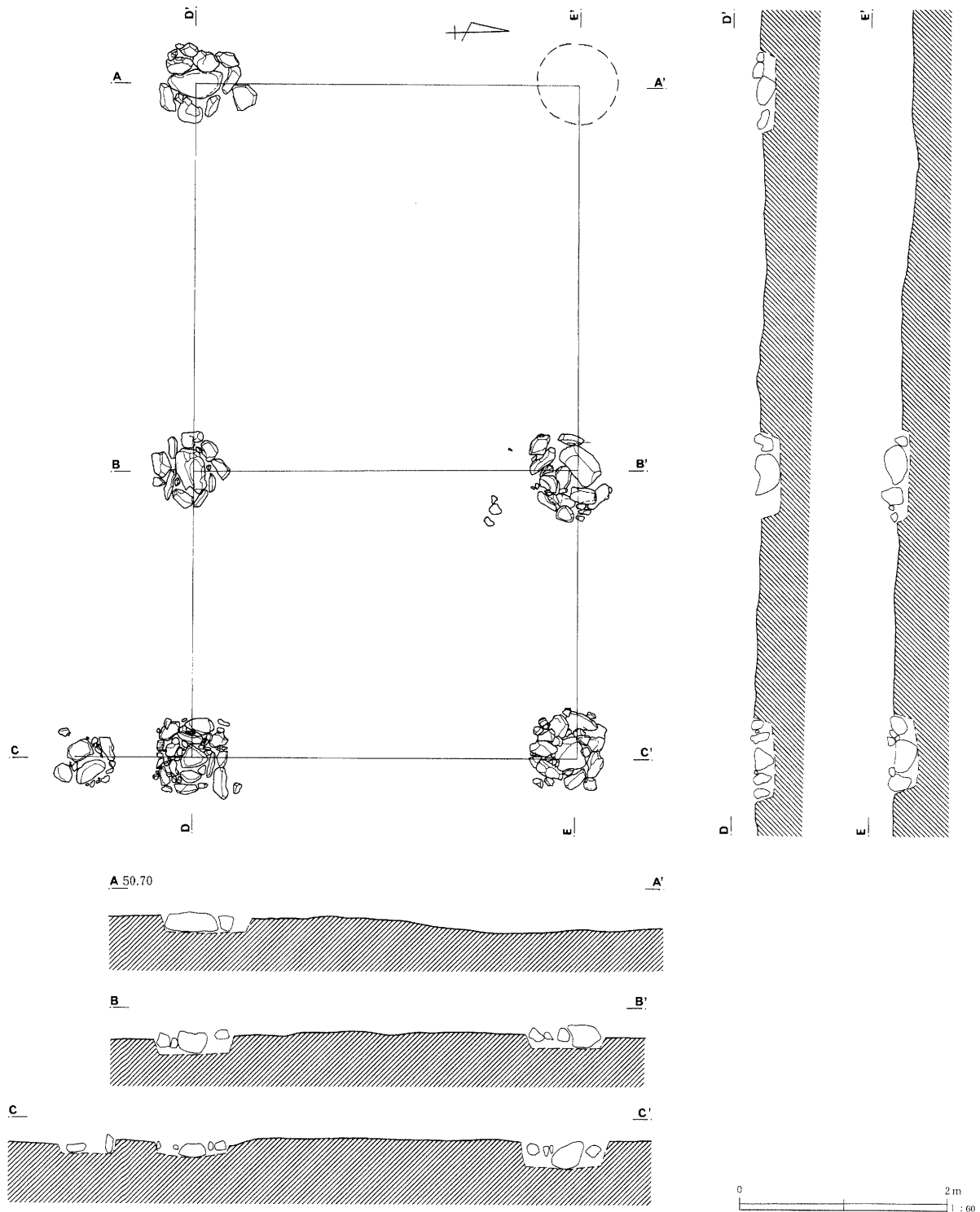


第66図 遺構外出土遺物(10)

4 その他の時期

(1) 礎石建物跡

土坑の集中する地点の北側に6箇所の石敷きを確認した。この石敷きは等間隔に規則的に配列していること、各石敷きが比較的大きめの石を囲むように配置されていることから、礎石建物と判断した。時期は不明である。



第67図 第1号礎石建物跡

第1号礎石建物跡 (第67図)

D-4・5グリッドにおいて確認されている。中世土坑群の北側に位置し隣接するが、重複関係は認められない。第11号土坑が北接するが1間×1間の身舎に廂が東に付く1間×2間の建物で、主軸はほぼ東を指す。身舎の北西隅の礎石は確認されておらず、建物南東側には一箇所礎石が張り出している。身舎の北西隅はその地点に限り旧表土の標高が下がっていることから破壊されている可能性がある。建物南東側に張り出した礎石は、他のものに比べやや小規模な構造をしており、可能性としては階段のような入り口的な施設と考えられる。これが入り口施設とすれば、この西対の礎石がもう一つ存在していたことが想定される。具体的な基礎地業は確認されなかった。また明瞭な据え付け掘り方は確認されていない。身舎の梁行3.825m、桁行3.70mを測り、廂の梁行は2.80mである。総面積約24.51㎡、身舎だけで約14.15㎡を測る。

根石、礎石ともに川原石を用いているが、礎石にはより大きめの石を選択している。礎石は長軸3.40cm程度の川原石を、平坦部を上にして据えている。厚みは最大で25cmである。根石には長軸5～20cm程度の大きさにばらつきのある礫を、ひとつの掘り方に対し20個前後を用い、円形ないしは方形に配置させている。

当遺構からは遺物はまったく検出されておらず正確な時期は不明である。

(2) 集石遺構

集石遺構は2基検出された。1基は単独でもう1基は土坑が数基集中する箇所での検出である。

第1号集石遺構 (第68図)

C-2グリッドに位置する。集石は東西40cm、南北60cmの範囲に分布する。石の配置に規則性はなく、全体として弧状に配置されている。石はすべて川原石の転石で、最大のもは19cmを計測する。多くの石は平坦面を上にして据えている。

当遺構からは遺物はまったく検出されなかった。

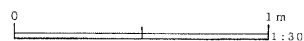
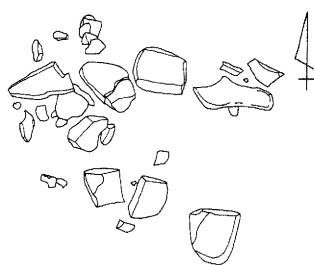
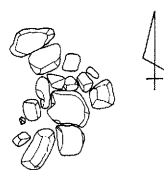
第2号集石遺構 (第68図)

F-2グリッドに位置する。第17号土坑、第5号ピットと重複関係にあるが破壊された痕跡はなく、詳細な時期決定はできないものの、両遺構に後続する時期が与えられそうである。集石は東西115cm、南北100cmの範囲に分布する。多くの石は平坦面を上にして据えている。石はすべて川原石の転石で、最大のもは33cmを計測する。石の分布に規則性はなく、第1号集石遺構ほど石は密集していない。全体として東西に長いV字状に配置されている。

当遺構からは遺物はまったく検出されなかった。

第1号集石遺構

第2号集石遺構



第68図 第1・2号集石遺構

V 調査のまとめ

三ヶ尻遺跡は、櫛挽台地の東縁辺部に位置し、一部は妻沼低地の新荒川扇状地上に及ぶ、東西約900m、南北約650mに広がる遺跡である。当遺跡はこれまでに埼玉県教育委員会、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団により、三ヶ尻天王遺跡、三ヶ尻林(1)・(2)遺跡、三ヶ尻中学校遺跡として地点ごとに別々に調査されてきた。またこの他に三ヶ尻上古遺跡では、発掘調査によるものではないが、弥生時代の壺型土器が数個体採集されている。遺跡の詳細はそれぞれの報告書に委ねるが、三ヶ尻遺跡のこれまでの調査成果を整理すると、①縄文時代前期黒浜式期の集落跡、②弥生時代中期須和田式期の再葬墓、③古墳時代後期の集落跡、④古墳群、⑤奈良・平安時代の集落跡、⑥中世遺構群、⑦近世遺構群に大別でき、いくつかの相をもつ複合遺跡であることがわかる。

今回の調査区は、三ヶ尻遺跡内でも中央やや北よりに位置し、地形としては妻沼低地に半島状に突き出した、櫛挽台地の最東端にあたる。遺跡は標高約50mの台地上のほぼフラットな面に形成され、北側から南東側にかけて、眼下には妻沼低地に続く熊谷低地が広がっている。

三ヶ尻遺跡は今回の調査により、縄文時代中期後半の住居跡3軒、土坑5基、埋甕1基、倒木痕5箇所、後期初頭の土坑2基、古墳時代後期の住居跡4軒、奈良時代の土坑1基、平安時代の住居跡1軒、中世の土坑184基、ピット328基、時期不明の礎石建物跡1棟、集石遺構2基の成果を加えることになった。これらを整理すると、①縄文時代中期～後期の集落跡、②古墳時代後期の集落跡、③奈良・平安時代の集落跡、④中世土坑・ピット群にまとめられる。このうち①縄文時代中期～後期の集落跡は、これまでの調査で確認されておらず、新たな成果と位置づけることができよう。そこで以下では、はじめに本遺跡の中心時期の一つである、縄文時代中期～後期の集落跡について概観し、その後、周辺地域における該期の集落動態について簡単に取り上げてみたい。

今回の調査において縄文時代の遺構は、住居跡3軒、土坑7基、埋甕1基、倒木痕5箇所を数える。第1、2号住居においては称名寺式土器をわずかに含むものの、炉体土器のあり方や主体的に出土する土器を見る限り、3軒とも加曾利EⅢ式期に位置づけられる。一方、土坑7基は加曾利EⅢ式期に属するものと、後続する後期初頭称名寺式期に属するものの二者が認められる。調査区北東に位置する第4、5号土坑が称名寺式期のものであろう。第4号土坑は該期の土器がまとまって出土しており、第5号土坑は少量の加曾利E式土器破片に混じって称名寺式土器が出土している。本調査区における縄文時代遺構としてはもっとも新しいものであり、集落は一定期間継続していたとみなされる。埋甕は調査区北西において1基が確認された。埋設された土器は加曾利E式浅鉢の頸部から胴部破片であり、全周する土器破片の半分を、外側に逆位で埋置し、もう半分は内側に正位で埋設するという特異な出土状況であった。倒木痕は調査区南東に5箇所が集中し、第1号倒木痕では完形個体を含む大量の縄文土器破片が確認された。また図示できた資料は少ないが、第2号倒木痕においても礫を伴って比較的多くの縄文土器破片が確認できた。第3、4号倒木痕においては土器の出土は見られなかったが、覆土の様相などから同時期のものと判断している。これらの縄文時代の遺構は、調査区内の中央には分布せず外縁にのみ分布する。特に住居跡3軒は調査区外にまでおよび、遺構・遺物の分布が当遺跡のみで完結していない。このことは、該期の集落が本調査区に限定されず、さらに広い範囲に及んでいたことを推測させる。また、中世土坑群の分布する調査区中央には縄文時代の遺構・遺物を攪乱した痕跡もうかがえないことか

ら、調査区中央は本来、遺構の分布しない地域であり、集落は中央に広場を有する環状配置であった可能性も考えられる。調査範囲が狭いため推測の域を出ず、ここでは可能性を指摘するに留めたい。

一方、遺構外出土遺物を概観すると、遺構出土では見られなかった加曾利E II式期の深鉢をわずかながら認めることができ、周辺に該期遺構の存在と集落開始時期の遡上を想起させる。また下限の時期は、第1号住居跡混入の後期安行式の精製深鉢破片を上げることができるが、わずか一点のみであり、遺構に伴うものではないことから、当調査区における縄文時代集落の下限は、第4号土坑出土の深鉢をもって称名寺II式期としたい。なお、遺構外からは堀之内2式期の土器破片を少量確認しており、集落はこの時期まで断続的に営まれた可能性があることも付記しておく。

以上を総合すると、本調査区における縄文時代の遺跡の性格は、縄文時代中期後半加曾利E II式～後期初頭称名寺II式期における、集落跡の一部と位置づけられる。

これまでの三ヶ尻遺跡の調査において確認された該期の遺構・遺物としては、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和53年度に行った三ヶ尻天王遺跡における、古墳墳丘や周溝出土の土器破片少量と同事業団が昭和55年度に行った三ヶ尻林(2)遺跡における、加曾利E III式期の単独埋甕を上げることができる。これとは別に、市教育委員会が行った近年の試掘調査では、本調査区の南西370mの地点において、加曾利E式期の土器破片を、平成14年12月の試掘調査では、本調査区の西側220mの地点において、磨消し懸垂文の胴部破片、台付深鉢の脚台部など、加曾利E III式土器破片数点を確認している。このことは縄文時代の集落跡が本調査区に限定されず、当遺跡内のかなり広い範囲に展開していたとする、前述の推測を補強するだろう。

さて、当遺跡周辺における該期の集落動態について、具体的な検討は見られないものの、櫛挽台地の東縁辺部および妻沼低地における、後期以降の低地への集落進出は繰り返し指摘されてきたことである。近年、部分的ではあるが、深谷市域では当該地域の発掘調査件数の増加により資料が増加しており、改めてこの現象を整理し捉え直す必要性を感じている。しかしながら今回は、筆者の力量と紙幅の都合により具体的な検討を行う余裕がない。そこで以下では、これまでに指摘されてきた、「後期における低地への集落進出」を正しく理解するために、「中期の低地集落」、「後期の台地集落」という二点に焦点を絞り、集落跡を概観するに留めたい。なお、ここで言う‘集落跡’とは遺構の確認された遺跡もしくは豊富に土器を確認した遺跡を指す。また‘低地’とは妻沼低地を、‘台地’とは櫛挽台地の北縁部および東縁辺部を指し、具体的には熊谷・深谷市域と妻沼・岡部町域の遺跡を含む。

〈中期の低地集落〉(6遺跡)

寺東遺跡 櫛挽台地に隣接。加曾利E式期の住居跡2軒、称名寺式期6軒、加曾利E式～称名寺式期の土坑12基、ピット多数を確認

城下遺跡 櫛挽台地に隣接。加曾利E式終末～称名寺式期の土坑3基を確認。

原遺跡 加曾利E式終末～称名寺式期の集石遺構を確認。

深谷町遺跡 櫛挽台地に隣接。3条の河川跡より加曾利E III式、称名寺式、堀之内1・2式土器を大量に確認。

城西遺跡 櫛挽台地に隣接。低地に所属する西地区において、加曾利E III式の浅鉢を埋設するピット1基を確認。

上敷免遺跡 加曾利E式期の集石1基、称名寺式期の土坑1基を確認。加曾利E式土器を微量、称名

寺式～曾谷式土器少量、安行1式～安行3式を多量に確認。

〈後期の台地集落〉（4遺跡）

- 三ヶ尻遺跡 台地東縁辺部に立地。加曾利EⅢ式期の住居跡3軒、土坑5基、埋甕2基、倒木痕5箇所、称名寺Ⅱ式期の土坑2基、堀之内式、加曾利B式、安行1式の土器破片を微量確認。
- 小台遺跡 中峠式期の住居跡1軒、加曾利EⅡ式期8軒、称名寺式期2軒、堀之内1式期1軒を確認。
- 城西遺跡 台地部にあたる東地区におい加曾利EⅡ式期の遺構を確認、堀之内1・2式、加曾利B式の破片を確認。
- 東方城跡 台地先端部に立地。堀之内式期？の土坑1基、加曾利EⅡ式～称名寺式、堀之内式の土器破片を確認。

以上の低地集落6遺跡、台地集落4遺跡の事例からは、以下の特徴を抽出することができる。

- 1) 中期の低地集落の上限は加曾利EⅢ式期に求められる。
- 2) 中期の低地集落は櫛挽台地に隣接した地域に立地する傾向にある。
- 3) 低地集落、台地集落に問わず、加曾利EⅡ式期の集落は称名寺式期まで継続することが多い。
- 4) 中期の低地集落は、同時期の台地集落に比較して小規模である。
- 5) 後期の台地集落は概して小規模である。

以上の低地集落と台地集落の概観は、これまで再三にわたって指摘されてきた「後期における低地への集落進出」について、若干の変更を求めることを意味し、当該地域における集落動態の新たな知見を用意する。

低地へ進出した集落の時期は、1に示したように加曾利EⅢ式期に集中することが多く、現段階における当該地域の、低地への集落進出時期の上限と評価できる。また2で示しているように、低地へ進出した集落もその初期段階では、櫛挽台地と接するような地点に立地することが多い。進出初期の集落様相の特徴として評価できるだろう。集落の継続性という観点では、台地、低地を問わず、加曾利EⅡ式期に営まれた集落は称名寺式期まで継続する傾向が見られる。すなわち中期後半～後期初頭期には台地集落と低地集落が、立地を異にして並存しているのである。4の特徴は、今回取り上げた後期の低地集落6遺跡からも理解できるが、出口遺跡、島之上遺跡、菅原遺跡、水窪遺跡など台地における加曾利EⅡ式期の大規模集落を見ると理解はいっそう容易である。加曾利EⅡ式期の台地集落は住居跡が大量に確認されるような大規模であることが多いが、現在のところ同時期の低地において大規模と呼べるような集落は確認されていない。そこに当該時期における①低地利用の限定性(=限定的低地利用)、もしくは②低地へ進出した集団の限定性を推測させ、「試行的な集落進出」を読み取ることができよう。また5で示したように、後期前半ないしは中葉以降の台地集落は小規模なものがほとんどで、同時期における低地集落と対照的であり、そこに後期前半以降における低地への、「本格的な集落進出」を読み取ることができると。

以上をまとめると、当該地域における縄文時代中期後半の集落は加曾利EⅢ式期に至り、低地へ進出していく集落と、そのまま台地へ継続していく集落に分かれる。進出初期段階では一部の集落が、低地の中でも台地に隣接した限定的な地域において、試行的に集落設営を行い、後期初頭までは台地集落と併存していた様子が復元される。後期前半以降は地域を限定することなく、低地の自然堤防上の至るところに集落が分布する。と同時に、それまで大規模だった台地集落は、この時期小規模になり、生活の

舞台は本格的に低地へ移されることになる。限定的低地利用がその後の本格的な低地利用を招来したのか、それとも本格的な低地利用へ向けての限定的低地利用だったのかは本検討では明らかにし得ないが、当該地域の縄文時代後期における低地への集落進出は、その直前の加曽利EⅢ式期における「集落進出の試行的な段階」無くしては理解できぬ現象と評価できるだろう。

以上、櫛挽台地東縁辺部および妻沼低地における中期後半の低地集落と後期の台地集落を対比することで、これまでに指摘されてきた「後期における低地への集落進出」を大まかに理解することができた。しかしながら本検討にもいくつかの課題が残されている。最後にこれらの課題を提示することによって今後の検討に備えたい。一点目は本市域における寺東遺跡の立地の問題、二点目は櫛挽台地からやや離れた低地に分布する中期後半期の遺跡の評価、三点目は深谷市上増田地内出土土器の評価である。

まず一点目、寺東遺跡の立地の問題である。当遺跡は櫛挽台地に隣接した標高約31～32mの遺跡であり、現在の地形区分としては低地に属するが、発掘調査の結果、現地表面から約2mの深さにおいてローム面を確認しており、加曽利E式～堀之内式期の集落は当時、櫛挽台地の最先端部に立地していたことが判明している。このことは、櫛挽台地に隣接する妻沼低地に、埋没したローム層の存在を想起させ、今回取り上げた低地集落の評価に再考を促すものである。二点目は上敷免遺跡、上敷免北遺跡、居立遺跡、原遺跡のように、櫛挽台地に隣接しない地域においても加曽利E式期の遺構や土器が確認されているという事実である。これは初期段階の低地利用は、地域的に限定されていたとする本検討の結論とは相反するものであり、上記4遺跡の詳細な時期決定を含めて今後の課題とされる。最後は三点目の深谷市上増田地内出土土器の評価である。遺構が確認されていないことから本検討には加えなかったが、昭和47年、深谷市の上増田地内の土地改良事業において、地表より約1mの深さで縄文中期後半の完形土器が確認されている。出土土器は水平口縁のキャリパー類深鉢で、口縁部は楕円形区画文を有し、頸部は3条の沈線によって胴部と区画され、胴部は2本一組の沈線により懸垂文が描出され、懸垂文間は横方向の沈線が加わる。地文は横位のLRであろうか(未実見)。土器は、加曽利EⅡ式に位置づけられよう。この土器の出土地点は、櫛挽台地から直線距離にして約3km離れた後背湿地内の微高地にあたり、この出土地点が集落跡として認められるものなら、低地進出の地理的限定性だけでなく、その開始時期においても本検討は再考を要することになろう。今後、低地部の資料の増加は期待できるが、集落進出の開始時期はその都度確認されていくべきであり、進出初期における低地利用の地理的限定性の有無も再度確認されるべきであろう。

今回の検討は集落の立地と大別時期による継続性という項目からの概観に過ぎない。また遺跡を網羅することも、遺構・遺物の内容を精査することもできず、管見に触れなかった資料も多々あるものと思われる。今後は悉皆的な資料集成を行い、土器の細分時期を決定した上で、遺構内容や遺物組成を含めた検討が望まれる。また集落の動態とは静態の時間的連続を意味し、動態を把握する大前提として同時性集落を捉える作業が不可欠である。本稿はこれを怠っており、不足している視点と言えよう。集落動態把握の先には必ず背景の理解があり、逆に、背景を理解するための集落動態把握でもある。本検討では低地への集落進出を理解するために台地集落も取り上げたが、「低地への集落進出」という現象の真の理解は、同時期の台地集落との関係においてのみ理解されるだろう。

本地域は低地における未確認の遺跡を多く含み、資料の増加によって見解を変更していく可能性があるが、集落動態を理解する上で不適當な地域である。特に熊谷市域の低地部の調査は依然として限定的で、

堀之内式の土器群を確認した入川遺跡や深町遺跡、後晩期の土坑、包含層を確認した諏訪木遺跡など数例を上げるのみである。しかしながら今後、低地への本格的な集落進出に先立つ、試行的な進出段階の時期が前後することがあろうとも、後期における低地進出そのものは、当地域に顕著に認められる集落動態の特徴と評価でき、この理解自体が大きく変更する余地はないだろう。今後、低地の調査事例が増えた段階で、集落進出の背景を含めて再考したい。

引用・参考文献

- 青木克尚『深谷市内遺跡VII』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第46集 1998
 青木克尚『深谷市内遺跡IX』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第53集 1997
 荒川 弘『妻沼西南遺跡群 I 一道ヶ谷戸条里・道ヶ谷戸・飯塚南一』 1981
 磯崎 一『新田裏・明戸東・原遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第85集 (埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989
 石坂俊郎他『堀東・城西II』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第257集 (埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2000
 岩瀬 譲『前・居立』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第151集 (埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995
 大屋道則『清水上遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第152集 (埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994
 金子正之『寺東・八反田・東耕地・入川・深町遺跡』 熊谷市教育委員会 1988
 川口 潤『本郷前東遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第78集 (埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989
 木戸春夫『根絡・横間栗・関下』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第153集 (埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995
 木戸春夫『上敷免北遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第248集 (埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2000
 栗岡 潤他『堀東遺跡II』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第275集 (埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2002
 古池晋禄『小台遺跡 (第5次)』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集 1989
 古池晋禄『根岸遺跡』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集 1992
 古池晋禄『城下遺跡 (第3次)』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第42集 1995
 古池晋禄『上唐沢地区遺跡群』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第54集 1998
 笹森健一他『前島・島之上・出口・芝山』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集 1977
 澤出晃越『城下遺跡』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 1983
 澤出晃越『萱場松原遺跡』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 1984
 澤出晃越『深谷町遺跡』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集 1985
 澤出晃越『東方城跡』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集 1988
 澤出晃越『小台遺跡 (第4次)』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集 1990
 鈴木敏昭『横間栗遺跡』 熊谷市教育委員会 1999
 滝瀬芳之他『上敷免遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集 (埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993
 田中広明『新屋敷東・本郷前東』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集 (埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992
 知久裕昭『小台遺跡 (第7次)』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第60集 1999
 知久裕昭『島之上 (第2次)・仲町・市内遺跡確認—深谷市内遺跡VIII—』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第66集 2001
 中村倉司『下辻遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第69集 (埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1987
 中山浩彦『宮ヶ谷戸・根岸・八日市・城西』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第172集 (埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995
 西口正純『矢島南遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第149集 (埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994
 蛭間真一他『小台遺跡』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 1979
 松田 哲『三ヶ尻遺跡』 熊谷市三ヶ尻遺跡調査会 1999
 吉野 健『寺東遺跡・別府氏館跡』 熊谷市教育委員会 2000
 吉野 健『三ヶ尻遺跡II』 熊谷市教育委員会 2000
 深谷市教育委員会『目で見る深谷の歴史』 市制二十五周年記念 1981

写真図版



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡



第2号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡炉出土状況



第2号住居跡埋甕出土状況



第2号住居跡埋甕半截狀況



第4号土坑遺物出土状況

図版2



第5号土坑遺物出土状況



第5号土坑打製石斧出土状況



第6号土坑礫出土状況



第1号埋甕遺物出土状況



第1号倒木痕遺物出土状況



第4・5号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡編み物石出土状況



第6号住居跡



第6号住居跡遺物出土状況



第7号住居跡遺物出土状況



第8号住居跡遺物出土状況



第8号住居跡カマド遺物出土状況



第8号土坑遺物出土状況



第8号土坑遺物出土状況



第19号土坑人骨出土状況



第19号土坑頭骨出土状況

図版4



第73号土坑石臼出土状況



第183号土坑遺物出土状況



第192号土坑人骨出土状況



第192号土坑頭骨出土状況



第1号礎石建物跡



第1号礎石建物跡



第2号集石遺構



発掘調査風景



第7图1



第7图2



第7图3



第7图4



第7图5



第7图6

图版6



第7图7



第7图8



第14图1



第14图2



第14图3



第14图4



第14图5



第18图 1



第18图 2



第20图 4-1



第21图 4-8



第21图 4-9·10

图版 8



第21图5-1



第21图5-10



第22图5-11



第25图 1



第25图 2



第28图1-1



第28图 1-2



第28图 1-3



第30图 1



第30图 2



第30图 3



第30图 4

図版10



第30図5



第30図6



第30図7



第33図110



第8図9~20

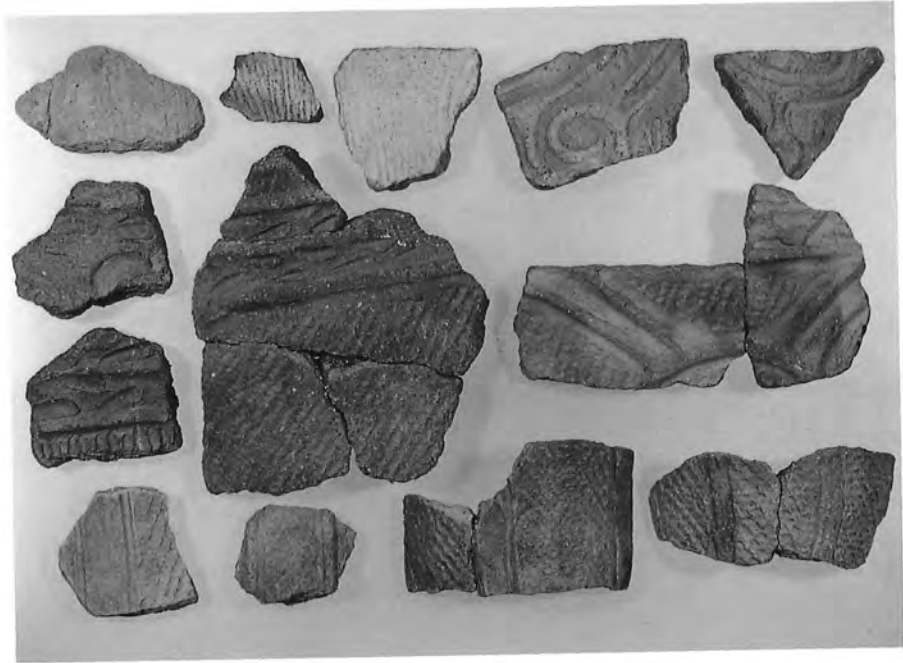


第8图21~41

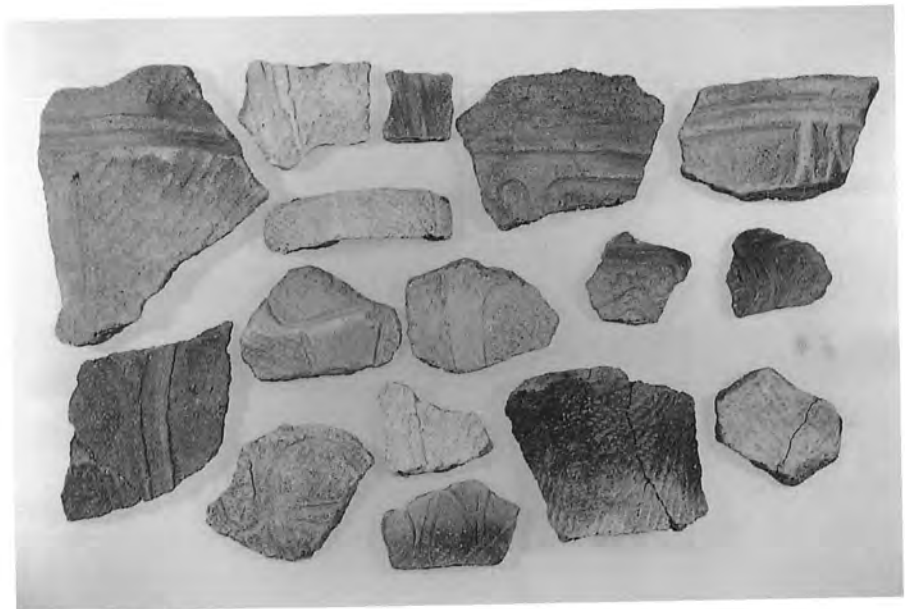


第9图42~53

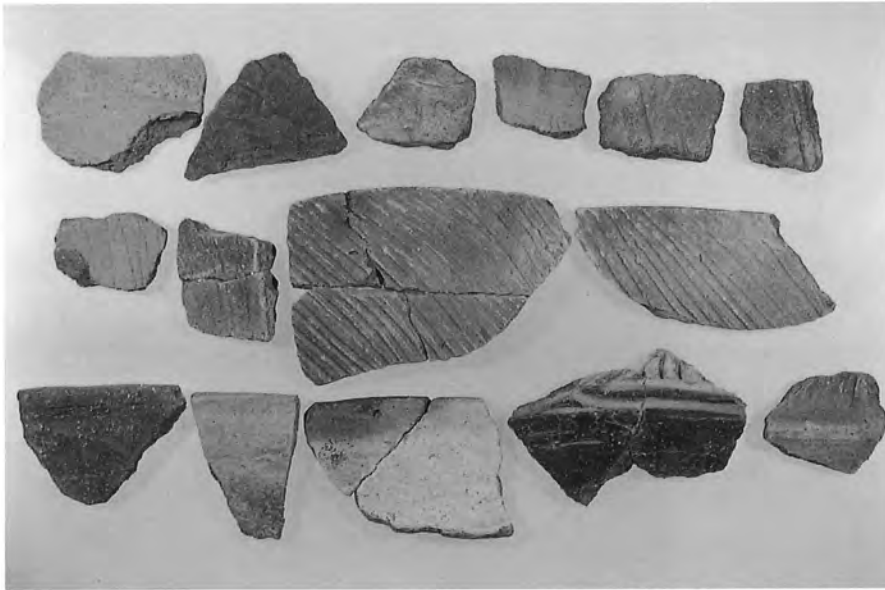
图版12



第9图54~66



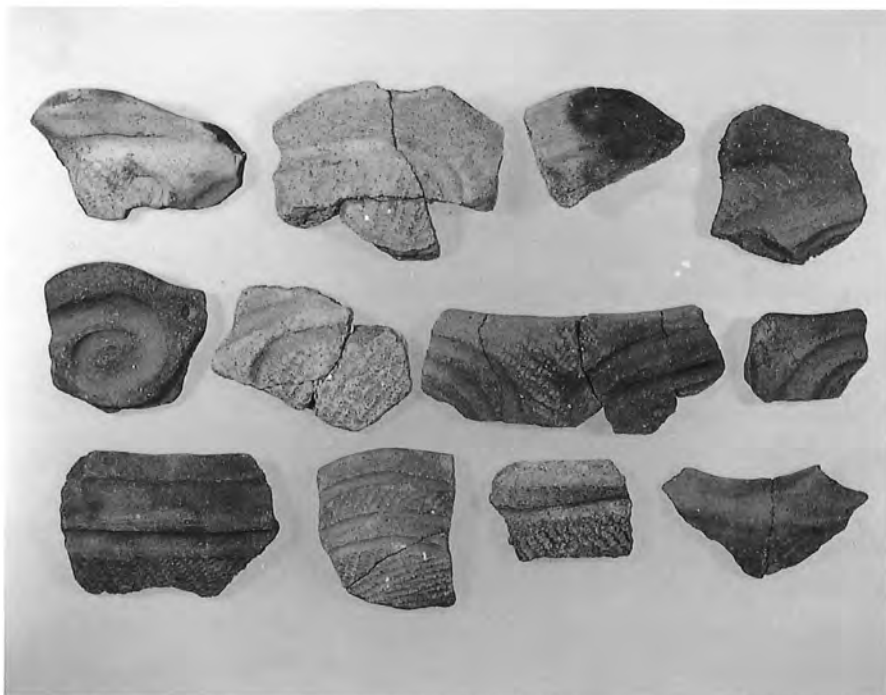
第9图67~82



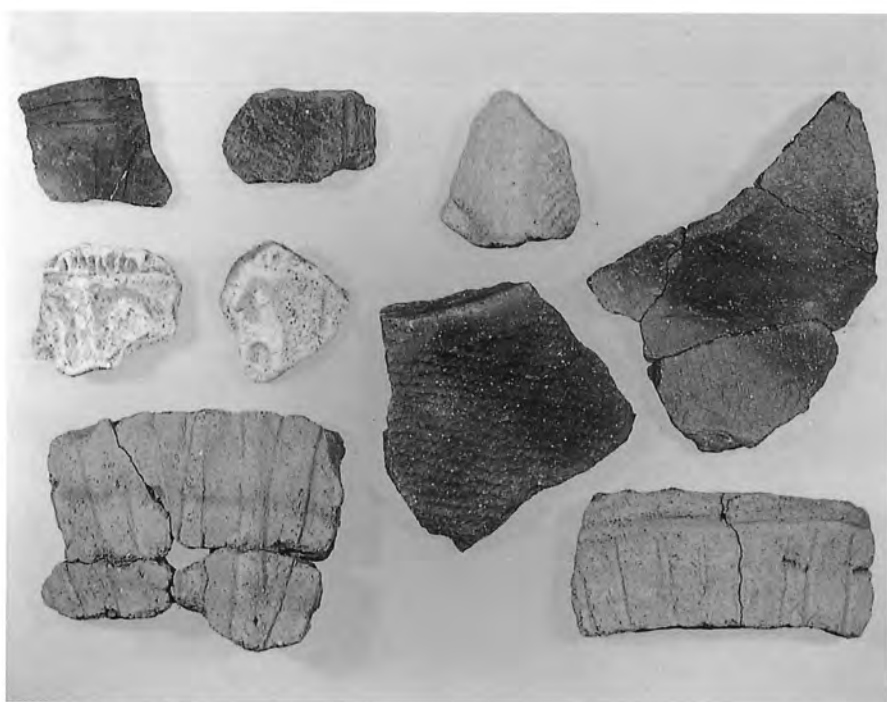
第10图83~92·94~97



第10图98~102·104~108



第15図6~17



第15図18・19・21~27



第15图28~33 第16图35·36



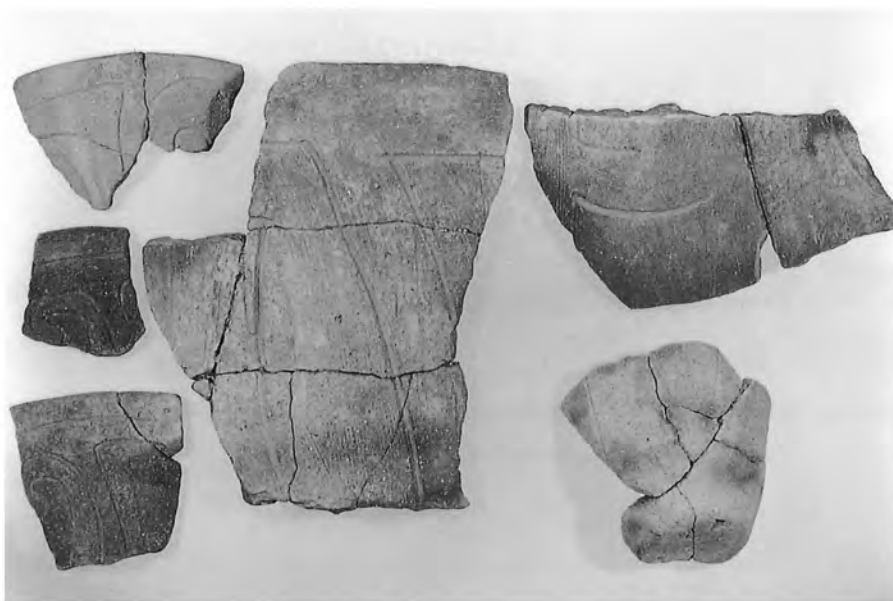
第18图3·6~17·27



第18图4·5·18·20~26·28~30



第20图1-1 2-1~2-6 3-1~3-5



第20图4-2~4-6

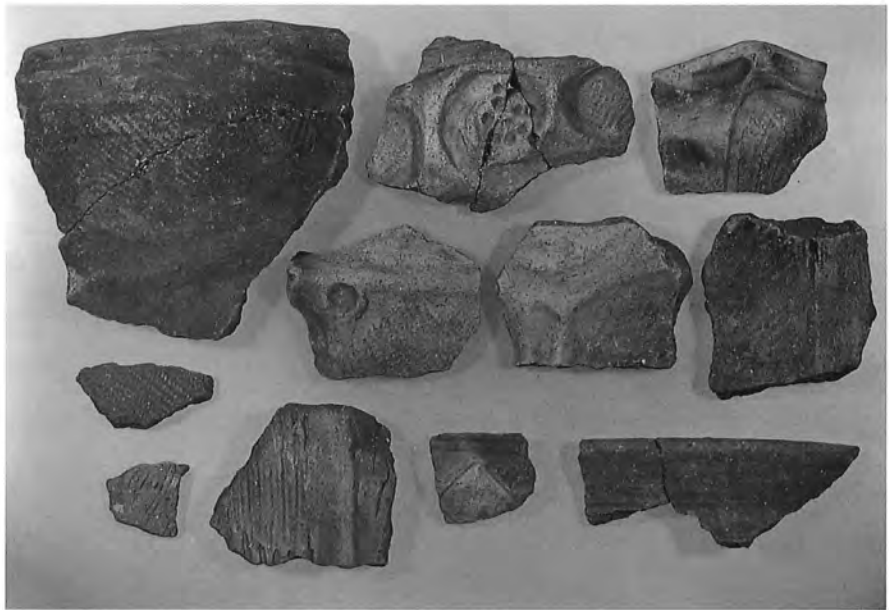


第21图5-2~5-5 第22图5-6~5-9

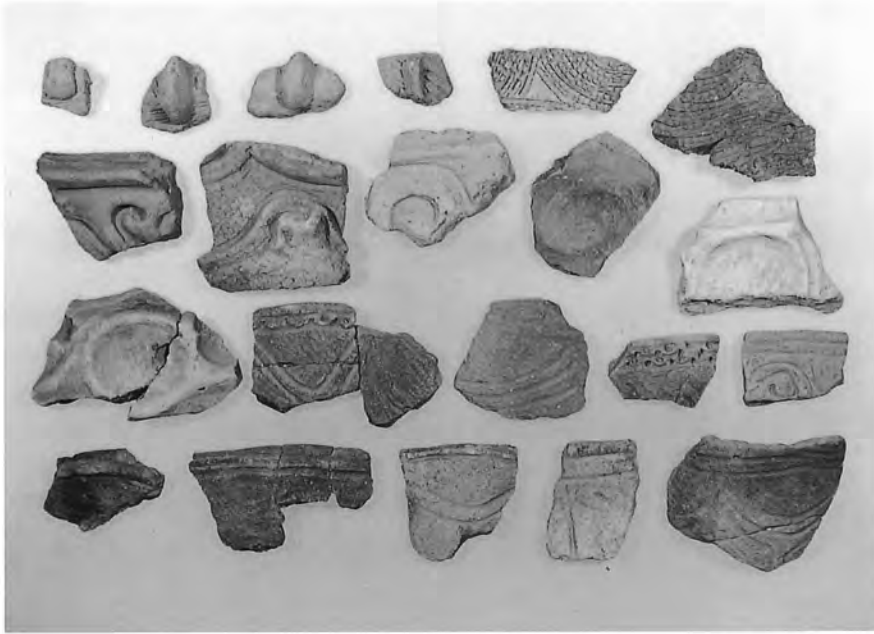
图版18



第23图6-1~6-5 7-1~7-9



第28图1-4~1-8 1-10~13 第29图2-1



第31图8~28



第31图29~48



第32图49~61



第32图62~70



第32图71~73 第33图74~85·87



第33图90~107·109



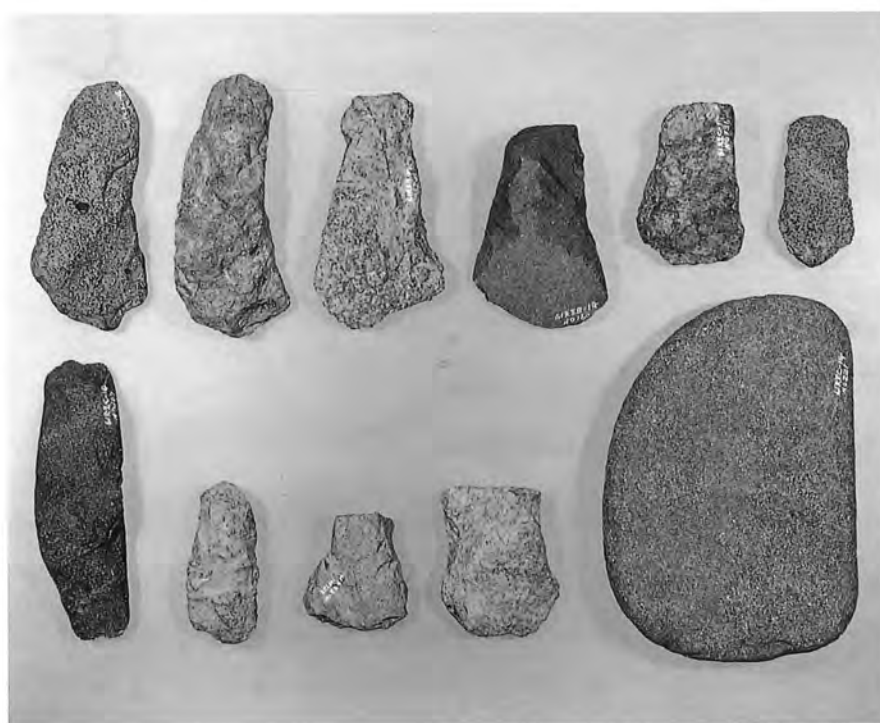
第34図111~124・126・127



第34図128~145



第11图109~120



第11图121~126 第12图127~131



第16图37 第18图32·33



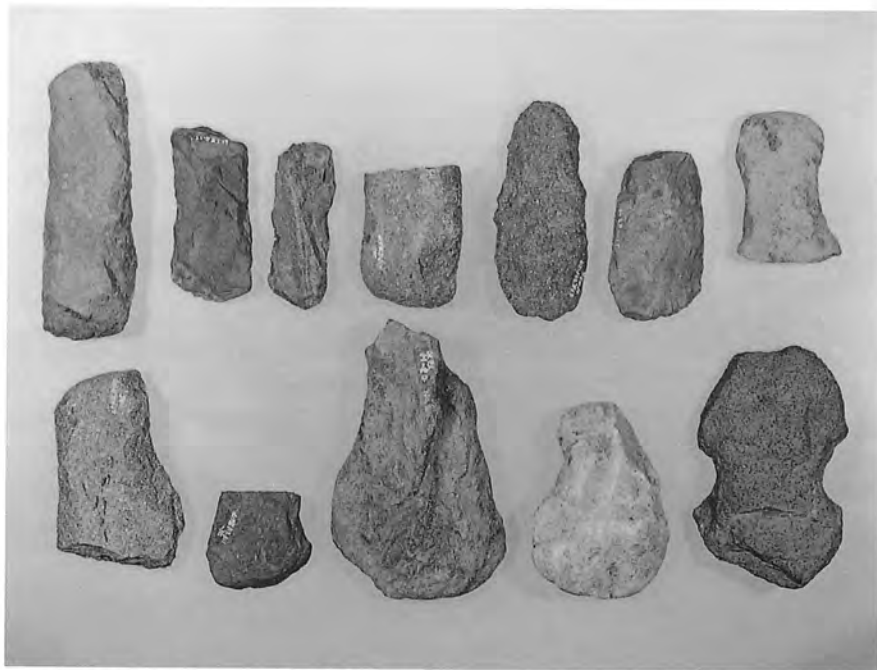
第20图2-7 3-6 4-7 第23图6-6~6-8



第29图 1-14·15 5-1



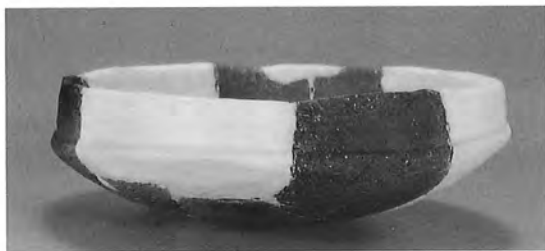
第35图 146~157



第35図158~163 第36図165~169



第36図170~174 第37図175・176



第40图1



第39图7



第64图121-1



第40图6



第40图4



第39图8



第40图9



第46图4



第42图3

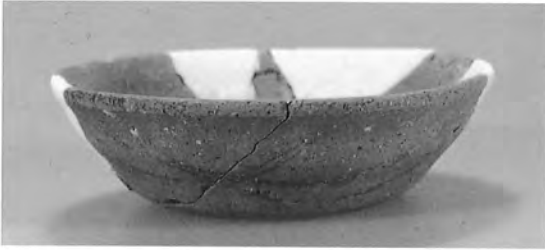
图版28



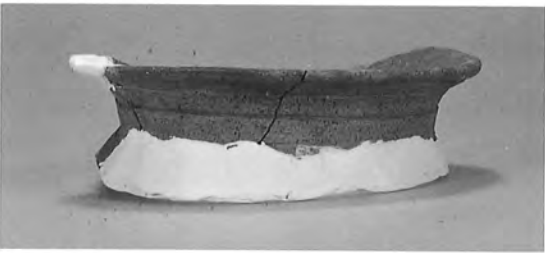
第44图 1



第45图 1



第45图 5



第39图 10



第39图 11



第39图 14



第43图 1



第42图 7



第42图8



第43图2



第43图4



第45图6



第45图7



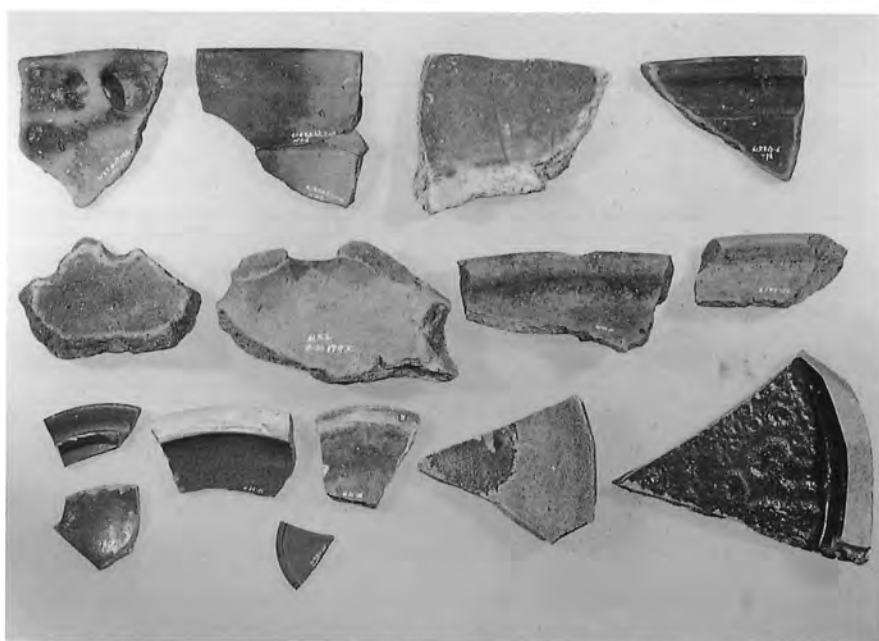
第64图183-1



第66图17



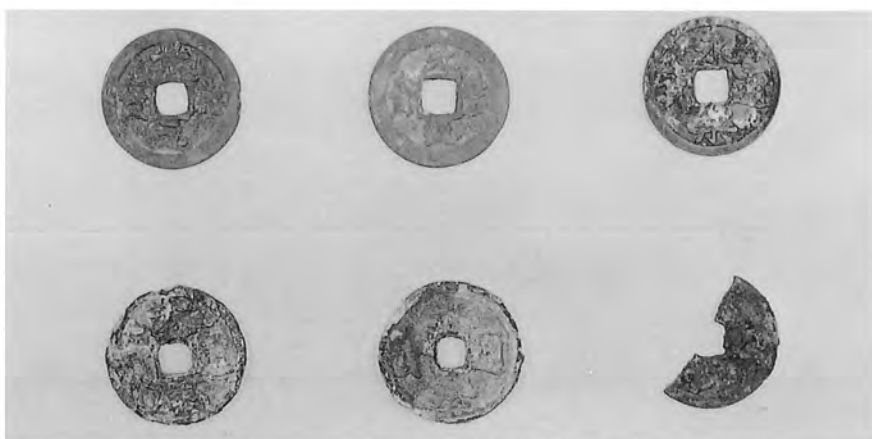
第64図110-1 165-1 第66図1~6・9・11・13~15 (外面)



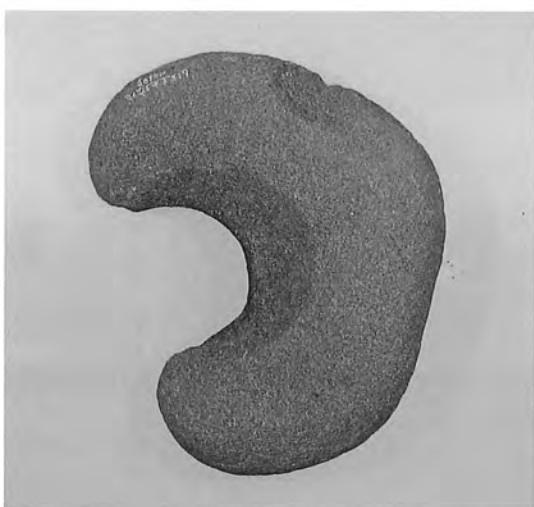
第64図110-1 165-1 第66図1~6・9・11・13~15 (内面)



第39图15~20 第40图15~19



第64图184-1~3 第64图175-1·2



第42图14



第66图18

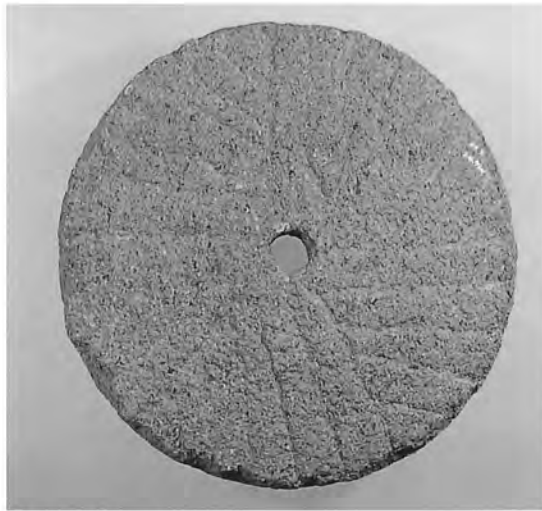
图版32



第66图19



第66图20



第64图73-1



第66图21·22

報 告 書 抄 録

ふりがな	みかじりいせき さん							
書 名	三ヶ尻遺跡Ⅲ							
副 書 名	平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
編 著 者 名	加藤隆則・吉野 健							
編 集 機 関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所 在 地	〒 360-8601 埼玉県熊谷市宮町二丁目47番地 1 TEL 048-524-1111							
発行年月日	西暦2003（平成15）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みかじりいせき 三ヶ尻遺跡	さいたまけんくまがやし おおあぎ みか 埼玉県熊谷市大字三ヶ 尻あざてんのう 尻字天王2956番地 1 他	11202	022	36°9'18"	139°19'20"	19860514 ～ 19860901	1,194.01	水泳プー ル建設工 事
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
三ヶ尻遺跡	集落跡 墓地跡 古墳群	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 中 世 近 世 時期不明	住居跡 3 倒木痕 5	土坑 7 住居跡 4 土坑 1 住居跡 1 土坑 184 ピット 328	埋甕 1	土器 石器 土器 土師器 須恵器 土錘 土師器 須恵器 土師器 須恵器 陶器 土師質土器 瓦質土器 古銭 石臼 五輪塔 陶磁器 煙管 古銭		

平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

三ヶ尻遺跡Ⅲ

平成15年3月31日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／朝日印刷工業株式会社



さくらのまち“熊谷”